

博士後期課程学位論文

『唐詩選』収録作品の主題
—その特徴と江戸文芸に与えた影響を中心に—

馬 艶艶

岡山大学社会文化科学研究科

令和7年12月

『唐詩選』収録作品の主題
—その特徴と日本文芸に与えた影響を中心に—

目次

序章 『唐詩選』に関する先行研究と本論の問題意識	6
はじめに	6
第1節 『唐詩選』の概要	7
第2節 『唐詩選』に関する先行研究の整理	9
第3節 本研究のテーマ設定と本研究の研究手法	11
第4節 本研究の目的と意義	12
第1部 主題からみた『唐詩選』の特徴	14
はじめに	14
第1章 『唐詩三百首』との比較を通じて	14
はじめに	14
第1節 『唐詩三百首』の概要	15
第2節 『唐詩三百首』に関する先行研究	16
第3節 『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩人とその作品数	17
第4節 『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩体	23
第5節 『唐詩選』と『唐詩三百首』収録作品の主題の比較	26
小結	31
附表	32
第2章 『三体詩』との比較を通じて	37
はじめに	37
第1節 『三体詩』の概要	37
第2節 『唐詩選』と『三体詩』の詩人とその作品数	39
第3節 『唐詩選』と『三体詩』の詩体	42
第4節 『唐詩選』と『三体詩』収録作品の主題の比較	43
1. 『唐詩選』と『三体詩』における「寺観部」・「釈部」・「道部」・「儒部」 詩	44
2. 『唐詩選』と『三体詩』における懷古詩・送別詩・辺塞詩・閨怨詩	49
小結	51
附表	52
第3章 『古文真宝』との比較を通じて	60

はじめに	60
第1節 『古文真宝』の概要	60
第2節 『唐詩選』と『古文真宝』の詩人とその作品数	62
第3節 『唐詩選』と『古文真宝』の詩体	64
第4節 『唐詩選』と『古文真宝』収録作品の主題の比較	65
1. 『唐詩選』と『古文真宝』における「歳時部」・「水部」詩	66
2. 『唐詩選』と『古文真宝』における懐古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩	68
小結	71
附表	72
第2部 『唐詩選』の江戸期受容と文化的影響	78
はじめに	78
第4章 服部南郭の詩作に見る『唐詩選』の受容	79
はじめに	79
第1節 南郭と『唐詩選』の関連	79
第2節 『唐詩選』収録作品と南郭初篇収録作品との詩体配置の比較	80
第3節 『唐詩選』と南郭初篇において詩題が一致する作品の詩題・主題の比較	82
第4節 『唐詩選』と南郭初篇において詩題が類似する作品詩題・主題の比較	84
小結	99
第5章 山本北山の『唐詩選』への態度	101
はじめに	101
第1節 江戸中後期詩壇の展開と反徂徠派の登場	101
第2節 山本北山について	102
第3節 『作詩志轂』における『唐詩選』への態度	103
小結	111
第6章 市河寛斎の『唐詩選』への態度	113
はじめに	113
第1節 市河寛斎の詩風と前期詩作の位置づけ	113
第2節 『唐詩選』と『寛斎摘草』詩作との詩体配置の比較	114
第3節 『唐詩選』と『寛斎摘草』詩作との詩題と主題の比較	116
小結	123
第7章 『唐詩選』と『通詩選』と『通詩選彥解』について	125
はじめに	125
第1節 『唐詩選』と江戸文芸に関する先行研究	125

第2節 調査方法の説明及び『通詩選三部作』を対象とする理由	128
第3節 『唐詩選』と『通詩選』・『通詩選諺解』	129
小結	131
附表	131
第8章 江戸文芸作品における『唐詩選』の受容—主題別影響の分析を中心に—.....	133
はじめに	133
第1節 『唐詩選』と『唐詩笑』	133
第2節 『唐詩選』と『異素六帖』	135
第3節 『唐詩選』と『唐詩三物』	137
小結	138
第9章 結論と展望	140
第1節 結論	140
第2節 展望	143
参考文献（刊行年順）	144
初出一覧	147
謝辞	148

序章 『唐詩選』に関する先行研究と本論の問題意識

はじめに

中国最古の詩集『詩経』が誕生して以降、中国では、現代に至るまで詩作が続けられている。特に、唐代の詩は中国の文学史において常に重要な役割を果たしてきた。王国維が『宋元劇曲史』の中で、「凡一代有一代之文學：楚之騷、漢之賦、六代之駢語、唐之詩、宋之詞、元之曲、皆所謂一代之文學、而後世莫能繼焉者也」¹と述べたように、詩といえば唐詩が一番代表的な存在である。

唐代には王勃、李白、杜甫、白居易、李商隠など約二千九百余りの詩人が登場し、詩篇は約五万首作られている²。これらの唐詩を収録した書は詩人別の個人の詩集のみならず、様々な分類方法による選集が編まれてきた。孫琴安氏が編纂した『唐詩選本六百種提要』によれば、唐代の孫季良が編纂した『正声集』から清朝末期の王闓運の『唐詩選』に至るまで、およそ六百種の唐詩選集がある³。これらの唐詩選集の中でも、「熟読唐詩三百首、不会吟詩也会吟」⁴の諺に表現されているように、中国において『唐詩三百首』は唐詩を学ぶ者の教科書的存在である。

一方、唐詩は中国の文学史において常に重要な役割を果たしてきたばかりでなく、周辺諸国にも伝えられ、世界の国々の文化に影響をもたらした。漢詩を含む漢学は日本に伝来してから、すでに長い歴史を持っている。中国との公式な文化交流は七世紀前後に始まったようである。入谷仙介氏が著した『漢詩入門』は、「七世紀はじめ、国土の統一をほぼ完了して中央政權の地位を確立した大和朝廷は遣隋使を派遣し、やがて奈良時代から平安初期にかけての遣隋使に受けつがれた」⁵と述べている。国と国の公式な交流が始まり、造船術や航海術の進歩によって、進んだ知識と技術が日本に伝来した。優れた漢詩の書物も沢山の漢籍とともに日本に伝わり、漢詩が多く日本人に親しまれてきた。

『王勃集』が輸入されたことや、『白氏文集』が流行したこと⁶から、当時の中国で流行していた作品集が比較的早い段階で日本に受け入れられていたことが分かる。それに続いて、『三体詩』、『古文真宝』、『聯珠詩格』、『唐詩選』など、さまざまな漢詩選集も日本にもたらされた。その中でも、『唐詩選』は特に広く読まれ、日本において大きな影響を与えた詩集として知られている。『唐詩選』が現在に至るまで重要な唐詩入門書として位置

¹ 王国維『宋元劇曲史』（新世界出版社、2012年、p.4）

訳文：「どの時代にも、その時代固有の文学がある。楚の「騷」、漢代の「賦」、六朝期の「駢文」、唐の「詩」、宋の「詞」、元の「曲」は、いずれもその時代を代表する文学であり、後世にこれを受け継ぐことができたものはなかった。」

² 堀誠「杜甫「春望」という古典教材」（『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第6号、2014年、pp.15-27）

³ 孫琴安『唐詩選本六百種提要』（陝西人民教育出版社、1987年）

⁴ 中国には「熟読唐詩三百首、不会吟詩也会吟」ということわざがある。このことわざについて、大川忠三氏は、『唐詩三百首』を熟読すれば、詩を吟ずるを会せざるも、また吟を会す」と訳している（唐詩三百首、明德出版社、1984年、p.19）。すなわち、唐詩の代表的選集である『唐詩三百首』を繰り返し読み込むことによって、たとえ自ら詩を作ることができなくとも、自然と詩的表現を身につけることができると考えられてきたのである。

⁵ 入谷仙介『漢詩入門』（日中出版、1990年、p.207）

⁶ 水田紀久・頼惟勤編『中国文化叢書9・日本漢学』（大修館書店、1968年、pp.4-6）

づけられ、日本人の中国文学に関する教養や趣味の形成において重要な役割を果たしていると高く評価されている。

では、『唐詩選』が日本でこれほど長期にわたり広く読まれた要因は何であったのか。従来の研究は、荻生徂徠・服部南郭に代表される古文辞派の提唱や、出版・印刷業の発展、知識人層の拡大といった外在的条件、あるいは詩体構成や盛唐詩重視といった編纂方針に注目し、『唐詩選』流行の背景を多面的に説明してきた。しかし、そうした要因がどれほど重要であっても、最終的に読まれ、参照され、模倣される対象は、詩集そのものに収められた作品である。とりわけ、収録作品の主題や内容のあり方が日本の読者の嗜好や学習実践と一定程度合致していなければ、『唐詩選』が入門書や規範としてこれほどの定着を示すことは難しかったと考えられる。

ところが、『唐詩選』研究においては、収録作品全体を視野に入れて主題を体系的に分類し、その構成比率や傾向を数量的に示したうえで、他の主要唐詩選集（『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』）と比較しながら、『唐詩選』の主題的特徴を客観的に位置づける試みは、必ずしも十分とは言いがたい。さらに、『唐詩選』が江戸時代の詩壇のみならず、通俗文芸を含む広範な文芸領域に及ぼした影響についても、どの作品・どの主題が具体的にパロディーの対象となったのかという点は、体系的な検討がなお不足している。

以上の問題意識にもとづき、本研究は、『唐詩選』の受容と影響を支えた要因として、収録作品の主題構成そのものに着目する。そして、①『唐詩選』の主題構成が他の主要選集との比較においていかなる独自性を有するのか、②その独自性が江戸期日本の漢詩文化および文芸作品の受容過程においてどのように作用したのか、という二つの問いを連結させて解明するため、本論を二部構成とする。第1部では『唐詩選』収録作品の主題を統計的に分析し、比較対象となる諸選集との照合を通じてその特徴を数量的に示す。第2部では、第1部で明らかにした詩体・詩人・主題の特徴が、古文辞派・反古文辞派の詩作や詩論、ならびに江戸文芸におけるパロディーの具体相の中で、いかに受容され、いかなる文化的影響をもたらしたのかを考察する。これにより、『唐詩選』の内在的特質（主題構成）と日本における文化的受容との関係を、数量的分析と具体的事例研究の双方から立体的に捉えることを目指す。

第1節 『唐詩選』の概要

1. 『唐詩選』の作者について

『唐詩選』は唐代の128人の詩を詩体別に収めた唐詩選集である。全七巻に分かれ、五言古詩に始まり、順番に五言古詩14首、七言古詩32首、五言律詩67首、五言排律40首、七言律詩73首、五言絶句74首、七言絶句165首、合計465首が収録されており、古典詩の形式がほとんど網羅されている。編者であるとされる李攀龍の序文から、詩体や詩人に対する評価がうかがえる。

唐無五言古詩、而有其古詩。陳子昂以其古詩為古詩、弗取也。七言古詩、唯杜子美不失初唐氣格、而縱橫有之。太白縱橫、往往彊弩之末、間雜長語、英雄欺人耳。至如五七言絶句、實唐三百年一人、蓋以不用意得之。即太白亦不自知其所至、而工者顧失焉。五言律排律、諸

家槩多佳句。七言律體、諸家所難、王維李頎頗臻其妙。即子美篇什雖衆、憤焉自放矣。作者自苦、亦惟天實生才不盡。後之君子、本茲集以盡唐詩、而唐詩盡於此。⁷

このように、『唐詩選』は詩体ごとの評価を含み、唐詩を総括する目的で編纂されたと考えられる。

『唐詩選』は明の李攀龍の編と称されるが、その真偽については古くから議論がある。

李攀龍（1514—1570）は中国明代の文人で、字は于鱗、号は滄溟（そうめい）、山東省歴城（現在の済南市）の人である。王世貞とともに古文辞を重視し、文は秦漢、詩は盛唐を主張したことで知られ、明代詩壇における古文辞派の代表的人物の一人に数えられる⁸。

また、明代の詩壇では明初より擬古の風潮が生じ、なかでも前後七子⁹による復古運動が最も盛んであった。嘉靖年間（1522年—1566年）には、復古を提唱した李東陽・何景明の後を継ぎ、李攀龍・王世貞を中心とする後七子によって復古運動が展開され、擬古派の勢力はさらに強大となった。

『明史』には、「迨嘉靖時、王慎中・唐順之輩、文宗歐・曾、詩倣初唐。李攀龍・王世貞輩、文主秦・漢、詩規盛唐。王・李之持論、大率與夢陽・景明相倡和也」¹⁰とあり、李攀龍・王世貞らが、文章は秦・漢、詩は盛唐を最も優れたものとする立場をとったことが記されている。このような盛唐詩重視の詩論は、江戸時代の詩壇にも深い影響を与えた。

李攀龍の著作には『滄溟集』および『古今詩刪』がある。前述のとおり、『唐詩選』が李攀龍の著作であるか否かについては、日本・中国双方において議論が続いてきた。後世になると、『四庫全書総目提要』において「舊本題明李攀龍編……亦託名矣」と指摘されているように、『唐詩選』は李攀龍の『古今詩刪』から唐詩部分のみを摘録し、他者の注や解を付したものであり、書肆による仮託の書、すなわち偽書である可能性が高いとされる。このため、『唐詩選』は中国において次第に信用を失い、その地位を低下させた。また、『唐詩三百首』などの類書の流行に伴い、次第に顧みられなくなっていった。

日本への渡来時期は明確ではないが、江戸時代までには伝来していたことが知られている。日野龍夫によれば、中国では十六世紀末から十七世紀初めにかけて盛んに出版され、日本にも比較的早期に舶載され、和刻¹¹以前から唐本によって読まれていた¹²。

⁷ 訳文：「唐代には本来「五言古詩」という形式は存在しなかったが、それに似た古詩はあり、陳子昂は自作の古詩を真の古詩と見なしたものの採るべきではないとされる。七言古詩については杜甫のみが初唐の気格を保ちながら自在な表現を備えており、李白は奔放ではあるがしばしば勢いが衰え冗長になり、英雄ぶって人を圧倒するにとどまる。五言・七言の絶句に至っては唐三百年でただ一人の到達点であり、これは作為によらず自然に得られた境地であって、その李白でさえ自らその境地を自覚せず、技巧を凝らす者はかえってそれを失う。五言の律詩・排律は諸家に優れた句が多く、七言律詩は多くの詩人にとって難しいが王維や李頎はその妙にかなり達している。杜甫は作品数こそ多いもののやや雑然として奔放に流れる面もあり、詩人は自ら苦しむが結局は天の与える才は尽きないのであり、後世の人々はこの集によって唐詩を尽くしたとし、唐詩はまさにここに尽きるのである。」

⁸ 李攀龍に関する記述は、『日本国語大辞典』を参照した。

⁹ 前七子とは李東陽、何景明、徐禎卿、辺貢、王廷相、康海・王九思、後七子は李攀龍、王世貞、謝榛、宗臣、梁有譽、徐中行、呉国倫をいう（鈴木修次・高木正一・前野直彬『中国文化叢書5文学史』（大修館書店、1968年、p.271））

¹⁰ 「嘉靖の時に、王慎中・唐順之らは、文宗歐・曾などの初唐の詩を真似した。李攀龍・王世貞らは、文章は秦・漢時代を主とし、詩の規則は盛唐のものを勧めた。王・李らの論は大抵、夢陽・景明に唱和するものである」（『明史』「列傳第一百七十三・文苑一」）

¹¹ 日本で出版すること。

¹² 日野龍夫（校注）『唐詩選国字解1』（平凡社、1982年、p.9）

日本では当初『唐詩訓解』によって受容され、その後、荻生徂徠と服部南郭の提唱によって広く流行した。特に、南郭校刊の和刻本（享保九年・1724）は大きな反響を呼んだ。

一方、『唐詩選』の真偽をめぐっては、日本においても重要な論点となり、山本北山や市河寛斎らが偽書説を唱えた。しかし、中国とは対照的に、日本ではその後も広く読まれ続け、漢詩入門書としての地位を保った。

第2節 『唐詩選』に関する先行研究の整理

日本における『唐詩選』に関する先行研究は、主に、著者の李攀龍、『唐詩選』と他の唐詩選集の比較、『唐詩選』の偽書論、『唐詩選』の版本の問題、日本における『唐詩選』の受容などの視点から行われている。その中で、日本における『唐詩選』流行の要因に言及している先行研究は、主に『唐詩選』の様々な注釈書といくつかの論文である。

日本における『唐詩選』流行の要因に関する先行研究は、以下の五つの方面にまとめられる。

① 『唐詩訓解』の影響

『唐詩選』は当初、唐本のまま日本にもたらされたと考えられるが、理解の困難さから、その受容には一定の媒介が必要であった。この点について、日野龍夫は、和刻以前の受容を考えるうえで『唐詩訓解』の存在が重要であると指摘する¹³。『唐詩訓解』は広く流通し、新井白石や荻生徂徠らもこれを読んでいたとされ、日本における『唐詩選』受容の基盤を形成したと考えられる。

② 他の唐詩選集との比較による特徴

『唐詩選』の流行は、先行する唐詩選集との比較の観点からも説明されている。

久保得二氏は、『唐詩品彙』『唐詩正声』『唐詩帰』『唐賢三昧』『唐詩別裁』などは体裁が整っているものの、初学者にとっては難解であり、『唐詩選』の方が適していると指摘する¹⁴。また、斎藤响氏は、『瀛奎律髓』『聯珠詩格』『三体詩』などが詩体に制限を持つのに対し、『唐詩選』はより広範な詩体を収めており、唐詩全体を学ぶ入門書として優れていると述べている¹⁵。さらに、塚本哲三氏も、『唐詩選』は初学者にとって「手頃の書」であり、広く普及した理由がそこにあるとする¹⁶。加えて、簡野道明氏は、『唐詩選』が詩体・時代・作者の点において広い範囲を網羅していることを評価している¹⁷。日野龍夫氏もまた、『唐詩選』が盛唐詩を多く収めている点が、当時の漢詩愛好者の嗜好に合致していたと指摘している。以上から、『唐詩選』は初学者向けの体系的な選集として評価されてきたといえる¹⁸。

これらの点から、『唐詩選』は初学者向けの体系的な選集として評価されてきた。

¹³ 前掲注 12 所掲の同書を参照。

¹⁴ 久保得二（芸閣玄之口述）『唐詩選・三體詩』（東京博文館、1913、p.7）

¹⁵ 斎藤响『唐詩選』（集英社、1964 年）

¹⁶ 塚本哲三『唐詩選：三體詩』（有朋堂書店、1920 年、p.34）

¹⁷ 簡野道明『唐詩選詳説 上下』（明治書院、1929 年）

¹⁸ 前掲注 12 所掲の同書を参照。

③ 古文辞派の提唱

『唐詩選』流行の最も重要な要因として、古文辞派の提唱が挙げられる。

三島毅氏・服部宇之吉氏らの校訂本においても、『唐詩選』は徳川初期に伝来し、荻生徂徠が古文辞の学を唱えとともにこれを重視し、門下において尊重されたこと、さらに門人服部南郭がこれを校刊して世に広めたことが指摘されている¹⁹。すなわち、徂徠による提唱と南郭による校閲・刊行活動が、『唐詩選』の流行を決定づけたと考えられる。

さらに日野龍夫氏は、こうした外的要因にとどまらず、『唐詩選』の内容自体が古文辞派の文学観と適合していた点に注目する。日野氏は、楽府題の詩を都市の繁華、艶情、辺境といった主題に分類し、これらが人間の真情を重視する古文辞派の詩風に合致していたと指摘する²⁰。また、『唐詩選国字解』の解説において、服部南郭が徂徠の文学観を継承しつつ、惜別・辺愁・閨怨などの感傷的主題を重視したことから、これらの作品を多く収める『唐詩選』が愛好されたと論じている²¹。

④ 出版文化の発展

『唐詩選』の流行は、江戸時代における出版文化の発展とも密接に関係している。日野龍夫氏は、服部南郭校訂本の刊行に際し、版元須原屋が従来の『唐詩訓解』に比べて小型で携帯しやすい体裁を採用した点に注目し、こうした出版上の工夫が普及を促進したと指摘している²²。

また、村上哲見氏は、『唐詩選』の流行は出版事業の隆盛と切り離せないとし、読書人口の増加と書物需要の拡大に伴い、出版が営利事業として発展したことを指摘する。さらに、寺社版・官版・藩版に加え、書籍商による町版が発展したことにより、出版の大衆化が進み、『唐詩選』の広範な流通を可能にしたと論じている²³。

以上のように、出版形態の工夫と商業出版の発展が、『唐詩選』流行の重要な背景となっていたと考えられる。

⑤ 江戸時代の知識人層の拡大

『唐詩選』の流行は、江戸時代における知識人層の拡大とも密接に関係している。吉川幸次郎氏・小川環樹氏は、南郭の和点本が広く読まれた背景として、江戸社会が武士道的価値観を基盤としていた点を挙げ、『唐詩選』がその文化的志向に適合していたことを指摘している²⁴。

また、村上哲見氏は、寺子屋の普及などにより識字率が向上し、読書層が拡大したことに注目する。すなわち、日本の読書階層は、仮名のみを理解する層から、漢字を用いる層、さらに漢詩文を読む・作る層へと多層的に形成されており、このような構造が『唐詩選』の受容を支えたとされる²⁵。

¹⁹ 三島毅・服部宇之吉監修、瀬武次郎・久保得二校訂『唐詩選・三體詩』（東京博文館蔵版、1913年、p.9）

²⁰ 日野龍夫『『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風』（岩波書店、文学 39(3)、1971年）

²¹ 前掲注 12 所掲の同書を参照。

²² 前掲注 12 所掲の同書を参照。

²³ 村上哲見『漢詩と日本人』（講談社、1994年、pp.33-36）

²⁴ 吉川幸次郎・小川環樹（編）『筑摩叢書 唐詩選上』（筑摩書房、1973年、p.iii）

²⁵ 前掲注 23 所掲の同書を参照。

以上のように、知識人層の拡大と武士層の文化的嗜好への適合が、『唐詩選』流行の重要な背景となっていたと考えられる。

以上のように、日本における『唐詩選』流行の要因に関する先行研究では、『唐詩訓解』の影響、他の唐詩選集と比較した際の入門書としての適性、古文辞派の提唱、出版文化の発展、知識人層の拡大などが指摘されている。

一方、『唐詩選』流行の要因について言及した中国側の先行研究としては、蔣寅氏および劉芳亮氏の論考が重要である。

蔣寅氏は、「舊題李攀龍《唐詩選》在日本的流傳和影響」において、日本における漢詩受容には、平安期の白居易詩と江戸期の『唐詩選』という二つのピークが存在すると指摘する。また、『唐詩選』流行の要因に関する研究は日野龍夫氏の論考²⁶にほぼ限られるとしたうえで、これを踏まえ、①古文辞派の提唱、②江戸期文人の評価と嗜好への適合、③出版商嵩山房の役割の三点を補足的に挙げている²⁷。

劉芳亮氏は、『唐詩選』在日本的流行及原因再論」において、江戸時代における流行の要因を五点から論じている。すなわち、①古文辞派の影響、②出版形態の工夫（嵩山房による体裁・可読性への配慮）、③収録詩数および内容の適切さ、④競合する類書の不在、⑤教養書としての位置づけである。また、『唐詩選国字解』の日本語解釈を流行要因とする見解には否定的立場を示している²⁸。

しかしながら、これら中国側の研究は、日本側の先行研究に依拠する部分が多く、提示される要因も概ね重複しており、独自の視点に基づく分析は十分とはいえない。

以上を踏まえると、日本および中国における先行研究は、『唐詩選』流行の要因を、①『唐詩訓解』の影響、②他の唐詩選集と比較した際の構成上の優位性、③古文辞派の提唱、④出版文化の発展、⑤知識人層の拡大の五点に整理している。このうち②は『唐詩選』の内容に基づく内的要因であり、他は外的要因と位置づけられる。

もっとも、内容的要因に関する研究はなお不十分である。特に、収録作品の主題に関しては、注釈書が詩句の解釈に重点を置く一方で、主題の全体的傾向を体系的に検討した研究は少ない。日野龍夫氏は、惜別・辺愁・閨怨などの悲哀を詠じた作品が多いと指摘し²⁹、前野直彬氏も懷古・送別・旅愁の詩の偏重が指摘されてきた³⁰ことを述べている。しかし、これらの指摘について、収録詩全体に占める主題の割合を実証的に検証した研究は行われていない。

したがって、『唐詩選』の流行要因をよりの確に解明するためには、収録作品の主題構成を定量的に分析する必要があると考えられる。

第3節 本研究のテーマ設定と本研究の研究方法

本研究は、『唐詩選』の日本における長期的流行を支えた要因として、従来強調されてき

²⁶ 前掲注 12 所掲の同編

²⁷ 蔣寅「舊題李攀龍《唐詩選》在日本的流傳和影響:日本接受中國文學的一個側面」(國學研究第 12 卷、2005)

²⁸ 劉芳亮「『唐詩選』在日本的流行及原因再論」(解放軍外國語學院學報、2011 年)

²⁹ 前掲注 12 所掲の同書を参照。

³⁰ 前野直彬注解、『唐詩選』(岩波文庫、1984 年、p.9)

た古文辞派の提唱や出版・印刷業の発展、知識人層の拡大といった外在的条件に加え、詩集そのものに内在する要素、とりわけ収録作品の主題構成に着目する。すなわち、『唐詩選』が入門書や規範として定着した背景には、読者の嗜好や学習実践と合致しうる主題・内容の配置が一定の役割を果たした可能性がある、という点を本研究の基本仮説として設定する。

しかしながら、先行研究においては、収録作品全体を対象に主題を体系的に分類し、その構成比率や傾向を数量的に示したうえで、他の主要唐詩選集との比較から『唐詩選』の主題的特徴を客観的に位置づける試みは必ずしも十分ではない。そこで本研究は、主題構成の定量的把握（第1部）と、受容・影響の具体相の実証（第2部）を連結させるため、全体を二部構成として論を進める。

第1部では、『唐詩選』収録作品全体を対象として主題の統計的分析を行い、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』との比較を通じて、『唐詩選』がいかなる主題構成を有し、どの点に独自性が認められるのかを明らかにする。比較対象として『唐詩三百首』を採るのは、中国において広く普及し、唐詩入門の規範として機能してきた代表的選集であるためである。また『三体詩』『古文真宝』は、日本において『唐詩選』流行以前から読まれた主要選集であり、『唐詩選』の特徴を歴史的な文脈の中で相対化するために有効である。加えて、先行研究で言及されてきた詩人選定傾向・収録作品数・詩体構成についても数量的に検証し、主題分析の結果と照合することで、『唐詩選』の編纂的特質を多角的に捉える。

主題分類にあたっては、筆者の恣意性を避け、比較可能性と客観性を担保するため、『唐詩類苑』を参照基準として用いる。共通の分類基準を導入することで、各選集の主題構成を同一尺度で比較できるようにし、第1部の分析結果を第2部における受容・影響分析の基礎資料として位置づける。

分析の手順としては、『唐詩選』（465首）、『唐詩三百首』（321首）、『三体詩』（494首）、『古文真宝』（唐詩120首）について、詩体・詩題・詩人・成立時期・詩句・主題の六項目からなるデータベースを作成した。まず詩体・詩人・成立時期などの要素を整理して先行研究の指摘を検証し、その上で主題構成の比較を行う。特に先行研究で詩数が多いとされてきた懷古・辺塞・送別・閨怨などの主題領域については、実際の構成比率を統計的に確認し、『唐詩選』の主題的特徴を客観的に示す。

第2部では、第1部で定量的に明らかにした『唐詩選』の詩体・詩人・主題の特徴が、日本の漢詩文化、特に江戸期の詩壇や江戸の文芸作品にどのように受容され、影響を与えたのかを具体的に検討する。第一に、古文辞派詩人および反古文辞派詩人における『唐詩選』の受容と態度を明らかにするため、服部南郭の詩作を中心とする古文辞派の実作例に加え、山本北山および市河寛斎の詩論と詩作を分析対象とする。第二に、『唐詩選』が通俗文芸と融合して広く親しまれた側面に着目し、先行研究では十分に検討されてこなかったどの作品・どの主題がパロディーの対象となったのかという点を解明する。そのため、『通詩選』『通詩選諺解』『唐詩笑』『異素六帖』『唐詩三物』を取り上げ、引用・翻案・パロディーの具体相を整理しつつ、主題別の偏りや傾向を検証する。

以上の方法により、本研究は、『唐詩選』の内在的特質（主題構成）と、日本における文化的受容・影響の連関を、定量分析と具体的事例研究の双方から明らかにすることを目指す。

第4節 本研究の目的と意義

本研究の目的は、『唐詩選』収録作品の主題構成を定量的に解明し、その特徴が日本、と

りわけ江戸時代においてどのように受容され、漢詩文化および文芸諸領域にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにすることである。とくに、従来の流行要因論が外在的条件の説明に偏りがちであった点を踏まえ、『唐詩選』が実際に読まれ、参照され、模倣される対象であったという前提に立ち、作品内容の側（主題構成）から受容を説明する枠組みを提示することを目標とする。

本研究の意義は、次の五点にまとめられる。

第一に、『唐詩選』流行の要因を、主題・内容という内在的側面から再評価する点にある。古文辞派の提唱や出版文化の発展といった外的要因を否定するのではなく、それらが作用する前提として、どのような作品群が「読まれうる対象」として成立していたのかを、主題構成の実態から具体化する。

第二に、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』との比較を通じて、『唐詩選』の主題的独自性を数量的に示し、従来定性的に語られてきた特徴を客観的に位置づける点にある。これにより、『唐詩選』の編纂的特質（詩体・詩人・時期・主題の関係）を多角的に把握できる。

第三に、第1部で得られた主題構成の知見を手がかりとして、江戸期詩壇における受容の具体相を、詩作・詩論の分析によって実証する点にある。服部南郭・市河寛斎・山本北山といった詩人を対象に、『唐詩選』が規範として参照される局面と、距離化・批判・選択的受容が生じる局面とを、作品レベルで明らかにする。

第四に、江戸文芸におけるパロディーの対象を具体的に明らかにし、どの作品・どの主題が通俗的受容の中で選ばれたのかを検討する点にある。これにより、これまで広範な影響があったと総括されてきた議論を、対象作品や主題のレベルでより精密に捉え直し、和漢の文芸的融合がどのように形成されたのかを考察するための基盤を提供する。

第五に、分析過程で構築した諸選集のデータベースを整備・公開することで、唐詩選集研究における再現可能性を高め、人文情報学的手法を導入した研究基盤の拡充に寄与する点にある。

以上のように本研究は、『唐詩選』の主題構成という内在的特質を出発点として、江戸期日本における受容と文化的影響を立体的に解明し、日中両国の文学史・文化交流史に新たな視角を提供することを目指す。

第1部 主題からみた『唐詩選』の特徴

はじめに

前述したように、『唐詩選』に関する先行研究は、その成立背景や編纂意図、選詩の評価をめぐって多岐にわたる成果を蓄積してきた。しかし、収録作品全体を対象として主題を体系的に分類し、その構成比率や傾向を数量的に示した研究は、必ずしも十分に行われてきたとは言いがたい。とりわけ、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』といった他の主要な唐詩選集との比較を通じて、『唐詩選』の主題的特徴を客観的に位置づける試みについては、なお検討の余地を残している。

また従来の研究では、『唐詩選』の流行要因として、詩体構成や盛唐詩重視の編纂方針、さらには古文辞派による推奨といった外在的側面が主として強調されてきた。しかし、こうした要因に加えて、より根本的には、『唐詩選』に収録された詩作品そのものの特徴、とりわけ主題や内容のあり方が、日本における受容の過程において重要な役割を果たした可能性があると考えられる。これまで必ずしも十分に重視されてこなかった主題・内容の側面こそが、実際の『唐詩選』受容を支える要因の一つであったのではないか、という点が本研究の基本的な問題意識である。

以上を踏まえ、本研究では、『唐詩選』収録作品における主題構成そのものが、日本における受容において一定の影響力を有していたという仮説を立てる。その検証の第一段階として、第1部では、『唐詩選』に収められた全作品を対象に主題の統計的分析を行い、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』といった他の主要な唐詩選集との比較を通じて、『唐詩選』がどのような主題構成を有し、いかなる点に独自性が認められるのかを明らかにすることを目的とする。あわせて、先行研究において指摘されてきた詩人の選定傾向、収録作品数、詩体構成についても数量的に検証し、主題分析の結果と照合することで、『唐詩選』の編纂的特質を多角的に捉える。

漢詩選集の主題分類にあたっては、筆者の恣意的判断を避け、分析の客観性を確保するため、『唐詩類苑』を参照基準として用いる。共通の分類基準を導入することにより、各選集間の比較可能性を高めるとともに、本部の分析結果を、第2部において論じる江戸期日本における『唐詩選』の受容と文化的影響を考察するための基礎的資料として位置づける。

なお、本部の構成は以下のとおりである。第1章では、『唐詩三百首』との比較を通じて、『唐詩選』における主題構成および詩人選定の特徴を明らかにする。第2章では、『三体詩』との比較を通じて、詩体構成と主題傾向の関係に注目し、『唐詩選』の編纂的特徴を検討する。第3章では、『古文真宝』との比較を通じて、教材的性格や選詩観の差異を手がかりに、『唐詩選』における主題構成および詩人選定の特徴を考察する。

第1章 『唐詩三百首』との比較を通じて

はじめに

『唐詩三百首』は、偏りの少ない唐詩選集として評価され、中国で広く流行してきた代表的な唐詩選本である。本章では、『唐詩選』の特徴を明らかにするために、『唐詩三百首』と

の比較を行う。『唐詩三百首』は、清代に孫洙氏によって編纂され、初学者向けの教科書として広く読まれてきた。そのため、両者を比較することで、『唐詩選』がどのような詩人・詩体・主題を重視しているのかを把握することができる。

これまでの研究では、『唐詩選』は盛唐の詩を重視し、中唐・晩唐の詩をあまり採らないこと、また、辺塞詩・送別詩・閨怨詩などの作品が多いことが指摘されてきた。しかし、こうした指摘は印象的なものが多く、他の選本と比較しながら数量的に検討した研究は十分ではない。そこで本章では、『唐詩三百首』との比較を通じて、『唐詩選』の特徴を具体的に確認する。

まず、『唐詩三百首』の概要と先行研究を整理し、『唐詩選』との収録詩人や作品数を比較する。あわせて、詩人の時期や作品の作成時期についても検討する。次に、詩体構成を比較し、『唐詩選』がどのような形式の詩を多く採っているのかを明らかにする。さらに、『唐詩類苑』の分類を基準として、懷古・辺塞・送別・閨怨の四つの主題に注目し、両者の主題構成を比較する。

以上の分析を通じて、『唐詩選』の特徴を明らかにし、それが日本での受容とどのように関わるのかを考えるための手がかりとしたい。

第1節 『唐詩三百首』の概要

『唐詩三百首』は、清の乾隆年間（1763年）に孫洙（号は衡塘退士）によって編纂された唐詩選本である。最初は塾の読み物として読まれてきた。

『唐詩三百首』の編纂趣旨は題辭に書かれている。

世俗兒童就學、卽授千家詩。取其易于成誦、故流傳不廢。但其詩隨手掇拾、工拙莫辨、且止五七律絕二體、而唐宋人又雜出其間、殊乖體制。因專就唐詩中膾炙人口之作、擇其尤要者、每體得數十首、共三百餘首。錄成一編、爲家塾課本。俾童而學習之、白首亦莫能廢。較『千家詩』不遠勝耶。 諺云：熟讀唐詩三百首、不會吟詩也會吟。請以是編驗之¹

『唐詩三百首』の「題辭」によれば、孫洙は『唐詩三百首』を編纂する動機は既存の教科書である『千家詩』に詩体、時代に偏りがあると思っており、唐詩の中から、世間に認められる者を選び、一種類の詩体に数十首を取り、塾のテキストに適する本にしたかったとのことである。

¹ 孫琴安『唐詩選本六百種提要』（陝西人民教育出版社、1987年、p.452）

訳文：「世間の子どもたちが学問を始めると、すぐに『千家詩』を教えられる。それは暗唱しやすいため、長く広く伝えられてきたからである。しかし、その詩は寄せ集めであり、出来の良し悪しの区別もはっきりしない。また、五言詩と七言詩の二種類だけに限られているうえ、唐や宋の詩人の作品が雑然と混じっていて、詩の形式としても整っていない。そこで私は、唐詩の中から特に人々に親しまれている作品を選び、その中でも重要なものを厳選して、各形式ごとに数十首ずつ、合わせて三百余首を集めた。これを一冊にまとめ、家庭や私塾での教科書としたのである。子どもの頃からこれを学べば、年を取っても決して忘れることはないだろう。『千家詩』よりも、はるかに優れていると言えないだろうか。ことわざにもいう。「唐詩三百首をよく読めば、詩を作れなくても自然と詩が詠めるようになる」と。どうかこの書によって、それを確かめてほしい。」

初学者用の教科書として編まれた『唐詩三百首』は、もとは310首であったが、のちに清の章燮が原書に11首を加えて注釈した『唐詩三百首注疏』や、陳婉俊の『唐詩三百首補注』などが刊行され、さらに流布して今日に至っている²。

第2節 『唐詩三百首』に関する先行研究

本節では、『唐詩三百首』に関する先行研究のうち、本研究に関連するものについて概観しておくことにする。

『唐詩選』と関連する『唐詩三百首』の論文としては、黄暉氏の「『唐詩選』與『唐詩三百首』対比研究」（新疆師範大学、2011年）が挙げられる。黄暉氏は二つ選本の研究現状、選本の内容の違い、流行した理由の分析の三つを行っている。選本の内容の違いについては、二つの選本の編集目的、編集経過、収録された詩と詩人などから分析する。また、流行の要因については、①『唐詩選』と『唐詩三百首』の収録詩に違いがあること、②『唐詩三百首』が作られた清代は『唐詩選』が作られた時代よりも後であり、後の時代の唐詩選本は前の時代の唐詩選本より優れていること、という二つの理由を挙げている。二つの選本の所収詩・詩人の比較が行われ、中国では『唐詩選』が衰退し、『唐詩三百首』が流行している要因が考察されたが、日本の状況については言及されていない。

また、本研究に関する『唐詩三百首』の日本側の書物として、以下の四冊が挙げられる。

- ① 鹽谷温氏の『唐詩三百首新釈』（書籍文物流通會、1968年）
- ② 目加田誠氏の『唐詩三百首』（平凡社、1973年）
- ③ 大川忠三氏の『唐詩三百首』（明德出版社、1984年）
- ④ 田部井文雄氏『唐詩三百首詳解』（大修館、1988年）

これら四冊に共通して見られるのは、著者孫洙の紹介、収録詩の詩体、詩人の偏りに関する分析などである。『唐詩選』との比較に言及したものとしては、鹽谷温氏の『唐詩三百首新釈』と大川忠三氏の『唐詩三百首』が挙げられる。

鹽谷温氏は、日本においては荻生徂徠らの提唱によって『唐詩選』が流行した一方、中国本土ではその流行が早く衰えたのに対し、『唐詩三百首』は郷村家塾の教材として用いられ、革命以後の今日に至るまで衰えず、一般教養書としても読まれてきたことを指摘している。さらに、『唐詩三百首』が日本に伝来した時期について、鹽谷の学生である内田泉之助は、先師の節山先生が大正元年に独・清両国への留学を終えて帰朝した際、清国から持ち帰ったのが最初であり、大正初年に大日本漢文学会の主催で、佐々木平治郎学士と連名により初めて本書の講義を公にしたと述べている³。

大川忠三氏は、『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩人や詩体などから、両選本の違いを分析している。『唐詩選』と『唐詩三百首』の所収詩人の比較について、大川は「詩の選び方については『唐詩選』には選者の好みが強くと打ち出され、初唐・盛唐の詩が多いのに比較して、中・晩唐の諸家の作品がはなはだ少ない。白樂天を一首も選ばないなど、詩人の選択にも片寄りが見られる。一方、『唐詩三百首』は神韻・格調などの一派に立脚せず、唐代四期の詩人とその名作を広く採用しているので、唐三百年間の詩風の特色を概観することができる」

² 松浦友久『漢詩の事典』（大修館書店、1999年、p.846）

³ 鹽谷温氏『唐詩三百首新釋』（書籍文物流通會、1968年）

と指摘している。これによれば、詩人の選択という点で『唐詩三百首』は偏りが少ないことがうかがえる。さらに大川氏は、『唐詩選』と『唐詩三百首』にはそれぞれ若干の難点があるものの、両書とも唐詩選本として広く用いられた実績を持つと述べる。そして、『唐詩三百首』の流行の要因について、詩人と内容の二つの観点から考察している。第一に、詩人の選択という点では、『唐詩三百首』は杜甫・李白・王維などの代表的詩家の佳編はもとより、白楽天ら中唐詩人の傑作や、晩唐の李商隠の律詩、杜牧の絶句に至るまで、唐詩の精粹とされる名作をほとんど網羅している。第二に、内容の面では、詠懐・辺塞・送別・懷古・紀行・詠物・登高・艷情など、多様な主題の詩を幅広く採り上げている⁴。

以上の先行研究によって、『唐詩三百首』がいつ日本に伝来した時期と、『唐詩選』より、『唐詩三百首』は内容が偏っておらず、様々な詩人の、幅広いテーマの詩が収められているという点が指摘されているということが分かった。

第3節 『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩人とその作品数

『唐詩選』所収詩人について言及した主な先行研究を以下に挙げる。

斎藤响氏は「その缺点是中晩唐が過度に軽視され、白楽天や杜牧の作品が一首も選ばれていないなどである」⁵と述べている。

高木正一氏は「作家の数で言えば、全部で百二十八人。うち最も多くの作品が選ばれているのは、杜甫五十一首であり、これを筆頭に、李白の三十三首、王維の三十一首、岑参の二十八首というように、盛唐詩に重点がおかれていることは、「古文辞」をもって立つ彼の主張通りである。それにまた、中晩唐詩が軽くあしらわれる中で、代表的な詩人である韓愈がわずかに一首、李商隠は三首。白居易、杜牧にいたっては全く無視されているという極端な偏向も、格調を重視する彼の立場から見れば、あながち不思議なことではなく、むしろ一つの見識を示すものさえ言えよう」⁶と述べており、白居易と杜牧の詩がないことが改めて指摘されている。

吉川幸次郎氏・小川環樹氏は「唐詩の中でも、感情の振幅を細かにして、神経のおののきを伝えようとする詩、それは最末期九世紀のいわゆる「晩唐」の詩人、ことに李商隠の得意である。感情の放恣を抑えて、委曲な描写におもむこうとする詩、それは八世紀後半の「中唐」の詩人、ことに韓愈、白居易の得意である。それらを李の書はしりぞけて収めない」⁷と指摘しており、中唐と晩唐の代表詩人を挙げて、韓愈、白居易らの詩が収録されていないことに懸念を示している。

前野直彬氏は「作家の数は全部で百二十八人、最も多く作品を選ばれたのは杜甫の五十一首を筆頭に、李白三十三首、王維三十一首、岑参二十八首と、李攀龍の主張通りに重点がおかれ、中・晩唐詩については、韓愈が一首、李商隠が三首、杜牧は零というように、極端な冷遇が与えられている」⁸と述べており、内容は高木正一氏とほぼ同じである。

以上、『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩人に関する先行研究では、初唐・盛唐の詩が多いのに比較して、中・晩唐の諸家の作品がはなはだ少ないことを強調している。

⁴ 大川忠三氏の『唐詩三百首』（明德出版社、1984年）

⁵ 斎藤响『漢詩大系 唐詩選上』（集英社、1694年、p.10）

⁶ 高木正一『新訂中国古典選 唐詩選上』（朝日新聞社、1965年、p.10）

⁷ 吉川幸次郎・小川環樹編『唐詩選』（筑摩書房、1973年、ii）

⁸ 前野直彬（注解）『唐詩選』（岩波文庫、1984年、p.5）

本節では、『唐詩選』と『唐詩三百首』に登場する詩人とその詩の数を確認する。

1. 詩人の数の比較

本節における詩人数の集計は、簡野道明著『唐詩選詳説』および目加田誠氏訳注『唐詩三百首 1・2・3』を参照した。

『唐詩選』では、全 465 首のうち、「伊州歌二首」の二首、「初過漢江」、「胡笳曲」四首の計 6 首が無名氏の作とされており、これに関わる詩人 4 名は作者不明として扱われている。それ以外に、詩人名が明記されているのは 124 名である。したがって、『唐詩選』には合計 128 名の詩人が登場しているとみなすことができる。

一方、『唐詩三百首』では、全 321 首のうち、「雜詩十五首之一」の作者が無名氏とされており、詩人名が明記されているのは 76 名である。したがって、『唐詩三百首』には合計 77 名の詩人が登場しているとみなすことができる。

無名氏を除いて両書を比較すると、『唐詩選』と『唐詩三百首』の双方に収録されている詩人は 55 名である。

このように、所収詩人の総数は『唐詩選』が 128 名、『唐詩三百首』が 77 名であり、収録詩数の多い『唐詩選』の方が、詩人数の面でもより幅広い構成をとっていることが確認できる。

以下では、『唐詩選』と『唐詩三百首』のデータベースに基づき、収録詩数の多い詩人を表 1 に示す。また、各詩人の詩数については、それぞれの全収録詩数に占める割合も算出した。これにより、両選本における詩人の選定や収録数の違いを、より具体的に確認することができる。

表 1：『唐詩選』と『唐詩三百首』詩人上位 10 名と詩数

	『唐詩選』 詩人ごと詩数			『唐詩三百首』 詩人ごと詩数		
	作者	詩数		作者	詩数	%
1	杜甫	51	10.97%	杜甫	39	12.15%
2	李白	33	7.10%	李白	35	10.90%
3	王維	31	6.70%	王維	29	9.03%
4	岑参	28	6.02%	李商隠	24	7.48%
5	王昌齡	21	4.51%	孟浩然	15	4.67%
6	高適	18	3.87%	韋応物	12	3.74%
7	李頎	12	2.58%	劉長卿	11	3.43%
8	宋之問	9	1.94%	杜牧	10	3.12%
9	張説	9	1.94%	王昌齡	8	2.49%
10	沈佺期	9	1.94%	李頎	7	2.18%

『唐詩選』、『唐詩三百首』共に、詩人の数からみると、詩数が多い上位 3 位は杜甫、李白、王維であることが分かった。例えば、杜甫の詩は『唐詩選』において 51 首で、全詩 465 首の 10.97%を占めているのに対し、『唐詩三百首』においては 39 首で、全詩 321 首の 12.15%を占めていることが分かった。

同じく、李白詩の割合は7.1%と10.9%で、王維詩の割合は6.7%と9.03%である。『唐詩選』と『唐詩三百首』における上位3位の詩人の共通しているところは三人とも盛唐の時代の詩人であることである。『唐詩選』と『唐詩三百首』が成立した時代から見ると、二つの選本は100年以上の時代差があり、時代の流れによって、詩人への偏向が見られる可能性もあると思われる。しかし、以上の結果から、時代差には影響されていないことが分かるだろう。二つの選本において、杜甫、李白、王維の詩が多い点から見ると、時代の流れに影響されず、安定性があることが分かる。

それから、『唐詩選』において、詩数が多い第四位から第七位がそれぞれ岑参、王昌齡、高適、李頎であることは注目を集める。四人の詩人の特徴を見てみる。

岑参は節度使の幕僚として二度にわたり西域に赴き、王之涣・王昌齡・高適らと並ぶ辺塞詩人として名をはせた。王昌齡は七言絶句に優れ、「詩家の夫子（詩人の大先生）王江寧」と称せられる。辺塞詩や閨怨詩、離別詩に名作が多い。高適は若いころは定職につかず、任侠の徒と交わった。天宝三年（七四四年）には李白・杜甫とともに梁・宋の地（河南省）を旅行し、酒と詩作の日々を送っている。中年より初奮して学問に励み、天宝八年（七四九年）ごろ科挙（有道科）に及第、哥舒翰に認められて西域に勤務し、ついで安祿山の時、軍功を挙げ、侍御史から諫議大夫となった。李頎は詩人として王昌齡・高適らと親交があり、五言古詩と七言歌行に優れ、律詩も高適と並び称せられている。広い題材を取り上げたが、人物描写と辺塞詩に優れた⁹。

四人の共通点は、四人とも盛唐の詩人で、辺塞詩の有名な詩人であることである。実際に、岑参の「封大夫破播仙凱歌」2首、「磧中作」、「送劉判官赴磧西」など、王昌齡の「出塞行」、「從軍行」など、高適の「自薊北歸」、「塞上聞吹笛」など辺塞に関する詩が収められている。このことから、『唐詩選』においては、辺塞詩が多いと考えられる。

以上、詩人の詩数についての分析から、『唐詩選』と『唐詩三百首』において、選者に好まれる詩人が異なること、同じ詩人でも、好まれる作品が異なることと、『唐詩選』では辺塞詩が多いことが分かった。辺塞詩が多いという特徴は、『唐詩選』が日本人に好まれる理由のひとつと推測できるだろう。『唐詩選』の詩題調査において、改めて検証したい。

2. 『唐詩選』と『唐詩三百首』における時期別の詩人数

明代初期の高棟は『唐詩品彙』において、唐代を初唐・盛唐・中唐・晩唐に分類し、さらに「九格」（正始・正宗・大家・名家・羽翼・接武・正変・余響・旁流）という品格に基づいてそれぞれの時期を分類している。唐代を初唐・盛唐・中唐・晩唐に分けることは『唐詩品彙』に始まる¹⁰。

先行研究において、『唐詩選』所収詩人は初唐・盛唐の詩が多いのに比較して、中・晩唐の諸家の作品がはなはだ少ないと指摘されたが、実際に『唐詩選』所収詩人の状況はどのような状況か、時期別に『唐詩三百首』所収詩人と比較する。

『唐詩選』と『唐詩三百首』における、時期別の詩人数と割合を表2に示す。

表2：『唐詩選』と『唐詩三百首』所収詩人時期別数

⁹ 詩人に関する記述はすべて松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、1999年）を参考にした。

¹⁰ 松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、1999年、p. 847）

	唐詩選		唐詩三百首	
時期	人数		時期	人数
初唐	29	22.66%	9	11.69%
盛唐	42	32.81%	24	31.17%
中唐	36	28.13%	24	31.17%
晩唐	17	13.28%	17	22.08%
不詳	4	3.13%	3	3.90%
	128	100.00%	77	100.00%

表2から『唐詩選』においても、『唐詩三百首』においても、初唐、盛唐、中唐、晩唐四つの時代の詩人が所収されていることが分かる。時代別に見ると、『唐詩選』においては盛唐の詩人が一番多いのに対し、『唐詩三百首』においては盛唐と中唐の詩人が一番多いことが分かった。

次に、先行研究に『唐詩選』において、詩数からみると、初唐・盛唐の詩が多いのに比較して、中・晩唐の諸家の作品がはなはだ少ないと指摘されているが、実は、詩人の人数から見ると、盛唐の次に、中唐の詩人の人数が第2位で、中唐の詩人の人数は決して少なくない。『唐詩選』において、中唐の詩人が多いのに、中唐の詩の数が少ない理由については、採録される各中唐詩人の作品が少ないことが推測できる。

3. 『唐詩選』と『唐詩三百首』所収詩の作成時期

『唐詩選』と『唐詩三百首』のデータベースの作成時期に基づき、詩数を統計した結果を表3に示す。

表3：『唐詩選』と『唐詩三百首』作成時期別詩数

	唐詩選		唐詩三百首	
初唐	86	18.49%	14	4.36%
盛唐	271	58.28%	166	51.71%
中唐	83	17.85%	82	25.55%
晩唐	19	4.09%	56	17.45%
不明	6	1.29%	3	0.93%
	465	100.00%	321	100.00%

表3から見ると、『唐詩選』において、詩数が一番多いのは盛唐詩（58.28%）で、次に、初唐詩（18.49%）と中唐詩（17.85%）が続き、最後は晩唐詩（4.09%）である。確かに、盛唐詩が多いことは先行研究の通りである。しかし、初唐詩と中唐詩の比率には大きな違いが見られなかった。

一方、『唐詩三百首』において、詩数が一番多いのは『唐詩三百首』と同じく、盛唐詩（51.71%）で、その次に、中唐詩（25.55%）、晩唐詩（17.45%）、初唐詩（4.36%）である。

ここから、『唐詩選』と『唐詩三百首』において各時期の詩数の比率から見ると、『唐詩三百首』に比べて、『唐詩選』においては、中唐詩と晩唐詩が少ないことが指摘できる。

しかし、詩人の人数から見ると、盛唐の次に、中唐の詩人の人数が第2位で、中唐の詩人の人数が決して少なくないのに、中唐の詩数が少ない理由について、採録される各中唐詩人の作品が少ないからと予測された。

『唐詩選』と『唐詩三百首』における中唐詩人と詩数を表4に示しながら、考察する。

表4：『唐詩選』と『唐詩三百首』における中唐詩人と詩数

	唐詩選		唐詩三百首	
	詩人	詩数	詩人	詩数
1	韋応物	8	韋応物	12
2	劉長卿	7	劉長卿	11
3	李益	6	白居易	6
4	劉禹錫	5	盧綸	6
5	錢起	5	張祜	5
6	張仲素	4	柳宗元	5
7	張祜	4	韓愈	4
8	柳宗元	4	元稹	4
9	韓翃	3	劉禹錫	4
10	顧況	3	韓翃	3
11	皇甫冉	3	司空曙	3
12	王烈	2	李益	3
13	戴叔倫	2	錢起	3
14	武元衡	2	朱慶余	2
15	羊士諤	2	孟郊	2
16	盧綸	2	王建	1
17	賈島	2	顧況	1
18	王建	1	皇甫冉	1
19	王表	1	戴叔倫	1
20	韓愈	1	張籍	1
21	元稹	1	張繼	1
22	司空曙	1	李端	1
23	朱放	1	權德輿	1
24	張籍	1	賈島	1
25	張南史	1		
26	張繼	1		

27	文宗皇帝	1		
28	包何	1		
29	孟郊	1		
30	李端	1		
31	令狐楚	1		
32	呂溫	1		
33	歐陽詹	1		
34	耿漳	1		
35	積靈一	1		
36	郎士元	1		
合計		83		82

表4は、『唐詩選』と『唐詩三百首』における中唐詩人の人数と、それぞれの詩人数を示したものである。まず詩人の人数を見ると、『唐詩選』では中唐詩人が36名確認され、『唐詩三百首』の24名より多い。このことから、『唐詩選』が中唐詩人そのものを少なく扱っているわけではないことが分かる。

一方で、各詩人の採録詩数に注目すると、両詩集の間には違いが見られる。『唐詩三百首』では、韋応物や劉長卿、白居易など、特定の詩人について比較的多くの作品が採録されているのに対し、『唐詩選』では、上位数名を除けば、多くの詩人が数首程度にとどまっている。

とくに『唐詩選』では、第18位以降の詩人はすべて1首のみの採録であり、中唐詩人の作品数が全体として少ないことがうかがえる。これは、『唐詩選』が中唐詩人を幅広く取り上げながらも、各詩人の作品は最小限にとどめる編集方針をとっていたことを示していると考えられる。

以上の点から、表3で確認された『唐詩選』における中唐詩数の少なさは、中唐詩人の人数が少ないためではなく、各詩人の採録作品数が少ないことによるものと考えられる。つまり、『唐詩選』では、中唐詩は盛唐詩を中心とする構成の中で、限定的に配置されているのである。

最後に、『唐詩選』において、晩唐詩が少ないことについて分析する。ここでは、『唐詩選』と『唐詩三百首』における晩唐詩人と詩数を表5に示す。

表5：『唐詩選』と『唐詩三百首』における晩唐詩人と詩数

	唐詩選		唐詩三百首	
	詩人	詩数	詩人	詩数
1	李商隱	3	李商隱	24
2	王周	1	杜牧	10
3	許渾	1	溫庭筠	4
4	荊叔	1	許渾	2
5	司馬札	1	馬戴	2

6	段成式	1	崔塗	2
7	張喬	1	韋莊	2
8	陳祐	1	韓偓	1
9	李建勳	1	秦韜玉	1
10	李拯	1	張喬	1
11	于武陵	1	張泌	1
12	崔魯	1	陳陶	1
13	薛瑩	1	鄭畋	1
14	趙嘏	1	杜秋娘	1
15	釈処默	1	杜荀鶴	1
16	韋莊	1	李頻	1
17	温庭筠	1	薛逢	1
合計		19		56

『唐詩選』と『唐詩三百首』ともに、晩唐の詩人数が 17 人であることが注目を集める。それから、『唐詩三百首』においては、李商隠（24 首）、杜牧（10 首）、温庭筠（4 首）であるのに対し、『唐詩選』においては、李商隠（3 首）、杜牧（0 首）、温庭筠（1 首）である。『唐詩三百首』より、『唐詩選』において、晩唐詩が少ないことがより強く感じられる。

第 4 節 『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩体

漢詩（狭義の「中国古典詩」）の詩型は、「古体詩」と「今体詩」に二分される。古体詩とは、唐代に到るまでの「古い体」の作品を言うとともに、その形式によって作られた唐代以降の作品をも言う。古体詩には今体詩に見られるような、韻律上の厳密な規則はない。句式・平仄は自由であり、換韻も許される。齊言と雜言に分けられ、さらに齊言の下に四言古詩、五言古詩、七言古詩、雜言の下に雜言古詩がある。一方、今体詩とは、唐代に完成された「新しい体」の作品を言い、絶句（五言絶句・七言絶句・六言絶句）・律詩（五言律詩・七言律詩）・排律（五言排律・七言排律）の三種を含む¹¹。

『唐詩選』は七巻に分けられ、五言古詩に始まり、順番に七言古詩、五言律詩、五言排律、七言律詩、五言絶句、七言絶句が収録されており、古典詩の形式がほとんど網羅されている。一方、『唐詩三百首』は順番に五言古詩、樂府、七言古詩、樂府、五言律詩、七言律詩、樂府、五言絶句、樂府、七言絶句の詩体の詩が出てくる。樂府を除き、詩体の数からみると、『唐詩三百首』は合計六つの形式を網羅している。しかし、『唐詩選』と異なり、『唐詩三百首』において、「樂府」詩が特別に区分されていることは無視できない。

1. 樂府について

樂府も広い意味では古詩である。ただこれは本来、音楽に合わせて歌う詩を指す「樂章」である。漢の時代になると、管弦に合わせて歌う詩（樂章）とそうではない詩に分かれてき

¹¹ 松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、1999 年、p.696）

た。武帝は、楽府という音楽を取り扱う役所を設け、李延年を協律都尉として音律を整えさせ、司馬相如らに命じて樂章を作らせた。その一方、漢の文人は志を述べるために、周以来の四言の詩にならって詩を作ることもあった。しかし、一般の歌謡に五言形の句が多くなるにつれて、彼らも五言で整えた詩を作り出し、時には七言の詩も生まれてきた。唐の詩人たちも楽府の古題によって詩を作ったが、それはもはや歌うものではなかった。李白などはことに楽府題の詩が得意であった。杜甫や白樂天のように、目の前の事実を歌うのに、新しい楽府題を設けた人々もいる。「○○歌」、「○○曲」、「○○行」など、昔からの楽府歌行の形をとる¹²。

以上、楽府は広い意味で古詩であることが分かった。『唐詩三百首』において、楽府と古詩との区別があまり明らかではない事情について、目加田誠氏は白居易の「長恨歌」の例を挙げ、「長恨歌」の内容から言えば楽府に入れてよく、五七言の整齊した形から言えば古詩と言ってもよいものであると述べている¹³。

また、『唐詩選』と『唐詩三百首』に重複している詩の中で、同じ詩なのに、『唐詩三百首』において、楽府詩に分類される詩を表6に示す。

表6：『唐詩選』と『唐詩三百首』に重複するが詩体分類の異なる詩

詩人	詩題	時代	『唐詩選』の詩体	『唐詩三百首』の詩体
李白	子夜歌 秋歌	盛唐	五言古詩	樂府
杜甫	哀江頭	盛唐	七言古詩	樂府
沈佺期	獨不見（古意）	初唐	七言律	樂府
崔顥	長干行二首 其一	盛唐	五言絶句	樂府
盧綸	塞下曲 四首 其三	中唐	五言絶句	樂府
李白	清平調 三首 其一	盛唐	七言絶句	樂府
李白	清平調 三首 其二	盛唐	七言絶句	樂府
李白	清平調 三首 其三	盛唐	七言絶句	樂府
王昌齡	出塞	盛唐	七言絶句	樂府
王之渙	出塞 涼州詞二首	盛唐	七言絶句	樂府

2. 詩体別詩数の比較

『唐詩選』には、五言古詩（14首）に始まり、順番に七言古詩（32首）、五言律詩（67首）、五言排律（40首）、七言律詩（73首）、五言絶句（74首）、七言絶句（165首）が収録されているのに対し、『唐詩三百首』は順番に五言古詩（35首）、五古樂府（11首）、七言古詩（28首）、七古樂府（16首）、五言律詩（80首）、七言律詩（53首）、七律樂府（1首）、五言絶句（29首）、五絶樂府（8首）、七言絶句（51首）、七絶樂府（9首）が収録されている。詩体別のデータに基づき、二つの選本の詩体と詩数を表7に示す。

¹² 目加田誠訳注『唐詩三百首1』（平凡社、1973、p.xxi）

¹³ 同上

表 7：『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩体別詩数

『唐詩選』 465 首			『唐詩三百首』 321 首		
詩体	詩数		詩体	詩数	
七言絶句	165	35.48%	七言絶句	60 (9)	18.69%
五言絶句	74	15.91%	五言絶句	37 (8)	11.53%
七言律詩	73	15.70%	七言律詩	54 (1)	16.82%
五言律詩	67	14.41%	五言律詩	80	24.92%
五言排律	40	8.60%			0.00%
七言古詩	32	6.88%	七言古詩	44 (16)	13.71%
五言古詩	14	3.01%	五言古詩	46 (11)	14.33%
	465			321	100.00%

* () の中は樂府詩の詩数を示している。

まず、『唐詩選』と『唐詩三百首』において、今体詩と古体詩の比率を見ると、『唐詩選』においては、古体詩である五言古詩と七言古詩の割合は全詩の約 10%にしか占めないのに対し、今体詩である七言絶句、五言絶句、七言律詩と五言律詩が約 90%を占めている。『唐詩三百首』においては、古体詩の割合は約 28%で、今体詩は約 72%を占めていることから、『唐詩選』においては、古体詩より今体詩が著しく多いことが分かった。

さらに、同じ「今体詩」という枠内でも、七言絶句 (35%) と五言絶句 (16%) が全詩の約 51%で半分以上占めている。絶句が『唐詩選』の選者に好まれる傾向が見られる。一方、『唐詩三百首』において、五言絶句 (11%) と七言絶句 (19%) を合わせて絶句は約 30%を示しているのに対し、五言律詩 (25%) と七言律詩 (17%) と合わせて律詩が約 42%を占めている。『唐詩三百首』においては、絶句より律詩の方が多いたことが分かった。

以上の分析により、『唐詩選』と『唐詩三百首』所収詩の詩体に関する違いが分かった。なぜ『唐詩選』が流行したか、詩体から考察してみる。

『唐詩選』には今体詩が多く、今体詩自体には厳密的な作り方があり、ルールを覚えれば、作ることができるため、日本人にも親しみやすい。それに、厳密的な作り方は、日本人好みに合ったことも『唐詩選』が日本人に好まれる一つの理由だと思われる。

特に、『唐詩選』において、全詩の約 51%で半分以上占めている絶句は形が整い、詩句も短いため、日本人にとって、読みやすいだろう。石川忠久氏は日本人が絶句の好きな理由について、「絶句は四句の、最短の詩形であるから、詩人はまずポイントをしぼる。想いを凝らし、視点を定め、言葉を吟味する。そこに詩人のセンスがひらめく。こういうところは、わが国の和歌や俳句に似通うだろう。だから、絶句のころは日本人に好まれると思われる。」¹⁴と述べている。そこで、絶句が多いという特徴は『唐詩選』が日本に流行した一つの要因になったと思われる。

¹⁴ 石川忠久『漢詩のころ』(時事通信社年、1980)

第5節 『唐詩選』と『唐詩三百首』収録作品の主題の比較¹⁵

先述のように、先行研究において指摘された懷古・送別・旅愁・惜別・辺愁・閨怨などといった主題については、実際に『唐詩選』にはこれらの主題の詩が本当に多いかどうか研究は行われていない。たとえば、『唐詩選』が惜別・辺愁・閨怨等の悲哀を詠じた作品に富むという日野氏の指摘に対して、『唐詩選』収録作品の主題の割合を確認する研究は行われていない。

そこで、本節では、まずは『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩に着目し、統計的に調査し、主題からみる『唐詩選』の特徴を究明することにした。

『唐詩類苑』においては、詩の主題は「部」に分けられ、部はさらに「類」と呼ばれる小項目に分けられる。具体的には、人部、天部、歳時部、地部、山部、水部、京都部など計 39 部に主題が分けられ、人部にはさらに 94 類の小項目がある。

『唐詩選』収録詩 465 首のうち、435 首が『唐詩類苑』にも収録されており、30 首は収録されていなかった。一方、『唐詩三百首』は 321 首のうち、298 首が『唐詩類苑』にも収録されており、23 首は収録されていなかった。収録されていない詩は『唐詩類苑』の分類の方法を参考にし、筆者が主題を分類した。以下では、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合と、筆者が分類した詩を加えた場合との両方の結果を示すことにする。

前述したように、前野直彬氏の懷古と、日野龍夫氏の惜別・辺愁・閨怨といった主題の分類はどのような基準で決められているかについて言及していない。そのため、これから、『唐詩選』と『唐詩三百首』所収詩のうち懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩が『唐詩類苑』においてどの部別と類別に分類されているかを調査し、それぞれの選本における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況について統計的な調査を行う。

1. 『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩

前野氏は、『唐詩選』において懷古・送別・旅愁といった主題の詩を選びすぎているとの批判があることを指摘しているが、日野氏の議論とは異なり、具体的な作品例は示されていない。このうち「旅愁」については、語義上は旅の途上で抱く愁情を指すと理解されるものの、『唐詩類苑』の分類に照らすと、「人部」の「人部」の「行役」・「羈旅」・「帰国」・「還郷」・「貶謫」・「流徙」など、複数の部類にまたがって関連し得る主題であり、その範囲を一義的に定めることが難しい。先行研究においても、どのような詩を「旅愁」として想定しているのかが必ずしも明確ではないため、本論文では「旅愁」を独立した主題として設定せず、考察の対象から除外することとした。

本章では、懷古について考察する。「懷古」という主題に該当するものには、『唐詩類苑』の「人部」の「懷古」類がある。例えば、次のような詩が収められる。

- 李白 蘇臺覽古 （『唐詩選』）¹⁶
舊苑荒臺楊柳新 舊苑荒臺 楊柳新たなり
菱歌清唱不勝春 菱歌清唱 春に勝へず

¹⁵本節の比較内容は、すでに「『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況―『唐詩三百首』との比較を通じて―」（『中國中世文學研究』第 76 号、2023 年 3 月）として投稿し、掲載されたものである。

¹⁶本章で挙げた『唐詩選』の詩句はすべて目加田誠氏の『唐詩選』から引いたものである。

只今惟有西江月　　只今　惟だ　西江の月のみ有り
曾照吳王宮裏人　　曾て照らす　吳王宮裏の人

この詩の詩題に含まれる「蘇臺」は、吳王によって姑蘇山に建てられた「姑蘇臺」を指しており、詩句に含まれる「吳王宮裏人」は、戦いに敗れた越王勾践から吳王夫差に送られた絶世の美女の西施のことである。この詩は李白が古跡を訪れて詠じたものである。

比率の面から『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩を比較したい。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』においては、「人部」の「懷古」類詩が8首あり、全詩435首の1.84%を占めているのに対して、『唐詩三百首』においては、「人部」の「懷古」類詩が12首あり、全詩298首の4.03%を占めている。(附表1)

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、「人部」の「懷古」類詩が8首あり、全詩465首の1.72%を占めているのに対して、『唐詩三百首』においては、「人部」の「懷古」類詩が13首あり、全詩321首の4.05%を占めている。(附表2)

どちらの場合でも『唐詩三百首』は『唐詩選』の二倍以上の割合で、懷古の詩が収められていることが分かる。『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、前野氏の指摘と異なり、『唐詩選』における懷古詩は、『唐詩三百首』より少ないことが分かった。

2. 『唐詩選』と『唐詩三百首』における辺塞詩

日野龍夫氏は『唐詩選』が辺愁の詩に富むと指摘するほか、「『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風—」¹⁷において、川柳などに引用される頻度を検証し、『唐詩選』の中でどのような作品が人々に好まれていたかについて、(イ)都会の繁華を詠むもの、(ロ)「古意」、「宮怨」などの艶詞、(ハ)辺境を詠むものに弁別している。

そして、(ハ) 辺境を詠むものに関しては、「関山月」・「涼州詞」・「從軍行」など八首の詩題が挙げられ、辺境の風物感慨を詠じた「從軍行」・「塞上曲」などの詩は悲壮で感傷的な詩情が人々に愛されたと述べている。

日野氏の先行研究に挙げられている辺境を詠じた詩題を『唐詩類苑』の部別に照らし合わせた結果、「辺塞部」と「武部」に分けて収録されていた。そのため、本論文では、『唐詩類苑』の分類基準を参照し、『唐詩選』と『唐詩三百首』において「辺塞部」と「武部」に分類されている詩を、辺境を詠じた詩、つまり辺塞詩と定義する。ただし、武部に分類されている詩のうち、明らかに辺塞を舞台としていない詩は除く。¹⁸

『唐詩類苑』においては、「辺塞部」の下に、「総辺」・「塞上」・「出塞」・「薊門」など三〇類が分類されており、「武部」の下に「刀」・「從軍」・「行營」・「凱旋」・「赴軍」など三三類が分類されている。

そのうち、『唐詩選』における辺塞詩は「辺塞部」の「総辺」・「塞上」・「薊門」・「巡辺」・「出塞」類と「武部」の「從軍」・「凱旋」・「行營」・「烽」・「刀」・「戦伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類に含まれている。『唐詩三百首』においては、「辺塞部」の「総辺」・「塞上」・「塞下」・「涼州」類と「武部」の「戦伐」・「從軍」類に含まれている。

¹⁷ 日野龍夫「『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風」(岩波書店、『文学』39巻3号、1971年)

¹⁸例えば、「武部」の「八陣圖」である。

『唐詩選』における「辺塞部」の「総辺」類の詩を実例として挙げる。

● 岑参 磧中作 （『唐詩選』）

走馬西來欲到天	馬を走らせて西來 天に到らんと欲す
辭家見月兩回圓	家を辭して月の兩回圓かなるを見る
今夜不知何處宿	今夜知らず 何れの處にか宿せん
平沙萬里絶人烟	平沙萬里 人烟を絶つ

「磧中作」は、詩人の実際の体験に基づき、作られた詩という。辺境に赴き、家から出てもう二か月経ったという描写で、月を見て時間を数えることから詩人の望郷の愁いを感じられる。泊まるところも砂漠しかないという描写は、辺境の過酷な環境に湧いてくる望郷の思いがより強く感じられる。

次に、『唐詩選』の「武部」の「從軍」類の実例を挙げる。

● 王昌齡 從軍行 （『唐詩選』）

青海長雲暗雪山	青海の長雲 雪山暗し
孤城遙望玉門關	孤城遙かに望む 玉門關
黃沙百戰穿金甲	黃沙百戰 金甲を穿つ
不破樓蘭終不還	樓蘭を破らずんば終に還らじ

この詩は、樓蘭を打ち破ることができなければ、どうしても帰ってくることはないという描写から、辺境に行って、威勢よく気張ってみせる兵士の心意気を感じられる。

以上、『唐詩選』の「辺塞部」と「武部」を通して、詠う内容は様々であるが、いずれも辺境に関する詩であることを確認した。

以下、これらの詩の比率の面から見て、『唐詩選』は本当に辺塞詩に富んでいるかについて、『唐詩三百首』と比較してみたい。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』においては、「辺塞部」の「総辺」類が 23 首、「塞上」・「薊門」・「巡辺」・「出塞」類が各 1 首あり、「武部」の「從軍」類が 5 首、「凱旋」類が 4 首、「行營」類が 2 首、「烽」・「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類が各 1 首あり、つまり、「辺塞部」と「武部」を合わせて 44 首あり、『唐詩選』全詩 435 首の 10.11% を占めている。一方、『唐詩三百首』において、「辺塞部」と「武部」を合わせて 15 首あり、『唐詩三百首』全詩 298 首の 5.03% を占めている。(附表 3)

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「辺塞部」の「総辺」類が 24 首、「塞上」類が 3 首、「薊門」・「巡辺」・「出塞」類が各 1 首で、「武部」の「從軍」類が 5 首、「凱旋」類が 4 首、「行營」・「烽」類が各 2 首で、「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類には各 1 首で、つまり、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』において、「辺塞部」の「総辺」類が 23 首、「塞上」・「薊門」・「巡辺」・「出塞」類が各 1 首あり、「武部」の「從軍」類が 5 首、「凱旋」類が 4 首、「行營」類が 2 首、「烽」・「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類が各 1 首あり、つまり、「辺塞部」と「武部」を合わせて 44 首あり、『唐詩選』全詩 435 首の 10.11% を占めている。一方、『唐詩三百首』においては、「辺塞部」と「武部」を合わせて 15 首あり、『唐詩三百首』全詩 298 首の 5.03% を占めている。(附表 3)

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』においては、「辺塞部」の「総辺」類が

24 首、「塞上」類が 3 首、「薊門」・「巡辺」・「出塞」類が各 1 首で、「武部」の「從軍」類が 5 首、「凱旋」類が 4 首、「行營」・「烽」類が各 2 首で、「刀」・「戰伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」類には各 1 首で、つまり、「辺塞部」と「武部」を合わせて 48 首あり、『唐詩選』全詩 465 首の 10.32%を占めている。(附表 4)

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、『唐詩三百首』において、「辺塞部」の「総辺」類が 9 首で、「塞上」・「塞下」・「涼州」類が各 1 首ずつで、「武部」の「戰伐」類が 2 首で、「從軍」類が 1 首あり、「辺塞部」と「武部」を合わせて 15 首である。

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩三百首』においては、「辺塞部」と「武部」の詩が 15 首あり、全詩 321 首の 4.67%を占めている。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩三百首』より、『唐詩選』における「辺塞部」と「武部」の詩の方が全詩における割合が高いことが分かった。日野氏が述べているように、『唐詩選』には、『唐詩三百首』に比べて、辺塞詩が多いことが分かった。

3. 『唐詩選』と『唐詩三百首』における送別詩

日野氏の二つの先行研究においては、『唐詩選』には惜別の詩が多いという指摘があったが、どのような詩が惜別の詩なのか、言及されていない。

本論文では、送別詩と捉えることにし、まず、その定義について述べる。送別に関連しそうな『唐詩類苑』の分類は、「送」もしくは「別」を含む「人部」の「送」・「別」・「送別」・「留別」・「贈別」・「話別」・「酬別」・「寄別」・「宴別」の 9 類であった。

送別詩に関連しそうな『唐詩類苑』の 9 類において、作詩者は送る側と旅立つ側に分かれ、場面は宴席などに分けられるが、詩題にその類別名が含まれることと、離別の際に作られた詩であることが共通点である。本論文では、送る側と送られる側、送別の場面などで分けることなく、離別の際に作られた詩をすべて送別詩と定義し、統計的な調査を行うこととする。

送別詩に該当するのは、『唐詩選』においては「人部」の「送」・「別」・「送別」の 3 つの類、『唐詩三百首』においては「送」・「別」・「送別」・「贈別」・「留別」の 5 つの類である。

比率から見ると、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』において「人部」の「送」・「別」・「送別」に分類される詩はそれぞれ 13 首、7 首、1 首で、全部で 21 首あり、『唐詩選』435 首の 4.83%を占めている。一方、『唐詩三百首』において「送」・「別」・「送別」・「贈別」・「留別」に分類される詩はそれぞれ 6 首、4 首、2 首、2 首、1 首で、全部で 15 首あり、『唐詩三百首』の 298 首の 5.03%を占めている。(附表 5)

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において「人部」の「送」・「別」・「送別」に分類される詩はそれぞれ 16 首、7 首、1 首で合わせて 24 首あり、全詩 465 の 5.16%を占めている。一方、『唐詩三百首』において「送」・「別」・「送別」・「贈別」・「留別」に分類される詩はそれぞれ 6 首、5 首、2 首、2 首、1 首で、全部で 16 首あり、『唐詩三百首』全詩 321 首の 4.98%を占めている。(附表 6)

以上、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における送別詩の割合は、『唐詩三百首』とあまり変わらないことが分かった。『唐詩選』に送別詩が特に多いとは言えないのである。

4. 『唐詩選』と『唐詩三百首』における閨怨詩

前述したように、日野龍夫氏は「『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風—」において、(ロ)「古意」、「宮怨」などの詩を艶詞に弁別している。また、艶詞は『唐詩選』のなかでは大きな比重を占める領域であり、「閨怨」や「章台柳」など、男女の情を主題とする詩が、『三体詩』などに比べて『唐詩選』では格段に増えたことが『唐詩選』の流行の要因とされているが、好まれた「艶詞」とは具体的にどのように判断しているのかについて、説明が行われず、ただ、「烏夜啼」・「古意」・「独不見」など具体的な詩題一九首が挙げられているだけである。

また、『唐詩選国字解一』においては、日野氏は「閨怨」と表現しているが、艶詞と重なるものと考えられる。

日野氏の前掲論文において、「艶詞」として挙げられている作品を『唐詩類苑』の主題の調査に照らし合わせると、楽府に分類される詩を含むため、完全に重なるわけではないが、「人部」の「閨情」類と「幽怨」類に重なる詩が多かった。

そのため、日野氏の「閨怨」や「艶詞」と一番近い部別や類別は、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類になると判断し、『唐詩選』と『唐詩三百首』において、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類の詩数や割合等の状況を比較することにした。これにより、『唐詩選』に本当に「閨怨」や「艶詞」が多いかどうかについて考察できると思われる。

筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「人部」の「幽怨」詩には「吳宮怨」(衛萬)、「怨情」(李白)など合計 15 首あった。ここでは、王昌齡の「閨怨」を挙げる。

- 王昌齡 閨怨 (『唐詩選』)

閨中少婦不知愁 閨中の少婦 愁を知らず
春日凝粧上翠樓 春日 粧を凝らして翠樓に上る
忽見陌頭楊柳色 忽ち見る 陌頭 楊柳の色
悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは 夫婿をして封侯を覓めしめしを

この詩は、夫と別れて暮らす若い妻の心情を詠んだものである。前半では、閨中の少婦が春の日に美しく装って楼上に上る姿が描かれるが、後半では、道端の楊柳の色を目にしたことを契機として、夫を立身出世のために旅立たせたことへの後悔が表明される。すなわち、本詩は第三者の視点から女性の心情を描いたものであり、離別によって生じた怨情を主題とする作品として、「幽怨」詩の具体例に位置づけることができる。

また、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「人部」の「閨情」詩には「古意」(沈佺期)、「靜夜思」(李白)など合計 13 首あった。

「人部」の「閨情」詩の具体例を挙げる。

- 張仲素 秋閨思 (『唐詩選』)

碧窗斜月靄深輝 碧窗の斜月 深輝靄たり
愁聽寒蛩淚濕衣 寒蛩を愁ひ聽きて 涙衣を濕す
夢裏分明見關塞 夢裏 分明に關塞を見る
不知何路向金微 知らず 何れの路か金微に向ひし

この詩の詩題は、「女性の秋の閨のものの思い」の意で、辺境に行った夫を思う女性を描いている。

上記、二つの実例とも、女性の思いを描いた詩であったが、『唐詩類苑』においてはそれぞれ、「幽怨」類と「閨情」類に分類されている。「人部」の「幽怨」詩と「閨情」詩の相違点に関しては、「人部」の「幽怨」詩に分類されている詩の詩題に「怨」が含まれる詩が多く、内容から見ると、女性の怨みを描くものが多かった。一方、「人部」の「閨情」類に分類されている詩の詩題に「閨」・「思」・「意」などが含まれる詩が多く、内容から見ると、女性の思いに限らず、男性の望郷などの思いを詠じる詩もあった。『唐詩選』における「人部」の「幽怨」詩と「人部」の「閨情」詩の共通している所は、人間の哀愁等の情を詠じている詩であると思われる。

本論文では「人部」の「幽怨」詩と「人部」の「閨情」詩を合わせて日野氏のいう閨怨詩に当たると考えることにする。以下、『唐詩選』と『唐詩三百首』において、「人部」の「幽怨」詩と「人部」の「閨情」詩の詩数や割合等の状況を比較して、『唐詩選』に本当に閨怨詩が多いかどうかについて考察する。

附表7と附表8はそれぞれ、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合と、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、「人部」の「幽怨」詩と「閨情」詩の割合を示す。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』において、「人部」の「幽怨」詩が10首で、「閨情」詩が13首で、閨怨詩が全部で23首あり、全詩435首の5.29%を占めている。『唐詩三百首』において、「人部」の「幽怨」詩が7首で、「閨情」詩が24首で、閨怨詩が全部で31首あり、全詩298首の10.40%を占めている。

一方、筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』において、「人部」の「幽怨」詩が15首で、「閨情」詩が13首で、つまり閨怨詩が全部で28首あり、全詩465首の6.02%を占めている。『唐詩三百首』において、「人部」の「幽怨」詩が9首で、「閨情」詩が26首で、閨怨詩が全部で35首あり、全詩321首の10.90%を占めている。

上記、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、先行研究の指摘とは異なり、『唐詩選』においては、『唐詩三百首』より、閨怨詩が少ないことが分かった。『唐詩選』には閨怨詩も特に多いとは言えないのである。

以上、『唐詩類苑』の主題への分類の基準を参照しながら、『唐詩三百首』との比較を通じて、『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況を把握することができた。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、先行研究の指摘と同じく、『唐詩三百首』より、『唐詩選』においては辺塞詩が多いことが分かった。また、先行研究の指摘とは異なり、『唐詩三百首』より『唐詩選』における送別詩には大きな差がなかったことと、『唐詩選』においては懷古詩と閨怨詩が少ないことが分かった。

先行研究の指摘のうち、実際に多かったのは辺塞詩のみであった。送別詩には大きな差はなく、懷古詩と閨怨詩は『唐詩三百首』より少なかったのである。

小結

『唐詩選』と『唐詩三百首』には、詩体や主題の選択においていくつかの特徴的な違いが見られる。

詩人に関して、先行研究では『唐詩選』において初唐・盛唐の詩が多いのに対し、中・晩唐の詩人の作品が非常に少ないと指摘されている。しかし、詩人の人数に着目すると、盛唐に次いで中唐の詩人が多く、中唐の詩人の人数は決して少なくないことが確認された。中唐の詩人が多いにもかかわらず、中唐の詩の数が少ない理由としては、各中唐詩人の作品数が限られている点が挙げられる。また、盛唐詩が多いという特徴、特に辺塞詩人の多さは主題分析の結果とも一致しており、この特徴が『唐詩選』の日本における受容と関連していることがうかがえる。

詩体については、『唐詩選』が主に今体詩を収録し、その中でも絶句（約 51%）の割合が高い点が顕著である。一方、『唐詩三百首』でも今体詩が 72%を占めるものの、律詩（約 42%）の割合が高い。この違いは、『唐詩選』が日本で流行した一因である可能性があり、特に日本人に馴染みやすい絶句の短さや、和歌・俳句との共通点が重要な要素と考えられる。

また、主題の比較では、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者が主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩三百首』と比較した場合、『唐詩選』に確かに多いと判断されるのは、辺塞詩のみであった。また、先行研究の指摘と異なり、『唐詩三百首』と『唐詩選』における送別詩には大きな差がなく、『唐詩選』においては懷古詩と閨怨詩は、『唐詩三百首』より少ないことが分かった。

これらの分析を踏まえ、『唐詩選』の特徴をより詳細に探るため、次章以降では、『三体詩』や『古文真宝』など『唐詩選』以前の選本と詩人、時期、主題ごとに比較し、その独自性を深掘りする必要がある。また、『三体詩』や『古文真宝』といった『唐詩選』登場以前の唐詩選本との比較を通じて、『唐詩選』の主題における特徴をさらに明らかにしていきたい。

附表

附表 1 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩

	唐詩選		唐詩三百首	
類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
懷古	8	1.84	12	4.03

附表 2 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における懷古詩

	唐詩選		唐詩三百首	
類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
懷古	8	1.72	13	4.05

附表 3 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における辺塞詩

		唐詩選		唐詩三百首	
部名	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
辺塞部	総辺	23	5.29	9	3.02
	塞上	1	0.23	1	0.34

	薊門	1	0.23	0	0.00
	巡辺	1	0.23	0	0.00
	出塞	1	0.23	0	0.00
	塞下	0	0.00	1	0.34
	涼州	0	0.00	1	0.34
武部	從軍	5	1.15	1	0.34
	凱旋	4	0.92	0	0.00
	行營	2	0.46	0	0.00
	烽	1	0.23	0	0.00
	刀	1	0.23	0	0.00
	戦伐	1	0.23	2	0.67
	観兵	1	0.23	0	0.00
	幕府	1	0.23	0	0.00
	赴軍	1	0.23	0	0.00
合計		44		15	5.03

附表 4 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における辺塞詩

部名	類名	唐詩選		唐詩三百首	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
辺塞部	総辺	24	5.16	9	2.80
	塞上	3	0.65	1	0.31
	薊門	1	0.22	0	0.00
	巡辺	1	0.22	0	0.00
	出塞	1	0.22	0	0.00
	塞下	0	0.00	1	0.31
	涼州	0	0.00	1	0.31
武部	從軍	5	1.08	1	0.31
	凱旋	4	0.86	0	0.00
	行營	2	0.43	0	0.00
	烽	2	0.43	0	0.00
	刀	1	0.22	0	0.00
	戦伐	1	0.22	2	0.62
	観兵	1	0.22	0	0.00
	幕府	1	0.22	0	0.00
	赴軍	1	0.22	0	0.00
合計		48	10.32	15	4.67

附表5 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における送別詩

		唐詩選		唐詩三百首	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	送	13	2.99	6	2.01
2	別	7	1.61	4	1.34
3	送別	1	0.23	2	0.67
4	贈別	0		2	0.67
5	留別	0		1	0.34
	合計	21	4.83	15	5.03

附表6 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における送別詩

	唐詩選		唐詩三百首	
類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
送	16	3.44	6	1.87
別	7	1.51	5	1.56
送別	1	0.22	2	0.62
贈別	0		2	0.62
留別	0		1	0.31
合計	24	5.16	16	4.98

附表7 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における閨怨詩

	唐詩選		唐詩三百首	
類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
幽怨	10	2.3	7	2.35
閨情	13	2.99	24	8.05
合計	23	5.29	31	10.40

附表8 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『唐詩三百首』における閨怨詩

	唐詩選		唐詩三百首	
類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
幽怨	15	3.23	9	2.80
閨情	13	2.80	26	8.10

合計	28	6.02	35	10.90
----	----	------	----	-------

附表 9 『唐詩選』と『唐詩三百首』の主題の各部別比較（筆者の分類を加える場合）

	主題	唐詩選詩数	唐詩三百首詩数
1	人部	145	140
2	居処部	42	30
3	歳時部	42	23
4	辺塞部	30	12
5	水部	23	15
6	寺観部	19	6
7	樂部	19	16
8	職官部	18	6
9	武部	18	4
10	礼部	16	6
11	地部	13	6
12	天部	11	15
13	山部	9	8
14	治政部	9	1
15	京都部	6	0
16	州郡部	6	2
17	帝戚部	5	0
18	花部	4	4
19	巧芸部	4	3
20	服食部	4	2
21	鳥部	3	1
22	木部	3	1
23	獸部	3	0
24	祠廟部	3	3
25	積部	3	5
26	果部	2	0
27	器用部	1	0
28	草部	1	2
29	道部	1	1
30	文部	1	4

31	産業部	1	1
32	蟲豸部	0	2
33	儒部	0	1
34	帝王部	0	1
		465	321

第2章 『三体詩』との比較を通じて

はじめに

前章においては、内容に偏りがないとされる『唐詩三百首』を比較の対象とし、二つの選本の収録作品の主題を比較した。その結果、先行研究の指摘のうち、実際に多かったのは辺塞詩のみであり、送別詩には大きな差は見られず、また、懷古詩と閨怨詩は『唐詩三百首』よりも収録数が少なかったことが明らかになった。

本章では、『唐詩選』と同じく日本で流行した唐詩選集の『三体詩』¹を比較の対象とし、二つの唐詩選集の収録作品の主題の特徴を明らかにすることにする。前稿で比較対象とした『唐詩三百首』は、中国で大きな流行を見せたが、日本ではあまり普及しなかったのに対し、『三体詩』は日本に伝来後に好評を博し、『唐詩選』が伝わるまでは最も広く読まれた唐詩選集であった。日本の読者が『三体詩』に馴染んでいた状況下で、新たに伝来した『唐詩選』を読むことにより、その違いが顕著に感じられたことが考えられる。これまでの先行研究によって、収録作品の時代や詩の形式の違いについては指摘されていたが、内容に関する詳細な比較は行われていなかった。したがって、本章では新たに『三体詩』を比較対象に取り上げることにより、『唐詩選』の日本での流行の要因について、より深く理解することを試みることにした。

第1節 『三体詩』の概要

『唐詩選』と『三体詩』は、ともに日本において長い間愛読されてきた唐詩の選集であり、その文学的価値については、すでに多くの言及がある²。ここでこの二つの選集についてまとめると、『唐詩選』は明代の李攀龍によって編纂されたもので（ただし偽作説もある）、五言古詩・七言古詩・五言律詩・五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句という詩体ごとに、計128人による465編が収められた唐詩の選集である。一方、『三体詩』は南宋の周弼によって編纂されたもので、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三つの形式（三体）に限定され、167人による494首³が収められている。さらに、詩をその構成や表現のスタイルに基づいて合計21の「格」に分類し、それぞれ「実接」「虚接」「前実後虚」などと名づけている

¹ 『三体詩』のほか、『唐詩三体家法』、『唐賢三体詩法』、『唐三体詩』、『三体唐詩』などの別称がある。別称につく「家法」、「詩法」が示すように、詩の「法」（原理、規範）を表そうとするのは『三体詩』の形式の特徴である（主に村上哲見著『三体詩』「新訂 中国古典選」第16巻〔朝日新聞社、1966年、p.2〕参照）。

² 例えば服部宇之吉氏は、日本においては『古文真宝』、『唐詩選』、および『三体詩』が四書五経と並んで広く読まれており、文部省の教員検定受験者に示される必読書にも

『古文真宝』と『唐詩選』が含まれていたことを指摘している（富山房編集部編「漢文 大系」第2巻『箋解古文真寶後集・増註三體詩・箋註唐詩選』解題（富山房、1910年、p.1）

「從來我邦に於て四書五経と共に一般に讀まれたるものとしては古文真寶、唐詩選及び三體詩を推さざるを得ず、現在においても文部省が教員検定受験者に示したる必讀書中には、古文真寶と唐詩選とを含めり。此れ從來の習慣に仍ると云はば云ふべけれども、亦此等三書の文學上に有する價值の然らしむるものあること勿論なり」（原文の片仮名表記を引用者が平仮名に改めた）

³ 『三体詩』は南宋の周弼に作られ、元に至り、釋天隱、その後、裴庾によって注釈が施された。僧円至と裴庾の注を付した三卷本（原題『増註唐賢絶句三体詩法』）がもっとも普及したが、二十卷本、清の高士奇注の六卷本もある。この数字は『増註三卷本』によるものである（主に注1前掲書pp.17-19参照）。

4。

『唐詩選』と『三体詩』の収録作品の詩体の違いについて、齋藤响氏は、『唐詩選』が『瀛奎律髓』や『聯珠詩格』や『三体詩』のような部分的な紹介にとどまらず、唐詩の諸体を紹介したもので、しかも分量が手頃であることが流行の要因であると述べている⁵。

村上哲見氏によると、『唐詩選』は、その編者が李攀龍ではないにしても、彼の編定した詩集がもとになっているには違いないので、その詩論、すなわち「詩は必ず盛唐」という見識が強く反映されており、徹底して盛唐中心に選ばれているという。また、『三体詩』の方は、編纂の当時、すなわち南宋時代の好みが反映されていて、中晩唐＝唐代後半の中心になっているとする⁶。このことについて岡田正之氏は、『三体詩』収録作品の詩風は南宋末期の詩壇の動向に関係し、江湖詩派の影響を受けたとして、周弼はその中心的な存在であるため、古体を捨て、特に中晩唐の詩を奨励したという⁷。

一方、簡野道明氏は、『三体詩』を詩の様式や制作方法を研究する上で便利な資料であると評価しつつも、採録された詩を見ると、初唐の詩や盛唐期の詩壇の巨匠である李白や杜甫の作品を一首も収録しておらず、これは唐詩選集としては不完全であると指摘している⁸。

日本における流行の経緯に関しては、『唐詩選』は江戸初期に日本に伝来し、荻生徂徠や服部南郭ら古文辞派によって漢詩の入門書として広く普及した⁹。一方、『三体詩』は室町時代の五山の禅僧たちから始まり、広く愛読され、江戸時代には『唐詩選』と並んで広く読まれた¹⁰。村上哲見氏によれば、長期的な視点では『三体詩』の方が『唐詩選』よりもよく読まれた漢詩集であり、両書は室町時代から江戸時代末まで頻繁に出版され、日本における漢詩の普及に貢献したという¹¹。市木武雄氏も『三体詩』は鎌倉・室町時代に最も読まれた漢

⁴ この点に言及している資料は多く、ほとんどの『三体詩』の注釈書の解題や序に書かれているが、ここでは筆者が主に参照したものを挙げる。

国民文庫刊行会編、『国訳漢文大成』[第2]第6巻（東洋文化協会、1920年、p.2）

「三體の詩法は左の如し。七言絶：實接・虚接・用事・前對・後對・拗體・仄體；七言律：四實・四虚・前虚後實・前實後虚・結句；五言律：四實・四虚・前虚後實・前實後虚・一意・起句・結句・詠物」

塚本哲三編、『唐詩選・三體詩』漢文叢書 第32、（有朋堂、1929年、pp.62-63）

「三體詩に分ちたる詩格は律絶に因りて異れり。七言絶句體には實接・虚接・用事・前對・後對・拗體・側體の七格に分ち、七言律體には四實・四虚・前虚後實・前實後虚・結句・詠物の六格に分ち、五言律體には四實・四虚・前虚後實・前實後虚・一意・起句・結句・詠物の八格に分ちたり」

⁵ 齋藤响『唐詩選 上』『漢詩大系』第六（集英社、1964年、p.10）

⁶ 村上哲見『漢詩と日本人』（講談社選書メチエ、1994年、pp.198-199）

⁷ 注4前掲塚本氏編書 p.62

⁸ 簡野道明著『唐詩選詳説 上』（明治書院、1929年、p.12）

⁹ この点に言及している本は多く、ほとんど『唐詩選』の注釈書の解題や序に書かれている。また、前章では挙げているため、ここでは略す。

¹⁰ 注4前掲国民文庫刊行会編書（序言 p.1）

「此の三體詩は宋の淳祐十年に周弼字は伯弼の選ぶ所のもの、是より後六十年を経て元の至大二年に高安の釋圓至天隱が注を著はし、其の友東嘉の裴庚季昌が増注を著はし 以て世に出ししものなり、日本の傳來は建仁寺の中巖圓月が入元して携へ還りしより、禪家宿老の提唱と為り、熊谷立閒の如きは備考大成二十卷を著はし南禪和尚は和語俗談十二卷を著はすに至る、是の故に釋家に於て盛んに之を用ひたるなり、物徂徠は李于鱗の唐詩選を盛行させんが爲め特に此の本を貶して伯弼は一無名子書賣の輩と詐稱するに至る、此の如き所より儒流は多く唐詩選、緇流は多く三體詩を講じたるなり」

¹¹ 注6前掲村上氏書 pp.148-149

「日本で最もよく読まれた漢詩集といえば、誰しもがまず『唐詩選』という書物を挙げることであろう。たしかに江戸時代中期以降についていえばその通りに違いあるまいが、もっと長い目で見れば、つまり長期にわたる累積でいえば、あるいは『三体詩』の方が上であるかもしれない...（引用者略）...とにかくこの両書が、室町時代から江戸時代末に到る木版印刷の時代に、くり返しくり返し出版された超ベストセラー

学入門書であり、『唐詩選』の登場によってその存在が薄れたものの、唐詩の日本への紹介に大きく貢献したと述べている¹²。しかし、漆山又四郎氏によれば、『唐詩選』を推奨し、『三体詩』を貶める人々も存在したようである¹³。

以上の先行研究により、『唐詩選』及び『三体詩』はそれぞれの特徴を持ち、日本において漢詩を学ぶ者にとって重要な位置を占めており、日本人に好まれて読まれてきたことがうかがえる。

しかし、『唐詩選』と『三体詩』の収録作品の主題の違いに関する先行研究は少なく、村上哲見氏によって、『唐詩選』は初唐から盛唐に偏り、慷慨や悲壮な調子が主体であり、感情の振幅が激しいとされる一方、『三体詩』は南宋末期の詩壇の傾向を反映し、中唐から晩唐の詩を収録しており、より日常的で淡々とした抒情性が主体であり、技巧的で才気を発揮する詩も多いと述べられている程度である¹⁴。

主題に関する先行研究が不足していることと、『唐詩選』には懷古・送別・旅愁・閨怨などの詩が多いという先行研究の指摘を踏まえ、本章では、『唐詩選』と『三体詩』の収録詩の主題を比較し、『唐詩選』の特徴を明らかにすることにより、その流行の要因の一端について考察したいと思う。

第2節 『唐詩選』と『三体詩』の詩人とその作品数

『唐詩選』と『三体詩』に関する先行研究では、『三体詩』や『唐宋聯珠詩格』、『瀛奎律髓』などが中・晩唐の詩を多く収録し、盛唐の詩をあまり含まないのに対し、『唐詩選』は盛唐の詩を多く収めていることが指摘されている。このことが、漢詩を作る人々の嗜好に『唐詩選』が適合した理由の一つとされている¹⁵。

また、注釈書の数においても、『唐詩選』は豊富である一方、『三体詩』の注釈書は限られており、『唐詩選』の方は人気が高かったことがうかがえる¹⁶。『唐詩選』についての先行研究では、収録作品の詩人やその作品数について統計的な分析が進められているが、『三体詩』に関する研究では、詩人の数や作品数について記述が見られるものの、それらを体系的に統

であったことは間違いなく、この両書によって、漢詩は日本人の間に広く深く浸透した。江戸中期まではもっぱら『三体詩』、そして和刻本『唐詩選』登場以降は、まず『唐詩選』、ついで『三体詩』と、およそ漢詩を読む日本人ならば、この両書を読んでいない人はあるまいとすら思われる」

¹² 市木武雄「万里集九と三体詩―「梅花無尽蔵」中に見られる―」(『昭和学院國語國文(19)』、1986年3月、p.16)

¹³ 漆山又四郎訳注『三體詩』(奎光書院、1936年、p.1)

「誰やらが唐詩選を評して、嚴として泰山の如し仰ぎ見るべしといひ、三體詩を評して麗なること湘江の如く細漣煙霞澤しといつてゐる。但徠一派は唐詩選を揚げて三體詩を貶してゐる。大田錦城はそれについて但徠を無識の男子といつてゐる。吾人は二書の甲乙は論じないが、李羣玉の黃陵廟…(引用者略)…が唐詩選に載つてないのをしむ者である」

¹⁴ 注6前掲書 p.9

「採録する詩は、初唐盛唐に偏し、更にその中でも、慷慨の氣に富む、あるいは悲壮なしらべに満ちた、調子の高い作品を主とする(鈴木虎雄博士の「支那詩論史」にいう「格調派の詩の長ずる所は、雄渾、悲壯、高華、瀏亮にあり。)」いいかえるとその根底には、振幅の激しい、高ぶった感情、もしくはつきつめた深刻な感情がある。これに対して周弼の「三体詩」が、南宋末期の詩壇の好尚を反映して中唐晩唐の詩を主とすることはすでに述べたが、その根底にある感情についていえば、「唐詩選」に比較して、より日常的であり、生活詩的な方向に傾き、淡々たる抒情性を主とする。そして、表現の面より言えば、やや技巧的な、才気を発揮するというタイプのものを多く含む。」

¹⁵ 前掲日野龍夫(校注)『唐詩選国字解1』

¹⁶ 国立国会図書館や国書データベースの検索結果からこのような傾向が見られる。

計した研究は少ない。

例えば、国立国会図書館デジタルコレクションで確認できる最古の『三体詩』関連資料である室町時代末期刊行の『増註唐賢絶句三體詩法』（全3巻＋序巻）には、167人の詩人が収録されており、詩人ごとの名前や解説が付されている¹⁷。ただし、各詩人の作品数については統計が行われていない¹⁸。一方、塚本哲三編『唐詩選・三体詩（漢文叢書 第14巻）』では、収録詩人167人の内訳として、初唐の詩人が12人（3首）、盛唐が18人（56首）、中唐が60人（177首）、晩唐が72人（247首）、時期不明が17人（17首）であることが明らかにされている¹⁹。また、『国訳漢文大成 第六巻』では、『三体詩』の収録作品について、七絶174首、七律110首、五律209首、合計493首と記されている²⁰。

なお、『三体詩』は版本によって収録作品数に差異が見られるため、詩人の時期や作品数が一貫しておらず、混乱が存在する場合がある。そのうえ、一部の注釈書では詩人の時期や作品数について全く言及しないものもある。

そのため、本節では、村上哲見氏による『三体詩』の494首を基に、『漢文大系 第2巻』²¹の詩人の時期分類を参照して統計を行い、『唐詩選』と『三体詩』における収録詩人と作品数の違いを明確にする。また、『唐詩選』には初唐・盛唐の詩が多く含まれるのに対し、『三体詩』には中唐・晩唐の詩が多いという従来の指摘を検証する。

1. 詩人の時期別の比較

『唐詩選』と『三体詩』における、時期別の詩人数を表1に示す。

表1：『唐詩選』と『三体詩』所収詩人時期別数

	唐詩選		三体詩	
時期	詩人数		詩人数	
初唐	29	22.66%	3	1.80%
盛唐	42	32.81%	20	11.98%
中唐	36	28.13%	60	35.93%
晩唐	17	13.28%	67	40.12%
不詳	4	3.13%	17	10.18%
	128	100.00%	167	100.00%

表1に示すように、『唐詩選』と『三体詩』における詩人の時期別分布には顕著な違いが見られる。両選集には、初唐、盛唐、中唐、晩唐の四つの時期の詩人が収められているが、それぞれの時期における詩人の割合に差があることが明らかである。

¹⁷ 例えば、張籍について、「字文昌和州烏江人登進士第韓愈薦為国子博士歷水部主客郎中終国子司業」と書かれている。宋）周弼撰、（元）釋圓至註、（元）裴庾増註『増註唐賢絶句三體詩法』3巻（含英堂・明誠堂、享保3年）

¹⁸ 同前掲注17『増註唐賢絶句三體詩法』3巻首1巻

¹⁹ 塚本哲三編『唐詩選・三体詩（漢文叢書 第14巻）』

²⁰ 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成 第六巻』（国民文庫刊行会、大正10年）

²¹ 富山房編輯部編『漢文大系第2巻』（富山房、1910年）

まず、『唐詩選』においては、盛唐の詩人が最も多く、全体の 33.07%を占めており、次いで中唐（28.35%）および初唐（22.83%）の詩人が続く。晩唐の詩人は全体の 13.39%にとどまり、その他の時期の詩人は 2.36%である。これに対して、『三体詩』においては、晩唐の詩人が最も多く、全体の 40.72%を占め、次いで中唐（36.53%）の詩人が続く。盛唐の詩人は 11.38%にとどまり、初唐の詩人はわずか 0.60%である。その他の詩人は 10.78%を占めている。

この分析から、『唐詩選』は盛唐の詩人を重視し、その文学的価値を評価している一方で、『三体詩』は晩唐および中唐の詩人に多くの比重を置いており、それぞれの時期の文学的傾向の違いが選集に反映されていることが確認できる。

また、『三体詩』における初唐および盛唐の詩人の数は合計 20 人で、全体の 11.98%に過ぎないのに対し、中唐および晩唐の詩人は合計 129 人で、全体の 77.25%を占める。これにより、『三体詩』は中唐および晩唐の詩人に圧倒的に重点を置いた選集であることが明らかとなる。

2. 『唐詩選』と『三体詩』所収詩の作成時期

表 1 に基づいて、各時期の詩数を統計した結果を示すことができる。しかし、詩人数が多い時期においても、必ずしもその詩数が高いわけではないため、選集における詩の数についての詳細な分析が求められる。この分析により、各選集がどの時期の詩に重きを置いているかがさらに明確となる。ここでは、『唐詩選』と『三体詩』所収詩の作成時期を統計した結果を表 2 に示す。

表 2：『唐詩選』と『三体詩』作成時期別詩数

	『唐詩選』		『三体詩』	
時期	詩体	詩数	詩体	詩数
初唐	86	18.49%	3	0.61%
盛唐	271	58.28%	57	11.54%
中唐	83	17.85%	185	37.45%
晩唐	19	4.09%	230	46.56%
その他	6	1.29%	19	3.85%
	465	100.00%	494	100.00%

『唐詩選』と『三体詩』の収録作品における時代別の傾向を比較すると、両者には顕著な違いが見られる。『唐詩選』は特に盛唐詩を重視しており、全体の 58.28%を占めている。一方、『三体詩』では盛唐詩は 11.54%にとどまり、代わりに晩唐詩が 46.56%を占め、晩唐詩の収録比率が高いことが特徴である。中唐詩も『三体詩』では 37.45%と多く収録されているのに対し、『唐詩選』では 17.85%にとどまる。また、初唐詩は『唐詩選』に 18.49%収録されているのに対し、『三体詩』ではわずか 0.61%にすぎない。

このように見ると、『唐詩選』は盛唐を中心とした詩を重視しているのに対し、『三体詩』は中唐・晩唐の詩を多く取り入れていることが分かる。すなわち、『唐詩選』は情感や美しさが評価される盛唐詩を中心に構成されているのに対し、『三体詩』はより幅広い時代の詩

を収めていると言える。このような違いは、両選集の選択基準や編纂の目的の違いを反映しているものと考えられる。

第3節 『唐詩選』と『三体詩』の詩体

本節では、『唐詩選』と『三体詩』を取り上げ、収録された詩体の構成を比較する。詩体の種類とその割合を検討することで、両詩集の選定基準や詩的な特徴を明らかにする。

両者はともに唐代詩を代表する詩集であるが、成立背景や編者の意図の違いにより、収録される詩体には差が見られる。以下に、その構成を表3に示す。

表3：『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩体別詩数

詩体	唐詩選		三体詩	
	詩数		詩数	
七言絶句	165	35.48%	174	35.22%
五言絶句	74	15.91%	0	0.00%
七言律詩	73	15.70%	111	22.47%
五言律詩	67	14.41%	209	42.31%
五言排律	40	8.60%	0	0.00%
七言古詩	32	6.88%	0	0.00%
五言古詩	14	3.01%	0	0.00%
合計	465	100.00%	494	100.00%

まず、両者に共通して多い詩体は七言絶句であり、『唐詩選』では165首（35.48%）、『三体詩』では174首（35.22%）を占めている。割合がほぼ同じであることから、七言絶句は両詩集に共通して重視された詩体であるといえる。七言絶句は短い形式の中に内容を凝縮しやすく、簡潔で印象的な表現に適しているため、広く選ばれたと考えられる。

しかし、詩体全体の構成を見ると、両者の違いは明確である。『唐詩選』には五言絶句が74首（15.91%）収録されているのに対し、『三体詩』には見られない。また、『唐詩選』には五言排律40首（8.60%）、七言古詩32首（6.88%）、五言古詩14首（3.01%）も収められているが、これらも『三体詩』には含まれていない。つまり、『唐詩選』は七言絶句だけでなく、五言絶句・排律・古詩まで取り入れており、詩体の面で幅広い構成をもつことが分かる。

一方、『三体詩』では五言律詩が209首（42.31%）で最も多く、七言律詩も111首（22.47%）を占めている。両者を合わせると律詩は全体の64.78%に達し、『三体詩』が律詩を中心に構成されていることは明らかである。これに対して、『唐詩選』の律詩は五言律詩67首（14.41%）、七言律詩73首（15.70%）で、合計しても30.11%にとどまる。この差からみて、『三体詩』は対句や平仄などの規則を備えた整った形式を重視しているのに対し、『唐詩選』は律詩に偏らず、より多様な詩体を採用しているといえる。

また、『唐詩選』では古詩・排律・絶句が併存しているのに対し、『三体詩』では五言律詩・七言律詩・七言絶句の三種にほぼ限られている。このことは、『三体詩』が詩作の模範とし

て用いやすい定型的な詩体を重視していることを示している。他方、『唐詩選』は詩体の多様性を保ちながら作品を選んでおり、表現の幅や鑑賞の豊かさにも配慮した選集であると考えられる。

以上より、『唐詩選』は複数の詩体を取り入れた多様な構成をもつのに対し、『三体詩』は律詩を中心とする限定的で規範的な構成をもつといえる。両者の違いは、単なる収録形式の差ではなく、それぞれの詩集が重視した詩のあり方、すなわち多様な鑑賞を重んじるか、規則にかなった模範的な詩形を重んじるかという編集方針の違いを反映している。

第4節 『唐詩選』と『三体詩』収録作品の主題の比較²²

前章で述べていたように、『唐詩類苑』は収録された詩の主題を把握するのに適しているため、前章で『唐詩三百首』と比較する際にも用いたことから、本章でも『唐詩類苑』を分類の参考にすることとした。

『唐詩選』と『三体詩』の収録作品が、『唐詩類苑』でどのような主題に分類されているかを一首ずつ確認したところ、『唐詩選』全詩 465 首のうち、435 首が『唐詩類苑』にも収録されており、30 首は収録されていなかった。一方、『唐詩類苑』の引用諸書のリストには『三體唐詩』が挙げられているが²³、『三体詩』全詩 494 首のうち 353 首しか『唐詩類苑』には収録されておらず、141 首は収録されていなかった。これら収録されていない詩については、『唐詩類苑』の分類の方法を参考にし、筆者が主題を分類した。以下では、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合と、筆者が分類した詩を加えた場合との両方の結果を示すことにする。

『唐詩類苑』に収録された詩の主題は「部」に分けられ、部はさらに「類」と呼ばれる小項目に分けられている。まずこの「部」に基づいて調査を行った結果について以下に記すことにしたい。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』の収録作品は全部で 31 部に分けられ、『三体詩』の収録作品は全部で 26 部に分けられる²⁴。それぞれの部ごとに詩数を統計し、結果を附表 1 と附表 2 にまとめた。

附表 1 と附表 2 をみると、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、どちらの選集においても、「人部」の詩数と割合が最も多いことが分かる。次に、「歳時部」と「居処部」の詩数と順位が二つの選集で異なるが、大きな差は見られない。

しかしながら、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』と『三体詩』の間に違いが見られる部もある。以下、それについて論じていくが、その際、どちらの選集についても、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合の詩数（全詩における割合）/筆者が分類した詩を加えた場合の詩数（全詩における割合）という書き方を用いることにする。

²² 本節の比較内容は、すでに『唐詩選』収録作品の主題—『三体詩』との比較を通じて—（『中国文史論叢』第 20 号、2024 年 3 月）として投稿し、掲載されたものである。

²³ 前掲書張之象編・中島敏夫整理、『唐詩類苑』（汲古書院、1990 年）p.41

²⁴ この場合の収録作品は、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合では、『唐詩選』は 435 首、『三体詩』は 353 首、筆者が分類した詩を加えた場合では、『唐詩選』は 465 首、『三体詩』は 494 首という数になる。

まず、「辺塞部」の詩については、『唐詩選』においては 27 首 (6.21%) /30 首 (6.45%) であり、『三体詩』においては 2 首 (0.57%) /3 首 (0.61%) となっており、大きな差異があることが分かる。次に、「武部」については、『唐詩選』においては 17 首 (3.91%) /18 首 (3.87%)、『三体詩』においては 0 首 (0.00%) /0 首 (0.00%) であることが注目される。

他に、「楽部」は『唐詩選』では 16 首 (3.68%) /19 首 (4.09%)、『三体詩』では 7 首 (1.98%) /8 首 (1.62%)、「礼部」は『唐詩選』では 16 首 (3.68%) /16 首 (3.44%)、『三体詩』では 3 首 (0.85%) /3 首 (0.61%) となっていて、「楽部」と「礼部」も『唐詩選』における詩数が『三体詩』より多いが、この点については、現在の段階ではまだ詳しい考察に及んでいないため、差異があることの指摘のみに留めておく。

さて、以上のように、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては「辺塞部」と「武部」の詩が『三体詩』より多いことが明らかになった。

一方、「寺観部」については、『唐詩選』においては 18 首 (4.14%) /19 首 (4.09%) であり、『三体詩』においては 29 首 (8.22%) /41 首 (8.30%) となっている。また、「釈部」については、『唐詩選』においては 2 首 (0.46%) /3 首 (0.65%) であり、『三体詩』においては 16 首 (4.53%) /19 首 (3.85%) となっている。

他に、「道部」については、『唐詩選』においては 1 首 (0.23%) /1 首 (0.22%) であり、『三体詩』においては 5 首 (1.42%) /10 首 (2.02%) である。また、「儒部」については、『唐詩選』においては 0 首 (0.00%) /0 首 (0.00%) であり、『三体詩』においては 4 首 (1.13%) /6 首 (1.21%) となっており、「道部」と「儒部」も『三体詩』における詩数が『唐詩選』よりも多かった。

以上のように、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては、『三体詩』に比べて、「寺観部」・「釈部」・「道部」・「儒部」の詩が少ないことが分かった。

以上のように、「辺塞部」や「武部」、「寺観部」や「釈部」・「道部」・「儒部」といった部においては、『唐詩選』と『三体詩』の詩数に違いがあることが明らかとなった。これに基づき、本章では、『唐詩選』と『三体詩』において詩数と割合が異なる「辺塞部」・「武部」・「寺観部」・「釈部」・「道部」・「儒部」に焦点を当て、どのような詩が含まれるかを分析する。また、先行研究で『唐詩選』において詩数が多いと指摘されている「懷古詩」・「閨怨詩」・「送別詩」・「辺塞詩」に特に注目し、統計的な調査を行うことで、主題からみた『唐詩選』の特徴を明らかにすることにした。

ただし、前稿で述べたように、一般に「辺塞詩」とされる詩は、『唐詩類苑』の分類基準では、「辺塞部」と「武部」に分類されるため、まずは先行研究で指摘がなされていない「寺観部」・「釈部」・「道部」・「儒部」について分析を行い、「辺塞部」と「武部」の詩は、「辺塞詩」として「懷古詩」・「送別詩」・「閨怨詩」と一緒に分析を行うことにする。

1. 『唐詩選』と『三体詩』における「寺観部」・「釈部」・「道部」・「儒部」詩

前述の通り、『唐詩類苑』に収録された詩のみを対象とした場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における「寺観部」・「釈部」・「道部」・「儒部」の詩数は、『三体詩』より少ない。本節では、『唐詩選』と『三体詩』に収録されているこれらの部の詩に

ついて、具体例を挙げながら検討する。

1.1 『唐詩選』と『三体詩』における「寺観部」詩

『唐詩類苑』において、「寺観部」の下には「寺」・「浮圖」・「樓」・「閣」・「院」・

「禪居」・「禪房」など合計 37 類が含まれている²⁵。これらの類別の共通点はすべて仏教に関連する建物や場所に関係があることである。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合、『唐詩選』の「寺観部」には「寺」・「閣」・「禪房」・「観」・「樓」・「蘭若」・「池」・「浮圖」という 8 類があり、合計 18 首 (4.14%) の詩が収録されている。一方、『三体詩』の「寺観部」には「寺」・「院」・「閣」・「禪房」・「観」・「蘭若」・「房」・「僧舍」・「樓」・「精舍」・「臺」という 11 類があり、合計 29 首 (8.22%) の詩が収録されている。(附表 3)。

一方、筆者が分類した詩を加えた場合、『唐詩選』の「寺観部」には上記と同じ 8 類があり、合計 19 首 (4.09%) が収録されている。一方、『三体詩』の「寺観部」には上記の 11 類に「道居」・「池」を加えた 13 類があり、合計 41 首 (8.30%) の詩が収録されている(附表 4)。合計すると、『三体詩』における「寺観部」の詩は、『唐詩選』の 1.9 倍/2.0 倍になっている。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』及び『三体詩』において、「寺観部」の詩数が多い類が「寺」類である。ここでは、『唐詩選』には収録されず、『三体詩』のみに収録されている「寺観部」「寺」類の具体例を一つ挙げる。

●沈佺期 遊少林寺 『三体詩』巻五²⁶

長歌遊寶地	長歌して寶地に遊び
徙倚對珠林	徙倚として珠林に對す
雁塔風霜古	雁塔風霜古り
龍池歲月深	龍池歲月深し
紺園澄夕霽	紺園夕霽澄み
碧殿下秋陰	碧殿秋陰下る
歸路煙霞晚	歸路煙霞の晚
山蟬處處吟	山蟬處處に吟ず

「少林寺」は河南省登封県の北に位置する嵩山にある有名な寺院であり、この詩は、詩人がその少林寺に遊んだ時の情景を描いたものである。ただし、村上氏によれば、「素隱抄」には、「煙霞」が女性に、「山蟬」が小人にたとえられており、皇帝が女性に溺れ、詩人が讒言で流されたことを詠じたという説が記されているという。

『唐詩選』と『三体詩』における「寺観部」に分類される詩は、その内容はそれぞれに異なっているが、多くは「遊少林寺」のように、仏教に関する建物や場所について詠じた詩に

²⁵ 『唐詩類苑』の「寺観部」には「寺」・「浮圖」・「樓」・「閣」・「院」・「禪居」・「禪房」・「佛龕」・「精廬」・「精舍」・「禪堂」・「法堂」・「經堂」・「講堂」・「影堂」・「玉像堂」・「禪室」・「石室」・「浴室」・「僧舍」・「齋」・「軒」・「牕」・「林泉」・「亭」・「池」・「蘭若」・「臺」・「題壁」・「觀」・「壇」・「院」・「堂」・「房」・「道居」・「道室」・「柱」の計 37 類がある。

²⁶ 本章で挙げる『三体詩』の原文及び注釈は、すべて注 1 前掲村上氏書を参照したものである。

なっている。そのような状況の中で、前述の通り、『唐詩選』には初盛唐の詩が、『三体詩』には中晩唐の詩が多く収録される傾向があるのに、この詩が初唐のものであるにも関わらず、『唐詩選』には収録されず『三体詩』に収録されている点が注目される。

1.2 『唐詩選』と『三体詩』における「釈部」詩

『唐詩類苑』においては、「釈部」の下には「僧」・「衲子」・「尼師」・「尼子」・「小尼」・「出家」・「經典」「礼拝」など計 25 類がある²⁷。これらの類別の共通点は、仏教の文脈に関連する用語であり、特に僧侶や出家者、仏教の修行や儀式に関するものであるという点である。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合、『三体詩』においても、『唐詩選』においても、「釈部」には「僧」という類しかない。「釈部」「僧」類について、『唐詩選』においては、詩数が 2 首 (0.46) / 3 首 (0.65%) であり、『三体詩』においては、詩数が 16 首 (4.53%) / 19 首 (3.85%) である (附表 5 と附表 6)。すなわち『三体詩』には、『唐詩選』の 9.7 倍/6.0 倍の「僧」類の詩が収録されている。

ここでは、『唐詩選』に収録されず、『三体詩』にのみ収録されている「釈部」「僧」類の詩の具体例を挙げる。

●鄭谷 贈日東鑒禪師 『三体詩』巻一

故國無心渡海潮　　故国無心にして海潮を渡る
老禪方丈倚中條　　老禪の方丈中條に倚る
夜深雨松堂靜　　夜深け雨絶えて松堂靜かなり
一點山螢照寂寥　　一點の山螢寂寥を照らす

村上氏によれば、「日東」は日本のことであり、「鑒禪師」がどのような人物かは不明であるが、詩の内容からみると、日本から中国の寺に来て修行する僧侶を描いているとされる。このように、『唐詩選』と『三体詩』の「釈部」「僧」類に収録されている詩の内容を見ると、僧侶を描く詩や僧侶との交流を描いた詩が多いことが分かる。

『唐詩選』と『三体詩』の「寺觀部」と「釈部」に収録されている詩の共通点は、いずれも仏教に関する作品だということである。そのため、『三体詩』における「寺觀部」と「釈部」の詩が『唐詩選』より多いということは、『三体詩』においては、『唐詩選』よりも、仏教に関する詩が多いと言えるだろう。

1.3 『唐詩選』と『三体詩』における「道部」詩

『唐詩類苑』においては、仏教に関する詩が「寺觀部」や「釈部」などの複数の部に分かれているのに対し、道教に関するものは「道部」にまとめられていて、「道部」の下には「仙」・「道士」・「女道士」・「入道」・「齋戒」・「誦經」など計 30 類がある²⁸。これらの共通点は、い

²⁷ 『唐詩類苑』の「釋部」には「僧」、「衲子」、「尼師」、「尼子」、「小尼」、「出家」、「經典」、「禮拝」、「行香」、「施香」、「受戒」、「齋戒」、「出齋」、「談玄」、「問道」、「飯僧」、「道場」、「錫杖」、「佛鉢」、「旛」、「念珠」、「袈裟」、「銅椀」、「佛」、「還俗」の計 25 類がある。

²⁸ 『唐詩類苑』の「道部」には「仙」、「道士」、「女道士」、「入道」、「齋戒」、「誦經」、「受籙」、「步虛」、「投龍」、「焚修」、「奠簡」、「修養」、「學道」、「訪道」、「味道」、「問易」、「種藥」、「求藥」、「謝惠藥」、「買藥」、「採藥」、「洗藥」、「燒金」、「藥轉」、「大還」、「得道」、「辟穀」、「丹竈」、「道場」、「道書」の計 30 類がある。

ずれも道教に関連しているという点である。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては「道部」には「道士」という類しかなく、『三体詩』には「道士」・「種薬」・「歩虚」という3類ある。「道部」の詩については、『唐詩選』には1首(0.23%) / 1首(0.22%)であり、一方、『三体詩』には5首(1.42%) / 10首(2.02%)あり、『唐詩選』の6.2倍/9.4倍の割合になっている(附表7と附表8)。具体例を挙げよう。

●戎昱 寄許鍊師 『三体詩』巻二

掃石焚香禮碧空 石を掃い香を焚いて碧空に禮す
露華偏濕藥珠宮 露華偏えに濕す藥珠宮
如何說得天壇上 如何ぞ説き得ん天壇の上
萬里無雲月正中 萬里雲無く月の正中せるを

村上氏によれば、「許鍊師」はいかなる人か未詳であるが、「鍊師」は道士に対する尊称である。この詩は戎昱が許鍊師に送った詩であり、詩の中には許鍊師の修道の様子が描かれている。

以上のように、「道部」に属する詩もまた、『三体詩』の方に多く収録されている。したがって、『三体詩』では、仏教だけでなく道教に関わる題材についても、『唐詩選』より広く採られているといえる。

以上の1.1から1.3までを通して見ると、『三体詩』では「寺觀部」・「釈部」・「道部」のいずれにおいても、『唐詩選』より詩数が多いことが確認できる。ただし、この傾向を一括して「宗教的関心の高さ」と説明することには慎重であるべきである。

『三体詩』に仏教に関する詩が多い理由を明らかにするには、『三体詩』が作られた際の時代背景を考慮する必要がある。しかし、前述のように、『三体詩』収録作品の主題に関する先行研究が少ないことに加えて、編者の周弼は序文を残しておらず、裴庾と天隱の注本の序文も、作詩方法について論じたもので主題に焦点を当てたものではなく、さらに『四庫全書総目提要』等の書目類にも主題について述べるものが見当たらなかったため、『三体詩』に仏教に関する詩が多い理由を南宋の時代背景から推測することは困難であった。

ただ、作品収録の対象となった唐代に目を向けると、楊妹美氏の研究によれば、仏教が中国に伝来してから唐代に至って最盛期を迎え、多くの寺が建立されたこと、寺は当時の文人たちが志を表す場所であり、単なる僧侶の修行の場ではなかったこと、さらに、白居易や王維などの文人が仏教を信仰し、多くの仏教に関する詩を作成したことが指摘されている²⁹。

²⁹ 「唐代统治者崇奉佛教，佛教发展鼎盛。作为传播和弘扬佛教文化的佛寺的大量出现，影响到社会的各个阶层人士。佛寺是僧尼民众的顶礼膜拜的场所，也是文人墨客表达心志之地。唐代诗人深受佛教的影响。诗人们吸收的文化有着密切的关系... (引用者略)...出于不同的原因文人大多好佛，文人士学佛是一大社会时尚。如诗人王维，白居易韦应物等都是虔诚的佛教徒，而颜真卿不信佛法而好居佛寺喜与学佛者语」楊妹美「唐代佛寺題材詩論稿」(吉林大学碩士學位論文、2008年、p.7)

訳文：唐代の統治者は仏教を篤く信仰し、仏教は大いに発展した。仏教文化を伝え弘める場である仏寺が数多く建立されたことは、社会のあらゆる階層に影響を及ぼした。仏寺は僧尼や民衆が礼拝する場であると同時に、文人たちが心志を表現する場でもあった。唐代の詩人は仏教の影響を深く受けており、その受容した文化は仏教と密接に関わっていた..... (中略)さまざまな理由から、多くの文人は仏教を好み、仏教を学ぶことは一つの社会的風潮となっていた。たとえば、王維・白居易・韋應物らの詩人はみな篤

楊氏はさらに、寺に関する詩は『全唐詩』の五分の一以上を占めるとも述べている³⁰。唐代においては、仏教の流行により、仏教に関する詩が多く作成されたという楊氏のこの指摘に従えば、『三体詩』において仏教の詩が多い理由のひとつとして、唐詩全体における仏教に関する詩の多さが影響している可能性が考えられる。

一方、村上氏は日本の五山の状況について、「これらの寺院はそれぞれ各地に経済的基盤となる荘園・寺領を持ち、様々な特権を与えられて繁栄するが、更に学識高い名僧がつぎつぎに出て、当時の学問の中心となった。また漢詩文を善くする人が多く、五山文学と称されて日本漢文学史のひとつのピークを形成する...（筆者略）...これらの寺院では、学僧たちの講義が行われて、当時の最高のレベルの学校となったが...（筆者略）...当時の学僧たちは広く漢学の全般にわたる学識を備えていたのである」と述べている。また、『三体詩』の大衆化現象について、村上氏は「東坡・山谷が好まれたのはこの二人が宋代一流の詩人であったからばかりでなく、二人とも仏教とくに禅宗に関心が深く、当時の名僧たちとの交遊がきわだっているからに違いない」と述べている。

これらの指摘によれば、五山の文学に対する僧侶たちの強い影響力がうかがわれ、さらに、仏教に関連する詩は、五山の文人たちに好まれそうなものであったことが想像される。そのため、『三体詩』に「寺観部」・「釈部」の詩、つまり仏教に関する詩が多いということは、『三体詩』が五山の文人に好まれ、推奨された理由の一つになったと言えるのではないかとと思われる。

また、『三体詩』に道部の詩が多いことについても、この仏教に対する興味と関心が、別の宗教である道教にも及び、収録作品の多さにつながったという可能性が考えられるのではないだろうか。

1.4 『唐詩選』と『三体詩』における「儒部」詩

『唐詩類苑』においては、「儒部」の下には「秀才」・「文学」・「文士」・「宏詞」・「有道」・「孝廉」など計 17 類がある³¹。これらの類名はいずれも儒教に関連するもので、儒教の教育制度・学問・試験制度・社会的地位・人間関係、あるいは儒教の理念や価値観を表す用語

信の仏教徒であり、また顔真卿は仏教そのものを信仰してはいなかったものの、仏寺に居ることを好み、仏教を学ぶ者と語ることを楽しんでいた。

³⁰ 「作为唐代最主要的文学样式—唐诗，有大量关于佛寺题材诗。设计招提、兰若、精舍、寺院以及相关的诗歌，占全唐诗的五分之一多」

「《全唐诗》中僧俗交游所作的佛教诗或寺院诗占了相当的比例。有很多僧人与世俗中人交往赠怀之作」楊妹美「唐代佛寺題材詩論稿」（注 29 前掲論文 p.10）

「唐朝国势最强盛，中国和亚洲各国之间的经济，政治和文化交流十分广泛，其中也包括佛教的交往，佛寺接纳外僧，展现了外交的功能。有不少印度，日本等国的僧人来到中国。《高僧传》中所见唐代外来僧 42 人」（注 29 前掲論文 p.34）

訳文：「唐代における最も主要な文学様式である唐詩には、仏寺を題材とする詩が数多く存在する。招提・蘭若・精舍・寺院などに関わる詩は、『全唐詩』全体の五分の一以上を占めている。」

「『全唐詩』においては、僧侶と世俗の人々との交遊の中で作られた仏教詩や寺院詩が相当な割合を占めている。また、僧侶と世俗の人々が交流し、互いに詩を贈り合った作品も多く見られる。」

訳文：「唐朝は国勢が最も強盛であり、中国とアジア諸国との間で経済・政治・文化の交流が広く行われていたが、その中には仏教を通じた交流も含まれていた。仏寺は外国僧を受け入れ、外交的な機能も果たしていた。インドや日本などから多くの僧が中国を訪れており、『高僧伝』には唐代における外国出身の僧侶が 42 人記録されている。」

³¹ 『唐詩類苑』の「儒部」には「秀才」・「文學」・「文士」・「宏詞」・「有道」・「孝廉」・「明經」・「貢士」・「赴學」・「御試」・「放榜」・「落第」・「擢第」・「及第」・「座主」・「先輩」・「同年」の計 17 類がある。

である。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては「儒部」の詩数は0首(0.00%)である。一方、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合、『三体詩』においては、「儒部」には「落第」類が4首(1.13%)ある(附表9)。筆者が分類した詩を加えた場合、『三体詩』においては、「儒部」には「落第」類が6首(1.21%)ある(附表10)。

ここで、具体例を挙げておく。

●盧綸 與從弟同下第出關 『三体詩』卷五

出關愁暮一沾裳	關を出で暮を愁へて一に裳を沾ほす
滿野蓬生古戰場	滿野蓬生す古戰場
孤村樹色昏殘雨	孤村の樹色殘雨に昏く
遠寺鐘聲帶夕陽	遠寺の鐘聲夕陽を帶ぶ

村上氏によると、「從弟」は盧璞という人物を指しているようで、「下第」は科挙の試験に落第することであり、「出關」は函谷關を出ること、つまり都の長安を去ることを意味している。詩の内容をみると、從弟と一緒に落第して帰る途中の哀愁が感じられる。このように、『三体詩』の「儒部」「落第」に収められる詩は、いずれも科挙試験に合格しなかった際に作られた作品であり、『唐詩選』には見られない主題の詩ということができる。

このように、『三体詩』の「儒部」に収められる詩は、いずれも科挙の落第に関する作品であり、『唐詩選』には見られない主題である。しかも、それらは宗教的関心によって収録されたものではなく、科挙制度と文人生活との結びつきを反映したものと考えられる。中晩唐において科挙制度が整備され、文人にとってその意義がいつそう大きくなったことを踏まえるならば、中晩唐の詩を多く収録する『三体詩』に、落第を主題とする詩が含まれるのは自然なことであろう。

2. 『唐詩選』と『三体詩』における懷古詩・送別詩・辺塞詩・閨怨詩

前節では、先行研究には指摘されていないが、明確に『三体詩』より『唐詩選』には詩数が少ない「寺觀部」と「積部」の詩を中心に分析した。一方、前述したように、先行研究では『唐詩選』には懷古詩、送別詩と辺塞詩が多いと指摘されているので、本章では、前稿の主題の定義と統計した『唐詩選』の詩数を適用し、『三体詩』を比較の対象に加えて、『唐詩選』と『三体詩』における懷古詩・送別詩・辺塞詩と閨怨詩について比較して分析する。ただし、前稿ですでにそれぞれの詩の具体例を示しているため、ここでは具体例は割愛して、詩数と比率のみを示すことにする。

2.1 『唐詩選』と『三体詩』における懷古詩

前稿で述べたように、「懷古」という主題に該当するものには、『唐詩類苑』の「人部」の「懷古」類がある。そのため、本論文でも、『唐詩選』と『三体詩』において、「人部」の「懷古」類に収録されている作品を懷古詩と定義する。

『唐詩選』における「人部」の「懷古」類の詩は、8首(1.84%) / 8首(1.72%)を占めるのに対して、『三体詩』においては、9首(2.55%) / 11首(2.23%)を占めている(附表11、

12)、『唐詩選』は『三体詩』に比べて0.7倍/0.8倍ということになる。

これによれば、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては、『三体詩』に比べて懷古詩の割合はやや少ないが、大きな差はなく、割合も低かったと言えるだろう。すなわち、伝統的に『三体詩』に親しんできた日本の読者にとって、『唐詩選』において、懷古詩が特に多いという印象は持たれなかったであろうと想像される。先行研究では、『唐詩選』は懷古詩が多いという特色を持つとされているが、『三体詩』と比較した限りでは、懷古詩が多いということは、『唐詩選』の流行の要因にはなりにくいと考えられる。

2.2 『唐詩選』と『三体詩』における送別詩

日野氏の二つの先行研究においては、『唐詩選』には惜別の詩が多いという指摘があったが、どのような詩が惜別の詩なのか、言及されていなかったため、前稿では、送別に関連しそうな『唐詩類苑』の分類の「送」もしくは「別」を含む「人部」の「送」・「別」・「送別」・「留別」・「贈別」・「話別」・「酬別」・「寄別」・「宴別」の9類を送別詩と定義した。本論文でもその基準を適用する。

これらの類について調査したところ、それぞれの選集に収められていたものは、『唐詩選』においては「人部」の「送」・「別」・「送別」の三つの類、『三体詩』においては「送」・「別」・「送別」・「寄別」・「留別」の五つの類の詩であった。比率を見ると、『唐詩選』において上記の3類に分類される詩は、合計21首(4.83%) / 24首(5.16%)を占めており、『三体詩』において上記の5類に分類される詩は、合計22首(6.23%) / 33首(6.68%)を占める(附表13, 14)『唐詩選』は『三体詩』に比べて0.8倍/0.8倍ということになる。

以上、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における送別詩は、全体に占める割合としては懷古詩よりは高いものの、『三体詩』の割合と比べると、やや少ないか、または大きな差はなかったと言えるだろう。従来『三体詩』に親しんできた日本の読者にとって、『唐詩選』に特に送別詩が多いとは感じられなかったと思われ、先行研究において、『唐詩選』には送別詩が多いとされている点は、流行の要因という視点から考えると、あまり大きな意味を持たなかったと考えられる。

2.3 『唐詩選』と『三体詩』における辺塞詩

前章で述べたように、先行研究に挙げられた辺境を詠じた詩題を『唐詩類苑』の部別に照らし合わせた結果、「辺塞部」と「武部」に分けて収録されていたため、『唐詩類苑』の分類基準を参照し、『唐詩選』と『三体詩』において「辺塞部」と「武部」に分類された詩を、辺境を詠じた詩、つまり辺塞詩と定義している。ただし、武部に分類された詩のうち、明らかに辺塞を舞台としていない詩は除いた。

『唐詩類苑』においては、「辺塞部」の下に、「総辺」・「塞上」・「出塞」・「薊門」など30類が分類されており、「武部」の下に「刀」・「從軍」・「行營」・「凱旋」・「赴軍」など33類が分類されている。

そのうち、『唐詩選』における辺塞詩は、「辺塞部」の「総辺」・「塞上」・「薊門」・「巡辺」・「出塞」の5類と「武部」の「從軍」・「凱旋」・「行營」・「烽」・「刀」・「戦伐」・「觀兵」・「幕府」・「赴軍」の9類に含まれている。『三体詩』においては、「武部」に分類される詩はなく、「辺塞部」の「総辺」・「塞上」の2類に含まれている。以下、『唐詩選』は実際に辺塞詩に富んでいるかについて、詩の比率の面から『三体詩』と比較してみたい。

『唐詩選』においては、上記「辺塞部」と「武部」の全 14 類を合わせると、44 首 (10.12%) /48 首 (10.32%) を占めるのに対し、『三体詩』においては、「武部」の詩はなく、「辺塞部」の 2 類の詩が 2 首 (0.57%) /3 首 (0.61%) となっている (附表 15, 16)。

つまり『唐詩選』は『三体詩』に比べて、17.9 倍/17.0 倍もの比率の辺塞詩を収録していることになる。『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における「辺塞部」と「武部」の詩の割合は、『三体詩』よりもはるかに高いことが分かった。『三体詩』を愛読してきた日本の読者にとって、『唐詩選』の辺塞詩の多さは非常に新鮮な要素であり、『唐詩選』は、従来と異なる詩の世界を楽しむ機会を読者に提供したと考えられる。

2.4 『唐詩選』と『三体詩』における閨怨詩

前章では、先行研究が「閨怨」や「艶詞」とする詩に一番近い部別や類別は、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類になると判断した。本章でも同様に、『唐詩選』と『三体詩』において、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類の詩数や割合等の状況を比較することにした。これにより、『唐詩選』に本当に閨怨詩が多いかどうかについて考察できると思われる。

『唐詩選』においては、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類の詩は、全部で 23 首 (5.29%) /28 首 (6.02%) を占めており、『三体詩』においては、両類の詩は全部で 2 首 (0.57%) /6 首 (1.21%) を占めている (附表 17, 18)。すなわち、『唐詩選』の閨怨詩の割合は、『三体詩』の 9.3 倍/5.0 倍ということになる。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては、『三体詩』よりも、かなり閨怨詩が多いことが分かった。『三体詩』を愛読してきた日本の読者にとって、閨怨詩の多さという点も『唐詩選』の新鮮さの要素の一つであり、これまでと異なる新たな唐詩の魅力を感じさせることになったと思われる。

以上、『唐詩類苑』の主題の分類の基準を参照しながら、『三体詩』との比較を通じて、『唐詩選』における懷古詩・送別詩・辺塞詩・閨怨詩の収録状況を検討してきた。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては、辺塞詩と閨怨詩の割合が『三体詩』より多くなっていることが分かった。これは、『唐詩選』が当時の読者にとって新鮮な魅力を提供した可能性があることを示唆している。このことは、『唐詩選』の流行の要因と関連があると考えられよう。

一方、先行研究では、『唐詩選』には懷古詩と送別詩が多いと指摘されているが、『三体詩』と比較した場合には、懷古詩と送別詩の割合は特に多いとはいえないことが分かった。当時の読者にとって、『唐詩選』に懷古詩と送別詩が多いとは感じられなかったと思われ、流行の要因という点においては、あまり関連がなかったのではないかと考えられる。

小結

以上、本章では、日本で長く読まれてきた『三体詩』を比較対象とし、『唐詩選』の特徴を、作成時期・詩体・主題の三点から整理した。

第一に、作成時期の面では、『唐詩選』が盛唐詩を中心に集めているのに対し、『三体詩』は中唐・晩唐詩の比重が高いという違いがはっきり確認できた。『唐詩選』では盛唐詩が全体の 58.28%を占め、初唐詩も一定数含まれる。一方、『三体詩』では晩唐詩が 46.56%を占

め、盛唐詩は少ない。両選集の詩の雰囲気や情感の傾向は、この時期の偏りによって大きく左右されていると考えられる。

第二に、詩体の面では、『唐詩選』が古詩・律詩・絶句・排律を含み、五言・七言の諸体を幅広く取り入れているのに対し、『三体詩』は七絶・七律・五律の三体に限られている。とりわけ『三体詩』では五言律詩の割合が高く、形式面での規範性が強い。つまり、『唐詩選』は詩体の多様さによって唐詩の全体像を示すのに対し、『三体詩』は限られた形式の中で詩の技巧や型を学ぶのに適した構成だと言える。

第三に、主題の面では、『唐詩類苑』の分類を参照した統計から、『唐詩選』と『三体詩』とで主題の重心が異なることが分かった。具体的には、『唐詩選』では「辺塞部」「武部」に属する詩が『三体詩』より明らかに多く、辺境や軍旅を舞台とする緊張感の強い世界が前面に出ている。これに対して『三体詩』では、「寺観部」「釈部」「道部」「儒部」（寺院・僧侶・道士・落第など）に関わる詩が相対的に多く、『唐詩選』ではこれらが少ない。また、懷古詩や送別詩については両者の間に大きな差は見られなかったが、辺塞詩と閨怨詩については、『唐詩選』の方が『三体詩』よりも高い割合で収録されていることが明らかになった。

以上を踏まえると、『唐詩選』が日本に伝来したとき、すでに『三体詩』に親しんでいた読者にとって、『唐詩選』は、盛唐中心という時期の違い、諸体を含む詩体の広がりに加え、主題の面でも「辺塞・武」や「閨怨」といった領域が目立つ点で、新鮮に感じられた可能性が高い。言い換えれば、『唐詩選』は『三体詩』よりも、読者が出会う唐詩の世界を別の方向へ導き、印象を大きく変える働きを持っていたと考えられる。こうした主題・詩体・時期の差異は、『唐詩選』の受容と流行を考えるうえで重要な手がかりになるだろう。

附表

附表1 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における人部詩数

	部名	唐詩選		三体詩	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	人部	133	30.57%	117	34.21%
2	歳時部	42	9.66%	36	10.53%
3	居処部	39	8.97%	45	13.16%
4	辺塞部	27	6.21%	2	0.58%
5	水部	21	4.83%	17	4.97%
6	寺観部	18	4.14%	27	7.89%
7	職官部	18	4.14%	14	4.09%
8	武部	17	3.91%	0	0.00%
9	楽部	16	3.68%	7	2.05%
10	礼部	16	3.68%	3	0.88%
11	地部	13	2.99%	13	3.80%
12	天部	10	2.30%	5	1.46%

13	山部	8	1.84%	6	1.75%
14	治政部	8	1.84%	2	0.58%
15	京都部	6	1.38%	0	0.00%
16	州郡部	6	1.38%	3	0.88%
17	帝戚部	5	1.15%	0	0.00%
18	花部	4	0.92%	5	1.46%
19	巧芸部	4	0.92%	0	0.00%
20	服食部	4	0.92%	2	0.58%
21	鳥部	3	0.69%	4	1.17%
22	獣部	3	0.69%	0	0.00%
23	祠廟部	3	0.69%	1	0.29%
24	木部	2	0.46%	2	0.58%
25	糞部	2	0.46%	16	4.68%
26	果部	2	0.46%	2	0.58%
27	器用部	1	0.23%	1	0.29%
28	草部	1	0.23%	1	0.29%
29	道部	1	0.23%	5	1.46%
30	文部	1	0.23%	2	0.58%
31	産業部	1	0.23%	0	0.00%
32	儒部	0	0.00%	4	1.17%
	合計	435	100.00%	342	100.00%

附表 2 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における人部詩数

	部名	唐詩選		三体詩	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	人部	145	31.18%	182	36.84%
2	居処部	42	9.03%	63	12.75%
3	歳時部	42	9.03%	52	10.53%
4	辺塞部	30	6.45%	3	0.61%
5	水部	23	4.95%	23	4.66%
6	寺観部	19	4.09%	40	8.10%
7	楽部	19	4.09%	8	1.62%
8	職官部	18	3.87%	16	3.24%
9	武部	18	3.87%	0	0.00%
10	礼部	16	3.44%	3	0.61%

11	地部	13	2.80%	18	3.64%
12	天部	11	2.37%	7	1.42%
13	山部	9	1.94%	9	1.82%
14	治政部	9	1.94%	2	0.40%
15	京都部	6	1.29%	0	0.00%
16	州郡部	6	1.29%	4	0.81%
17	帝戚部	5	1.08%	0	0.00%
18	花部	4	0.86%	6	1.21%
19	巧芸部	4	0.86%	0	0.00%
20	服食部	4	0.86%	3	0.61%
21	鳥部	3	0.65%	5	1.01%
22	木部	3	0.65%	4	0.81%
23	獸部	3	0.65%	0	0.00%
24	祠廟部	3	0.65%	3	0.61%
25	穠部	3	0.65%	20	4.05%
26	果部	2	0.43%	3	0.61%
27	器用部	1	0.22%	1	0.20%
28	草部	1	0.22%	1	0.20%
29	道部	1	0.22%	10	2.02%
30	文部	1	0.22%	2	0.40%
31	産業部	1	0.22%	0	0.00%
32	儒部	0	0.00%	6	1.21%
		465	100%	494	100.00%

附表 3 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における「寺観部」詩

		類名	三体詩		唐詩選	
			詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
寺観部	1	寺	14	4.09%	8	1.84%
	2	院	2	0.58%	0	0.00%
	3	閣	2	0.58%	3	0.69%
	4	禅房	2	0.58%	2	0.46%
	5	観	2	0.58%	1	0.23%
	6	蘭若	1	0.29%	1	0.23%
	7	房	1	0.29%	0	0.00%

8	僧舎	1	0.29%	0	0.00%
9	楼	1	0.29%	1	0.23%
10	精舎	1	0.29%	0	0.00%
11	池	0	0.00%	1	0.23%
12	浮図	0	0.00%	1	0.23%
合計		27	7.89%	18	4.14%

附表 4 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における「寺観部」詩

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	寺	21	4.25%	9	1.94%
2	院	5	1.01%	0	0.00%
3	閣	2	0.40%	3	0.65%
4	禅房	2	0.40%	2	0.43%
5	観	2	0.40%	1	0.22%
6	蘭若	2	0.40%	1	0.22%
7	房	1	0.20%	0	0.00%
8	僧舎	1	0.20%	0	0.00%
9	道居	1	0.20%	0	0.00%
10	楼	1	0.20%	1	0.22%
11	精舎	1	0.20%	0	0.00%
12	池	1	0.20%	1	0.22%
13	浮図	0	0.00%	1	0.22%
合計		40	8.10%	19	4.09%

附表 5 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における「釈部」詩数

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	僧	16	4.68%	2	0.46%

附表 6 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における「釈部」詩

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合

1	僧	20	4.05%	3	0.65%
---	---	----	-------	---	-------

附表 7 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における「道部」詩

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合		全詩における割合
1	道士	3	0.88%	1	0.23%
2	種葉	1	0.29%		
3	歩虚	1	0.29%		
	合計	5	1.46%		

附表 8 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における「道部」詩

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合		全詩における割合
1	道士	8	1.62%	1	0.22%
2	種葉	1	0.20%		
3	歩虚	1	0.20%		
	合計	10	2.02%		

附表 9 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における「儒部」詩

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合		全詩における割合
1	落第	4	1.17%	0	0

附表 10 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における「儒部」詩数

		三体詩		唐詩選	
	類名	詩数	全詩における割合		全詩における割合
1	落第	6	1.21%	0	0

附表 11 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における懷古詩

		唐詩選		三体詩	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	懷古	8	1.84	8	2.34%

附表 12 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における懷古詩

		唐詩選		三体詩	
--	--	-----	--	-----	--

	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	懷古	8	1.72%	12	2.43%

附表 13 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における辺塞詩

			唐詩選		三体詩	
部名		類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
辺塞部	1	総辺	23	5.29%	1	0.29%
	2	塞上	1	0.23%	0	
	3	薊門	1	0.23%	0	
	4	巡辺	1	0.23%	0	
	5	出塞	1	0.23%	1	0.29%
	6	塞下	0	0	0	
	7	涼州	0	0	0	
武部	1	従軍	5	1.15%	0	
	2	凱旋	4	0.92%	0	
	3	行營	2	0.46%	0	
	4	烽	1	0.23%	0	
	5	刀	1	0.23%	0	
	6	戦伐	1	0.23%	0	
	7	觀兵	1	0.23%	0	
	8	幕府	1	0.23%	0	
	9	赴軍	1	0.23%	0	
合計			44	10.12%	2	0.58%

附表 14 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における辺塞詩数

		唐詩選		三体詩	
部名	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
辺塞部	総辺	24	5.16%	1	0.20%
	塞上	3	0.65%	1	0.20%
	薊門	1	0.22%	0	0.00%
	巡辺	1	0.22%	0	0.00%
	出塞	1	0.22%	1	0.20%
	塞下	0	0.00%	0	0.00%
	涼州	0	0.00%	0	0.00%
武部	従軍	5	1.08%	0	0.00%
	凱旋	4	0.86%	0	0.00%

	行營	2	0.43%	0	0.00%
	烽	2	0.43%	0	0.00%
	刀	1	0.22%	0	0.00%
	戰伐	1	0.22%	0	0.00%
	觀兵	1	0.22%	0	0.00%
	幕府	1	0.22%	0	0.00%
	赴軍	1	0.22%	0	0.00%
合計		48	10.32%	3	0.61%

附表 15 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における送別詩数

	類名	唐詩選		三体詩	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	送	13	2.99%	14	4.09%
2	別	7	1.61%	5	1.46%
3	送別	1	0.23%	1	0.29%
4	寄別	0	0	1	0.29%
5	留別	0	0	1	0.29%
	合計	21	4.83%	22	6.43%

附表 16 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における送別詩数

	類名	唐詩選		三体詩	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	送	16	3.44%	25	5.06%
2	別	7	1.51%	5	1.01%
3	送別	1	0.22%	1	0.20%
4	寄別	0	0	1	0.20%
5	留別	0	0	1	0.20%
	合計	24	5.16%	33	6.68%

附表 17 『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合、『唐詩選』と『三体詩』における閨怨詩

	類名	唐詩選		三体詩	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	幽怨	10	2.3	1	0.31
2	閨情	13	2.99	1	0.31
	合計	23	5.29	2	0.58%

附表 18 筆者の主題を分類した詩を加えた場合、『唐詩選』と『三体詩』における閨怨詩

		唐詩選		三体詩	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	幽怨	15	3.23	2	0.40%
2	閨情	13	2.8	4	0.81%
	合計	28	6.02	6	1.21%

第3章 『古文真宝』との比較を通じて

はじめに

第1章では、内容に偏りがないとされる『唐詩三百首』を比較の対象とし、二つの選本の収録作品の主題を比較した。その結果、実際に『唐詩選』において特に多かったのは辺塞詩のみであり、送別詩には大きな差は見られず、懷古詩と閨怨詩は『唐詩三百首』よりも収録数が少なかったことが分かった。

さらに、『唐詩選』が日本で流行する以前に、すでに多くの唐詩選集や漢詩選集が日本で広く読まれており、その中でも、『三体詩』、『瀛奎律髓』、『聯珠詩格』、そして『古文真宝』は、特に頻繁に言及される作品であることが確認された。これらの選集は、収録作品の時期や詩体などの違いによって『唐詩選』と比較されてきたが、主題からの比較は少なく、ほとんど行われていない。

このような背景を踏まえて、筆者は第2章において『唐詩選』と同じく日本で流行した唐詩選集の『三体詩』を比較の対象とした。その結果、『唐詩選』において特に多かったのは辺塞詩と閨怨詩であることが分かった。また、送別詩には大きな差が見られず、懷古詩は『三体詩』よりも少ないことが分かった。

本章では、第1章、第2章に続いて、『唐詩選』が日本に登場する以前に日本で流行してきた漢詩選集として『古文真宝』を新たな比較の対象に取り上げ、これらの収録作品の主題を比較することで、主題から見る『唐詩選』の特徴をより明らかにし、『唐詩選』が日本で広く受け入れられた要因について、一層深く理解することを試みる。

第1節 『古文真宝』の概要

『古文真宝』の成立に関しては明確な記録はないものの、宋代の黄堅による編纂であるとされている¹。『古文真宝』は前後二集に分かれているが、後集は辞類・賦類など計17類に分かれた文章が収められており、文集としての性格を持っているため、本章で比較の対象とするのは『古文真宝』の前集とする。前集は巻首の勸学文の一類に続いて、五言古風短篇・五言古風長編・七言古風短篇・七言古風長編・超短句・歌類・行類・吟類・引類・曲類の10項目に分かれ、各項目には何十篇かの詩が収められている。陶淵明、李白・杜甫・韓愈・蘇軾など漢代から宋代までの60家の作品が収められている²。

¹『古文真宝』の作者及び成立年については議論がある。ここでは、大野實之助氏の説を挙げる。

「古文真宝の成立について明確にわからないが、この書の叙文に「至正丙午」という文字があり、至正丙午が元の順帝の至正二十六年（一三六六）に当たるところから、この書は少くとも元以前に成ったものであろうといわれ、或は宋の黄堅の編にかゝるものであるとし、或は明の神宗皇帝の御撰に成るものと説く人もある。」（大野實之助著、『唐宋八家文・古文真宝・文章軌範』学燈社、1953年、p.214）

² この部分は主に以下の二冊の書籍を参考にした。

「『古文真宝』には前後二集があり、前集には...筆者略...後集は文集となっている。」（注6 前掲大野氏編書 p.214）

『古文真宝』前後集は、『唐詩選』や『文章軌範』とともに、詩文を学ぶ者の必読書であった。そして『唐詩選』や『三体詩』が唐の詩に限られ、『文章軌範』も唐宋の文を主としているのに対して、『古文真宝』前集は、古詩十九首や楽府、六朝の諸篇、唐宋の名作を網羅し、諸家は李白・杜甫・蘇軾・韓愈・陶淵明など六十家に及び、古詩の精華が親しめる。」（新釈漢文大系第9巻古文真宝《前集》上）

『古文真宝』と『唐詩選』を比較すると、『唐詩選』が五言古詩・七言古詩・五言律詩・五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句という詩体ごとに全 465 首を収めた唐詩選集であるのに対し、『古文真宝』は古体詩を中心とした詩文を収めた詩文集となっている。また、収録作品の時代的範囲においても、『唐詩選』やこれまで比較の対象とした『唐詩三百首』、『三体詩』が唐詩のみ収録しているのに対し、『古文真宝』前集は漢代から宋代までの詩文を収めている。

『古文真宝』は、中国では元明のころに盛行し、清代に入るとその影響力が衰退したが、朝鮮半島や日本では長きにわたって流行してきた³。日本では、室町時代初期に伝来し、五山の禅僧の間で愛読された。『古文真宝』の前集と後集の流行に関して、前集はあまり読まれなかったとの評価もあるが⁴、岡田正之氏は『古文真宝』の詩文の価値が高く評価され、時代や地域を超えて広く受け入れられてきたことを指摘している⁵。これによれば、『古文真宝』前集も詩文の学習や教育において重要な役割を果たしてきたことが窺える。

本章で、『古文真宝』を比較の対象とする意義は主に以下の四点ある。

第一に、『古文真宝』が五山時代から『唐詩選』が伝わるまでの間、漢詩や漢文学の教科書として広く読まれていたという歴史的背景がある。『古文真宝』は日本に伝来してから、出版や注釈が行われ、近代以降でも新釈漢文大系などの叢書の中に収められており、『古文真宝』が重視されていることが分かる⁶。さらに、現代においても、例えば李白の「把酒問月」⁷など、『古文真宝』の作品が高校の国語の教科書に採録されており、その影響力は続いている。

第二に、漢詩が日本に伝来してから、享受が深く根付いていることは周知の事実であるが、江戸時代の漢詩受容についても『古文真宝』が重要な役割を果たしたという点である。例えば、広瀬淡窓が『古文真宝』を学んだという記述がある⁸。また、日野龍夫氏は「『唐詩選』

³ 「『古文真寶』産生後、曾在元、明兩代廣泛流傳，入清以後，由於種種原因，在中國本土流傳漸衰，但在朝鮮半島和瀛的傳播卻方興未艾，在某種程度上，充當了中國與東亞國家文化交流的重要使者。」（鞏本棟、「略論『古文真寶』的東傳」『域外漢籍研究集刊』、2021 年 11 月、p.1）

訳文：「『古文真宝』は成立後、元・明の兩代において広く流布したが、清代に入るとさまざまな理由により、中国本土での流布は次第に衰えた。しかし、朝鮮半島と日本における伝播はなお盛んであり、ある意味では、中国と東アジア諸国との文化交流における重要な媒介の役割を果たした。」

⁴ 「利氏の初世に我國に渡来し、前集は殆ど之を高閣に束ねて觀る者尠かつたが、後集は古来好んで讀まれ、殊に足利時代五山禪僧の間に盛に行はれ、文を習ふ者、必ず之を模範とするやうになり...筆者略...」弘道館編・近藤正治講述『漢文講座 第 5 文章軌範、古文真宝』（弘道館、1933 年、p.1）

⁵ 「其の詩文が尤も重んずべく寶とすべきものなりとの意を以て眞寶と名けしならん。元明の間には校刻せられて頗る行はれ、朝鮮に於ても、増補刊行し、我邦に於ても、室町時代に五山の学僧に喜ばれ、徳川時代には初學の詩文を學ばんとするものの必讀の書となり、近年に至りても文部省の中等教員検定試験に於ける國漢文受檢者の閱讀すべき書中の一となれり」（岡田正之解題『古文眞寶』漢文叢書第 23（有朋堂、1928 年、p.15）

⁶ ここでは、『古文真宝』のいくつかの注釈書を挙げる。

榊原篁洲『漢籍国字解全書』「第 11 卷」「古文真宝前集諺解大成」（早稲田大学出版部、1909 年）

『漢文叢書 第 23 古文真宝（全） 楚辭（全）』（有朋堂、1928 年）

田中慶太郎校訂『古文真宝前集』（文求堂書店、1929 年）

簡野道明補注『古文真宝前集 補註』（明治書院、1931 年）

星川清孝著『新釈漢文大系 9 古文真宝（前集）上』（明治書院、1967 年）

林楨校注・佐藤保・和泉新訳『古文真宝』「中国の古典 26」（学習研究社、1984 年）

⁷ 「把酒問月」が『古文真宝』の「七言短篇」に収録されている。

⁸ 広瀬淡窓が『古文真宝』を学んだことについて、古川哲史氏著『広瀬淡窓』には下記のような記述がある。

「しかし上人は多事で、多くは代理の人をして授業に当たらしめた...（筆者略）...『詩経』、『書経』、『春秋』を授かった。また、その間に父より『古文真宝』を授かった」（古川哲史著、『広瀬淡窓』（思文閣、1972

と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風—において、荻生徂徠が従来推奨されていた『三体詩』や『古文真宝』の限界に気づき、『唐詩訓解』⁹を新たに推奨したと述べ、さらに、鳥山芝軒や笠原雲溪が同時期の他の詩人たちに比べて艶詞の作が多い点に注目し、彼らが『唐詩訓解』を好んだことを合わせてみると、古文辞派の風潮を体現していると指摘している。そして、『唐詩訓解』が『三体詩』や『杜律集解』などと区別されて特に愛読されたことに触れ、古文辞派が『唐詩選』の他の詩集とは異なる点を強調したことを通じて、近世の日本人に『唐詩選』が受け入れられる基盤が形成されたと述べている¹⁰。日野氏の指摘によると、江戸時代の日本において、『三体詩』や『古文真宝』に親しんだ読者が、新たに伝来した『唐詩選』を読む際、その詩風や主題の違いに注目していた可能性があると考えられる。

第三に、先行研究では、『唐詩選』と『古文真宝』の内容に関する詳細な比較が行われていない点が挙げられる。これまで、日本で流行した漢詩選集は作成時期、詩人、詩体から比較されることが多かったが、収録作品の主題あるいは内容からの比較は少なかった。これらの唐詩選集を主題から比較することで、『唐詩選』の特徴をより明確にし、その人気の理由を解明できると考えられる。

第四に、第2章で取り上げた『三体詩』が近体詩のみで構成されているのに対し、『古文真宝』は古体詩で構成されているという点である。『唐詩選』には近体詩と古体詩の両方が収録されているので、比較の対象を偏りなく選定するために、『三体詩』と『古文真宝』の両方を取り上げ、この三書を比較することで、詩体に基づく全面的で客観的な分析が可能になると考えられる。

以上のような理由から、本章では、『三体詩』に続いて『古文真宝』を比較の対象に加えることとした。

第2節 『唐詩選』と『古文真宝』の詩人とその作品数

前述のように、『唐詩選』、『唐詩三百首』、『三体詩』が唐詩のみを収録しているのに対し、『古文真宝』は漢代から宋代までの60家、計209首の作品を収録している。しかし、『古文真宝』に収められている唐詩について、これまで時代ごとの詩数や詩人の分布に関する統計的分析は十分に行われていない。特に、収録されている120首の唐詩が唐代のどの時期に属するのか、またそれぞれの時期に何首が含まれるのかについての具体的な調査は見られない。本節では、『古文真宝』における唐詩の詩人とその作品の時期別分布および詩数を統計し、『唐詩選』との比較を試みる。

先行研究において、『唐詩選』に収録されている詩人は初唐・盛唐の詩が多く、中・晩唐の諸家の作品が極めて少ないと指摘されている。しかし、実際に『唐詩選』所収詩人の時期別分布がどのようになっているのかは、詳細な統計による検証が必要である。本節では、時

年、p.10))

⁹ 選者は明の李攀龍、校定者は袁宏道と題しているが、民間の書肆がこの2人の著名な文学者の名を利用したといわれている。

¹⁰ 前掲注1 日野龍夫氏論文、pp.276–pp.278

「數十年前宿學老儒尊信三體詩古文真寶至與四子五經並矣殊不知周伯弼一無名男子林以正書賈也近來漸覺其非而以唐詩訓解代之」（荻生徂徠著、『徂徠集』・卷22・「與平子和 又」、松邨九兵衛）

期別の詩人分布に注目し、『古文真宝』所収詩人との比較を行うことで、両者の収録方針や特徴の違いを明らかにする。

『唐詩選』と『古文真宝』における時期別の詩人数とその割合を表1に示す。この表を基に、両者の時期ごとの収録傾向を具体的に分析し、比較する。

表1：『唐詩選』と『古文真宝』作成時期別詩

	『唐詩選』		古文真宝	
時期	人数		人数	
初唐	29	22.66%	2	8.00%
盛唐	42	32.81%	6	24.00%
中唐	36	28.13%	9	36.00%
晩唐	17	13.28%	6	24.00%
不詳	4	3.13%	2	8.00%
	128	100.00%	25	100.00%

『唐詩選』には詩人が128名、詩作が合計465首収録されているのに対し、『古文真宝』には漢代から宋代にわたる60家209首の作品が収録されており、そのうち唐詩に該当するのは25家120首である。唐詩は『古文真宝』全体の約42%を占めており、唐代の詩人が比較的重視されていることが分かる。

表1のデータから時期別に見ると、『唐詩選』では盛唐の詩人が最も多いのに対し、『古文真宝』では中唐の詩人が最も多いことが確認できる。

第3節 『唐詩選』と『古文真宝』所収詩の作成時期

『唐詩選』と『古文真宝』のデータベースの作成時期に基づき、詩数を統計した結果を表2に示す。

表2：『唐詩選』と『唐詩三百首』作成時期別詩

	『唐詩選』		『古文真宝』	
初唐	86	18.49%	3	2.50%
盛唐	271	58.28%	78	65.00%
中唐	83	17.85%	30	25.00%
晩唐	19	4.09%	7	5.83%
不明	6	1.29%	2	1.67%
	465	100.00%	120	100.00%

表2のデータを見ると、『唐詩選』では盛唐の詩が58.28%を占め最も多く収録されているのに対し、『古文真宝』でも盛唐の詩が65%を占め、収録数で最も多いことが分かる。これにより、両選集がいずれも盛唐詩を重視している点が明らかである。一方、『古文真宝』

では中唐の詩人が最も多いが、詩数は 25%に留まっており、中唐の詩人の作品が比較的少ないことが推測される。

さらに、『唐詩選』と『古文真宝』における盛唐詩の割合を比較すると、『古文真宝』では盛唐詩が全体の 65%を占めるのに対し、『唐詩選』では 58.28%である。この点から、『古文真宝』のほうが盛唐詩に重点を置いていることが確認できる。

収録作品の時期の比較からみると、二つの選集の『唐詩選』は盛唐期を中心に、唐代詩の中でも芸術的に優れた作品を選定するという明確な収録方針が見られる。『古文真宝』が中唐期の詩人を重視する一方で、『唐詩選』は初唐から晩唐に至る時期の中で、特に盛唐詩に比重を置いている点がその最大の特徴といえる。

第3節 『唐詩選』と『古文真宝』の詩体

『唐詩選』と『古文真宝』の収録詩体について比較すると、両者の詩体と詩数に関する以下の特徴が明らかである。

『唐詩選』は、五言古詩、七言古詩、五言律詩、七言律詩、五言絶句、七言絶句といったさまざまな詩体を収録しており、詩体のバリエーションに富んでいる。具体的には、五言古詩が 14 首、七言古詩が 32 首、五言律詩が 67 首、五言排律が 40 首、七言律詩が 73 首、五言絶句が 74 首、そして七言絶句が 165 首収録されている。このように、『唐詩選』は、唐代詩の代表的な詩体である近体詩（律詩、絶句）と古体詩（古詩）をバランスよく取り入れ、特に絶句（七言絶句）に多くの作品を選定している点が特徴である。

一方、『古文真宝』は、古体詩に特化しており、歌類、曲類、吟類、五言古風短篇、行類、七言古風長篇、七言古風短篇といった詩体が収録されている。具体的には、歌類（11 首）、曲類（1 首）、吟類（5 首）、五言古風短篇（44 首）、行類（12 首）、七言古風長篇（15 首）、七言古風短篇（32 首）が収められており、近体詩（律詩や絶句）は収録されていない。これにより、『古文真宝』は古体詩を中心に構成されており、その収録作品数と詩体の構成が『唐詩選』と大きく異なることが明らかである。

詩体別のデータを表 3 に示すことで、両選集における詩体と詩数の違いがより具体的に把握でき、両者の収録方針の違いが視覚的に比較可能となる。『唐詩選』は近体詩と古体詩を含む幅広い詩体を収めており、『古文真宝』は古体詩に特化しているため、それぞれがどのような詩体に重点を置いているかが理解できる。

表 3：『唐詩選』と『古文真宝』の詩体別詩数

唐詩選			古文真宝		
詩体	詩数		詩体	詩数	
七言絶句	165	35.48%	歌類	11	9.17%
五言絶句	74	15.91%	曲類	1	0.83%
七言律詩	73	15.70%	吟類	5	4.17%
五言律詩	67	14.41%	五言古風短篇	44	36.67%
五言排律	40	8.60%	行類	12	10.00%
七言古詩	32	6.88%	七言古風長篇	15	12.50%

五言古詩	14	3.01%	七言古風短篇	32	26.67%
合計	465	100.00%		120	100.00%

『唐詩選』と『古文真宝』における詩体の収録傾向には顕著な違いが見られる。『唐詩選』は、近体詩の中でも特に絶句と律詩に重点を置いており、全体の 51.39%を占める絶句（七言絶句と五言絶句）において、唐代詩の中でも芸術的に優れた作品が多く選ばれている。また、律詩（七言律詩と五言律詩）も全体の 30.11%を占め、形式的な整然さや技巧的完成度が評価されていることが分かる。一方、古詩は比較的少なく、五言古詩（3.01%）や七言古詩（6.88%）の割合は低い。この点から、『唐詩選』は唐代の近体詩、特に絶句や律詩に重点を置き、形式的な美しさと技巧に重きを置いた選集であることが明らかである。

これに対して、『古文真宝』は、古体詩に特化した構成となっており、歌類、曲類、吟類、古風短篇など、自由で多様な詩体を中心に収められている。特に、五言古風短篇（36.67%）や七言古風短篇（26.67%）が多くを占め、古体詩の豊かな表現形式が際立っている。また、歌類や曲類、吟類といった詩体も含まれており、これらは唐代詩が持つ柔軟な表現の多様性を反映している。『古文真宝』はこのように、近体詩に対して古体詩を重視し、詩の表現形式における自由度や多様性を強調している選集である。

両者の詩体に対するアプローチは異なり、『唐詩選』は近体詩の中でも整然とした形式美や技巧に焦点を当てた一方、『古文真宝』は古体詩の自由で豊かな表現に重点を置いていることが分かる。これらの収録方針の違いは、それぞれの選集が唐代詩のどの側面を評価し、伝えようとしているのかを反映している。

第4節 『唐詩選』と『古文真宝』収録作品の主題の比較¹¹

これらの漢詩選集の主題を判断する際に、筆者の判断のみでは恣意的になる可能性があるため、第1章と第2章と同じく、本章でも『唐詩類苑』を分類の参考にした。

『唐詩選』と『古文真宝』の収録作品が、『唐詩類苑』でどのような主題に分類されているかを一首ずつ確認したところ、『唐詩選』全詩 465 首のうち、435 首が『唐詩類苑』にも収録されており、30 首は収録されていなかった。一方、『古文真宝』前集 209 首の詩のうち、120 首が唐詩であり、そのうち 115 首が『唐詩類苑』には収録されており、5 首は収録されていなかった。これら収録されていない詩については、『唐詩類苑』の分類の方法を参考にし、筆者が主題を分類した。以下では、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合と、筆者が分類した詩を加えた場合との両方の結果を示すことにする。

『唐詩類苑』に収録された唐詩の主題は「部」に分けられ、部はさらに「類」と呼ばれる小項目に分けられる。まずこの「部」に基づいて調査を行った結果について以下に記すことにしたい。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』の収録作品は全部で 31 部に分けられ、『古文真宝』の収録作品は全部で 22 部に分けられる。それぞれの部ごとに詩数を統計し、結果を附表 1 と附表 2 にまとめた。

¹¹ 本節の一部分の比較内容は、すでに「『唐詩選』収録作品の主題—『古文真宝』との比較を通じて—」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 58 号、2024 年 12 月）として投稿し、掲載されたものである。

附表1と附表2をみると、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、どちらの選集においても、「人部」の詩数と割合が最も多いことが分かる。次に、「居処部」の詩数も二つの選集で第二位である。ただし、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』と『古文真宝』の間にはいくつかの部で違いが見られる。以下、それについて詳述するが、その際、どちらの選集についても、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合の詩数（全詩における割合）/筆者が分類した詩を加えた場合の詩数（全詩における割合）という書き方を用いることにする。まず、「歳時部」の詩については、『唐詩選』においては42首（9.66%）/42首（9.03%）であり、『古文真宝』においては、3首（2.61%）/3首（2.50%）となっており、大きな差異があることが分かる。次に、「辺塞部」の詩については、『唐詩選』においては第4位で27首（6.21%）/30首（6.45%）であり、『古文真宝』においては第21位で1首（0.87%）/1首（0.83%）である。それに、「武部」の詩については、『唐詩選』においては17首（3.91%）/18首（3.87%）、『古文真宝』においては1首（0.87%）/1首（0.83%）であることが注目される。それから、「水部」の詩について、『唐詩選』において21首（4.83%）/23首（4.95%）であり、『古文真宝』においては、0首であることが注目を集める。

以上のように、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては「歳時部」、「辺塞部」、「武部」、「水部」の詩が『古文真宝』より多いことが明らかになった。

これに基づき、本章では、まず、『古文真宝』と詩数と割合が明らかに異なる「歳時部」、「辺塞部」、「武部」、「水部」に焦点を当て、どのような詩が含まれるかを分析する。また、先行研究で『唐詩選』において詩数が多いと指摘されている懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩に特に注目し、統計的な調査を行うことで、主題からみた『唐詩選』の特徴を明らかにすることにした。ただし、拙論で述べたように、一般に「辺塞詩」とされる詩は、『唐詩類苑』の分類基準では、「辺塞部」と「武部」に分類されるため、「辺塞部」と「武部」の詩は、「辺塞詩」として「懷古詩」・「送別詩」・「閨怨詩」と一緒に分析を行うことにする。

1. 『唐詩選』と『古文真宝』における「歳時部」・「水部」詩

前述した通り、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における「歳時部」、「水部」の詩が『古文真宝』より多いことが分かる。本章では、『唐詩選』と『古文真宝』に収録されている「歳時部」、「水部」の詩の具体例を挙げながら、分析を行う。

1.1 『唐詩選』と『古文真宝』における「歳時部」詩

『唐詩類苑』において、「歳時部」の下には「春」・「夏」・「秋」・「冬」・「暁」など合計36類が含まれている。これらの類別の共通点は、すべて季節や季節の節分・行事に関連していることである。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』の「歳時部」詩には「春」・「秋」・「夜」・「元正」・「立春」・「人日」・「正月十五」・「寒食」・「清明」・「三月三日」・「五月五日」・「九月九日」・「歳除」という13類があり、合計42首（9.66%/9.03%）である。（附表3、4）。一方、『古文真宝』において、「歳時部」の下には「春」・「人日」・「夜」の3類があり、それぞれ1首で、合計3首（2.61%/2.50%）である（附

表 4)。すなわち、『唐詩選』における「歳時部」の詩は、『古文真宝』の 3.61 倍/3.70 倍になっている。『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『古文真宝』に比べると、『唐詩選』において、「歳時部」の詩が多いことが分かった。特に、『唐詩選』の「歳時部」の中で、一番多い類が「九月九日」という類で、全部で 11 首ある。

松浦友久氏によると、陰暦九月九日を「重陽」・「重陽節」と言い、人々は連れ立って高みに登り、茱萸を袋に詰め、または頭にかざし、菊花を浮かべる酒を飲んだという。ここでは、『唐詩選』に収録されている「九月九日」類の具体例を一つ挙げる。

● 王維 九月九日憶山中兄弟

獨在異鄉爲異客 獨り異郷に在って異客と爲る
每逢佳節倍思親 佳節に逢ふ毎に 倍 親を思ふ
遙知兄弟登高處 遙かに知る 兄弟 高きに登る處
遍插茱萸少一人 遍く茱萸を挿んで一人少くらん

この詩は詩人の王維が重陽節に旅をしている際に、故郷の兄弟を思う気持ちを表現したものである。この詩のほか、漢詩の中では、重陽節を題材にした詩が非常に多く詠まれている。特に『唐詩類苑』の「歳時部」では、年中行事に関する詩の中で、「九月九日」に詠まれた詩の収録数が最も多く、この節句が詩人たちにとって重要なテーマであったことが分かる。このように、重陽節は中国の詩文化において特別な位置を占めており、多くの名詩がこのテーマに基づいて生まれた。

一方で、重陽節は中国から日本に伝わり、平安時代にはすでに日本の宮廷や貴族の間で祝われるようになった。この行事は、日本の文化に深く根付き、江戸時代に至るまで幅広く知られる存在となっていた。江戸時代の日本人にとって、重陽節は単なる輸入された行事ではなく、季節を感じ、無病息災を願う重要な行事として定着していた。

『古文真宝』と比べると、『唐詩選』において重陽節を題材にした詩が多く収録されている点は、特筆すべき特徴といえるだろう。江戸時代の日本人が重陽節に親しんでいた背景を考慮すると、この節句に関連する詩が多く収められていることは、『唐詩選』が江戸時代の日本で広く受け入れられた理由の一つであると推察される。重陽節という身近な行事を詠んだ詩が、当時の日本人にとって親しみやすく、共感を呼んだため、『唐詩選』が人気を博した要因の一つとなった可能性が高い。このように、重陽節に関連する詩の多さは、『唐詩選』の構成において重要な要素であり、日本におけるその普及と人気にも大きく寄与していると考えられる。

1.2 『唐詩選』と『古文真宝』における「水部」詩

『唐詩類苑』において、「水部」の下には「総水」・「海水」・「江水」・「河水」・「淮水」など合計 48 類が含まれている。これらの類別の共通点は、すべて江河湖海に関連していることである。

『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合、『唐詩選』の水部には「澗」、「江水」、「湖水」、「池」、「海水」、「泉」、「浦」、「渭水」、「湘水」という 9 類の詩があり、全部で 21 首ある。筆者が分類した詩を加えた場合、上記の 9 類の詩のほか、「潭」、「漢江」類それぞれ 1 首あり、全部で 23 首ある。『唐詩選』における「水部」の詩は、21 首 (4.83%) /23 首 (4.95%)

を占めるのに対して、『古文真宝』において0首である(附表5、6)。したがって、『唐詩選』は『古文真宝』に比べて、水部の詩がはるかに多いことが分かる。『唐詩選』において、「水部」の「湖水」類の詩が一番多く、6首ある。ここでは、『唐詩選』の「水部」の「湖水」類の具体例の一つ挙げる。

● 湖中 顧況

青青湖邊日色低 青青湖邊 日色 低る
黄茅瘴裏鷓鴣啼 黄茅瘴裏 鷓鴣啼く
丈夫飄蕩今如此 丈夫 飄蕩 今 此くの如し
一曲長歌楚水西 一曲の長歌 楚水の西

この詩は青草湖のほとりで日の色が低く、青々とした湖岸で日の色が低い様子、黄茅が繁る湿地帯の中で見慣れない鷓鴣が啼いている情景が描かれている。また、詩の中の「丈夫飄蕩今如此」という一節からは、出世できない哀愁と放浪の悲しみが感じられる。

『唐詩選』に収録されている「水部」の詩の内容はそれぞれであるが、「水部」の詩が『古文真宝』より多いことは『唐詩選』の一つの特徴と言えるだろう。現時点では、「水部」の詩が多いという特徴は『唐詩選』の流行の理由と直接に関連付けにくいのであるが、後ほど、比較の対象とした『唐詩三百首』と『三体詩』の統計結果と合わせて分析を行う。

以上、『唐詩選』と『古文真宝』の収録作品に詩数の差異がある部別について具体例を示してきた。次節では、先行研究に指摘されている『唐詩選』に多い懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩に着目したい。

2. 『唐詩選』と『古文真宝』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩

前述したように、先行研究では『唐詩選』には懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩が多いと指摘されている。本節では、『古文真宝』を比較の対象に加えて、『唐詩選』と『古文真宝』におけるこれらの主題の詩を比較して分析する。ただし、第1、2章ですでにそれぞれの詩の具体例を示しているため、ここでは具体例の提示を省略し、詩数と比率のみを示すことにする。

2.1 『唐詩選』と『古文真宝』における懷古詩

第1章と第2章で、「懷古」という主題に該当する詩は『唐詩類苑』の「人部」の「懷古」類に収録されていることを確認しているので、本章でも「人部」の「懷古」類に収録されている詩を懷古詩と定義する。

『唐詩選』における「人部」の「懷古」類の詩は、8首(1.84%) / 8首(1.72%)を占めるのに対して、『古文真宝』においては、3首(2.61%) / 3首(2.50%)を占めている(附表9、10)。したがって、『唐詩選』は『古文真宝』に比べて、それぞれ0.7倍/0.68倍の割合となる。これによれば、前野氏が指摘する『唐詩選』には懷古詩が多いという見解とは異なり、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては、『古文真宝』に比べて懷古詩の割合は大きな差は見られず、むしろ低い割合となっている。

第2章で得られた、『三体詩』においては、9首(2.55%) / 11首(2.23%)を占めており、

『唐詩選』は『三体詩』に比べて0.7倍/0.8倍だったという結果を踏まえると、『三体詩』や『古文真宝』と比較した場合、『唐詩選』における懷古詩の数はやや少なく、大きな差異は見られないと言えるだろう。そのため、『三体詩』や『古文真宝』に親しんできた日本の読者にとって、『唐詩選』において、特に懷古詩が多いという印象は強くなかった可能性がある。前野氏の先行研究では『唐詩選』は懷古詩が多いとされているが、『三体詩』や『古文真宝』と比較した限りでは、懷古詩が多いことは検証できず、『唐詩選』の流行の要因には懷古詩が大きな役割を果たしているとは言い難いと考えられる。

2.2 『唐詩選』と『古文真宝』における辺塞詩

第1章と第2章と同じく、「辺塞部」と「武部」に分類された詩を、辺境を詠じた詩、つまり辺塞詩と定義する。ただし、武部に分類された詩のうち、明らかに辺塞を舞台としていない詩は除いた。

『唐詩類苑』においては、「辺塞部」の下に、「総辺」・「塞上」・「出塞」・「薊門」など30類が分類されており、「武部」の下に「刀」・「從軍」・「行營」・「凱旋」・「赴軍」など33類が分類されている。そのうち、『唐詩選』における辺塞詩は、「辺塞部」の「総辺」・「塞上」・「薊門」・「巡辺」・「出塞」の5類と「武部」の「從軍」・「凱旋」・「行營」・「烽」・「刀」・「戦伐」・「観兵」・「幕府」・「赴軍」の9類に含まれている。『古文真宝』においては、「辺塞部」の「長城」・「武部」の「劍」の2類に含まれている。

『唐詩選』における辺塞詩の比率を『古文真宝』と比較すると、『唐詩選』においては、上記「辺塞部」と「武部」の全14類を合わせると、44首(10.11%) / 48首(10.32%)を占めるのに対し、『古文真宝』においては、「辺塞部」と「武部」の詩は2首(1.74%) / 2首(1.67%)となっている(附表11、12)。つまり『唐詩選』は『古文真宝』に比べて、5.82倍/6.19倍もの比率の辺塞詩を収録していることになる。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における「辺塞部」と「武部」の詩の割合は、『古文真宝』よりもはるかに高いことが分かった。さらに、第2章で明らかになったように、『三体詩』においては、「武部」の詩はなく、「辺塞部」の2類の詩が2首(0.57%) / 3首(0.61%)となっており、『唐詩選』は『三体詩』に比べて、17.9倍/17.0倍もの比率の辺塞詩を収録していることが分かった。これらの結果を踏まえると、『唐詩選』には『三体詩』や『古文真宝』よりも辺塞詩が多いことが検証され、『唐詩選』の特徴の一つであると考えられる。『三体詩』や『古文真宝』を愛読してきた日本の読者にとって、『唐詩選』の辺塞詩の多さは非常に新鮮な要素であり、『唐詩選』は、従来と異なる詩の世界を楽しむ機会を読者に提供したといえるだろう。また、前掲の日野氏の論文でも指摘されているように、『八水随筆』や『夜航余話』の記述から、辺境の風物感慨を詠じた「從軍行」・「塞上曲」などの詩が男女の情にも通う悲壮で感傷的な詩情を持つことが、人々に愛された要因の一つとされている。このように、悲壮な感情を伝える辺塞詩の多さが『唐詩選』の流行に関連していると考えられる。

2.3 『唐詩選』と『古文真宝』における送別詩

第1章と第2章では、送別に関連しそうな『唐詩類苑』の分類の「送」もしくは「別」を含む「人部」の「送」・「別」・「送別」・「留別」・「贈別」・「話別」・「酬別」・「寄別」・「宴別」の九類を送別詩と定義した。本章でもその基準を適用する。これらの類について調査した結果、『唐詩選』においては「人部」の「送」・「別」・「送別」の3類、『古文真宝』においては

「送」・「別」の2類に該当する詩が収録されていることが確認された。

比率を見ると、『唐詩選』において上記の3類に分類される詩は、合計21首(4.83%)/24首(5.16%)を占めており、『古文真宝』において上記の2類に分類される詩は、合計2首(1.74%)/2首(1.67%)を占める(附表13、14)。したがって、『唐詩選』は『古文真宝』に比べて、それぞれ2.8倍/3.1倍の割合になる。このことから、『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』における送別詩の割合は懷古詩より高く、『古文真宝』より明らかに多いことが分かった。すなわち、日野氏と前野氏の先行研究に指摘されているように、『古文真宝』に比べて『唐詩選』には送別詩が多いことが検証できた。

一方、第1章と第2章において、『三体詩』の送別詩は、合計22首(6.23%)/33首(6.68%)を占めて、『唐詩選』は『三体詩』に比べて0.8倍/0.8倍であった。この結果を踏まえると、『唐詩選』における送別詩は、『三体詩』とは大きな差がなく、『古文真宝』より多いということになる。『古文真宝』よりも送別詩の割合が多い『三体詩』と『唐詩選』がほぼ同じ割合であるということは、読者にとっては『唐詩選』には送別詩が多めであるという印象だったのではないだろうか。『三体詩』と『古文真宝』に親しんできた日本人の読者にとって、『三体詩』とほぼ同じ割合であるため、完全に新鮮だったとは言えないかもしれないが、『唐詩選』にも送別詩が多いことは、送別詩の収録において安定した傾向を示しており、読みやすく感じたと思われる。また、日野氏の論文では送別の詩については分析されていないが、艶詞と同じく、別れる際に歌われる未練や感傷といった感情は人間の自然的な感情を反映しており、このような詩が多く収録されていることが『唐詩選』の流行に関連している可能性があると考えられる。

2.4 『唐詩選』と『古文真宝』における閨怨詩

第1章と第2章では、先行研究が「閨怨」とする詩に一番近い部別や類別は、『唐詩類苑』の「人部」の「幽怨」類と「閨情」類になると判断した。本章でも同様に、『唐詩選』と『古文真宝』において、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類の詩数や割合を比較することで、『唐詩選』に本当に閨怨詩が多いかどうかについて考察する。

『唐詩選』においては、「人部」の「幽怨」類と「閨情」類の詩は、全部で23首(5.29%)/28首(6.02%)を占めており、『古文真宝』においては、両類の詩は全部で6首(5.22%)/6首(5.00%)を占めている(附表15、16)。つまり、『唐詩選』の閨怨詩の割合は、『古文真宝』の1.01倍/1.20倍ということになる。『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』においては、『古文真宝』に比べると、閨怨詩の詩数はやや高いが、大きな差はなく、どちらの選集においても閨怨詩が比較的多いことが分かる。

ただし、第2章で指摘した通り、『三体詩』では閨怨詩は全部で2首(0.57%)/6首(1.21%)しかなく、『唐詩選』の閨怨詩の割合は、『三体詩』の9.3倍/5.0倍という大きな差がある。この結果を踏まえると、『唐詩選』における閨怨詩は、『古文真宝』とは差が少ないが、『三体詩』より顕著に多いことが分かる。

前述の送別詩の収録状況と同様に、『三体詩』と『古文真宝』に親しんできた日本人の読者にとっては、『古文真宝』とほぼ同じ割合なので、完全に新鮮だったとは言えないかもしれないが、『唐詩選』にも閨怨詩がやや多いことは、閨怨詩の収録において安定した傾向を示しており、読みやすく感じたと思われる。また、日野氏の論文で分析されているように、

未練や感傷といった感情は人間の自然的な感情を反映しており、このような詩が多く収録されていることが『唐詩選』の流行に関連している可能性があると考えられる。

小結

以上、『唐詩類苑』に基づき、『唐詩選』と『古文真宝』収録作品の主題について統計的な調査を行った結果、『唐詩選』収録作品の特徴がより明らかになった。第1章と第2章で行った『唐詩三百首』と『三体詩』との比較の結果を踏まえると、比較の対象により収録数や割合に若干の違いが見られるが、全体的な傾向を把握することができた。

『唐詩類苑』の分類のみの詩の場合でも、筆者の主題を分類した詩を加えた場合でも、第1章の分析では、『唐詩三百首』に比べると、『唐詩選』に実際に多かったのは『辺塞詩』のみであり、送別詩には大きな差がなく、閨怨詩と懷古詩は少ないことが分かった。一方、第2章と本章で『三体詩』と『古文真宝』を比較の対象に付け加えて比べた結果、『唐詩選』には辺塞詩が特に多いほか、送別詩、閨怨詩も多いと言えることが分かった。また、懷古詩の収録数に関しては大きな違いが見られなかった。

これらの結果は、日野氏の先行研究に指摘されている通り、『唐詩選』には辺塞詩、閨怨詩、送別詩が多いと感じられたであろうということを確認するものである。特に、『唐詩選』では辺塞詩の多さが際立っており、これは『唐詩三百首』、『三体詩』や『古文真宝』には見られない特徴である。このため、『三体詩』や『古文真宝』に親しんできた日本の読者にとって、『唐詩選』に多く収録された辺塞詩は新鮮な印象を与え、従来の選集にはない独自性を持っていたと考えられる。『唐詩選』の流行は、これらの新たな主題の導入によって、日本の読者に対する魅力を高めた可能性がある。特に、『三体詩』や『古文真宝』には少なかった主題を補完する形で登場した『唐詩選』は、日本人の文学的興味を引きつけ、その普及に貢献したかもしれない。

また、閨怨詩、送別詩の内容を考えると、女性の哀愁や女性の立場を借りて詩人の不遇を詠じたもの、離別に伴う感情などは人間の日常生活に共通する感情であり、これらの詩が多く収められている『唐詩選』は、読者の心情に訴える力が強いと考えられる。このことが、『唐詩選』の人気の一因であると推測される。

さらに、『唐詩選』には『古文真宝』に比べて「歳時部」、「水部」の詩が多く収められていることにより、『唐詩選』収録作品の主題には多様性が見られるといえる。特に「歳時部」に関しては、四季に関する詩が多く収録されており、これは拙論「日本の古典としての漢詩の特徴：日中の教科書に採録されている漢詩の分析より」¹²で分析した内容とも関連性が見られる。この分析によると、日本の教科書に採録されている漢詩の中には、「月」、「山」、「花」など自然に関する言葉が多く、日本人にとって自然描写の詩が好まれる傾向があることが示されている。この結果は「歳時部」に関しては、日本の和歌、俳句などの季節に敏感に反応してきた文学ジャンルとの関係性が考えられる。一方で、「水部」に関しても水に恵まれた自然や生活が理由として考えられるが、今後、「歳時部」と合わせて考証していきたいと思っている。

以上、本章では、先行研究で指摘されてきた主題詩をもとに統計的な調査を行い、その収

¹² 拙論「日本の古典としての漢詩の特徴：日中の教科書に採録されている漢詩の分析より」（一般社団法人情報処理学会『じんもんこん 2020 論文集』2020 年 12 月、pp.261-268）

録状況を確認することで、『唐詩選』の主題上の特徴を明らかにした。また、こうした特徴が『唐詩選』の流行とどのように関係しているのかについても考察した。今後は、主題だけでなく、詩体や文体の特徴にも目を向け、さらに検討を進めていきたい。これにより、『唐詩選』の流行と、その後の日本における漢詩の受容や理解との関係を、より具体的に明らかにしていく予定である。

また、『唐詩選』は流行の中で日本の文芸と結びつき、広く親しまれるようになった。第2部では、江戸詩壇における受容の様子を取り上げ、どのような作品が好まれ、パロディーの対象となったのかを調査する。さらに、パロディーのもとになった詩の主題を統計的に分析することで、『唐詩選』の特徴を主題の面から捉え直し、江戸時代の日本人にどのように受け入れられていたのかを明らかにする。

附表

附表1 『唐詩選』と『古文真宝』における各部の詩数（『唐詩類苑』のみ）

	部名	唐詩選		古文真宝	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	人部	133	30.57%	53	46.09%
2	歳時部	42	9.66%	3	2.61%
3	居処部	39	8.97%	9	7.83%
4	辺塞部	27	6.21%	1	0.87%
5	水部	21	4.83%	0	0.00%
6	寺観部	18	4.14%	1	0.87%
7	職官部	18	4.14%	3	2.61%
8	武部	17	3.91%	1	0.87%
9	楽部	16	3.68%	4	3.48%
10	礼部	16	3.68%	0	0.00%
11	地部	13	2.99%	1	0.87%
12	天部	10	2.30%	4	3.48%
13	山部	8	1.84%	0	0.00%
14	治政部	8	1.84%	1	0.87%
15	京都部	6	1.38%	0	0.00%
16	州郡部	6	1.38%	0	0.00%
17	帝戚部	5	1.15%	0	0.00%
18	花部	4	0.92%	3	2.61%
19	巧芸部	4	0.92%	4	3.48%
20	服食部	4	0.92%	8	6.96%
21	鳥部	3	0.69%	5	4.35%

22	獣部	3	0.69%	2	1.74%
23	祠廟部	3	0.69%	0	0.00%
24	木部	2	0.46%	2	1.74%
25	秭部	2	0.46%	0	0.00%
26	果部	2	0.46%	0	0.00%
27	器用部	1	0.23%	3	2.61%
28	草部	1	0.23%	1	0.87%
29	道部	1	0.23%	2	1.74%
30	文部	1	0.23%	3	2.61%
31	産業部	1	0.23%	1	0.87%
32	儒部	0	0.00%	0	0.00%
	合計	435	100.00%	115	100.00%

附表2 『唐詩選』と『古文真宝』における各部の詩数（筆者の分類を含む）

	部名	唐詩選		古文真宝	
		詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	人部	145	31.18%	57	47.50%
2	居処部	42	9.03%	9	7.50%
3	歳時部	42	9.03%	3	2.50%
4	辺塞部	30	6.45%	1	0.83%
5	水部	23	4.95%	0	0.00%
6	寺観部	19	4.09%	1	0.83%
7	楽部	19	4.09%	4	3.33%
8	職官部	18	3.87%	3	2.50%
9	武部	18	3.87%	1	0.83%
10	礼部	16	3.44%	0	0.00%
11	地部	13	2.80%	1	0.83%
12	天部	11	2.37%	4	3.33%
13	山部	9	1.94%	0	0.00%
14	治政部	9	1.94%	1	0.83%
15	京都部	6	1.29%	0	0.00%
16	州郡部	6	1.29%	0	0.00%
17	帝戚部	5	1.08%	0	0.00%
18	花部	4	0.86%	3	2.50%
19	巧芸部	4	0.86%	5	4.17%
20	服食部	4	0.86%	8	6.67%

21	鳥部	3	0.65%	5	4.17%
22	木部	3	0.65%	2	1.67%
23	獣部	3	0.65%	2	1.67%
24	祠廟部	3	0.65%	0	0.00%
25	糞部	3	0.65%	0	0.00%
26	果部	2	0.43%	0	0.00%
27	器用部	1	0.22%	3	2.50%
28	草部	1	0.22%	1	0.83%
29	道部	1	0.22%	2	1.67%
30	文部	1	0.22%	3	2.50%
31	産業部	1	0.22%	1	0.83%
32	儒部	0	0.00%	0	0.00%
		465	100%	120	100.00%

附表3 『唐詩選』と『古文真宝』における「歳時部」の詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	部名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	歳時部	42	9.66%	3	2.61%

附表4 『唐詩選』と『古文真宝』における「歳時部」の詩（筆者の分類を含む）

		唐詩選		古文真宝	
	部名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	歳時部	42	9.03%	3	2.50%

附表5 『唐詩選』と『古文真宝』における「水部」の詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	部名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	水部	21	4.83%	0	0.00%

附表6 『唐詩選』と『古文真宝』における「水部」の詩（筆者の分類を含む）

		唐詩選		古文真宝	
	部名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	水部	23	4.95%	0	0.00%

附表7 『唐詩選』と『古文真宝』における「服食部」の詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	部名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	服食部	4	0.92%	8	6.96%

附表 8 『唐詩選』と『古文真宝』における「服食部」の詩（筆者の分類を含む）

		唐詩選		古文真宝	
	部名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	服食部	4	0.86%	8	6.67%

附表 9 『唐詩選』と『古文真宝』における懷古詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	懷古	8	1.84%	3	2.61%

附表 10 『唐詩選』と『古文真宝』における懷古詩（筆者の分類を含む）

		唐詩選		三体詩	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	懷古	8	1.72%	3	2.50%

附表 11 『唐詩選』と『古文真宝』における辺塞詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
部名	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
辺塞部	総辺	23	5.29%	0	0.00%
	塞上	1	0.23%	0	0.00%
	薊門	1	0.23%	0	0.00%
	巡辺	1	0.23%	0	0.00%
	出塞	1	0.23%	0	0.00%
	長城	0	0.00%	1	0.87%
武部	従軍	5	1.15%	0	0.00%
	凱旋	4	0.92%	0	0.00%
	行營	2	0.46%	0	0.00%
	烽	1	0.23%	0	0.00%
	刀	1	0.23%	0	0.00%
	戦伐	1	0.23%	0	0.00%
	觀兵	1	0.23%	0	0.00%
	幕府	1	0.23%	0	0.00%
	赴軍	1	0.23%	0	0.00%
	劍	0	0.00%	1	0.87%
合計		44	10.11%	2	1.74%

附表 12 『唐詩選』と『古文真宝』における辺塞詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
部別	類別	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
辺塞部	総辺	24	5.16%	0	0.00%
	塞上	3	0.65%	0	0.00%
	薊門	1	0.22%	0	0.00%
	巡辺	1	0.22%	0	0.00%
	出塞	1	0.22%	0	0.00%
	塞下	0	0.00%	0	0.00%
	涼州	0	0.00%	0	0.00%
	長城	0	0.00%	1	0.83%
武部	従軍	5	1.08%	0	0.00%
	凱旋	4	0.86%	0	0.00%
	行營	2	0.43%	0	0.00%
	烽	2	0.43%	0	0.00%
	刀	1	0.22%	0	0.00%
	戦伐	1	0.22%	0	0.00%
	観兵	1	0.22%	0	0.00%
	幕府	1	0.22%	0	0.00%
	赴軍	1	0.22%	0	0.00%
	劍	0	0.00%	1	0.83%
合計		48	10.32%	2	1.67%

附表 13 『唐詩選』と『古文真宝』における送別詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	送	13	2.99%	1	0.87%
2	別	7	1.61%	1	0.87%
3	送別	1	0.23%	0	0.00%
	合計	21	4.83%	2	1.74%

附表 14 『唐詩選』と『古文真宝』における送別詩（筆者の分類を含む）

		唐詩選		古文真宝	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	送	16	3.44%	1	0.83%
2	別	7	1.51%	1	0.83%
3	送別	1	0.22%	0	0.00%
	合計	24	5.16%	2	1.67%

附表 15 『唐詩選』と『古文真宝』における閨怨詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	幽怨	10	2.30%	2	1.74%
2	閨情	13	2.99%	4	3.48%
	合計	23	5.29%	6	5.22%

附表 16 『唐詩選』と『古文真宝』における閨怨詩（『唐詩類苑』のみ）

		唐詩選		古文真宝	
	類名	詩数	全詩における割合	詩数	全詩における割合
1	幽怨	15	3.23%	2	1.67%
2	閨情	13	2.8%	4	3.33%
	合計	28	6.02%	6	5.00%

第2部 『唐詩選』の江戸期受容と文化的影響

はじめに

第1部では、先行研究において指摘されてきた詩作を対象に統計的調査を行い、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』との比較を通じて、『唐詩選』収録作品における詩体・詩人・主題の特徴を明らかにしてきた。

本部では、第1部で定量的に明らかにした『唐詩選』の詩体・詩人・主題などの特徴が、日本の漢詩文化、特に江戸時代の詩壇にどのような影響を与えたのかを具体的に考察する。さらに、『唐詩選』が江戸時代の文芸作品に及ぼした影響にも注目し、象徴的な事例を取り上げながら、その文化的受容の広がりについて論じる。

具体的には、まず古文辞派詩人および反古文辞派詩人における『唐詩選』の受容とその態度を明らかにする。その際、古文辞派詩人である服部南郭の詩作を出発点とし、ついで反古文辞派における『唐詩選』への批評的態度を、山本北山の詩論を中心に検討する。さらに、詩論の変遷を経て、晩年には反古文辞を基調としつつもその長所を取り入れ、宋詩を鼓吹して性霊説を主張した市河寛斎の詩作を分析対象とし、反古文辞派内部における受容の多様相を考察する。

加えて、『唐詩選』の流行に伴い、本詩集が日本の文芸と融合し、通俗的な形で広く親しまれるようになった側面にも着目する。『唐詩選』が江戸時代の多岐にわたる文芸分野に影響を及ぼし、多くの関連作品が生み出されたことは先行研究によって明らかにされているが、どのような作品、あるいはどのような主題の詩が具体的にパロディーの対象となったのかについては、十分な検討がなされていない。

本部では、こうした課題を踏まえ、『唐詩選』の影響を受けた江戸文芸作品を整理するにあたり、江戸時代において『唐詩選』のどのような主題の作品が好まれ、パロディーの対象となったのかを明らかにすることを目的とする。特に、先行研究において指摘されてきた主題の詩が、実際に江戸文芸にどの程度影響を与えているのかを検証する。

具体的には、『通詩選三部作』、『唐詩笑』、『異素六帖』、『唐詩三物』を取り上げ、これらの作品を通じて、『唐詩選』収録詩のうち、どの詩がパロディーの対象となったのかを特定し、その文化的影響について考察する。

なお、本部の構成は以下のとおりである。

第4章では、服部南郭の詩作に見る『唐詩選』の受容を考察する。

第5章では、山本北山の詩論を中心に反古文辞派における『唐詩選』への態度を整理したうえで、市河寛斎の詩作分析を通じて、その受容の具体相を検討する。

第6章では、『唐詩選』と『通詩選』および『通詩選諺解』との関係を取り上げ、その受容と展開を明らかにする。

第7章では、江戸文芸作品における『唐詩選』の受容について、主題別影響の分析を中心に考察する。

第4章 服部南郭の詩作に見る『唐詩選』の受容

はじめに

第2部では、第1部で定量的に明らかにした『唐詩選』の詩体・詩人・主題の特徴が、江戸時代の漢詩文化の中でどのように受け入れられ、実際の詩作や文芸活動にどのような影響を与えたのかを検討する。本章はその最初の考察として、古文辞派詩人における『唐詩選』の受容を、服部南郭の詩作を通して明らかにする。

江戸中期の漢詩壇では、『唐詩選』は鑑賞のための詩集にとどまらず、詩人たち、とくに古文辞派詩人にとって作詩の手本となる詩集として受け入れられていたと考えられる。本章では、古文辞派詩人が『唐詩選』を高く評価し、そこに示された詩体の構成、詩人の選び方、主題のあり方を自らの詩作に取り入れていた、という仮説を立てる。

この仮説を確かめるため、本章では『唐詩選』の校訂に関わった服部南郭（1683-1759）の詩作を分析対象とする。南郭は江戸中期を代表する儒学者・漢詩人であり、古文辞派の詩風を受け継いだ人物である。南郭の詩文は『南郭先生文集』に収められているが、なかでも1711～1725年の詩作を収める初篇（1727年刊）は、『唐詩選』（1724年刊）と刊行時期が近く、同詩集が詩作の手本として広まっていく過程を考えるうえで重要である。

南郭初篇を見ると、詩集の構成や詩体の配列において、『唐詩選』と共通する点が多く見られる。また、「西宮春怨」「青楼曲」などのように詩題が一致する作品があるほか、題名が異なっても、内容や主題の面で『唐詩選』収録詩とよく似た作品が少なくない。これらの点から、南郭が『唐詩選』を盛唐詩中心の模範集として意識し、その特徴を自らの詩作に取り入れていたことが分かる。

しかし、南郭の詩作は『唐詩選』をそのまま写したものではない。同じ詩題や主題を踏まえつつも、構成や表現に工夫を加え、自身の詩として作り直している点に特徴がある。

そこで本章では、『南郭先生文集』初篇（以下、南郭初篇）を対象に、詩体の配列といった形式面と、詩題・主題の扱い方という内容面の両方から検討し、古文辞派詩人が『唐詩選』をどのように受け入れ、作詩の規範として用いていたのかを明らかにする。

以上の考察により、本章では、古文辞派において『唐詩選』が実際の詩作の場で広く共有され、詩体・詩人・主題の特徴が体系的に受け入れられていたことを示す。これは、次章以降で扱う反古文辞派が『唐詩選』とどのような距離を取ったのかを考えるための基準となり、第2部全体の議論の出発点として位置づけられる。

第1節 南郭と『唐詩選』の関連

1.1 服部南郭について

服部南郭は名を元喬、字を子遷、号を南郭または芙蕖館といい、通称を小右衛門と称した。京都の商家に生まれ、和歌を嗜む父および歌人であった外祖父の影響を受け、幼少より詩歌に親しんだ。元禄期に江戸へ下り、柳沢吉保に和歌の才能を認められて仕えたが、同家に入りしていた荻生徂徠と出会ったことを契機に、その門に入って古文辞学を修め、漢詩人としての道を歩むようになった¹。

¹ 本節における服部南郭の生涯に関する記述は、主として日野龍夫『服部南郭伝攷』（ペリかん社、1999年）を参照した。

享保三年（1718）に柳沢家を辞した後は仕官を避け、自由な文人生活を送った。徂徠没後は、経学を担った太宰春台と並び門下の双璧と称され、とりわけ詩文の分野において、徂徠学の正統な後継者として高く評価された。寛保年間以降は麻布森元町に「芙蕖館（芙館）」を営み、多くの門人や文人と交遊しながら、詩酒風流を旨とする隠逸的生活を志向した。

南郭の詩風は盛唐詩を尊び、文学・芸術を通して自我や個性の伸張を志向する点に特徴がある。また、『莊子』への関心も深く、「郭注莊子」の刊行に代表されるように、思想的営為にも及んでいる。とりわけ注目されるのは、南郭が『唐詩選』を日本で初めて校訂・出版した点である。これにより『唐詩選』は江戸期を通じて広く流布し、日本漢詩界における唐詩受容の方向性を大きく規定することとなった。その詩文は『南郭先生文集』に集大成されている。宝暦九年（1759）に没し、享年七十七。墓所は品川東海寺少林院にあり、その学統と詩風は松下烏石・石島筑波・湯浅常山ら多くの門弟を通じて後世に継承された。

一方、服部南郭の事績として、もう一つ重要なのが『唐詩選国字解』の存在である。同書は、南郭が門人を相手に『唐詩選』収録詩を一首ずつ講釈した内容を筆録した注釈書であり、当時広く読まれた。日野龍夫氏は『唐詩選国字解』の解説において、服部南郭と『唐詩選』との関係について次のように述べている。すなわち、『唐詩選』の流行に伴い、日本人による注釈書が近世中期以降数多く著されたが、その中でも最も著名なものが、部南郭による『唐詩選』講釈を門人が筆録した『唐詩選国字解』である。同書は当初写本として流布したが、寛政三年（1791）に刊行されて以後、さらに多くの読者を得、明治期にも版を重ねた。「国字解」とは、中国古典を仮名まじり文によって平易に注釈する書物を指し、当時こうした形式の注釈書が複数刊行されていたことを示している²。

1.2 『南郭先生文集』について

本稿で参照する『南郭先生文集』は、日野龍夫氏が編集・解説した『近世儒家文集集成 第七巻 南郭先生文集』によるものである。日野氏によれば、その底本は国会図書館鵜軒文庫蔵本の題簽を有する版本であり、本文については相良亨氏蔵本をもとに校訂が行われている。原本は全八冊に改装されており、原姿を完全にはとどめていないものの、刷りの状態は比較的良好であるとされる。

また日野氏の説明によれば、『南郭先生文集』は全四編からなり、各編十巻、合計四十巻で構成されている。刊記によると、初篇は享保十二年九月、二編は元文二年九月、三編は延享二年十一月、四編は宝暦八年六月に、それぞれ嵩山房須原屋新兵衛から刊行された。初篇の巻頭には荻生徂徠・本多猗蘭・金華による序文が置かれ、巻末には望月鹿門の跋文が付されている。なお、輯校は望月鹿門および伊藤南昌によって行われたとされる³。

第2節 『唐詩選』収録作品と南郭初篇収録作品との詩体配置の比較

『唐詩選』収録作品と南郭初篇収録作品の構成を概観すると、まず注目されるのが詩体の配置である。『唐詩選』は、五言古詩・七言古詩・五言律詩・五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句という順で詩体を配列した詩集である。一方、南郭初篇の目次および収録作品を確認すると、擬古樂府、五言古詩、七言古詩、五言律詩、五言排律、六言律詩、七言律詩、

² 前掲注1

³ 服部南郭著、日野龍夫編集・解説『近世儒家文集集成 第七巻 南郭先生文集』（ぺりかん社、1985年）

五言絶句、七言絶句という順で作品が配置されており、擬古樂府と六言律詩を含む点を除けば、『唐詩選』とおおむね共通した構成を持っていることが分かる。

しかし、このような配置上の類似が、単なる形式的な一致にとどまるのか、それとも編纂方針や詩作意識の共有を示すものなのかを判断するためには、配列順だけでなく、詩体ごとの比率も含めて検討する必要がある。そこで本節では、『唐詩選』と南郭初篇に収録された作品を、詩体という形式的観点から整理し、定量的に比較する方法を採る。

具体的には、各詩集における詩体別の作品数と全体に占める割合を算出し、それらを比較することで、詩体構成や比重の違いを明らかにする。この方法によって、両者の特徴を印象論ではなく、数値に基づいて示すことが可能となる。

また、詩体の配列順や構成比率に注目することで、南郭が『唐詩選』に代表される明代唐詩選集の編纂理念をどの程度受け入れていたのか、さらに、それをそのまま踏襲したのか、それとも自らの詩作意識に応じて調整したのかを、形式面から把握することができる。本節の分析は、南郭における『唐詩選』受容のあり方を考えるための基礎的な作業として位置づけられる。

『唐詩選』と南郭初篇に収録された作品を詩体別に整理すると、その内訳は表1の通りである。

表1 『唐詩選』収録作品と南郭初篇収録作品との詩体配置⁴

『唐詩選』			南郭初篇		
詩体	詩数	全詩における割合	詩体	初篇	全詩における割合
			擬古樂府	31	8.64%
五言古詩	14	3.01%	五言古詩	27	7.52%
七言古詩	32	6.88%	七言古詩	19	5.29%
五言律詩	67	14.41%	五言律詩	74	20.61%
五言排律	40	8.60%	五言排律	5	1.39%
			六言律詩	1	0.28%
七言律詩	73	15.70%	七言律詩	88 (89)	24.51%
五言絶句	74	15.91%	五言絶句	22	6.13%
七言絶句	165	35.48%	七言絶句	92 (90)	25.63%
合計	465	100.00%	合計	359	100.00%

表1に示すように、『唐詩選』と南郭初篇に収録された作品を詩体別に整理すると、両者の間には明確な差異が認められる一方で、一定の共通点も確認できる。まず詩体の構成に注目すると、『唐詩選』では五言古詩、七言古詩、五言律詩、五言排律、七言律詩、五言絶句、

⁴ 注：『南郭先生文集』（服部南郭著、日野龍夫編集・解説『近世儒家文集集成 第七巻 南郭先生文集』ペリカン社、1985年）および『詩集日本漢詩 第4巻』（富士川英郎ほか編、汲古書院、1985年）の目次には「七言律詩」89首、「七言絶句」90首と記載されている。しかし、筆者がこの二冊に基づき確認したところ、「七言律詩」は88首、「七言絶句」は92首であった。したがって、表中では括弧内に目次上の数値を併記している。

七言絶句の順で作品が配列されている。南郭初篇においても、擬古樂府および六言律詩を含む点を除けば、詩体の配列順はおおむねこれに沿っている。

このような詩体配置は、さらに遡れば『唐詩品彙』の詩体構成とも高い共通性を示しており、南郭が『唐詩選』や『唐詩品彙』など、古文辞派が重視した明代唐詩選集の編纂理念を意識していた可能性が示唆される。

次に、詩体ごとの比率を見ると、『唐詩選』では七言絶句が全体の約 35%を占め、最も高い割合を示している。これに五言絶句 (15.91%) を加えると、絶句類は全体の半数を超え、『唐詩選』が絶句を中心に編纂された詩集であることが分かる。すなわち、『唐詩選』は簡潔で親しみやすい絶句を重視し、鑑賞や教育に適した入門的選集としての性格を強く備えていると評価できる。

これに対し、南郭初篇では七言律詩と五言律詩を合わせると、律詩系作品が全体の 46%以上を占める。この点から、南郭が律詩を詩作の中心に据えていたことが明らかとなる。また、擬古樂府や六言律詩といった比較的特殊な詩体も含まれており、伝統的な形式を踏まえつつ、多様な表現の可能性を探ろうとする姿勢が認められる。

第 3 節 『唐詩選』と南郭初篇において詩題が一致する作品の詩題・主題の比較

前述のとおり、『唐詩選』全 465 首と南郭初篇全 359 首を概観すると、南郭初篇は、擬古樂府および六言律詩を加えている点を除けば、五言古詩・七言古詩・五言律詩・五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句という『唐詩選』における詩体配列に、ほぼ従った構成を取っている。このような詩体配置の共通性は、形式面にとどまらず、詩題や主題の水準においても確認される。

すなわち、南郭初篇には、『唐詩選』と詩題が完全に一致する作品が複数見られ、しかもそれらの多くは、同一または対応する詩体区分の中に配置されている。このことから、南郭は個々の詩題を参照しただけでなく、『唐詩選』における詩体と詩題の対応関係そのものを意識しながら、詩作および詩集編成を行っていた可能性が高いと考えられる。

そこで本節では、『唐詩選』と南郭初篇において詩題が完全に一致する作品を取り上げ、それらの詩題の構造や主題的特徴について検討する。両詩集における詩題一致作品を整理すると、表 2 のとおりである。

表 2 『唐詩選』と南郭初篇における詩題一致作品⁵

『唐詩選』				南郭初篇		
	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題
26	七絶	李白	春夜洛城聞笛	8	七古	聞笛
135	七絶	李商隠	漢宮詞	9	七古	漢宮詞
19	五律	李白	塞下曲	4	五律	塞下曲

⁵ 表中に示した数字は、それぞれの詩が各詩集において詩体別に区分された枠内での掲載順を示すものである。たとえば、『唐詩選』において李白の「春夜洛城聞笛」は七言絶句に収録され、同部中で 26 番目に配置されているため、「26」と表記した。一方、南郭初篇では「宮詞三首」が 21 番から 23 番まで連続して配置されており、三首から成る連作として収録されていることから、「21～23」と表記している。

2	五律	楊炯	從軍行	8	五律	從軍行
1	五律	王績	野望	67	五律	野望
57	五絶	盧綸	和張僕射塞下曲	6	五絶	塞下曲
36	五絶	高適	詠史	7	五絶	詠史
147	七絶	李建勳	宮詞	21～23	七絶	宮詞三首
27	七絶	王昌齡	春宮曲	24	七絶	春宮曲
28	七絶	王昌齡	西宮春怨	26	七絶	西宮春怨
29	七絶	王昌齡	西宮秋怨	27	七絶	西宮秋怨
31	七絶	王昌齡	青樓曲	28～30	七絶	青樓曲三首
32	七絶	王昌齡	閨怨	36	七絶	閨怨

表2に示したように、『唐詩選』と南郭初篇には、詩題が一致する作品が複数確認される。これらの作品は、同一の詩題を共有するだけでなく、多くの場合、同一または対応する詩体の枠内に配置されている。したがって、南郭は自作を詩集に収める際、『唐詩選』における詩題構成や詩体配列を強く意識していたと考えられる。

具体的には、「塞下曲」「從軍行」「野望」「詠史」などの詩題は、『唐詩選』と南郭初篇のいずれにおいても、同一の詩体に対応している。これらは辺塞・行役・懷古といった比較的定型化された主題領域に属しており、南郭が唐詩の伝統的な主題構造を大きく崩すことなく継承している例と位置づけられる。

一方で、「春夜洛城聞笛」や「漢宮詞」のように、詩題は一致しているものの、『唐詩選』では七言絶句であるのに対し、南郭初篇では七言古詩へと詩体が変更されている事例も見られる。この点から、南郭は詩題の継承を重視しつつも、詩体については必ずしも固定的に踏襲していなかったことが分かる。南郭は詩題を中心に据えながら、詩体を状況に応じて選び直していたと考えられる。

さらに、「宮詞」や「青樓曲」のように、『唐詩選』では単作として収録されているのに対し、南郭初篇では複数首の連作として展開されている点も注目される。ここからは、同一の詩題を繰り返し用いることで、主題の世界を広げようとする創作姿勢がうかがえる。詩題の継承は、単なる模倣ではなく、創作を発展させるための基盤として機能していたといえよう。

以下では、『唐詩選』と南郭初篇には詩題が一致する作品の一例として「西宮秋怨」を取り上げる。

具体例1

● 西宮秋怨 王昌齡 『唐詩選』

芙蓉不及美人粧	芙蓉も及ばず 美人の粧
水殿風來珠翠香	水殿 風來たりて珠翠香し
卻恨含情掩秋扇	卻って恨む 情を含みて秋扇を掩ひ
空懸明月待君王	空しく明月を懸けて君王を待つを

● 西宮秋怨 服部南郭⁶ 『南郭先生文集』

纖纖初月上昭陽　纖纖たる初月　昭陽に上り
似妬娥眉秋恨長　娥眉を妬むに似て　秋恨長し
自信當年辭玉輦　自ら信ず　當年　玉輦を辭したるを
淒風何使妾心傷　淒風　何ぞ妾が心をして傷ましむ

両詩はいずれも「西宮秋怨」という詩題を有する。「西宮」とは、漢の成帝の妃・班婕妤が、趙飛燕およびその妹に恩寵を奪われたのち、退いて過ごした居所を指す。したがって、「西宮怨」は、失寵した女性が秋の気配に触れて物思いに沈む情景を主題とする詩題であり、主題的には閨怨詩に分類されることが多い。

詩句の内容を比較すると、王昌齡作は宮廷の情景描写を中心としているのに対し、南郭作では人物の心理描写により重きが置かれ、感情の内面化がいつそう際立っている。とりわけ第二聯の「自信當年辭玉輦」には、女性がみずからの過去の選択を振り返りつつ、悔恨の情を深めていく姿が表されており、その点が注目される。

また、一見すると両詩の間には詩題や主題以外の共通点が少ないように思われるが、王昌齡の「西宮春怨」（「西宮夜静百花香，欲捲朱簾春恨長。斜抱雲和深見月，朧朧樹色隱昭陽。」）を参照すると、「昭陽」や「恨長」といった語句の対応が確認できる。南郭はこれらの語を踏まえつつ、季節を「春」から「秋」へと転じることで、喪失感や孤独感をより強調して表現していると考えられる。

以上のように、詩題が一致する作品の分析からは、南郭が『唐詩選』の詩題体系や主題、さらには語彙や表現に至るまでを明確に意識しながら、それらを自作の詩集構成の中に取り込み、必要に応じて詩体や表現を調整しつつ再構成していたことが確認できる。

第4節 『唐詩選』と南郭初篇において詩題が類似する作品詩題・主題の比較

前節では、『唐詩選』と南郭初篇で詩題が完全に一致する作品を取り上げ、詩題の構造と主題の特徴を検討した。

しかし南郭初篇を『唐詩選』と照合すると、詩題が一致しない場合でも、詩題の語句や構成が似ている作品、または主題の方向性が近い作品が少なからず確認できる。

さらに、こうした詩題類似作品の多くも、詩題一致作品と同様に、同一または対応する詩体区分の中に配置されている。つまり南郭は、個々の詩題を偶然に参照したというより、『唐詩選』に見られる詩体と詩題の結びつきを意識しながら、詩題や主題を選んだ可能性があると考えられる。

具体的には、「～出塞」「送～之～」「和～」のように、詩題に共通する語句が用いられる例が多い。また詩句の表現面でも、『唐詩選』の作風や語彙を踏まえたと考えられる作品が見られる。そこで本節では、詩題が完全には一致しないものの、一定の類似性を示す作品群を取り上げて検討する。

本節では、前節で確認した両詩集に共通する詩体配列（五言古詩・七言古詩・五言律詩・

⁶ 本章で参照した『南郭先生文集』（服部南郭著、日野龍夫編集・解説『近世儒家文集集成 第七卷 南郭先生文集』ペリかん社、1985年）および『詩集日本漢詩 第4巻』では、詩題および詩句が旧字体で表記されている。そのため、本稿においても、引用する詩題および詩句については、原典の表記に従い、旧字体のまま掲げることとする。

五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句) に沿って、各詩体における詩題の類似例を整理する。そのうえで、両者の主題選択の共通点と相違点を明らかにしたい。

以上の分析を通じて、南郭が『唐詩選』を参照しつつ、詩題や主題をどのように変形・再編して自作に取り込んだのかを、詩体との関係に注目しながら考察することを本節の目的とする。

4.1 五言古詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』は初巻を五言古詩に充てており、全 14 首から構成されている。その詩題は、「述懷」「感遇」「薊丘覽古」「子夜呉歌」「經下邳圯橋懷張子房」「後出塞」「玉華宮」「送別」「西山」「宋中」「與高適薛據同登慈恩寺浮圖」「幽居」「南礪中題」「早發交崖山還太室作」である。

これに対し、南郭初篇の詩作も、擬古樂府を除けば五言古詩から始まり、全 27 首を数える。その詩題には、「詠懷」十五首、「贈子和」三首、「分賦唐五言古體得出塞」、「西臺候別筵分賦十二體得五言古侯帥戍西京」、「奉答越君瑞先生見懷」二首、「滕東壁墓下作」、「餞別于士茹歸西京」四首などが含まれる。これらの詩題には、共通する語句が用いられているものや、詩題の構成自体が類似しているものが多く、類似する題名をもつ詩が複数確認される点に特徴がある。

このような詩題構成は、作品を体系的に分類や整理しようとする明確な意図を示すものであり、同様の傾向は他の詩体にも認められる。したがって、南郭の詩作には、詩題を軸として作品を反復的かつ体系的に配置しようとする構成意識が一貫して働いていると考えられる。

以下では、表 3 に基づき、『唐詩選』と南郭初篇の五言古詩における詩題の一致・類似作品を具体的に示し、その特徴について検討する。

表 3 五言古詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』				南郭初篇		
	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題
1	五古	魏徵	述懷	1~15	五古	詠懷十五首
5	五古	李白	經下邳圯橋懷張子房	21~22	五古	奉答越君瑞先生見懷二首
6	五古	杜甫	後出塞	19	五古	分賦唐五言古體得出塞
8	五古	王維	送別	24~27	五古	餞別于士茹歸西京四首

以下では、表 3 に示した五言古詩の詩題類似例のうち、とりわけ両詩集の巻頭に置かれている「述懷」と「詠懷」に注目したい。

この二作は、詩題が完全には一致しないものの、いずれも「懷」を中核語とし、詩集冒頭に配置されている点で構造的に対応している。また、詩体が同じ五言古詩であることから、詩題・主題・配置の三点において比較が可能であり、南郭が『唐詩選』の詩題構成をどのように受け止め、変形したのかを具体的に検討するうえで、代表的な事例である。

そこで以下では、魏徵「述懷」と服部南郭「詠懷十五首（其一）」を取り上げ、両者の詩題の意味、主題の方向性、表現の特徴を比較しながら検討する。

具体例 2

● 魏徵 述懷⁷

中原還逐鹿	中原 還た鹿を逐ふ
投筆事戎軒	筆を投じて戎軒を事とす
縱横計不就	縱横 計 就らざれども
慷慨志猶存	慷慨 志 猶ほ存す
杖策謁天子	策を杖いて天子に謁し
驅馬出關門	馬を驅て關門を出づ
請纓繫南粵	纓を請うて南粵を繫ぎ
憑軾下東藩	軾に憑て東藩を下す
鬱紆陟高岫	鬱紆として高岫に陟り
出沒望平原	出沒して平原を望む
古木鳴寒鳥	古木 寒鳥鳴き
空山啼夜猿	空山 夜猿啼く
既傷千里目	既に千里の目を傷ましめ
還驚九折魂	還て九折の魂を驚かす
豈不憚艱險	豈に艱險を憚らざらんや
深懷國士恩	深く国士の恩を懷ふ
季布無二諾	季布 二諾なく
侯嬴重一言	侯嬴 一言を重んず
人生感意氣	人生 意氣に感ず
功名誰復論	功名 誰か復た論ぜん

● 服部南郭 詠懷⁸十五首 其一

名都多第宅	名都 第宅多し
藹藹揚紅塵	藹藹として紅塵を揚ぐ
繁華各自媚	繁華 各自に媚たり
交態重萬縉	交態 萬縉を重んず
往來趣捷徑	往來 捷徑に趣き
車馬嚇比鄰	車馬 比隣に嚇す
朝爲千金子	朝に千金の子と爲り
夕作五侯賓	夕に五侯の賓と作る
五侯不可接	五侯 接すべからず
冠蓋乏故人	冠蓋 故人に乏し
釋此歸古路	此れを釋てて古路に歸し
去釣大江濱	去きて大江の濱に釣りす
巨鰲東海來	巨鰲 東海より來たり
排流受我綸	流を排して我が綸を受く
烹之不當膳	これを烹るも膳に當たらず

⁷ 本章において引用する『唐詩選』所収詩の詩題・詩句・訓読については、日野龍夫校注『唐詩選国字解』（平凡社〈東洋文庫〉、1982年）を参照した。

⁸ 本章において引用する南郭の詩作三首については、詩題および詩句をすべて『南郭先生文集』（服部南郭著、日野龍夫編・解説、ペリカン社、1985年）に拠った。

『唐詩選』の冒頭が魏徴の「述懷」であるのに対し、南郭初篇の冒頭には「詠懷十五首」が置かれている。魏徴の「述懷」は、隋末から唐初にかけての動乱期にあつて、学問の道を捨てて戦場に赴く決意を詠じた作品であり、函谷関を通過する際に作られたと伝えられる。その題名には、自らの志向や抱負を率直に述べるという意味が込められている。

これに対して、服部南郭の「詠懷十五首」は、阮籍の連作詩を典拠とする「詠懷」詩の系譜に属するものであり、柳沢家を致仕した前後に経験した挫折や憂悶を背景として成立した連作である。その内容には、盧照隣『長安古意』の「佳氣紅塵暗天起」に由来する「紅塵」や、高適『邯鄲少年行』の「君不見今人交態薄」と関わる「交態重萬緒」など、先行詩の表現や語彙の影響が随所に認められる⁹。

このように、両詩集はいずれも「懷」を詠じる作品を巻頭に配置している点では共通しているものの、その内実には明確な差異が存在する。魏徴の「述懷」が、国家的動乱という歴史的状況の中での志の表明を主軸とするのに対し、南郭の「詠懷十五首」は、『唐詩選』に収録された先行詩の系譜を踏まえつつ、個人的な失意や内面的な葛藤を重ね合わせて表現している点に特徴がある。

4.2 七言古詩における詩題・主題の類似作品

前節では、五言古詩における詩題の一致・類似作品を取り上げ、南郭初篇が『唐詩選』の詩題構成を参照しつつ、作品を体系的に配置していることを確認した。本節では、これと同様の視点から、七言古詩における詩題および主題の対応関係について検討する。

『唐詩選』では、巻二が七言古詩に充てられており、全 32 首が収められている。一方、南郭初篇における七言古詩は 19 首であり、収録数には差が認められる。しかし、七言古詩という詩体区分においても、詩題に共通する語句を含む作品や、詩句の表現面において『唐詩選』の作風や語彙を踏まえたと考えられる作品が存在しており、詩題・主題の両面から両詩集の対応関係をうかがうことができる。

以下では、表 4 に基づき、『唐詩選』と南郭初篇の七言古詩のうち、詩題の語句構成や主題的方向性に共通性が認められる作品を示す。

表 4 七言古詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』				南郭初篇		
	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題
11	七古	杜甫	高都護驄馬行	1	七古	調馬行
15	七古	杜甫	韋諷録事宅觀曹將軍畫馬圖引	2	七古	徂徠先生宅觀青玉笏行
29	七古	張若虛	春江花月夜	3	七古	明月篇倣初唐體
7	七古	李白	烏夜啼	4	七古	秋夜吟

表 4 から明らかなように、特定の語句や意象、あるいは主題的枠組みにおいて、『唐詩選』所収詩との明確な連続性を示す作品が存在する点が注目される。

⁹ 先行詩の影響については、山本和義・横山弘注『江戸詩人選集 第三巻 服部南郭・祇園南海』（岩波書店、1991 年、pp.13-14）において指摘されている。

特に、「烏夜啼」と「秋夜吟」の関係は、詩題そのものは異なるものの、詩中の語彙や意象の重なりが顕著であり、七言古詩における南郭の受容のあり方を具体的に示す代表的な事例といえる。そこで以下では、この二作を取り上げ、詩題・語彙・意象の対応関係に着目しながら検討する。

具体例3

- 李白 烏夜啼

黄雲城邊烏欲棲	黄雲 城邊 烏 棲まんと欲し
歸飛啞啞枝上啼	歸飛 啞啞として枝上に啼く
機中織錦秦川女	機中 錦を織る 秦川の女
碧紗如煙隔窗語	碧紗 煙の如く 窗を隔てて語る
停梭悵然憶遠人	梭を停め悵然として遠人を憶ひ
獨宿空房淚如雨	獨り空房に宿して涙 雨の如し

- 服部南郭 秋夜吟

庭際樹上烏夜啼	庭際 樹上 烏 夜に啼く
牀前侵地月色低	牀前 地を侵して 月色低し
秋思不眠為誰長	秋思眠らず 誰が為にか長き
永夜凜凜露爲霜	永夜凜凜として 露 霜と爲る
休爭愁人鬢邊白	愁人 鬢邊の白きを争ふを休めよ
今宵早已一半強	今宵 早に已に 一半強

『唐詩選』には、李白の「烏夜啼」が収められている。「烏夜啼」は樂府題の一つであり、夫や恋人と離れて暮らす女性の思いを詠じた詩題として知られている。李白の作においては、夕暮れ時、ねぐらに帰る烏の鳴き声をきっかけとして、機織りに励む女性の孤独と哀愁が描かれている。

これに対し、南郭初篇に収められた「秋夜吟」は、詩題こそ異なるものの、冒頭に「烏夜啼」の語を用いており、李白詩を明確に想起させる構成となっている。内容面においても、夜の情景の中で孤独や愁思を表現する点で共通しており、「烏」「夜啼」といった語彙が両詩に共通して用いられている。静寂の中に不安や哀感をにじませる表現は、両詩に共通する特徴である。

また、南郭詩の「牀前侵地月色低」は、『唐詩選』所収の李白「静夜思」における「牀前看月光」を想起させる表現であると指摘されている¹⁰。こうした点からは、南郭が『唐詩選』に収められた李白詩の語彙や意象を意識的に参照しつつ、それらを自身の感情表現の中へと再構成している様相がうかがえる。このように南郭は、『唐詩選』に収められた李白詩の語彙や意象を意識的に参照しつつ、それらを自身の感情表現の中へと取り込み、再構成していると考えられる。

以上の点から、本例は、詩題の類似にとどまらず、語彙・意象のレベルにおいても『唐詩選』との連続性を保ちながら、新たな情趣を生み出している点に特徴があるといえよう。

¹⁰ 山本和義・横山弘注『江戸詩人選集 第三巻 服部南郭 祇園南海』（岩波書店、1991年、p.24）参照。

4.3 五言律詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』には五言律詩が 67 首収められているのに対し、南郭初篇には 74 首が収められている。ただし、南郭初篇には同一題名の詩が複数存在する場合が多く、重複を除いた場合、実際の詩題数は三十三首にとどまる。

この点から、南郭の五言律詩は、作品数の上では『唐詩選』を上回るものの、詩題の設定においては、同一主題を反復的に展開する傾向が強いことがうかがえる。

以下、表 5 において、『唐詩選』と南郭初篇の五言律詩における詩題の一致・類似作品を示す。

表 5 五言律詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』				南郭初篇		
	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題
22	五律	李白	送友人入蜀	3	五律	送人客游奥州
51	五律	杜甫	旅夜書懷	29～35	五律	秋日書懷七首
35	五律	岑參	寄左省杜拾遺	37	五律	寄浦子彬
45	五律	杜甫	秦州雜詩	39～48	五律	江上雜詩十首

表 5 に示したように、五言律詩では、「送」「書懷」「寄」「雜詩」といった主題を示す語を含む詩題が、両詩集に共通して確認できる。たとえば、「送友人入蜀」と「送人客游奥州」、「旅夜書懷」と「秋日書懷七首」、「秦州雜詩」と「江上雜詩十首」などは、詩題の語構成や主題の方向性がよく対応している。

ここでは、杜甫の「秦州雜詩」と、服部南郭の「江上雜詩十首」に収められた一首を取り上げ、五言律詩における「雜詩」主題の継承と変容について検討する。

具体例 4

● 杜甫 秦州雜詩

鳳林戈未息 魚海路常難 鳳林 戈 未だ息まず 魚海 路 常に難し
 候火雲峰峻 懸軍幕井乾 候火 雲峰峻しく 懸軍 幕井乾く
 風連西極動 月過北庭寒 風連なって西極 動き 月過ぎて北庭寒し
 故老思飛將 何時議築壇 故老 飛將を思ふ 何れの時か築壇を議せん

● 服部南郭 江上雜詩十首

村居隣大嶽 登陟此盤旋 村に居りて大嶽に隣し 登り陟りて此に盤旋す
 江吐蛟龍氣 山開日月前 江は蛟龍の気を吐き 山は日月の前に開く
 罷官新白帽 當酒舊青氈 官を罷めて白帽新たに 酒に当てて旧き青氈
 世態天真少 孤貧更自憐 世態は天真少なく 孤貧にして更に自らを憐れむ

杜甫の「秦州雜詩二十首 其十九」は、安史の乱後、秦州に流寓していた時期に詠まれた作品であり、西北辺、とくに吐蕃方面の戦乱を背景としている。「鳳林戈未息、魚海路常難」は、戦争がいまだ終わらず、辺境への往来が困難な状況にあることを端的に示す句である。

服部南郭の門人が編纂した『唐詩選国字解』では、この第一句に見える「鳳林」を秦州付近の鳳林関一帯と解釈しているが、日野龍夫氏の校注によれば、「鳳林」は甘肅省臨夏県西

方にあった関所を指し、秦州（現在の甘肅省天水市）よりもはるかに西に位置する地名であるという。日野氏は、この点から『唐詩選国字解』の注釈を誤りとし、こうした理解は中国の地理に十分通じていなかった江戸時代人の認識の限界を示すものだと指摘している¹¹。

続く「候火雲峰峻、縣軍幕井乾」では、合図の火や軍営の様子が描かれ、戦時の緊張や兵站の厳しさが表現されている。第三聯では、晩秋の風や月光が辺境一帯を覆う情景が詠じられ、自然の寒さが戦乱の長期化と人々の不安を象徴している。結句では、漢代の名将李広（飛将）への言及を通じて、良将がいないことへの嘆きと、朝廷が適切な人材を登用することへの期待が示されており、個人的な感懷を超えた国家的関心がうかがえる。

これに対して、服部南郭の「江上雑詩十首」に収められた一首は、官を退いた後の生活を背景としており、詩の舞台は静かな自然環境である。冒頭では山や川といった自然が描かれるが、それらは戦乱を示すものではなく、詩人の日常的な生活の場として提示されている。後半では、「罷官」「孤貧」といった語を通じて、官途を離れた後の心境や孤独が静かに語られ、関心は主として自己の境遇に向けられている。

このように、両詩はいずれも「雑詩」という詩題を用い、社会の中心から離れた場所に身を置く境遇を背景としている点では共通している。しかし、杜甫の「秦州雑詩」が、流寓という状況から戦乱や国家の行方へと視線を広げているのに対し、南郭の「江上雑詩」は、官を退いた後の生活に即した、より私的で内省的な感懷を中心に展開している。

以上の点から、南郭は『唐詩選』に収められた杜甫の「雑詩」に代表される主題のあり方を踏まえつつ、それを江戸期知識人としての生活実感に即して捉え直していることが分かる。五言律詩における南郭の受容は、詩題と主題の枠組みを受け継ぎながら、その内容を境遇詩へと転換している点に特徴があるといえよう。

4.4 七言律詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』には七言律詩が 73 首収められているのに対し、南郭初篇には 88 首が収められており、作品数では南郭初篇が『唐詩選』を上回っている。ただし、七言律詩においては、他の詩体とは異なり、詩題が完全に一致する作品は見られない。

しかし、詩題に共通する語句を含む作品や、送別・唱和・歳時といった主題の枠組みにおいて、『唐詩選』所収詩と対応関係を示す作品は少なくない。このことから、南郭の七言律詩は、特定の詩題をそのまま繰り返すのではなく、『唐詩選』に見られる詩題の型や主題の方向性を踏まえつつ、多様な作品へと展開している点に特徴があると考えられる。

以下、表 6 において、『唐詩選』と南郭初篇の七言律詩のうち、詩題の語構成や主題の方向性において類似性が認められる作品を示す。

表 6 七言律詩における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』				南郭初篇			グループ
	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題	
30	七律	李頎	送魏萬之京	3	七律	送人之京二首	A

¹¹ 日野龍夫（校注）『唐詩選国字解』（平凡社、1982 年、pp.324-325）

34	七律	李頎	送李回	4	七律	送人之京二首	A
40	七律	張謂	杜侍御送貢物戲贈	6	七律	送人之北地	A
41	七律	高適	送李少府貶峽中王少府貶長沙	10	七律	送高生歧嶺中之西州生善弓劍	A
48	七律	岑參	暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬	11	七律	送人游宦駿州	A
				12	七律	早春送人之泉南	A
				15	七律	送人歸隱西京南山	A
				18	七律	又和送客作	A
				19	七律	送友人入信中	A
				26 ～ 27	七律	奉送徂徠先生赴峽謁永隴二首用子和韻	A
57 ～ 60	七律	杜甫	秋興四首	30 ～ 32	七律	秋懷二首	B
38	七律	崔署	九日登望仙臺呈劉明府	32	七律	九日贈徂徠先生	C
46	七律	岑參	九日使君席奉餞衛中丞赴長水	37	七律	九日集	C
9	七律	蘇頲	奉和春日幸望春宮應制	16	七律	和島歸真中秋不見月	D
10	七律	蘇頲	奉和初春幸太平公主南莊應制	17	七律	又和雨後上金龍山	D
14	七律	賈曾	奉和春日出苑矚目應令	18	七律	又和送客作	D
15	七律	李邕	奉和初春幸太平公主南莊應制	46 ～ 47	七律	和答田元漢見贈二首	D
16	七律	孫逖	和左司張員外自洛使入京中路先赴長安逢立春日贈韋侍御及諸公	49 ～ 50	七律	歲暮和江生漫興作生時罷官二首	D
21	七律	王維	和賈至舍人早朝大明宮之作	52 ～ 54	七律	和萬庵和尚作三首	D

22	七律	王維	和太常韋主簿五郎溫泉寓目	64 ～ 71	七律	秋日作八首和島歸惠	D
24	七律	王維	奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制	73	七律	和答高秀才病中見寄	D
29	七律	李愔	奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制	74	七律	雨中望君彥席上會連阿上人主人有詩和以奉謝	D
43	七律	岑參	和賈至舍人早朝大明宮之作	76	七律	雪中和答望君彥見贈	D
44	七律	岑參	和祠部王員外雪後早朝即事	82	七律	和眞徹上人新歲謁諸陵之作	D
66	七律	錢起	和王員外晴雪早朝	86 ～ 87	七律	和答叅州源京國見寄二首	D
73	七律	韓愈	奉和庫部盧四兄曹長元日朝迴				D

南郭初篇における七言律詩には、詩題の上で『唐詩選』収録作との類似が多く認められる。これらの詩題は、主題や語構成の共通性によっていくつかのグループに分類することができる。

第一に、「送～」の形式を取る送別詩のグループ（グループ A）が挙げられる。『唐詩選』所収の李頎「送魏萬之京」や「送李回」などに対し、南郭は「送人之京二首」「送人之北地」「送高生歧岨中之西州生善弓劍」など、多数の送別詩を作している。これらはいずれも「送～」という詩題形式を共有しており、南郭が『唐詩選』の送別詩群を意識的に参照していたことがうかがえる。

第二に、秋を題材とする詩のグループ（グループ B）がある。『唐詩選』収録の杜甫「秋興四首」に対し、南郭は「秋懷二首」を作しており、いずれも秋の情景を通して感懷を表現するという点で主題的に呼応している。

第三に、重陽節あるいは九日を題材とする詩のグループ（グループ C）が認められる。『唐詩選』の崔曙「九日登望仙臺呈劉明府」や岑參の九日詩に対応するかのよう、南郭は「九日贈徂徠先生」「九日集」などの作品を残しており、歳時詩の伝統を踏まえた詩題設定が確認できる。

第四に、「和～」「奉和～」を冠する唱和詩のグループ（グループ D）がある。『唐詩選』に多く見られる応制詩・奉和詩に対して、南郭もまた「又和送客作」「歳暮和江生漫興作生時罷官二首」「和萬庵和尚作三首」など、多数の唱和詩を作している。これらは、詩壇における応酬の形式を継承しつつ、同時代の人間関係や自己の境遇を詠み込もうとする姿勢を示すものといえよう。

本節では、以上のうち、重陽節を題材とする詩のグループ（グループ C）から、崔曙「九日登望仙臺呈劉明府」と服部南郭「九日贈徂徠先生」を具体例として取り上げ、七言律詩における歳時詩の受容について検討する。

具体例 5

- 崔曙 九日登望仙臺呈劉明府

漢文皇帝有高臺	漢文皇帝 高臺有り
此日登臨曙色開	此の日 登臨 曙色 開く
三晉雲山皆北向	三晉の雲山 皆北に向かひ
二陵風雨自東來	二陵の風雨 東より來たる
關門令尹誰能識	關門の令尹 誰か能く識らん
河上仙翁去不回	河上の仙翁 去て回らず
且欲近尋彭澤宰	且つ近く 彭澤の宰を尋ねて
陶然共醉菊花杯	陶然として共に菊花の杯に酔わんと欲す

● 服部南郭 九日贈徂徠先生

高臥誰驚住節過	高く臥して 誰か驚かん 住節の過ぐるを
龍山風樹晚嵯峨	龍山 風に樹ありて 晩に嵯峨たり
濁醪寧爲蒲條廢	濁醪 寧ろ 蒲條として廢ると爲らんや
漫興應緣感慨多	漫興 応に 感慨多きに縁るべし
僻地尺書疑萬里	僻地 尺書 萬里を疑ひ
索居一水憶長河	索居 一水 長河を憶ふ
登臨此日秋堪慘	登臨 此の日 秋 慘むべく
彭澤黃花近若何	彭澤の黃花 近きこと 若何

崔曙「九日登望仙臺呈劉明府」と服部南郭「九日贈徂徠先生」は、いずれも詩題に「九日」を掲げ、重陽節に行われる登高や菊、彭澤（陶淵明）といった共通のモチーフを用いている点で共通している。

ただし、表現のあり方には違いが見られる。崔曙の詩では、高台から望む広い景色や山川の風雨といった外的な情景が大きく描かれ、結びでは彭澤令と菊酒を通して、隱逸への憧れが比較的明るく示されている。一方、南郭の詩では、自然の描写は抑えられ、「高臥」「索居」「尺書」などの語を用いて、孤独や感慨といった内面的な心情が強く表されている。

結句の「彭澤黃花近若何」も、陶淵明的な隱逸をすぐに実現できる理想として描くのではなく、現実の境遇との距離を意識した問いかけとして読める。この点に、南郭が唐詩の重陽詩の表現を踏まえながら、それを自身の心情に即した形へと用いている様子がうかがえる。

以上のように、七言律詩において南郭は、『唐詩選』の詩題や主題の枠組みを受け継ぎつつ、それを自身の詩作に応じて表現し直していたことが確認できる。

4.5 五言絶句における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』には五言絶句が74首収められているのに対し、南郭初篇に収められている五言絶句は22首にとどまっており、その数には大きな差がある。このことから、五言絶句は南郭初篇において、他の詩体に比べて比重の低い詩体であることが分かる。

しかし、作品数は少ないながらも、『唐詩選』所収作と詩題や主題の面で対応関係を示す作品は確認できる。以下、表7において、『唐詩選』と南郭初篇の五言絶句のうち、詩題や主題の類似が認められる作品を示す。

表7 五言絶句における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』	南郭初篇
-------	------

	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題
5	五絶	郭振	子夜春歌	1~4	五絶	東都四時歌 春
113	七絶	劉禹錫	楊柳枝詞	10	五絶	折楊柳二首送松子潤

表7に示したように、五言絶句においては、季節や歌曲的表現、あるいは特定の語句を共有する点で、『唐詩選』所収作との類似が認められる。

たとえば、『唐詩選』に収められた郭振「子夜春歌」は、子夜歌系統の樂府的表現を背景とする閨怨詩であるが、南郭はこれに対応する形で「東都四時歌 春」を含む一連の五言絶句を作している。両者は、「春」を主題とする季節詩という枠組みを共有しており、南郭がこの主題を連作形式によって展開している点が注目される。

また、『唐詩選』所収の劉禹錫「楊柳枝詞」に対して、南郭は「折楊柳二首送松子潤」を作している。いずれも「楊柳」という語を中心に、送別や離情を表現する点で共通しており、南郭が『唐詩選』の作品を直接模倣するというよりも、そこに見られる主題や語彙を手がかりとして自身の詩作に取り入れていたことがうかがえる。

具体例6

● 郭振 子夜春歌

陌頭楊柳枝 陌頭 楊柳枝
 已被春風吹 已に春風に吹かる
 妾心正斷絶 妾が心 正に斷絶す
 君懷那得知 君が懷ひ 那ぞ知ることを得ん

● 服部南郭 東都四時歌

花下誰家妓 花の下 誰が家の妓ぞ
 東山醉未歸 東山に 酔ひて 未だ歸らず
 落花不相待 落花 相ひ待たず
 偏傍紅顏飛 偏へに 紅顏に傍ひて飛ぶ

郭振の「子夜春歌」と服部南郭の「東都四時歌（春）」は、いずれも「四時歌」という枠組みを用い、春の情景を背景として詠まれている点で共通している。花や女性といったモチーフを用いる点でも共通性が見られ、南郭の詩は唐詩に見られる春歌の表現を踏まえているといえる。

ただし、表現の仕方には違いがある。郭振の「子夜春歌」は、女性の立場から詠まれる樂府詩の伝統に基づき、恋人を待つ女性の心情が中心に据えられている。「陌頭楊柳枝」「已被春風吹」といった語句は、季節の移り変わりや時間の経過を示し、「妾心正斷絶」「君懷那得知」において、相手の心が分からないまま思いが断たれていく女性の嘆きが直接的に表現されている。

これに対し、南郭の「東都四時歌（春）」では、女性の心情が前面に出ることはなく、「花下誰家妓」「東山醉未歸」といった表現を通して、花の下での遊興の場面が比較的客観的に描かれている。花や妓女といったモチーフは共通しているものの、感情表現は抑えられており、結句の「落花不相待 偏傍紅顏飛」によって、若さや楽しみが時の流れとともに失われていく様子が示されている。

このように、南郭は「子夜四時歌」という唐詩の形式や語彙を踏まえながら、それをそのまま用いるのではなく、江戸という場に即した表現へと置き換えている。五言絶句において南郭は、唐詩に見られる春歌の枠組みを参照しつつ、感情表現を控えめにする事で、独自の詩的表現を形づくっていたと考えられる。

以上のように、南郭の五言絶句は、『唐詩選』所収作に代表される楽府的春歌を踏まえつつ、その主題の示し方や表現の方向性を調整することで、自身の詩作へと取り込んでいたことが確認できる。

4.6 七言における詩題・主題の類似作品

『唐詩選』には七言絶句が 165 首収められているのに対し、南郭初篇に収められている七言絶句は 92 首に及んでおり、五言絶句と比較すると、七言絶句は南郭初篇において相対的に比重の高い詩体であることが分かる。

また、七言絶句においては、詩題の語構成や主題の方向性の面で、『唐詩選』所収作と一致、あるいは明確な類似関係を示す作品が数多く確認できる点が特徴的である。

以下、表 8 において、『唐詩選』と南郭初篇の七言絶句のうち、詩題が一致、または語構成・主題において類似が認められる作品を示す。

表 8 七言絶句における詩題の一致・類似作品

『唐詩選』				南郭初篇			グループ
	詩体	詩人	詩題		詩体	詩題	
36	七絶	王昌齡	出塞	1	七絶	牛門分得出塞韻安字	E
2	七古	盧照鄰	長安古意	3	七絶	古意	F
69	七絶	杜甫	奉和嚴武軍城早秋	9～10	七絶	和元漢峽中作二首	G
159～160	七絶	盧弼	和李秀才邊庭四時怨二首	33	七絶	春日同吊梅兒冢行至淺茅原江上風惡不得渡東璧吹笛且有詩余和之	G
162	七絶	崔惠童	奉和同前	40	七絶	石叔潭之函關留別諸子和此卻寄	G
				41	七絶	和答吳雪師龍華山見寄	G
				48～49	七絶	和答寂通師峽中見寄二首	G
				52	七絶	遊蓮光寺奉和卓上人答德夫作	G

				54	七絕	觀子帥與韓客唱和作因賦呈子帥	G
				70	七絕	和麟藪木公代笑老人之作	G
30	七絕	王昌齡	長信秋詞	25	七絕	秋宮曲	H
31	七絕	王昌齡	青樓曲	31	七絕	青樓怨	H
7	七絕	宋之問	送司馬道士遊天臺	4	七絕	送吳雪師歸山	I
8	七絕	張說	送梁六歸洞庭山作	58	七絕	江上樓送鳳泉師之信州	I
18	七絕	李白	黃鶴樓送孟浩然之廣陵	59	七絕	送子和赴東奧	I
38	七絕	王昌齡	芙蓉樓送辛漸	61	七絕	送辨中師之京	I
39	七絕	王昌齡	送薛大赴安陸	63	七絕	送融公歸相中	I
40	七絕	王昌齡	送別魏三	64	七絕	送貫道師歸鄉	I
46	七絕	王維	送韋評事	66	七絕	春日送融公歸鄉說法	I
47	七絕	王維	送沈子福之江南	67	七絕	暮春江樓送人	I
52	七絕	賈至	送李侍郎赴常州	68	七絕	送觀了師歸海西	I
60	七絕	岑參	虢州後亭送李判官使赴晉絳得秋字	69	七絕	送薰堂師歸海西	I
61	七絕	岑參	送人還京	83 ～ 87	七絕	六月送江山人歸嵐山五首	I
64	七絕	岑參	送劉判官赴磧西	88 ～ 90	七絕	送了願師之西京三首	I
74	七絕	常建	送宇文六	92	七絕	送清泰菊庵老禪歸峽中	I

80	七絶	孟浩然	送杜十四之江南				I
84	七絶	張謂	送人使河源				I
86	七絶	王之渙	九日送別				I
91	七絶	劉長卿	重送裴郎中貶吉州				I
92	七絶	劉長卿	送李判官之潤州行營				I
97	七絶	皇甫冉	送魏十六還蘇州				I
100	七絶	韓翃	送客知鄂州				I
102	七絶	李端	送劉侍郎				I
119	七絶	武元衡	送盧起居				I

表 8 に示したように、南郭初篇の七言絶句には、『唐詩選』所収作と詩題の形式や主題的枠組みを共有する作品が多数含まれている。これらは、詩題の性格に応じて、いくつかのグループに分けて整理することができる。

第一に、「出塞」や辺境・軍旅を題材とする作品群（グループ E）が挙げられる。『唐詩選』所収の王昌齡「出塞」に対し、南郭は「牛門分得出塞韻安字」を作しており、いずれも辺境を舞台とした題材を用いている。南郭の作品は、唐詩に見られる征戦や異域の情調を踏まえつつ、それを文人詩的な唱和の文脈に引き寄せて表現している点に特徴がある。

第二に、「古意」や都城をめぐる過去へのまなざしを主題とする作品群（グループ F）がある。『唐詩選』に収められた盧照隣「長安古意」と、南郭の「古意」は、いずれも過去の繁華や盛時を回顧するという主題を共有しており、詩題に用いられた「古意」という語が、その方向性を端的に示している。

第三に、「和～」「奉和」「和答」といった語を冠する唱和詩の作品群（グループ G）が挙げられる。『唐詩選』所収の杜甫「奉和嚴武軍城早秋」や盧弼「和李秀才邊庭四時怨二首」などに対し、南郭は「和元漢峽中作二首」以下、多数の唱和詩を残している。これらの作品は、詩題の形式そのものが唐詩の唱和詩を踏まえており、南郭が詩的応酬という実作の場において『唐詩選』的枠組みを積極的に用いていたことを示している。

第四に、宮廷・閨怨や樂府的題材を用いる作品群（グループ H）がある。『唐詩選』に見

られる王昌齡の「長信秋詞」「青樓曲」に対して、南郭も「秋宮曲」「青樓怨」など、同系統の詩題を用いた七言絶句を作している。これらの作品には、唐代宮怨詩に特徴的な語彙や情景構成が意識的に取り入れられている。

第五に、「送～」の形式を取る送別詩の作品群（グループ I）が挙げられる。『唐詩選』には、李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」をはじめ、多数の送別詩が収められているが、南郭初篇においても、「送吳雪師歸山」「送子和赴東奥」など、送別を題材とする七言絶句が極めて多い。これらはいずれも、詩題の形式と主題の両面において、『唐詩選』の送別詩と強い連続性を有している。

以下では、グループ H に属する作品として、王昌齡の「長信秋詞」と、服部南郭の「秋宮曲」を具体例として取り上げる。両作は、詩題に「秋」の字を含む点を除けば、一見すると直接の関連性を持たない作品のようにも見える。しかし、中国の歴史的背景や典故を踏まえて検討すると、詩題の構成や用いられた語句を通じて、主題の水準では共通性が認められることが分かる。

具体例 7

● 王昌齡 長信秋詞

真成薄命久尋思	真成に薄命 久しく尋思す
夢見君王覺後疑	夢に君王を見て覺めて後疑ふ
火照西宮知夜飲	火 西宮を照らして 夜飲を知る
分明複道奉恩時	分明なり 複道恩を奉くる時

● 服部南郭 秋宮曲

秋水菱花前殿開	秋水 菱花の前殿に開き
昭陽歌舞夜更回	昭陽の歌舞 夜 更けて回る
深宮浴罷纔看月	深宮に浴し罷りて 纔かに月を看れば
阿監已過重閣來	阿監 已に重閣を過ぎて 來たる

まず、両作はいずれも詩題に「秋」の字を含んでいる点で共通している。また、南郭の詩題には「宮」の字が明示されているが、王昌齡の「長信秋詞」における「長信」も、実際には「長信宮」という宮殿名を指す語である。この点から、両作はいずれも宮廷空間を背景としていることが確認できる。

「長信秋詞」は、中国・前漢時代の女官である班婕妤の故事を踏まえた作品である。班婕妤は成帝に仕えたが、のちに趙飛燕・趙合德姉妹に寵愛を奪われ、退いて皇太后に仕えた人物として知られる。「怨歌行」（「新裂齊紈素……恩情中道絶」）は、寵愛を失った後の悲しみを詠んだ作とされ、王昌齡の本詩もこの系譜に連なる宮怨詩として位置づけられる。本作は全五首のうちの第四首にあたり、詩題は「長信怨」ともされる。「長信宮」は、漢代に皇后や妃嬪、あるいは太后が居住した後宮の一つであり、寵愛を失った後の班婕妤の重賞だと考えられる。

これに対し、「阿監」とは、宮中における女官の長で、他の女官を監督する立場にある者を指す¹²。この語の用法からも、服部南郭の「秋宮曲」が、秋の宮廷を舞台として女性の姿

¹²『日本国語大辞典』によれば、「阿監」とは宮中における女官の長であり、他の女官たちを監督する立場にある者を指す。

を描いた作品であることが分かる。

詩中には、「菱花の前殿」「昭陽の歌舞」「深宮」といった語が見られ、華やかでありながら外界から隔てられた後宮の空間が表現されている。とくに「昭陽」は、成帝の時代に築かれ、趙飛燕および趙合德姉妹が居住した宮殿名であり、王昌齡の詩が想起する班婕妤の失寵と対照的な歴史的背景を含意している点が注目される。

また、入浴後に月を眺める場面や、阿監が重閣を過ぎて来るという描写からは、静かに時が流れる宮廷生活の一場面が示されている。

このように、両作はいずれも宮廷・秋・女性という共通の主題を持ち、唐代の宮怨詩の系譜に連なる作品である。ただし、王昌齡の「長信秋詞」では、夢と現実の対比を通して女性の感情が比較的直接的に表現されているのに対し、南郭の「秋宮曲」では、情景描写を中心とすることで感情が抑制された形で示されている。

以上のことから、七言絶句においては、五言絶句以上に、詩題の形式や主題の枠組みを通じて、『唐詩選』所収作との明確な対応関係が確認できる。南郭は、『唐詩選』に見られる代表的な詩題類型を手がかりとして、それらを自身の詩作の中で繰り返し用いることで、七言絶句という詩体において唐詩的表現の枠組みを受け継いでいたと考えられる。

小結

本章では、『唐詩選』の校訂者でもあった服部南郭を、古文辞派における『唐詩選』受容の代表例として位置づけ、その詩作を通して、『唐詩選』がどのように作詩の規範として理解され、実作に取り入れられていたのかを検討した。章頭で立てた、南郭は『唐詩選』を盛唐詩の模範として評価し、詩体構成・詩人選択・主題のあり方を自らの詩作に体系的に反映させていたという仮説は、本章の分析によって具体的に裏づけられたといえる。

第一に、詩体構成という形式面に注目すると、南郭初篇は、擬古樂府や六言律詩を含む点を除けば、『唐詩選』とほぼ共通する順序で詩体を配列している。この点から、南郭が詩集全体の構成において『唐詩選』を強く意識していたことが分かる。一方で、作品数の比率を見ると、南郭初篇では律詩の比重が高く、絶句を中心とする『唐詩選』とは異なる傾向も確認できる。これは、基本的な枠組みを参照しつつ、自身の詩作の重点に応じて構成を調整していた結果と考えられる。

第二に、詩題や主題の面においても、両詩集の対応関係は明確である。南郭初篇には、『唐詩選』と詩題が完全に一致する作品が複数見られるほか、語句構成や主題の方向性が近い作品も多く確認された。語彙や意象、詩題の選び方において、これらの詩人が創作上の具体的な手本として機能していたことがうかがえる。また、送別詩、辺塞詩、唱和詩、歳時詩、宮怨・閨怨詩といった伝統的テーマにおいて、共通する題材が繰り返し用いられている点から、南郭が『唐詩選』における主題構成を意識的に参照していたことが分かる。

しかし、南郭の詩作は『唐詩選』の単なる模倣にとどまるものではない。同じ詩題や主題を用いながら、詩体を変更したり、単作を連作として展開したりするなど、表現上の工夫が随所に見られる。また、南郭は内面的な感慨を前面に出す場合も多い。このように、南郭は『唐詩選』の枠組みを受け入れつつ、それを自身の境遇や関心に即して作り直していたといえる。

以上のことから、本章は、古文辞派において『唐詩選』が鑑賞用の詩集にとどまらず、詩体構成・参照すべき詩人・主題選択を含む実作上の規範として広く共有されていたことを明

らかにした。本章で示したこの受容のあり方は、次章で検討する反徂徠派の詩人たちが、『唐詩選』とどのように距離を取り、批判や再解釈を行ったのかを考えるための基準となる。

第5章 山本北山の『唐詩選』への態度

はじめに

前章では、『唐詩選』の校訂者でもあった服部南郭を、古文辞派における『唐詩選』受容の代表例として位置づけ、南郭初篇詩作を通して、『唐詩選』が作詩の規範として理解され、実作に体系的に取り入れられていたことを確認した。とりわけ、詩体配列の対応や、詩題の一致・類似が多く見られたことは、『唐詩選』が盛唐詩を模範とする手本として、実作の場で積極的に参照されていた事実を示す。

しかし徂徠派的な擬古主義・形式主義が広まり、一定の型として固定化していくにつれ、それを批判し、性霊や写実を重視する立場から詩作・詩論を組み替えようとする動きがはつきりしてくる。本章と次章では、この動きを担った反古文辞派に注目し、彼らが『唐詩選』をどのように理解し、どのように扱い直したのかを、理論と実作の両面から検討する。そのため本稿では二章に分け、第5章では山本北山（1752-1812）（詩論）を中心に、第6章では市河寛斎（1749-1820）（詩作）を中心に論じる。

本稿の仮説は次の通りである。反古文辞派は『唐詩選』を、古文辞派（南郭）のように作詩規範として全面的に受け入れたのではなく、同詩集に対して相対的な距離を取った。ただし、この「距離」は単純な否定を意味しない。『唐詩選』が広く普及していた以上、反古文辞派の側にも、形式・題材・語彙の一部が共有される可能性は残る。

そこで本章では、この「距離」を二つの水準に分けて確かめる。第一は形式水準（詩集編成・詩体配置）である。第二は運用水準（詩題・主題をどのように参照するか）である。南郭初篇に見られたような、詩題体系の直接的な踏襲（詩題一致・体系的類似）が反古文辞派にも成立するのか、それとも題名型の共有にとどまり、主題体系の取り込みが弱まるのかを検討する。

この枠組みを理論面から支える人物が山本北山である。北山は『作詩志穀』を中心に、擬古批判と性霊・真景志向を体系化し、『唐詩選』を「善尽」として規範化する態度そのものを相対化した。本章では北山の詩論を手がかりとして、反古文辞派が『唐詩選』を唯一の規範として固定しない理路を明らかにする。

第1節 江戸中後期詩壇の展開と反徂徠派の登場

江戸時代の漢詩は、社会や思想の変化と深く結びつきながら展開してきた。その流れは段階的に整理されており、一般に江戸漢詩史は三期に分けて説明される。すなわち、江戸初期から中期を徂徠学派の興隆期、十八世紀中葉から天明・寛政期を反徂徠派による革新期、幕末から明治初期を写実主義・平明詩風の確立期とする区分である。本章が対象とするのは、このうち第二期にあたる時期であり、徂徠派によって形づくられた詩の規範が見直され、詩の価値基準が組み替えられていく時期として位置づけられる。

荻生徂徠の登場以降、明代古文辞派の影響を受けた擬古主義が推し進められ、「文は秦漢、詩は盛唐」を掲げる古文辞格調派の詩風が形成された。服部南郭や太宰春台ら徂徠門下の活動によって、盛唐詩を基準とする詩風は詩壇に定着し、南郭による『唐詩選』和刻本の校訂・出版は、その流れを象徴する出来事といえる。このようにして、『唐詩選』は盛唐詩を模範とする作詩の手本として、大きな影響力をもつようになった。

しかしその一方で、格調や典故、構成の整いを重視する姿勢は、同じ型の模倣を繰り返す傾向を生み、詩作の主体性や生き生きとした表現を弱める側面もあった。菅野禮行氏・徳田武氏は、宝暦・明和期を、徂徠派詩論の形式的な模倣が批判され、より写實的で抒情的な表現を求める動きが明確になった時期として位置づけている¹。

菅野氏・徳田氏によれば、近世の詩史は、幕初から貞享期までの第一期、元禄初頭から安永末年までの第二期、天明期以降の第三期に大別される。第一期には五山文学の影響がなお強く残り、宋詩や『三体詩』に代表される七言律詩・七言絶句が好まれた。第二期には、日常的で説理的な宋詩が卑俗なものと思われ、高華で浪漫的な唐詩や、その流れを引く明詩が、模倣をいとわない手本として受け入れられた。そして第三期には、擬唐・擬明詩の空疎で誇張的な表現を批判する動きが現れ、宋詩や清詩に目を向けながら、日常性・写実性・説理性を重んじる詩風が広がったとされる。

このような転換期において、反徂徠派の理論的中心となったのが山本北山である。北山は『作詩志穀』において、徂徠派の擬古主義を批判し、詩は他人の作品をまねることによってではなく、詩人自身の「性霊」、すなわち真情や個性のあらわれと、現実の景や感情を的確にとらえることによって成立すべきであると主張した。

さらに、このような詩論を実際の詩作の場で示したのが、市河寛斎を中心とする江湖詩社であった。寛斎は、清新な抒情詩の創作を通じて近世漢詩に新たな方向性を示したが、ここで重要なのは、盛唐詩の規範そのものが否定されたわけではないという点である。形式的な模倣から距離を取りつつ、詩材の選び方や表現の方向性において再解釈が行われたのである。

以上のことから、この時期に問われるべきなのは、盛唐規範を単純に肯定するか否定するかではない。むしろ、『唐詩選』という強力な手本がすでに普及していた状況のなかで、反古文辞派がどの水準で距離を取り、どの水準でそれを資源として読み替えたのかという点にある。以下では、山本北山の詩論を手がかりとして、この問題を具体的に検討していく。

第2節 山本北山について

山本北山(1752—1812)は、江戸時代中期から後期にかけて活動した儒者・漢詩人である。宝暦二年生まれ、江戸の出身で、山本緑陰の父。名は信有、字は天禧、通称は喜六、号に孝経楼主人・奚疑塾主人などがある。二十四歳の時に『孝経集覧』を著し、のちに『作詩志穀』『作文志穀』を著して、当時の古文辞学および作詩観を批判的に再編した。また寛政異学の禁に反対するなど、思想的にも自覚的な姿勢を保ち、門下に梁川星巖らを擁して、江戸後期の儒学界・詩壇に一定の影響を及ぼした²。

本章の関心に即して重要なのは、北山が、徂徠派以後に一般化した盛唐詩規範の制度化・形式化に対して、詩作や文章作法を単なる模倣の技法としてではなく、詩人自身の主体的判断や目的意識に基づく営みとして捉え直す理論を提示した点である。北山の議論を検討することは、反古文辞派が『唐詩選』を唯一の作詩規範として固定しなかった思想的背景を明らかにすることに直結する。

なお、北山自身の詩作は、まとまった自撰詩集としては伝存していない。そのため本章では、個々の実作分析には立ち入らず、『作詩志穀』に示された詩論および批評の検討を通じ

¹ 菅野禮行・徳田武校注・訳『日本漢詩集』(新編日本古典文学全集 86、小学館、2002年、pp.544—555)

² 本段落で述べた山本北山の生涯に関する事項は、『日本人名大辞典』の記載に基づく。

て、北山の『唐詩選』観と古文辞派への態度を明らかにする。

第3節 『作詩志穀』における『唐詩選』への態度

前述のように、山本北山は徂徠派的な擬古主義を批判し、詩は他人の作品をただ模倣するのではなく、詩人自身の「性靈」（真情・個性）と、目の前の景や感情を的確に捉える営みとして成立すべきだと主張した。もっとも、従来の研究は北山の擬古批判を徂徠派との対立関係として整理するものが多く、北山が『唐詩選』をどのように評価し、また袁中郎理解と『唐詩選』受容とをどのように結びつけていたのかは、十分に検討されてきたとは言い難い。言い換えれば、北山が『唐詩選』に対して「距離」を取ったとき、その距離が単なる否定なのか、それとも別の基準による読み替えなのか、なお確認すべき余地が残っている。

この問題を考察する手がかりとして、本節では、北山の詩論の中核をなす『作詩志穀』に注目する。『作詩志穀』の目次は、以下の通りである。

仄起平起、起承轉合、律、拗體、排律、絶句、聯句、詩餘、押韻、格調、剽竊詩十首、性靈、清新詩十五首、天門中斷、絶句解、蘭陵美酒、徂徠詩誤、唐詩歸、瀟湘何事、宮女如花、懷中白壁、諸家本集、唐詩選、秋浦歌、洛陽道、秦時明月、已見寒梅發、漢國山河在、滄浪詩話、三家詩話、徂徠不知詩道、體裁、含蓄發露、言志詩、老杜詩、三家絶句、春臺南溟命題杜撰、列朝詩集、擬議成變化、元美定論、世論不知韓袁、佳詩暗合、中郎集、絶句解拾遺、幸不韋、弇園泌園、詩變總論、徂徠文章謬誤、南郭文章謬誤、南郭詩謬誤。

これらの項目を概観すると、仄起平起・起承轉合・律・拗體・排律・絶句・押韻・格調といった詩体・詩法に関する基礎的項目に加え、「性靈」「清新詩十五首」「佳詩暗合」「擬議成變化」など、詩作の原理や表現の在り方を論じる章が体系的に配置されていることが確認できる。一方で、「唐詩歸」「唐詩選」「三家詩話」「滄浪詩話」「元美定論」「中郎集」など、中国の詩論・詩集を名指しで論じる項目も含まれており、北山が唐詩および明代詩論を重要な参照枠として意識的に取り込んでいたことがうかがえる。とりわけ「唐詩選」が独立した項目として掲げられている点は注目され、同書が北山の詩論構成の中で一定の位置を占めていた可能性を示している。

以下では、『作詩志穀』に見える『唐詩選』および関連人物（于鱗・徂徠・南郭等）への言及を取り上げ、北山が『唐詩選』をいかに評価し、何に対して「距離」を取り、どのように読み替えたのかを確認する。結論を先取りすれば、北山の距離化は『唐詩選』そのものの全面否定ではない。むしろ北山は、権威として固定化された『唐詩選』像（善尽視）と、語句だけを移植する模倣の作法から距離を取り、作品が成立する条件、すなわち文脈（連作・配置）と照応（字義と景の一致）を基準に据え直そうとしたのである。

さきほど、『作詩志穀』の目次構成を示したが、内容をあらためて確認すると、「唐詩選」が一つの独立した項目として掲げられ、まとまった論述の対象となっている点が注目される。さらに、目次中には『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を、そのまま項目名としたものが複数見られる。たとえば、「天門中斷」「瀟湘何事」「宮女如花」「秋浦歌」「洛陽道」「秦時明月」「已見寒梅發」などはいずれも、『唐詩選』所収作品に由来する表現である。

このことから分かるのは、北山が『唐詩選』を単なる総論的な批評の対象として扱っているのではなく、そこに収められた個々の作品や詩句を具体的に取り上げ、詩法や構成、表現

の是非を検討するための検証材料として用いている点である。

そこで以下では、こうした個別作品への批評に即しながら、北山が『唐詩選』に対してどのような評価を与え、またいかなる論理によって距離を取っているのかを具体的に見ていくこととする。

資料①『作詩志穀』における『唐詩選』に関する論述

まず北山は、『唐詩選』を「善尽」として絶対視する見方そのものに距離を取り、選集としての判断基準が検証対象になりうることを示す。以下の一段は、明代詩論内部の再検討（王世貞晩年の見解など）を引きつつ、于鱗の選詩の「基準」と「実際」のずれを具体例によって指摘する箇所である。ここでは、北山の距離化が単なる否定ではなく、権威化した『唐詩選』像を相対化するための批評である点に注目したい。

原文

唐詩選ヲ不満トスルコト余ヨリ始ラズ王元美³晩年ヤ、于鱗⁴カ非ヲ悟リテ曰王江陵⁵カ七言絶句李太白ト勝ヲ毫釐ニ争フ俱ニ是神品ナレモ于鱗之ニ及ズ非ナリ萬楚ガ五日觀妓⁶ノ詩取ルニ足ズ而ルニ于鱗選ミ収解セザル所ナリト云云又太白ガ鳳凰臺⁷ノ一篇ハ黄顥ガ鸚武洲⁸ノ效顰ニテ甚ダ厭フヘレ呉宮晋代⁹ノ二句モ亦作手ニ非ズ余曾テ曰鳳凰臺ハ太白ガ本色ニ非ズ鸚武洲ニ擬レテ自試ノミ然ルヲ容易ニ選ミ収ム且其他唐詩選ヲ駁スル説アリ花隠掖垣暮¹⁰帶甲滿天地¹¹鳴墜葉宿寒鴉¹²東南拆日夜浮¹³ノ類于鱗ガ主トスル調ニ非ズ李頎¹⁴ガ物在人

³ 王世貞：中国、明代の文学者。字は元美。号は弇州山人。江蘇太倉の人。古文復古運動の中心をなし、李攀龍とともに「後七子」の中心人物として格調を重んじる擬古主義を主張、文壇に君臨した。荻生徂徠を通じて、江戸初期のわが国の詩壇に与えた影響は大きい。著「州山人四部稿、続稿」など。（1526—1590）（『日本国語大辞典』による。）

⁴ 李攀龍のこと。中国明代の文人。字は于鱗、号は滄溟。歴城（山東省済南市）の人。王世貞とともに古文辞を重視し、「文は秦漢、詩は盛唐」をその主張とした。荻生徂徠らに影響を与え、また「唐詩選」の撰者として名を借用されたことにより、日本ではよくその名が知られている。著「古今詩刪」「李滄溟集」がある。（1514—1570）（『日本国語大辞典』による。）

⁵ 王昌齡：中国盛唐期の詩人。字（あざな）は少伯。清新な着想で、七言絶句に秀で、李白と並び称された。代表作は「出塞」「芙蓉楼送辛漸」。（700頃—755頃）（『日本国語大辞典』による。）

⁶ 万楚は唐代の詩人で、代表作として「五日觀妓」などがある。「五日觀妓」（五日に妓を觀る）は『唐詩選』卷五七言律詩に収録されている。

⁷ 「登金陵鳳凰臺」は李白の作であり、『唐詩選』卷五の七言律詩に収録されている。

⁸ 筆者が参照している山本北山『作詩志穀』（須原屋伊八、天明3年〔1783〕）では「黄顥」と記されているが、これは北山の誤記であり、正しくは崔顥を指すものと考えられる。すなわち、文中の「鸚武洲」は、崔顥「黃鶴樓」詩中の「芳草萋萋鸚鵡洲」を踏まえた表現である可能性が高い。

⁹ 「呉宮花草埋幽徑 晋代衣冠成古丘」は、李白の詩「登金陵鳳凰臺」の一句である。ここでいう「呉宮」とは、三国時代の呉が建業（現在の南京）に都を置いていた際の宮殿の遺址を指す。

¹⁰ 「花隠掖垣暮 啾啾棲鳥過」の出典：杜甫「春宿左省」『唐詩選』卷三・五言律詩。

¹¹ 「帶甲滿天地」の出典：杜甫「送遠」『唐詩選』卷三・五言律詩

¹² 「鳴墜葉、宿寒鴉」は、李頎の詩「贈盧五舊居」に見える一句であり、本詩は『唐詩選』卷五・七言律詩に収録されている。詩の全文は次のとおりである。「物在人亡無見期、閑庭系馬不勝悲。窗前綠竹生空地、門外青山如舊時。悵望秋天鳴墜葉、巖岵枯柳宿寒鴉。憶君淚落東流水、歲歲花開知為誰。」

¹³ 「呉楚東南坼 乾坤日夜浮」出典：杜甫「登岳陽樓」『唐詩選』卷三・五言律詩

¹⁴ 李頎は中国・盛唐期の詩人で、趙郡（現・河北省趙県）の出身である。のちに潁陽（河南省登封）に移り住んだ。開元23年（735）に進士に及第し、新郷県尉となったが、その後の官歴は詳らかではない。晩年は神仙の道を求めて隠遁したとされる。交友関係は広く、王昌齡、王維、高適などと親交があり、とりわけ送別詩を多く残したことで知られる。『唐詩選』においては、七言律詩の名手として王維と並び高く評価され、七言律詩七首が採録されている。（『岩波 世界人名大辞典』による。）

亡無見期¹⁵ノ詩全篇于鱗ガ惡所ノ晩唐ノ最モ晩唐ナルモノ也又王龍標ガ萬歳樓¹⁶ノ詩前後ノ二對一意コレ律詩ノ大病且末句誰堪登望雲烟向晩茫々發旅愁心上ノ日々悲看ト一意是亦大病胡元瑞¹⁷カ詩藪¹⁸ニ所謂ル拙弱トハ此ナリ然ルシ于鱗妄リニ収メ納ル孰カ唐詩選ヲ以テ善盡ト謂フヤ

訓読文

唐詩選を不満とすること、余より始まらず。王世貞晩年に、李攀龍（字は于鱗）その非を悟りて曰く、王江陵の七言絶句は李白と勝を毫釐に争ふ、俱に是れ神品なれども、于鱗、之に及ばず、非なりと。万楚が「五日観妓」の詩は取るに足るに、而るに于鱗、選びて収め解せざる所なりと云々。

又、太白が「鳳凰臺」の一篇は、崔顥が「鸚鵡洲」の效顰にて、甚だ厭ふべし。「吳宮」「晋代」の二句も亦、作手に非ず。余、曾て曰く、「鳳凰臺」は太白が本色に非ず、鸚鵡洲に擬れて自ら試みしのみ。然るを、容易に選び収む。且つ、其他『唐詩選』を駁する説あり。「花隠掖垣暮」「帶甲滿天地」「鳴墜葉宿寒鴉」「東南坼日夜浮」の類、于鱗が主とする調に非ず。李頎が「物在人亡無見期」の詩、全篇、于鱗が惡しとする晩唐の、最も晩唐なるものなり。

又、王昌齡が「萬歳樓」の詩、前後の二對、一意なり。是れ律詩の大病なり。且つ末句「誰堪登望雲烟向晩茫々發旅愁心」上の「日日悲看」と一意、是れ亦た大病なり。胡應麟が『詩藪』に所謂る「拙弱」とは此れなり。然るに于鱗、妄りに収め納る。孰か『唐詩選』を以て善盡と謂はんや。

資料①に見られる北山の『唐詩選』批評は、同書全体を否定するものではなく、主として李攀龍（于鱗）の選詩の判断や基準に問題があることを、具体的な作品例を挙げて指摘する点に特徴がある。北山は冒頭で、「唐詩選を不満とするのは自分に始まることではない」と述べ、王世貞晩年の見解を引くことで、自身の批判が個人的な見解ではなく、明代詩論の内部で行われてきた再検討に基づくものであることを示している。このことから、北山が『唐詩選』を絶対的な模範としてではなく、批評の対象となりうる選集として捉えていたことが分かる。

北山の批判の中心は、于鱗が掲げた詩の理想と、実際に選ばれた作品との間にずれがある点に向けられている。たとえば、万楚の「五日観妓」のように評価に値する作品が収録されていない一方で、李白の「鳳凰臺」のような、詩人本来の持ち味を離れ、崔顥の作に倣った

¹⁵ 前掲注 15

¹⁶ 王昌齡の七言律詩「萬歳樓」は、『唐詩選』巻五に収録されている作品であり、詩の全文は次のとおりである。「江上巍巍萬歳樓、不知經歷幾千秋。年年喜見山長在、日日悲看水獨流。猿狖何曾離暮嶺、鸚鵡空自泛寒洲。」

¹⁷ 胡應麟（字は元瑞・明瑞、号は少室山人・石羊生、1551〔嘉靖 30〕～1602〔万曆 30〕）は、中国明代の学者・文芸評論家である。蘭溪（現・浙江省蘭溪）の人で、万曆 4 年（1576）に挙人となった。当時の文壇の盟主であった 王世貞 の詩社に参加し、その指導を受けた。著書には、詩体別の詩学概論や時代別の詩史を体系的に論じた明代を代表する詩論書『詩藪』があり、また蔵書家・文献学者としても知られる。その学問的成果は『少室山房筆叢』に結実しており、同書に示された中国の（小説）に関する整理・分類の見解は、小説を正面から論じた早期の試みとして注目される。（ジャパンナレッジ所収『岩波 世界人名大辞典』による。）

¹⁸ 胡元瑞著『詩藪』内編巻五には、「又王昌齡、孟浩然俱有題萬歳樓作、而皆拙弱可笑、則以二君非七言律手也」とあり、王昌齡 と 孟浩然 のいずれもが「萬歳樓」を題とする作を有するものの、それらはいずれも拙劣で笑うべきものであり、両者は七言律詩の名手ではないと評している。

試作的な作品が容易に収められている。北山が問題視しているのは模倣そのものではなく、詩人の本来の作風や作品の成り立ちを十分に考慮しないまま選詩している点である。

また北山は、「花隠掖垣暮」「帶甲滿天地」「鳴墜葉宿寒鴉」「東南坼日夜浮」といった具体的な句を挙げ、これらが于鱗自身の理想とする詩調と一致していないことを指摘する。さらに、李頎の「物在人亡無見期」を詠む詩を「最も晩唐的」と評し、王昌齡の「萬歲樓」については、対句の意味が重なる点や結句の弱さを取り上げ、律詩としての大きな欠点であると述べている。胡応麟『詩藪』の語を引くのも、北山の評価が既存の詩論に基づいたものであることを示すためである。

次は目次中には『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を直接掲げた項目について分析を行う。

資料②『作詩志藪』における『唐詩選』所収詩「秋浦歌」に関する論述

次に注目したいのは、『作詩志藪』の目次に見える「秋浦歌」という項目である。目次には、『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を、そのまま掲げた項目が複数確認できるが、「秋浦歌」もその一つに当たる。これは李白の連作「秋浦歌」に由来する詩題であり、北山がこの作品を独立した項目として取り上げ、集中的に論じている点は注目される。

原文

古人ノ詩ハ一題ニテ數首ヲ作ルニ其一其二其三ト次第ニ置モノ上ヲ承来テ前後連璧ノ如シ上ニ何モナキ詩ナレドモ下ノ詩ヲ得テ大ニ色ヲ増シ下ノ詩バカリニテハ何ノ味モナキヤウナレザル上ト照レテ却テ妙ヲ覺ユルナリ試ニ古人一題數首ノ詩ヲ看ヨ末ノ詩ニ至テハ曾テ題ニ干涉セザルモノアリ近ク人口ニ膾炙セル詩舉テ之ヲ證セシ太白カ白髮三千丈¹⁹ノ一首バカリニテハ秋浦歌ノ題ニ於テ何ノ干涉アラン照鏡白髮ノ題ニ換トモ孰カ然ラズト謂ノ然ドモ太白ガ本集ニ秋浦歌十七首アリテ白髮三千丈大其十五ニ當レリ篇々既ニ秋浦ノ景ト事ヲ言フ中間自ラ此等ノ情ヲ言フ詩ナクンバ有ベカラズ然ルニ唐詩選唐詩解品彙正声ノ諸書僅ニ此詩一首ヲ収テ題スルニ秋浦歌ヲ以テス見者ランテ何ノ義タルヲ知ラザラシムルノミナラズ大ニ故人連璧ノ意ヲ失フ今人一題數首ヲ作ルヲ見ニ故ニモノク一律ノ詩ヲ幾箇モ々々並作ツテ篇々題ニ切ナランコトヲ求ム多シトイヘドモ何ノ益アラン²⁰

訓読文

古人の詩は、一題にて数首を作るに、その一、その二、その三と次第に置き、上を承け来たりて前後連璧の如し。上に何も無き詩なれども、下の詩を得て大いに色を増し、下の詩ばかりにては何の味も無きやうなれども、上と照らして却って妙を覺ゆるなり。試みに古人の一題数首の詩を看よ。末の詩に至りては、曾て題に渉せざるものあり。近く人口に膾炙せる詩を挙げて之を証せし。太白が「白髮三千丈」の一首のみを以ては、「秋浦歌」の題に於て何の干涉あらん。照鏡白髮の題に換ふとも、孰か然らずと謂はんや。然れども、太白が本集に「秋浦歌」十七首ありて、「白髮三千丈」大いに其の十五に当たれり。篇々すでに秋浦の景と事とを言ふ。中間、自ら此等の情を言ふ詩、無くんばあるべからず。然るに『唐詩選』『唐詩解』『品彙』『正声』の諸書、僅かに此の詩一首のみを収め、題するに「秋浦歌」を以てす。見る者をして何の義たるを知らしむるのみにあらず、大いに故人連璧の意を失ふ。今

¹⁹ 「白髮三千丈」は、李白の詩「秋浦歌」に見える句であり、『唐詩選』卷六・五言絶句に収録されている。

²⁰ 山本北山『作詩志藪』（須原屋伊八、1783年）

人、一題数首を作るを見るに、故にも無く、一律の詩を幾箇所も並び作り、篇々題に切ならんことを求むる者多しといへども、何の益かあらん。

資料②において北山が問題としているのは、『唐詩選』における李白「秋浦歌」の収録のされ方である。北山はまず、古人の詩作においては、一つの題のもとに複数の詩を作り、それらを順に配置することで、前後が照応し合い、全体として意味と趣を形成する「連作」のあり方が重視されていたことを指摘する。このような連作では、単独では目立たない詩であっても、前後の詩と合わせて読むことで価値が生まれ、逆に後の詩も前の詩との関係の中でこそ理解されると北山は考えている。

この観点から北山は、李白の「白髮三千丈」の詩を例に挙げる。この詩一首だけを見るならば、「秋浦歌」という題との結びつきは弱く、「照鏡白髮」と題を改めても差し支えないように見える。しかし、李白の本集には「秋浦歌」が十七首存在し、「白髮三千丈」はその第十五首として位置づけられている。全体が秋浦の景や出来事を詠む連作である以上、その途中に作者の内面的感情を表す詩が含まれるのは自然であり、この一首もまた連作の流れの中で理解されるべき作品である。にもかかわらず、『唐詩選』や『唐詩解』『品彙』『正声』などの詩集では、この一首のみを抜き出し、「秋浦歌」と題して収録している。北山は、このような編集の仕方が、読者に詩の本来の意味を理解させないばかりか、古人が意図した連作としての構成美、すなわち「連璧」の妙を大きく損なっていると批判する。

さらに北山は、近世の詩人たちが、一つの題で複数の律詩を作り、すべてを題意に密着させようとする風潮についても言及し、それが必ずしも詩の価値を高めるものではないと指摘している。ここからは、北山が詩を単独作品として切り離して評価するのではなく、詩集全体の構成や作品間の関係を含めて理解すべきものと考えていたことがうかがえる。

資料③『作詩志穀』における『唐詩選』所収詩「天門中斷」に関する論述

『作詩志穀』の目次には、『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を、そのまま項目名としたものが複数見られるが、「天門中斷」もその一つである。これは、李白の七言絶句「望天門山」に見える「天門中斷楚江開」という一句に由来する表現である。北山はこの語句を独立した項目として掲げ、詩語の用法やその成立のあり方について集中的に論じており、この点は注目に値する。

原文

剽竊ノ詩ニ於テ尤モ笑フベキモノアリ李白ガ天門中斷楚江開ノ詩ハ天門山ト云ル山ハ門ノ如キ形ニテ立並ビ峙ヲ其間ヨリ楚江ガ見ユルユヘ開クト云也開ノ字門ノ字ヲ照シテ妙甚シ于鱗コレヲ剽竊シテ海門中斷出吳關トス是謬用ナリ海門ハ中斷ルト云ベカラズ然レド是レ亦通塘ノ曲ニ石門中斷平湖出ト云フアリ... (筆者略) ...徂徠ガ絶句解ニ只是吳關出ルナリト云是レ例ノ妄言ナリ出吳關ノ三字ハ太白ガ明朝離別出吳關ト云句ヨリ剪来レルナリ本邦ノ南郭氏又于鱗ヲ剽襲メ海門中斷大潮来ト云句ヲ作ル謬用モトヨリ于鱗ト同ジ且來ノ字門ノ字ニ切ナラズト云ヘド照應ノ義ヲ會セヌト見ヘタリ門ト来トノ照應モ畢竟ハ偶然ナルベシ其ユヘハ南郭カ首藤子高ヲ送ル詩ル詩ニ海門中斷九州間ト云句アリ抑調ノ似タルノハ似タリ審ニ之ヲ味フルニスベテ趣ナシ且唐人自然ノ照應ヲ失テ中斷ノ二字ブラリト片ツカスナリ..... (以下略)

訓読文

剽竊の詩に於いて、尤も笑ふべきものあり。李白が「天門中斷楚江開」の詩は、天門山といへる山は、門のごとき形にて立ち並び峙ち、その間より楚江が見ゆるゆゑ、開くと云ふなり。「開」の字、「門」の字を照して、妙はなほだし。于鱗、これを剽竊して「海門中斷出吳關」とす。是れ謬用なり。海門は中斷ると云ふべからず。然れども是れ亦、通塘の曲に「石門中斷平湖出」と云ふあり……（筆者略）……。徂徠が『絶句解』に、「ただ吳關を出づるなり」と云ふ。是れ例の妄言なり。「出吳關」の三字は、太白が「明朝離別出吳關」と云ふ句より剪り来れるなり。本邦の南郭氏、また于鱗を剽襲め、「海門中斷大潮来」と云ふ句を作る。謬用、もとより于鱗と同じ。且つ「来」の字、「門」の字に切ならずと云へど、照應の義を会せぬと見えたり。「門」と「来」との照應も、畢竟、偶然なるべし。そのゆゑは、南郭が首、藤子高を送る詩に、「海門中斷九州間」と云ふ句あり。抑、調の似たるは似たり。審らかにこれを味ふるに、すべて趣なし。且つ唐人、自然の照應を失ひて、「中斷」の二字を、ぶらりと片つかすなり……（以下略）…

上記のように、北山は、李白「望天門山」に見える「天門中斷楚江開」の一句に着目し、これを単なる名句としてではなく、詩語の運用と文字の字義的照應とが高度に統合された典型例として捉えている。そしてこの一句を基準として、于鱗・荻生徂徠・服部南郭らによる後代の模倣や解釈を、「剽竊」および「謬用」として厳しく批判している。すなわち、「天門中斷楚江開」における「中斷」や「開」という語は、天門山の地形的実態と「門」という文字の字義とが自然に照應することによって成立しており、その内在的論理を理解しないまま語句のみを踏襲する行為は、詩語の本質を損なうものであると北山は考えていたのである。

資料④『作詩志轂』における『唐詩選』所収詩「蘭陵美酒」に関する論述

『作詩志轂』の目次には、『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を、そのまま項目名としたものが複数見られるが、「蘭陵美酒」もその一つである。これは、李白の七言絶句「客中行」に見える「蘭陵美酒鬱金香」という一句に由来するものである。

原文

太白ガ蘭陵美酒鬱金香蘭ノ字香ノ字相照ノ比句一字モ襲ヒ動スベカラズ于鱗剽シテ蘭陵美酒日長携²¹トス趣ノ浅深ハ暫ク舍ク唐人自然ノ照應ヲ會セザルナリ凡ソ唐人ノ照應ハ自然ニ出テ于鱗ガ甚ダ應照ノ痕ヲ露ガ如クナラズ夜送趙縱²²ノ詩ハ縱ガ氏ハ趙ナルユヘ其人ヲ趙國連城ノ壁ニ比ヘテ天下傳ノ字ヲ惹出シ第四句明月ノ字題ノ夜ノ字ヲ照シテ第一句ノ連城壁ニ應ズ…（筆者略）…皆此類ナリ今人詩ノ照應ヲ以テ于鱗ガ法ト思ヘル者アリ是于鱗ガ詩ニ熟シテ唐人ノ詩ニ熟セザルユヘナリ

訓読文

太白が「蘭陵美酒鬱金香」は、蘭の字・香の字、相照ずるの比句にして、一字も襲ひて動かすべからず。于鱗、これを剽して「蘭陵美酒日長く携ふ」となす。趣の浅深は暫く舍くも、唐人自然の照應を會せざるなり。凡そ唐人の照應は、自然に出でて、于鱗が甚だ照應の痕を

²¹ 「蘭陵美酒日長携」出典は李攀龍の「贈左史」の「蘭陵美酒日長攜 趙女秦箏玉柱低」である。

²² 夜送趙縱は初唐詩人楊炯の詩であり、『唐詩選』の卷六の五言絶句に収録されている。詩句は「趙氏連城壁 由來天下傳 送君還舊府 明月滿前川」である。

露はすが如くならず。「夜送趙縱」の詩は、縦が氏は趙なるゆゑ、その人を趙国連城の壁に比へて、「天下傳」の字を惹き出だし、第四句の「明月」の字、題の「夜」の字を照して、第一句の「連城壁」に應ず。……（筆者略）……皆この類なり。今人、詩の照應を以て于鱗を法と思へる者あり、是れ、于鱗が詩に熟して、唐人の詩に熟せざるゆゑなり。

以上の記述から明らかなように、『作詩志穀』において北山は、「蘭陵美酒」を手がかりとして、唐詩における「照應」のあり方を、具体的な語句配置の分析を通じて示している。とりわけ注目されるのは、李白の句に見られる「蘭」「香」という字義的・感覚的に連動する語が、作為を感じさせることなく自然に呼応している点を高く評価し、それを「一字も襲ひて動かすべからず」と断じていることである。これに対し、于鱗の作は、語句の対応関係を意識的に操作するあまり、「照應の痕」を露呈させてしまうものとして批判されている。すなわち北山は、照應それ自体を否定するのではなく、照應が技巧として前景化した状態を問題視しており、唐詩の理想を「自然に出づる照應」に見いだしているのである。このような評価軸は、『唐詩選』所収詩を単なる語句模倣の手本としてではなく、詩中における意味・字義・題との関係性が有機的に構成された規範として捉える視点を示すものだと考えられる。

資料⑤『作詩志穀』における『唐詩選』所収詩「瀟湘何事」に関する論述

『作詩志穀』の目次には、『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を、そのまま掲げた項目が複数見られるが、「瀟湘何事」もその一つである。これは、錢起の七言絶句「帰雁」に見える「瀟湘何事等閑回」という一句に由来するものである。

原文

錢起ガ歸雁ノ詩ニ瀟湘何事等閑回水緑沙明兩岸苔云云春臺太宰氏コレヲ剽シテ送了雲歸高野ノ詩ニ襟裡風光半未開帝鄉何事等閑回歸山不負了雲意時復無心出岫來コレ謬用ナリ錢起ガ意ハ下ノ水緑沙明ニテ瀟湘ノ好風景ヲ言テ此スツベカラザル好風景ヲステ、何事等閑回ト雁ヲ詠ルナリ此下モノ句ニテ上ノ句スハルナリ春臺ガ詩ハ上下ノ間ダ帝鄉ヲ見ステ、歸ルベカラザル好風景ヲ言ザルユヘ何事等閑回ト詠ルベキ謂レナシ三四ノ句モ上ニ接セザルノミナラズ歸山ノ風景ガ却テ帝鄉ニマサルヤウナリ何事ノ字盆と穩ナラズ且古人ノ起句ヲ剽シテ第二ノ句ニ用ユ既ニ造語ノ体ヲ失フ……（以下略）

訓読文

錢起が「歸雁」の詩に、「瀟湘何事等閑回、水緑沙明兩岸苔」と云ふ。春臺太宰氏、これを剽して「送了雲歸高野」の詩に、「襟裡風光半未開、帝鄉何事等閑回、歸山不負了雲意、時復無心出岫來」と云ふ。これは謬用なり。錢起が意は、下の「水緑沙明」を以て瀟湘の好風景を言ひて、此の捨つべからざる好風景を捨てて、「何事等閑回」と雁を詠るなり。此の下の句にて、上の句據はるなり。春臺が詩は、上下の間だ、帝鄉を見捨てて歸るべからざる好風景を言はざるゆゑ、「何事等閑回」と詠るべき謂れなし。三四の句も、上に接せざるのみならず、歸山の風景が却って帝鄉に勝るが如し。「何事」の字、盆と穩ならず。且つ古人の起句を剽して第二の句に用ゐ、既に造語の體を失ふ。……（以下略）

本段において北山は、「瀟湘何事等閑回」という一句をめぐり、唐詩における語句の成立条件と、後人による剽用の問題点とを具体的に示している。錢起の詩では、「瀟湘」という

地名と「水緑沙明」という具体的な景物描写が提示されることによって、本来とどまるべき美景を捨てて帰る雁の行動が不思議なものとして立ち上がり、「何事等閑回」という疑問が必然的に導かれている。すなわち、上句の感嘆は下句の景物描写によって支えられ、両者は有機的な照応関係を成している。

これに対し、春台太宰の詩では、同一句を用いながら、その前提となる景物や状況が十分に示されておらず、疑問表現が宙に浮いた状態となっている点が批判されている。また、起句をそのまま移し替えて第二句に用いる行為は、北山の言う「造語の體」を失った例として位置づけられており、ここでも唐詩の理想が、語句そのものではなく、語句が成立する文脈的・構造的関係にあることが強調されている。

資料⑥『作詩志穀』における『唐詩選』所収詩「已見寒梅發」に関する論述

『作詩志穀』の目次には、『唐詩選』に収録された具体的な作品の語句や詩題を、そのまま掲げた項目が複数見られるが、もう一つ目が「已見寒梅發」である。これは、王維の五言絶句「雑詩」に見える「已見寒梅發」という一句に由来するものである。

原文

唐詩選ノウチ尤モ笑フベキハ王摩詰ガ五首五首ノ雑詩中ニテ已見寒梅發ノ一首バカリヲ拔テ選ミ入タリ此詩モト前篇ノ末句ニ來日綺窓前寒梅着花未ト云フヲ承テ已見寒梅發ト云ヘルナリ前篇ナキトキハ已見ノ字甚深ラズ于鱗詩趣ヲ取ズシテ、格調ニ拘ルヨツテ妄意ニ前篇ヲ刪リ己ガ調ニ入ザレバナリ唐仲言ガ解モト于鱗ニ效タルモノナレハ即前篇ヲ載セズ解シテ閨人感春之辭ト云フ...（筆者略）...前篇ノ君自故郷來、應知故郷事、來日綺窓前、寒梅着花未トアルヲ何如カ解スベキ享保中南郭服氏ガ唐詩選ヲ校正スル本集ニ就テ正スコトヲ知ズ僅ニ品彙詩刪等ニ就テ考フ淺シト謂ベシ且曰從ニ多且正者ト其多キニ從フコトハアラン正ハスナハチ余信ゼズ.....（以下略）

訓読文

『唐詩選』のうち、尤も笑ふべきは、王摩詰が五言絶句五首の「雑詩」の中にて、「已見寒梅發」の一首ばかりを抜きて選み入れたることなり。此の詩は、もと前篇の末句「來日綺窓前、寒梅着花未」を承けて、「已見寒梅發」と云へるなり。前篇なきときは、「已見」の字、甚だ深からず。于鱗、詩趣を取らずして、格調に拘るより、妄りに前篇を刪り、己が調に入らざればなり。唐仲言が解も、もと于鱗に效ひたるものなれば、即ち前篇を載せずして解し、「閨人感春之辭」と云ふ。.....（筆者略）.....前篇の「君自故郷來、應知故郷事、來日綺窓前、寒梅着花未」とあるを、何如か解すべきや。享保中、南郭服氏が『唐詩選』を校正する本集に就きて正すことを知らず、僅かに『品彙詩刪』等に就きて考ふ。淺しと謂ふべし。且つ曰く、「從に多く、且つ正しき者に從ふ」と。其の多きに從ふことはあらん、正しきは、すなはち余、信ぜず。.....（以下略）

以上のように、本条において北山は、「已見寒梅發」という一句をめぐり、『唐詩選』の編纂姿勢そのものを強く批判している。問題とされているのは、王維「雑詩」五首が本来、相互に照応し合う連作として構成されているにもかかわらず、その文脈を切断し、一首のみを独立させて採録した点である。とりわけ「已見」という語は、前篇における「寒梅着花未」という問いを受けて初めて意味を持つものであり、単独で切り出された場合、その詩的效果は著しく減殺される。

北山は、この切断の原因を、于鱗が詩の「趣」や意味生成の構造よりも、「格調」という外形的基準を優先した点に見いだしている。また、その影響が唐仲言の注解や、さらには服部南郭の校訂作業にまで及び、原詩の連作構造が十分に顧みられてこなかったことを問題視している。

資料⑦『作詩志穀』における「南郭詩謬誤」に関する論述

以上を踏まえると、北山の「距離」は中国側の于鱗批判にとどまらず、日本での受容のあり方にも向けられる。次の段では、南郭の才能は一定程度認めつつも、世間が「盛唐に迫る」と持ち上げる評価に距離を取り、具体的な誤りを挙げて検証しようとする。ここには、名声や流行ではなく、詩語・構造・用法を見て判断するという北山の立場がよく表れている。

原文

南郭服子ノ才太宰子諸人ノ類ニ非ズトイヘドモ、其詩ヲ知ザルトハ同ジ、世ル妄リニ南郭ガ詩ヲ稱シ、殊ニ其集ノ第四編ヲ稱譽シテ盛唐ニ迫ルト云、因テ復四編中近體ノ謬リ、一二ヲ舉テ吠聲ノ徒ノ睡ヲ覺シム

訓読文

南郭服子の才は、太宰子、諸人の類に非ずといへども、其の詩を知らざるとは同じ。世人、妄りに南郭が詩を稱し、殊に其の集の第四編を稱譽して、盛唐に迫ると云ふ。因りて、復た四編中の近體の謬り、一二を舉げて、吠聲の徒の睡を覺しませしむ。

本段は、山本北山が服部南郭の詩的評価に対して距離を取る姿勢を明確に示した箇所である。北山は、南郭の才能そのものを全面的に否定するのではなく、「才は凡庸に非ず」と一定の評価を与えつつも、詩の本質理解という点では不十分であると断じている点に特徴がある。とりわけ問題とされているのは、世評が南郭詩集第四編を「盛唐に迫る」と過度に持ち上げている点であり、北山はこれを無批判な称揚、すなわち「吠聲の徒」による同調的評価として捉えている。

ここで北山が掲げる方法は、具体的な近体詩の「謬り」を挙げることによって、評価の妥当性を実証的に検証するというものである。この姿勢は、『作詩志穀』全体に一貫する、名声や流行に依拠せず、詩語・構造・用法の具体的分析によって詩を判断する立場を端的に示している。また本段は、南郭を『唐詩選』受容の中心人物として位置づけつつも、その受容が必ずしも盛唐詩の本質に到達していないという、本書の批評的立場を総括的に表現する箇所ともなっている。

小結

本章では、山本北山『作詩志穀』の検討を通じて、反古文辞派における『唐詩選』への態度を明らかにしてきた。結論として言えるのは、北山が『唐詩選』そのものを否定したのではなく、それを盛唐規範として絶対化し、模倣の型として固定化する受容のあり方に距離を取ったという点である。

第一に、北山は『唐詩選』を「善尽」として無条件に權威化する立場を相対化し、選詩基準そのものを批評の対象とした。于鱗の選詩について、理想と実際のずれを具体例によって

指摘した点に見られるように、北山は『唐詩選』を完成された規範ではなく、検証されるべき選集として捉えていた。

第二に、北山は詩の価値を語句の巧拙だけで判断するのではなく、作品が置かれている文脈、とりわけ連作や配置を重視した。李白「秋浦歌」や王維「雑詩」をめぐる批評では、連作の中から一首のみを切り出して収録する『唐詩選』の編集方針が、作品本来の意味や味わいを損なっていると批判されていた。ここからは、詩を単独作品としてではなく、作品相互の関係の中で理解すべきものとする北山の姿勢が明確にうかがえる。

第三に、「天門中斷」「蘭陵美酒」「瀟湘何事」などの語句批評において、北山は唐詩の優れた点を、語句そのものの華麗さではなく、景物・字義・題意が自然に照応する構造に見いだした。その内在的論理を理解せず、語句のみを移植する模倣は「剽竊」「謬用」であるとして、干鱗のみならず、荻生徂徠や服部南郭の解釈・詩作にも批判の目を向けている。

以上を総合すると、北山にとって『唐詩選』への「距離」とは、伝統や作品を拒絶することではなく、権威化された規範から一歩引き、詩語が成立する条件の文脈、照応、運用を基準に詩を読み直すための距離であったと言える。北山の詩論は、『唐詩選』を依然として重要な参照枠としながらも、その参照の方法を、形式模倣中心の段階から、構造と意味生成を重視する段階へと転換させる理論的基盤を与えたのであり、次章で扱う市河寛斎の詩作は、この理論的転回が実作の水準でどのように具体化したかを示すものとして位置づけられる。

第6章 市河寛斎の『唐詩選』への態度¹

はじめに

本章は、反古文辞派に位置づけられる市河寛斎（1749–1820）の前期詩集『寛斎摘草』を取り上げ、古文辞派的規範とのあいだに見られる「距離」が、実際の詩作のなかでどのように現れているのかを考察するものである。

この「距離」を二つの側面から検討する。第一は、詩集の編成や詩体配置といった形式的側面であり、第二は、詩題や主題の取り上げ方に関わる運用的側面である。

『寛斎摘草』は、これまで古文辞派的訓練の影響が比較的強く残る時期に成立した初期詩集と考えられてきた。そこで本章は、そのような影響が認められる段階においても、寛斎が『唐詩選』をどのような作詩規範として受け止め、またどの側面から規範との距離を取り始めていたのかを明らかにすることを目的とする。

第1節 市河寛斎の詩風と前期詩作の位置づけ

市河寛斎は、江戸後期を代表する朱子学者・詩人である。名は世寧、字は子静、通称は小左衛門、別号は江湖詩老であり、主な著作に『全唐詩逸』『日本詩紀』『寛斎遺稿』などがある²。秋元侯家臣山瀬蘭台（もと市河氏）の二男として生まれ、二十七歳で秋元藩を脱藩して市河姓に復し、翌年林家に入門、三十五歳で昌平黌の啓事役となった。のち寛政異学の禁の影響下で昌平黌を辞し、四十三歳より富山藩儒として二十年間在職した³。文学的には、初め明代の擬唐詩を学び、徂徠門下の太内門にあつて古文辞を尊び、とくに韓愈に傾倒した。その徂徠派時代の作品を収めた詩集が天明六年刊の『寛斎摘草』である⁴。しかし詩壇が転換期を迎えるなかで、寛斎は山本北山とともに江戸詩壇における格調派から性霊派への転換の原動力となり、北山が詩論面から変革を準備したのに対し、寛斎は実作面においてこれを推進した。その契機となったのが江湖詩社の結成であり、天明七年に聖堂啓事役を辞したのち、両国矢の倉に寓居した寛斎は失意のうちに同社を結成したという⁵。また、天明初頭以降のいわゆる宋詩流行期においては、関西の六如上人・葛子琴・菅茶山らと並び、江戸では寛斎が擬唐・擬明詩の空疎な措辞を矯正すべく新奇な表現を模索し、陸游・范成大・楊誠斎らの宋詩に着目して日常的・写實的・説理的な詩性を導入したと評価されている⁶。

寛斎の詩風は生涯を通じて段階的に変化しているが、「人間の真情を詠う詩」を理想としていた点は一貫している。以下、市河寛斎の詩風に関する本節の記述は、蔡毅氏・西岡淳氏編『日本漢詩人選集9 市河寛斎』および同書所収『寛斎先生遺稿』の解説に基づく⁷。同書によれば、寛斎の詩作は、服部南郭に代表される古文辞派的教養を基盤としながら

¹ 本章の内容は、今後整理のうえ、「市河寛斎の『唐詩選』への態度」（『中国文史論叢』第22号、2026年3月）として投稿する予定である。

² 小学館国語辞典編集部編『日本国語辞典』（株式会社小学館、2006）

³ 菅野禮行・徳田武校注・訳『新編日本古典文学全集86・日本漢詩』（小学館、2002年、p.500）

⁴ 大曾根章介 [ほか]編集『研究資料日本古典文学 第11巻（漢詩・漢文・評論）』（明治書院、1984年、p.99）

⁵ 同前注3

⁶ 同前注2、p.554

⁷ 蔡毅氏・西岡淳氏編『日本漢詩人選集9 市河寛斎』（研文出版、2007年）

も、その形式主義に次第に距離を取り、写実性と性霊を重んじる詩境へと移っていく過程を示している。

初期の詩作は、昌平黉で学んだ時期の文人儒者としての立場を反映し、典雅で格調の高い作風を特徴とする。この段階では、南郭をはじめとする古文辞派詩人の影響が色濃く、詩を学問修養の一環として捉える姿勢が顕著である。実際、蔡毅氏・西岡淳氏は前期の寛斎が古文辞派の影響を強く受けていたことが指摘されている。前期詩集『寛斎摘草』には、「初唐の体に倣う」作品や、唐詩に見られる楽府題「関山月」を用いた作品が含まれており、盛唐以前の詩に学ぼうとする若年期の姿勢がうかがえる。

しかし、寛政元年（1789）に江湖詩社を結成し、社会的制約から比較的自由な立場を得た後には、こうした模倣的な文体から徐々に離れ、自然や日常生活の実感を重んじる方向へと詩風を転じていった。

中期以降、寛斎は宋詩の清新さや現実感に学び、性霊説を詩学の中心に据えるようになる。寛斎にとって詩とは技巧を競うものではなく、「詩は性情のあらわれであり、景は心を映す鏡である」という考えを、実作を通して体現する営みであった。『寛斎先生遺稿』や『寛斎摘草』には、日常生活や自然の情景を穏やかに描いた作品が多く、全体として落ち着いた語調が認められる。これらの詩は、唐詩の典雅さを基調としつつ、宋詩的な平明さや写実性を取り入れたものといえる。

また、寛斎の詩論についても、『談唐詩選』や『詩家法語』に見られるように、『唐詩選』を全面的に否定するのではなく、その長所を評価しつつ、安易な模倣を戒める姿勢が示されている。唐詩と宋詩の双方を尊重し、その調和を目指した点に、寛斎の詩学の特色がある。この姿勢は、徂徠派の形式主義を批判しながらも、山本北山のような急進的な反古文辞派とは一線を画し、比較的穏やかな詩境を形成した点に特徴がある。

以上のように、市河寛斎の詩風は、古文辞派的な格調主義を出発点としつつ、宋詩的な性霊主義へと展開する過程をたどりながら、江戸後期詩壇において「感情」と「写実」の調和を体現したものであった。本章ではまず、このような古文辞派の影響のもとで成立した前期詩集『寛斎摘草』を取り上げ、『唐詩選』に対する寛斎の姿勢を具体的に検討していくこととしたい。

第2節 『唐詩選』と『寛斎摘草』詩作との詩体配置の比較

本章では、国立国会図書館デジタルコレクションに公開されている、遊徳園出版社刊・大正15年版『寛斎摘草』（原版は天明6年刊）を主な底本として用い、市河寛斎の前期詩作における詩体構成を検討する。あわせて、『唐詩選』との比較を通じて、詩体配置および詩体比率の異同を明らかにする。

『唐詩選』および『寛斎摘草』に収録された作品を詩体別に整理すると、表1に示す通りである。

表1 『唐詩選』収録作品と『寛斎摘草』収録作品との詩体配置

唐詩選			寛斎摘草		
詩体	詩数	全詩における割合	詩体	詩数	全詩における割合
五言古詩	14	3.01%	五言古詩	16	5.44%
七言古詩	32	6.88%	七言古詩	16	5.44%
五言律詩	67	14.41%	五言律詩	93	31.63%

五言排律	40	8.60%	五言排律	4	1.36%
			六言律詩	1	0.34%
七言律詩	73	15.70%	七言律詩	73	24.83%
五言絶句	74	15.91%	五言絶句	33	11.22%
七言絶句	165	35.48%	七言絶句	57	19.39%
			六言絶句	1	0.34%
合計	465	100.00%		294	100.00%

表1に示されるように、『唐詩選』と市河寛斎の前期詩集『寛斎摘草』を詩体別に整理すると、詩体の配置順序においては共通性が認められる一方で、詩体ごとの比率には明確な差異が見られる。この点は、前章で検討した『唐詩選』と南郭初篇の関係と同様、詩体構成の「形式的継承」と「運用上の選択」の差異という二層構造として把握することができる。

まず詩体の配置順序に注目すると、『唐詩選』は五言古詩・七言古詩・五言律詩・五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句の順に詩体を配列しており、古詩—律詩—絶句という古典的な序列に従って編纂されている。『寛斎摘草』においても、六言律詩・六言絶句といった特殊な詩体を含む点を除けば、古詩・律詩・絶句の順で作品が配置されており、その基本的構成原理は『唐詩選』とほぼ一致している。

このような詩体配置の共通性は、前章で論じた服部南郭初篇にも確認される。南郭初篇では、擬古樂府や六言律詩といった変則的要素を含みつつも、全体としては古詩—律詩—絶句の順序が維持されていた。これらを総合すると、南郭・寛斎はいずれも、『唐詩選』や『唐詩品彙』に代表される明代以降の唐詩類書によって確立された詩体配置原理を、詩集編成の基本的枠組みとして共有していたと考えられる。

しかし、詩体ごとの比率に目を向けると、『唐詩選』と『寛斎摘草』のあいだには、南郭初篇の場合とは異なる、より顕著な選択傾向の差が認められる。『唐詩選』では七言絶句が全体の35.48%を占め、五言絶句(15.91%)を加えると、絶句類が全体の半数を超える。前章で述べたように、この構成は短小精緻で鑑賞性の高い詩体を重視し、読本・鑑賞用選集としての性格を強く帯びるものである。

これに対し、『寛斎摘草』では五言律詩が31.63%、七言律詩が24.83%を占め、律詩が全体の過半数を構成している。七言絶句(19.39%)および五言絶句(11.22%)の比率は、『唐詩選』に比して明らかに低く、寛斎が詩作の中心を律詩に置いていたことが数量的にも裏付けられる。この点は、南郭初篇において律詩が約半数を占める状況と共通しつつも、寛斎の場合にはより明確に律詩偏重の傾向が示されている点に特徴がある。

さらに、『寛斎摘草』には樂府題を模した作品や六言詩など、多様な詩体が含まれており、既成の形式を踏まえつつも、詩作そのものを修養的实践として展開しようとする姿勢がうかがわれる。これは、南郭が多様な詩体を試みつつも、『唐詩選』的構成との均衡を保っていたのに対し、寛斎がより明確に律詩を中核とする実作志向へと傾斜していることを示すものといえる。

以上のように、『唐詩選』が絶句を中心とする構成によって鑑賞・教育用選集としての性格を示すのに対し、南郭初篇および『寛斎摘草』はいずれも律詩の比重を高めることで、詩作実践を重視する方向性を共有している。ただし、南郭が『唐詩選』的構成原理と

の調和を意識した詩集編成を行っていたのに対し、寛斎はより一層、律詩中心の構成を通じて自らの詩学的立場を明確化している点に、両者の差異を見いだすことができる。

第3節 『唐詩選』と『寛斎摘草』詩作との詩題と主題の比較

前述のとおり、『唐詩選』全465首と『寛斎摘草』全294首を概観すると、『寛斎摘草』は六言律詩・六言絶句といった一部の特殊な詩体を含むものの、全体としては古詩—律詩—絶句の順に作品が配列されており、詩体配置の大枠は『唐詩選』と共通している。この点は、南郭初篇の場合と同様に、寛斎が明代以降の唐詩類書、なかでも『唐詩選』や『唐詩品彙』によって形成された詩体構成の枠組みを踏まえていた可能性を示している。

しかし、南郭初篇においては、こうした詩体配置の共通性が、詩題の一致や主題の体系的な対応と結びつき、詩集全体の構成原理として明確に機能していたのに対し、『寛斎摘草』の場合には、詩体構成の共通性がそのまま詩題や主題の水準にまで及んでいるとはいえない。むしろ、『寛斎摘草』における『唐詩選』との関係は一樣ではなく、詩題や主題のあり方には複数の方向性が併存していると考えられる。

そこで以下では、南郭章で用いた分析の枠組みを踏まえつつ、『寛斎摘草』における『唐詩選』との関係を、3.1 詩題・主題が一致する例、3.2 詩題・主題が類似する例、3.3 『唐詩選』とは直接対応しない初唐体模倣詩、という三つの観点から順に検討する。さらに、それらを踏まえたうえで、3.4 『唐詩選』と直接対応しない作品群の位置づけを整理し、寛斎詩作における重心がどこに置かれているのかを分析する。

3.1 『唐詩選』と『寛斎摘草』において詩題・主題が一致する作品の検討

南郭初篇では、『唐詩選』と詩題が完全に一致する作品が複数確認され、それらの多くが同一の詩体区分内に配置されていた。この点は、南郭が個々の詩題のみならず、『唐詩選』における詩体と詩題の対応関係そのものを意識して詩作・編集を行っていた可能性を裏づけるものであった。

これに対し、『寛斎摘草』において『唐詩選』と詩題が完全に一致する作品はきわめて少なく、現時点で確認できるのは儲光羲「關山月」（『唐詩選』卷六・五言絶句）と、市河寛斎「關山月」（『寛斎摘草』五言古詩）の一例に限られる。すなわち、『寛斎摘草』では、詩題体系を単位とする踏襲（すなわち南郭型の受容）はほとんど確認できず、題名一致は例外的・限定的現象として位置づけられる。

ここでは、『唐詩選』卷六・五言絶句に収められた儲光羲「關山月」と、市河寛斎による五言古詩「關山月」の具体例を挙げる。

具体例1

- 儲光羲 關山月
一雁過連營 一雁 連營を過ぎ
繁霜覆古城 繁霜 古城を覆ふ
胡笳在何處 胡笳 何處にか在る
半夜起邊聲 半夜 邊聲を起す

- 市河寛斎 關山月
海月上秋旻 海月 秋旻に上り

沙塞減煙塵	沙塞 煙塵を減す
踰山還出塞	山を踰えて 還た塞を出で
度關乍臨秦	關を度りて 乍ちに秦に臨む
冷色侵旅鏡	冷色 旅鏡に侵し
寒影逐征輪	寒影 征輪を逐ふ
疆場不見望	疆場すれども 望を見ず
夜夜苦聞人	夜夜に 人を苦しんで聞く

両者は同一の詩題「關山月」を用いているものの、その詩体・構成・描写内容には明確な差異が認められる。儲光羲の作は五言絶句という短小な形式の中で、辺塞における緊張感や孤愁を凝縮的に表現しているのに対し、寛斎の作は五言古詩の比較的自由的な篇幅を用い、寒色を帯びた風景描写、出塞と帰塞の往復的な行程、さらには旅中における心理的揺らぎなどを段階的に描き出している。

また、語彙や句法の面においても、儲光羲の詩句を直接踏襲したと見られる箇所はほとんど確認できない。寛斎は詩題のみを参照しつつ、その内容については自らの構想にもとづいて新たに組み立てており、本作における『唐詩選』との関係は、具体的な表現や構成の模倣というよりも、題名レベルでの参照にとどまるものと考えられる。

さらに注目すべき点として、儲光羲の「關山月」が『唐詩選』において典型的な辺塞詩に位置づけられるのに対し、『寛斎摘草』では同種の辺塞詩は本作一首に限られていることが挙げられる。南郭初篇では、辺塞詩が一定数まとまって確認されたのに対し、寛斎前期の詩作においては、辺塞という主題自体が周縁的な位置にとどまっている。

3.2 『唐詩選』と『寛斎摘草』の詩題・主題が類似する作品

南郭初篇では、詩題が完全に一致しない場合でも、詩題の語彙・構造（「送～」「和～」 「九日」等）や主題枠が『唐詩選』と広範に呼応し、それらが多くの場合同一詩体区分内で整理・反復されていた。つまり、南郭は詩題を核とする作品配置を通じて、『唐詩選』の主題体系を詩集構成の水準で取り込んでいた。

これに対し『寛斎摘草』では、詩題一致がほぼ見られない一方で、詩題の語彙や構造が『唐詩選』と部分的に重なる領域が存在する。その典型が、(1) 冒頭詩の述懐的配置、(2) 「送～」「贈～」に代表される贈答・送別題の多用である。

(1) 詩集冒頭の述懐的配置：「感懷」をめぐる

『寛斎摘草』冒頭は「感懷贈邊子徳」であり、述懐的作品を冒頭に置くという点では『唐詩選』巻頭の「述懷」「感遇」詩群、および南郭初篇冒頭「詠懷十五首」と同型の編成習慣を共有する。

具体例 2

● 市河寛斎	感懷贈邊子徳
孤桐生嶧陽	孤桐 嶧陽に生じ
靈根託嶺岵	靈根 嶺岵に託す
上拂萬重雲	上は萬重の雲を拂ひ
下臨不測淵	下は不測の淵に臨む
湍湍日蕩潏	湍湍として 日に蕩潏し

鳳凰棲其顛	鳳凰 其の顛に棲む
悲風一搖動	悲風 一たび搖動すれば
寒聲聞于天	寒聲 天に聞こゆ
截之爲瑤琴	之を截りて 瑤琴と爲し
施以朱絲絃	朱絲絃を以て施す
音韻一何調	音韻 何ぞ一たび調はざる
金石莫敢先	金石 敢へて先んぜず
世耳不能聽	世の耳 聽く能はず
塵篋徒棄捐	塵篋 徒らに棄捐す
持贈鍾子期	持して 鍾子期に贈る
可以萬古傳	以て 萬古に傳ふべし

前述のように、「感懷贈邊子德」は、詩題に「感懷」という語を含む点で、『唐詩選』巻頭の「述懷」詩題と語彙上の共通性を示している。この詩は、作者自身の思いを述べ、それを邊子德に贈るという構成をもつが、その詩句にも注目すべき点が見られる。

たとえば、『唐詩選』に収められた李端「送劉侍郎」には「嶧陽溪路第三聲」という句があり、「嶧陽」という地名が用いられている。この語は、『書経』禹貢篇の「嶧陽孤桐」に由来し、「嶧陽に生じる孤桐は良材である」という古くからの觀念と結びついている。寛斎の詩の冒頭句「孤桐生嶧陽」も、こうした典故を踏まえた表現であり、結果として李端詩と同じ語彙の領域に属しているように見える。

もっとも、このような語彙の共通性をもって、両者のあいだに直接的な影響関係があったと考えることはできない。むしろ、共通の古典的語彙や典拠を基盤として詩作が行われていたために生じた、間接的な重なりと見るべきであろう。ただし、寛斎が詩集冒頭に「感懷」を冠した五言古詩を置き、古典的典故を用いて自己の情懷を述べるという構成を取っている点は、『唐詩選』巻頭の述懷詩と形式的に近い位置関係にある点として注目される。

(2) 詩題構造の共通性：「送～」「贈～」題の集中

『寛斎摘草』には、「送子德」「送來子伯」など、「送～」を冠する作品が多数確認される。実際、「送～」を詩題にもつ作品は全 37 首（全詩 294 首の 12. 6%）に及び、「贈～」を冠する贈答詩が 12 首（4.08%）確認される。すなわち、『寛斎摘草』の詩題構成は、「送」「贈」という二つの主題に大きく収斂している点に顕著な特徴がある。

このうち「送～」題の多さは、送別詩を豊富に収録する『唐詩選』の構成とよく対応しており、詩題構造の水準において、『寛斎摘草』が『唐詩選』の枠組みと一定の連続性を有していることを示している。

以下では、まず「送～」題の作品を取り上げ、その主題的特徴を確認した上で、「贈～」題へと分析を進める。

①「送～」題：送別詩の集中

具体例 3

● 送子德 市河寛斎
 零雨何濛濛 零雨 何ぞ濛濛たる
 送子野水東 子を送りて 野水の東

相儻無一言	相ひ携へて 一言も無し
仰見雙飛鴻	仰ぎ見れば 雙飛の鴻
浮雲一失所	浮雲 一たび所を失へば
悠悠遠隨風	悠悠として 遠く風に隨ふ
難有長相思	長く相ひ思ふこと 難く
向誰訴深衷	誰に向かつてか 深衷を訴へん
人事常多乖	人事 常に多く乖き
天道豈終窮	天道 豈に終に窮まらんや
願君長努力	願はくは 君 長く努力し
結交有始終	結交 始終有らんことを

「送子徳」は、邊子徳との別れの場面を詠んだ作品であり、「送～」題に属する送別詩である。詩中では、静かな自然の描写の中に別れの情景が織り込まれ、言葉を交わさずに別れる様子や、浮雲・飛鴻といった比喻を通して、行き先の定まらない人生や心の揺れが表現されている。

『唐詩選』では送別詩が重要な主題の一つをなしているが、『寛斎摘草』においても「送～」題の作品が多く見られることから、寛斎が詩作の比較的早い段階から、送別という主題に強い関心を持っていたことがうかがえる。この点で、寛斎の詩題の選び方は『唐詩選』の主題的な傾向と共通する部分をもっている。

②「贈～」題：対人的表現としての詩

次に、「贈」を冠する詩題としては、「感懷贈邊子徳」「贈高子啓」「重贈河子」「雲室歌贈大洲上人」「題壺碑帖歌贈源子章」などが挙げられる。これらはいずれも、特定の人物に向けて詩を贈る形式をとっており、友情の確認や相手への評価、思いの共有といった役割を担っている。

「贈～」題の作品では、自らの思いを述べると同時に、それを相手に差し出すという構造が見られる。つまり、詩は単なる自己表現にとどまらず、相手との関係を築き、保つための手段にもなっているのである。

その例が「贈高子啓」(五言古詩)である。

具体例 4

● 贈高子啓 市河寛斎 五言古詩

良時可努力	良時 努力すべし
知音豈易逢	知音 豈逢ひ易からんや
千里一相失	千里にして 一たび相失へば
歡娛何日同	歡娛 何れの日か同じうせん
浮雲自西北	浮雲 西北よりし
悠悠長夜中	悠悠たり 長夜の中
我欲隨之去	我 之に隨ひて去らんと欲す
北風多變容	北風 多く容を変ず
行行莫復問	行き行きて 復た問ふこと莫かれ
浮雲不可從	浮雲 從ふべからず

この詩では、「知音は得難い」という認識から始まり、遠く離れた友との再会の難しさが詠まれる。浮雲や北風の比喻によって、人生の移ろいや人の行方の定まりにくさが象徴的に示されている。そして最後に「浮雲不可従」と結び、変わりやすい状況に流されるべきではないという姿勢を示しながら、その思いを相手に向けている。

ここで注目したいのは、「浮雲自西北」という表現である。これは曹丕「雜詩」の冒頭「西北有浮雲 亭亭如車蓋」を思い起こさせる。曹丕の詩では、浮雲は風に吹かれて流される存在の象徴として描かれ、異郷をさまよう客子の孤独を表している。

一方、寛斎の詩では同じ浮雲のイメージを用いながらも、最後に「浮雲不可従」と述べることで、流転に身を任せるのではなく、流されまいとする姿勢が示される。ここには、古典を踏まえつつも、それを贈答詩という対人的な場面の中で捉え直す寛斎の工夫が見られる。

このように、『寛斎摘草』に見られる「送～」「贈～」題の多さは、形式の面では『唐詩選』に多く収められている送別詩や贈答詩とよく共通している。そこからは、寛斎が唐詩の伝統を強く意識していたことがうかがえる。

しかし、その表現は『唐詩選』の作品をそのままなぞったものではない。唐詩にはさまざまな送別詩や贈答詩があるが、「送子德」では、別れの悲しみを直接述べるのではなく、自然の描写や比喻を通して間接的に表している点に特徴がある。こうした書き方には、寛斎自身の体験や具体的な人間関係が反映されていると考えられる。

つまり、送別や贈答という伝統的な主題を受け継ぎながらも、それを自らの立場や経験に即して表現し直しているのである。

3.3 『唐詩選』とは直接対応しない初唐体模倣詩

『寛斎摘草』には、『唐詩選』とのあいだに詩題や主題の対応関係をほとんど持たない作品が2首確認される点も注目される。これらはいずれも、初唐詩の詩風、あるいは初唐詩人の作品を明示的に模倣したものであり、その姿勢は詩題の段階ではっきりと示されている。以下では、このような特徴をもつ代表例として具体例5を取り上げ、その性格について検討する。

具体例5

● 市河寛斎 初晴落景效初唐體
光景初晴淨 光景 初めて晴れて淨し
山河炎熱空 山河 炎熱 空し
歸鳥匝煙樹 歸鳥 煙樹を匝し
暮蟬噪野風 暮蟬 野風に噪ぐ
雲卷峰凝翠 雲 巻きて 峰 翠を凝らし
霞蒸澗吐虹 霞 蒸して 澗 虹を吐く
南窓寄傲士 南窓 傲士を寄せ
心期曠望中 心期 曠望の中にあり

本作は、雨が上がって間もない初晴れの光景と、夕刻に向かう景色の余情とを描いた作品であり、詩題に「效初唐體」と明記されているように、初唐風の詩体を意識的に模倣している。蔡毅氏・西岡淳氏によれば、寛斎は若年期に、盛唐以前の詩風を尊ぶ古文辞派の

強い影響を受けて詩作修練を行っていた。しかし後年には、中唐から宋代の詩により高い価値を見いだすようになり、こうした初唐模倣の作品群を「所謂偽唐詩なるものなり」として、批判的に回顧したとされる。本作は、そのような古文辞派的訓練の痕跡を端的に示す一篇である。

また、『寛斎摘草』には、同様に初唐詩人を明示的に模倣した作品として、「擬王績策杖尋隱士」が収められている。詩題中の「擬王績」は、寛斎が初唐詩人・王績の作品を直接意識して詠作したことを示す明確な証拠であり、「策杖尋隱士」という語句も王績の原作に見られる表現である。寛斎はこれらの語彙や主題を部分的に借用しつつ、古典詩への学習的態度のもとで、自身の詩的構想を展開している。

もっとも、これら二作には、『唐詩選』の詩題や主題との直接的な対応関係は認められず、語句や構成の水準においても、その影響を具体的に確認することはできない。むしろ、寛斎が初唐詩そのものを手本として詩作修練を行っていたことが強く示されており、その関心は『唐詩選』収録作に限定されず、王績をはじめとする他の唐代詩人へと広く向けられていたと考えられる。

3.4 『唐詩選』と直接対応しない作品群の位置づけ：寛斎詩作の重心

3.1～3.3 で見たように、『寛斎摘草』において『唐詩選』と詩題が完全に一致する例は「關山月」の一首に限られ、詩題の類似も、冒頭配置（「感懷」）や「送・飲・贈」といった題名の型にとどまる場合が多い。また、初唐体模倣を明記する二作（「效初唐體」「擬王績…」）は、そもそも『唐詩選』との対応関係をほとんど持たないが、これらは偶然というより、寛斎の詩作修練の背景と結びつけて理解する必要がある。すなわち寛斎は若年期に、盛唐以前の詩風を尊ぶ古文辞派の強い影響のもとで詩作を学び、その過程で初唐風の模倣を意識的に行っていた。しかし後年には、中唐から宋代の詩により高い価値を見いだすようになり、こうした初唐模倣の作品群を「所謂偽唐詩なるものなり」として批判的に回顧したとされる。したがって、『寛斎摘草』に見られる初唐体模倣詩は、『唐詩選』受容の枠内に回収しにくい一方で、寛斎の学習段階と詩風転回を示す重要な手がかりとなる。以上を踏まえると、『寛斎摘草』では、『唐詩選』の詩題体系をまとめたかたちで踏襲する受容（南郭初篇に見られたような型）は成立していない。

このことは、『寛斎摘草』の作品の多くが、詩題・主題の水準で『唐詩選』と直接つながる領域の外側に位置していることを意味する。そして、まさにこの「非対応の作品群」が、詩集全体の印象を決め、寛斎前期詩作の重心を示している。以下では、その重心がどこに置かれているのかを、主題の傾向から整理する。

(1) 詠物詩の多さ

『唐詩選』および南郭初篇においては、送別詩・応酬詩・辺塞詩など、人事や社会的関係を中心とする主題が、詩題の段階で体系的に配置されていた。これに対して、『寛斎摘草』に見られる顕著な特徴の一つは、自然風景や物象そのものを直接の詠題とする詠物詩が、比較的多く収められている点である。

具体的には、「小園春霽」「初秋江村」「田家即事」「旅館花」「旅館月」「九月六日看菊」「芭蕉」「冬菊」「寒梅」「詠霜二體（並序）」「詠秋露」「詠早梅」「林園閑臥」「砥澤六詠（六首）」「下仁田雜詠（四首）」など、季節の移ろいや植物、景観、天候といった自然物・自然現象を詠題とする作品がまとまって確認される。これらは計 24 首に及び、全 294 首のうち約 8.16% を占めている。この割合は、数量的に見て突出して多いとは言えないも

ものの、決して少ないとは言えず、『寛斎摘草』の主題的傾向を考えるうえで一定の比重をもつ作品群であると評価できる。

とりわけ注目されるのは、これらの詠物詩の多くが、特定の人物との別離や応答を前提とせず、詩人自身の視線によって捉えられた自然や周辺の景物を中心に構成されている点である。このような傾向は、古文辞派の詩論を基盤としながらも、市河寛斎の早期詩作を収める『寛斎摘草』の段階ですでに、清新な抒情性を志向する詩人像の萌芽が現れていることを示していると考えられる。

以下では、その代表例として「寒梅」を取り上げ、詠物詩が寛斎前期詩作において果たしている詩学的意義について、具体的に検討する。

具体例 6

● 市河寛斎 寒梅

三冬深雨雪	三冬 深く 雨雪にして
誰報一枝春	誰か 一枝の春を報ぜん
香逐清風遠	香りは 清風を逐ひて 遠く
身將翠竹鄰	身は 翠竹を將つて 鄰りとす
素心臨酒淨	素心 酒に臨んで 淨く
佳氣入詩新	佳氣 詩に入りて 新たなり
欲問南來意	問はんと欲す 南より來たる意を
長江隔美人	長江 美人を隔つ

本作は五言律詩で、「寒梅」を主題とする典型的な詠物詩である。冬の深い雨雪の中に、早春を告げる一枝の梅が咲き出る情景を象徴的に捉え、「一枝春」「素心」など、梅花に付随する伝統的觀念を踏まえながら詠じている点に特徴がある。ここでは単なる鑑賞にとどまらず、梅の姿を通して人物の品格や心性が重ね合わされている。

また、「香逐清風遠」「佳氣入詩新」といった語彙に見られるように、梅の香気や佳気を媒介として、靈的・感応的な次元を描き出そうとする姿勢がうかがえる点も注目される。こうした表現には、後年の寛斎が重視する性靈說的な詩觀との通底が認められ、前期作品でありながら、寛斎詩風の方向性を先取りする要素がすでに現れているといえる。

(2) 「飲～」題：交遊を基盤とする詩作

「飲～」題の多さは、『唐詩選』ではそれほど目立たない特徴である。もちろん、『唐詩選』にも「幽州夜飲」や「飲中八仙歌」のように「飲」を含む作品は見られる。しかし、寛斎の詩では、飲宴の場面がより具体的に詩題に表れ、実際の交遊の様子がそのまま作品化されている点に特色がある。

『寛斎摘草』では、「送～」「贈～」題に加えて、「飲～」「集飲～」「邀飲～」といった飲宴を主題とする作品がまとまって見られる。「飲」を含む詩題には、「首夏飲田子冉宅」

「秋日飲...」「歲晚同...飲...」「九日...邀飲...」「七夕集飲酒雲館...」などがあり、季節・日付・場所・相手を具体的に示すものが多い。これらは、特定の邸宅や園亭での酒宴の場面をそのまま記録する性格が強く、詩作が日常的な交遊の場から生まれていることを示している。

また、「分韻」「得○字」といった語を伴う例も多く、文人社会における即興的・共同的な詩作の慣行が反映されている点も注目される。

このように、『寛斎摘草』における「飲～」題の作品は、その内容はより具体的で日常的な交遊の記録へと重心を移している。寛斎は唐詩の詩題構造を踏まえながら、それを江戸後期文人社会の現実の交際空間の中で再編成し、詩を実生活に密着した表現へと展開していたのである。

その一例として、次の作品を挙げる。

具体例 7

● 市河寛斎 首夏飲田子冉宅 五言律詩

吏情延野客 吏情 野客を延べ
盃酒結交新 盃酒 交を結びて新たなり
啼鳥看迎夏 啼鳥 夏を迎えるを見るに
殘花不讓春 殘花 春を譲らず
景斜詩未就 景 斜めにして 詩 未だ就らず
談劇意愈親 談 劇して 意 愈いよ親し
坐愛幽窓竹 坐して 幽窓の竹を愛し
清陰得主人 清陰 主人を得たり

この詩は、初夏に友人の田子冉宅を訪れ、酒を酌み交わしながら交友を深める情景を描いたものである。冒頭の「吏情延野客・盃酒結交新」では、官務の合間に生まれた交際の喜びが示される。続く「啼鳥看迎夏・殘花不讓春」では、季節の移ろいを捉えた穏やかな自然描写が詩の雰囲気を整えている。

後半の「景斜詩未就・談劇意愈親」では、夕暮れの中で談笑が深まり、詩作が進まないほどに親しさが増していく様子が描かれる。結びの「坐愛幽窓竹・清陰得主人」では、静かな庭の情景と主人との親密な関係が余韻をもって示される。

本作は、自然描写と交友の情とが調和した作品であり、寛斎前期詩作の特色をよく表している。

以上の検討からわかるように、『寛斎摘草』において『唐詩選』と直接対応しない作品群は、周辺的な存在ではなく、むしろ詩集全体の重心を形づくっている。詠物詩では、自然や身近な景物そのものに向けられた視線が強く表れ、個人的な抒情の芽生えがうかがえる。また「飲～」題の作品では、抽象的な典型場面ではなく、具体的な交遊の場がそのまま詩題となり、日常的な交際空間が詩作の基盤となっている。

これらの作品は、『唐詩選』の詩題体系をそのまま受け継いだものではない。しかし同時に、唐詩の形式や語彙を踏まえながら、それを寛斎自身の生活や交友の現実の中で捉え直した結果でもある。つまり、『寛斎摘草』に見られる非対応の作品群は、唐詩受容から外れたものというよりも、受容を経たうえでの再構成のあらわれと見ることができる。

その意味で、寛斎前期の詩作は、『唐詩選』との直接的な対応関係よりも、そこから一定の距離を保ちながら、自らの関心を自然・抒情・交遊へと広げていく過程に重心が置かれているのである。

小結

本章では、市河寛斎の前期詩集『寛斎摘草』を対象に、反徂徠派が『唐詩選』に対して

どのように「距離」を取ったのかを、①形式水準（詩集編成・詩体配置）と、②運用水準（詩題・主題の参照）の二点から検討した。

第一に、形式水準を見ると、『寛斎摘草』は古詩—律詩—絶句という基本的な詩体配置を保っており、『唐詩選』と共通する枠組みをもっている。つまり反徂徠派は、『唐詩選』を全面的に否定し、詩作の基盤から排除したわけではない。

第二に、ただし詩体の比率にははっきりした違いが見られる。『唐詩選』では絶句の割合が高く、鑑賞用選集としての性格が強いのに対し、『寛斎摘草』では律詩が過半を占め、詩を作る実践に重心が置かれている。寛斎は枠組みを共有しながらも中心となる詩体を変えることで、『唐詩選』を作詩規範として相対化していたと考えられる。

第三に、運用水準、すなわち詩題・主題の参照関係に目を向けると、この距離はさらに明確になる。『寛斎摘草』において『唐詩選』と詩題が完全に一致するのは「關山月」の一例のみであり、類似も「感懷」や「送・飲・贈」といった題名型の共有にとどまる。服部南郭初篇に見られるような、詩題体系全体を踏襲する広い再現は、寛斎前期の詩作には確認できない。

第四に、もっとも、この距離は完全な断絶を意味するものではない。初唐体模倣詩（「效初唐體」「擬王績…」）は古文辞派的訓練の痕跡と理解できると同時に、後年の寛斎が中唐・宋詩を重視していく方向への転換を示す手がかりともなる。

第五に、南郭の詩作では『唐詩選』の閨怨詩や辺塞詩が多く参照され、一定程度模範として再生産されていたのに対し、『寛斎摘草』では詠物・日常景・交遊場面を具体的に詠む作品が中心を占める。つまり寛斎は主題の重心を身近な経験へと移しており、辺塞・閨怨といった主題を体系的に再現する南郭とは異なる方向を示している。

以上を総合すると、反徂徠派における『唐詩選』受容は、形式の枠組みをある程度受け継ぎながらも、詩体の運用や詩題・主題の水準で距離を取り、別の方向へ組み替える態度として捉えられる。市河寛斎は、この動きを前期詩作の実践の中で具体的に示したといえる。

第7章 『唐詩選』と『通詩選』と『通詩選諺解』について

はじめに

前章まででは、江戸詩壇における『唐詩選』の受容を、古文辞派（服部南郭）と反徂徠派（山本北山・市河寛斎）という立場の違いから検討してきた。南郭の場合、『唐詩選』は盛唐詩の模範として重視され、詩体構成・詩題・主題の水準にまで、体系的に自作へ取り入れられていた。他方、北山の詩論や寛斎の前期詩作からは、『唐詩選』を参照しつつも、それを絶対的な規範として固定しない姿勢が確認できた。つまり第2部前半で明らかになったのは、『唐詩選』が江戸詩壇で一様に模範視されたのではなく、立場に応じて受け止め方が分かれ、参照の仕方も多様であった、という点である。

では、このように詩壇内部でさまざまに読まれた『唐詩選』は、江戸期の文芸の世界ではどのように受け入れられたのだろうか。『唐詩選』は漢詩学習や詩作の場にとどまらず、俳諧・川柳・狂詩・狂文・洒落本・読本・画本・かるたなど、幅広い分野に入り込み、通俗的な形でも親しまれていった。先行研究でも、このような影響の広がり自体は指摘されている。けれども、そこで「『唐詩選』のどのような主題の詩が、特に好まれて引用やパロディーの対象になったのか」という点は、まだ十分に整理されていない。

そこで本章と次章では、江戸文芸における『唐詩選』受容を、主題別の影響という観点から捉え直す。具体的には、本章では、『唐詩選』をもとに作られた狂詩集『通詩選』と『通詩選諺解』を分析対象とし、そこで用いられた原詩が『唐詩類苑』の分類（部・類）ではどの主題に当たるのかを確認する。そして、どの主題が多くパロディーに用いられたのかを数量的に示したい。これにより、第1部で明らかにした『唐詩選』全体の主題構成（どの主題が多いか）と、江戸文芸側での選び方（どの主題が実際に好まれたか）とを比べ、一致する点・一致しない点を検討する。

以下、第1節では『唐詩選』と江戸文芸に関する先行研究を分野別に整理し、研究の到達点と課題を確認する。続く第2節では、本章の調査方法と主題分類の基準を示し、『通詩選』・『通詩選諺解』を対象にする理由を述べる。さらに第3節では、両作品における原詩の主題分布を集計し、江戸期に『唐詩選』のどの主題がとくに好まれ、作り替えられたのかを明らかにする。

第1節 『唐詩選』と江戸文芸に関する先行研究

『唐詩選』が江戸文芸に与えた影響についての先行研究によると、さまざまな分野に影響を与えたことが明らかになっている。以下では、各分野における具体的な影響と、代表的な先行研究を簡潔に整理する。

まず、俳諧における影響として、与謝蕪村（1716—1784）、三宅嘯山（1718—1801）、大島蓼太（1718—1787）などの俳人たちの作品に『唐詩選』の影響が指摘されている。例えば、仁枝忠氏は蕪村の句とそれに影響を与えたと思われる具体的な漢詩文を比較考察し、『唐詩選』を含む漢詩文の影響について具体例を挙げて論じている。その中で、仁枝忠氏のどの漢詩選集の影響を受けたかを整理した内容からみると、特に『唐詩選』の影響を受けて作られた詩句が多い傾向がみられる¹。藤田真一氏は、三宅嘯山の著作『俳諧古選』の出版とその

¹仁枝忠「蕪村の句における漢詩文の影響について」（『津山工業高等専門学校紀要』第5号、1968年3月）

盛行が、服部南郭（1683—1759）によって和刻された『唐詩選』の体裁やその流行に多大な影響を受けている点について、田中道雄氏の詳細な立証を引用して強調している。さらに、『嘯山詩集』巻八に収録された五言律詩の中から、『唐詩選』巻三の五言律詩の題を借りて作られた詩を例に挙げ、嘯山が『唐詩選』収録作品に擬して詩作しただけでなく、『唐詩選』という書物そのものを模倣し、それを俳諧書として再構築したものが『俳諧古選』であると述べている²。小財陽平氏は蕉風復興運動に関わった人々の中には、嘯山と同様に『唐詩選』に触発されて創作活動を行った者が少なくないことを指摘している。たとえば、大島蓼太については、『唐詩選』五言絶句の部から選んだ二十首の詩作をもとに、それぞれ二十組の三物を制作した『唐詩選三物』という書物を著したと述べている³。以上のように、有名な俳人たちと『唐詩選』との関わりが明らかにされるとともに、『唐詩選三物』、『俳諧古選』をはじめとする俳諧関連の作品にその影響が広く認められることが確認できる。

次に、川柳における影響として、村上哲見氏は『唐詩選』をふまえた川柳について、俳諧よりも一段とくだけた江戸の文芸、川柳の世界にもしばしば漢詩が顔をのぞかせると述べており、平安時代では白楽天ばかりがもてはやされる一方、李白・杜甫はさっぱり人気がなかったのであるが、『唐詩選』が大流行する中で、二人の名は江戸時代の人々にはきわめて身近なものとなったと評している。それに、『唐詩選』の「飲中八仙歌」にある「李白一斗詩百篇」を題材とした川柳が存在することを指摘している⁴。また、若林力氏は、中国に関する詠史川柳と呼ばれる句の中から約 1000 句を選び、それらが詠まれた背景を探る研究を行っている。その中で、『唐詩選』に関連する川柳にも言及し、「唐詩選読むと孔雀の尾がほしい」や「唐詩選見て居る息子けちなつら」といった句を例示している⁵。こうした受容のあり方について、日野龍夫は『唐詩選』が辺愁の詩に富むことを指摘するとともに、「『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風—」において、川柳などに引用される頻度を手がかりに、人々に好まれた作品の傾向を分析している。そして、それらを（イ）都市の繁華を詠むもの、（ロ）「古意」「宮怨」などに代表される艶詞、（ハ）辺境を詠むもの、の三類に区分している⁶。このように、川柳においても『唐詩選』の影響が窺える。

それから、狂詩・狂文における影響としては、日野龍夫が以下のように述べている。狂詩は元来漢詩のパロディであり、享保九年の服部南郭の校訂本刊行以来、圧倒的な人気を集め、普及度がきわめて高かった『唐詩選』は、狂詩の歴史を通じてパロディの対象になるという意味で強い影響力を持っていた。しかし、一冊まるごと『唐詩選』のパロディとなっている狂詩集は、大田南畝の『通詩選』・『通詩選笑知』・『通詩選諺解』の三部作以外には例がない。このことは、いかにもパロディを好んだ大田南畝らしい狂詩集といえるだろう、と指摘している⁷。狂文について、中野氏は 中野三敏氏と浜田啓介校注の『唐詩笑』によれば、『唐詩笑』は享保期以降の江戸文壇で狂詩・狂文の流行を促した作品である。漢戯文という知識人の遊びを出版し、江戸に定着させた初期の例とされている。本来、このような知的遊

² 藤田真一「俳諧師嘯山：啓蒙家の両義性について」（『大阪大学国語国文学会』、1984 年 6 月、pp.29—40）

³ 小財陽平氏は「三宅嘯山の『唐詩選』受容」（和漢比較文学学会大会、2011 年）

⁴ 村上哲見『漢詩と日本人』（講談社、1994 年）

⁵ 若林力『江戸川柳で愉しむ中国の故事』（大修館書店、2005 年）

⁶ 日野龍夫「『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風」『文学』39 卷 3 号、1971 年

⁷ 大田南畝並びに社中作、日野龍夫他解説『通詩選三部作：通詩選笑知・通詩選・通詩選諺解 改訂増補版』（太平書屋、2010 年、p.8）

戯は上方に適した文化だったが、宝暦期には江戸でも出版業界が盛んになり、趣味や娯楽として出版が広がり、『唐詩笑』のような狂詩・狂文集が生まれた⁸。

さらに、洒落本や読本といった通俗文学への影響も指摘されている。神保五彌氏は次のように述べている。「…筆者略…京儒者のなかに、風流文事の世界に遊ぶものがみられ、彼らの筆になる洒落本が上方に発生していた。同じく徂徠歿後、南郭が芙蓉館に唐詩選を講ずるに及びまた江戸に洒落本を発生せしめたのである。いわゆる江戸洒落本の祖「異素六帖」（宝暦七年）が、儒学者沢田東江の作であり、唐詩選と百人一首をもって滑稽の中に遊里の穴をうがったその内容は、服部南郭が初めて註釈をほどこし、テキストとして門人に教え、寛保六年、宝暦三年と、あいついで書肆嵩山房から小本型式で出版せしめたことを原因とする、当時の唐詩選の流行にあてこんだものであった。倫理修徳をすてて風流文事の世界に遊んだ儒学者の群れと同じく東江もまた幕府の御用学者林鳳岡に学びがなら、遊里に遊んで柳橋美少年の名でよばれた…筆者略…」⁹。また、日野龍夫氏は、『唐詩選』の詩句を用いた洒落本『異素六帖』や、七つの短篇小説を収めた読本『俗談唐詩選』などを紹介している¹⁰。

加えて、『唐詩選』は画本、かるた、書道、都々逸などにも影響を与えている。村上哲見氏は『唐詩選唐音』、『唐詩選掌故』、『唐詩選字引』など様々な関連出版の中で、漢詩の普及、大衆化という点から特に注目すべきは『唐詩選画本』と『唐詩選国字解』の二種であると述べており、『唐詩選画本』は一時の出版ではなく、初篇から七編まで発刊は長期にわたっているし、更に『唐詩選』七巻の編成の順を追って刊行したのではなく、途中で適宜抜き出して編集したものを出したりもしたので、全体の構成が非常に入り組んだものになっていると述べている¹¹。吉海直人氏は『唐詩選』を絵本化した『唐詩選画本』の存在を指摘しており、江戸後期には木版の漢詩かるたが複数刊行されたことも記録されている。このような状況から、会津藩で『唐詩選』を題材とした遊びが行われていた記述も確認できる¹²。大庭氏は『唐詩選画本』と唐詩選かるたについて次のように述べている。近世期を通じて『唐詩選』の版權を有していた嵩山房（屋号は須原屋、代々小林新兵衛を名乗る）は、四代目の小林高英の頃にこのかるたを刊行したとされる。このかるたは『唐詩選画本』（初篇は天明8年刊、最終第七篇は天保七年刊）の副産物として誕生したものである。絵本としての構想は、高英の祖父である二代目小林文由の時代からあり、嵩山房にとって代々念願の一大事業だったという（『画本』初篇、小林高英撰「書画本唐詩選後」）。また、『画本』初篇において絵と詩の本文の揮毫を担当し、この事業の実現を後押しした橘石峰は、『小倉百人一首』が歌人の姿絵を添えることで一層楽しまれたことに倣い、『唐詩選』も絵本化する必要性を強く感じていた人物であった¹³。書道においても『行書唐詩選』や『篆書唐詩選』、さらに『唐詩選歌留多』など、さまざまな形で江戸文芸に取り入れられた。

以上の研究から、『唐詩選』は江戸文芸において、俳諧、川柳、狂詩、和歌、洒落本、読本、書道、歌留多など多岐にわたる分野に影響を及ぼしたことが明らかである。

⁸ 中野三敏・浜田啓介校注『異素六帖；古今俄選；粹字瑠璃；田舎芝居』（岩波書店、1998年）

⁹ 神保五彌「近世後期町人文学の発生」、『國文學研究』、(早稻田大學國文學會)、巻9(10)、1954年、pp.500-501を参照。

¹⁰ 日野龍夫『唐詩選国字解1』（平凡社、1982年）

¹¹ 前掲注4 村上氏著書、p.211、p.216

¹² 吉海直人「板かるたの歴史：会津発祥説の検討」、(同志社女子大学日本語日本文学、巻25、2013年、pp.55-71)

¹³ 大庭卓也「嵩山房小林新兵衛の「唐詩選かるた」について」（『比較文化年報』、(久留米大学大学院比較文化研究科) 第26輯、2021年、pp.1-53)

他にも、和歌においては『和漢草』、書道においても『行書唐詩選』や『篆書唐詩選』、さらに『都々逸唐詩選』など、さまざまな形で江戸文芸に取り入れられた。このように『唐詩選』は、江戸時代の文芸に幅広い影響を及ぼしており、多様なジャンルでその影響が確認される。

以上の研究から、『唐詩選』は江戸文芸において、俳諧・川柳・狂詩・狂文・和歌・洒落本・読本・画本・書道・かるた・都々逸など、多岐にわたる分野に影響を及ぼしていたことが明らかである。

しかし、これらの作品において『唐詩選』のどの作品がパロディーの対象となったかについて言及する研究は存在するものの、パロディー化された『唐詩選』作品の主題を統計的に整理した研究は見当たらない。

そのため、本章では、『唐詩選』の影響を受けた江戸文芸作品を整理したうえで、江戸時代においてどのような主題の詩がとくに好まれ、パロディーの対象となったのかを明らかにする。さらに、先行研究で指摘されてきた主題が、実際にどの程度江戸文芸に影響を与えていたのかを検証することを目的とする。

第2節 調査方法の説明及び『通詩選三部作』を対象とする理由

本章では、まず『唐詩選』の影響を受けた江戸時代の文芸作品を特定し、次にそれらの作品でパロディーとなった『唐詩選』収録作品の主題を統計し、好まれた主題を分析する。また、先行研究で指摘された主題ごとの詩数が江戸文芸に与えた影響と一致しているかを検証する。これらの分析に先立ち、これまでの研究で使用された『唐詩選』収録作品の主題分類基準を説明し、具体的な主題状況を示す。

前述のように、『唐詩選』は明代の李攀龍の編とされる唐詩選集であり、五言古詩（14首）、七言古詩（32首）、五言律詩（67首）、五言排律（40首）、七言律詩（73首）、五言絶句（74首）、七言絶句（165首）の形式ごとに、唐の128名による465編を収録している。先行研究では、懐古詩、辺塞詩、送別詩、閨怨詩の多さが指摘されているが、主題の分類基準が明確でなく、その割合の確認もされていなかった。そこで、本章でも、恣意的な判断を避けるため、前章に続き、『唐詩類苑』を参考にして分類し、得られた数値を用いることとした。

また、前述のように、『唐詩類苑』においては、詩の主題は「部」に、部はさらに「類」と呼ばれる小項目に分けられる。『唐詩選』の収録作品が、『唐詩類苑』でどのような主題に分類されているかを一首ずつ確認したところ、『唐詩選』全詩465首のうち、435首が『唐詩類苑』にも収録されており、30首は収録されていなかった。これら収録されていない詩については、『唐詩類苑』の分類の方法を参考にし、筆者が主題を分類した。以下では、『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合と、筆者が分類した詩を加えた場合との両方の結果を示す。『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合でも、筆者が分類した詩を加えた場合でも、『唐詩選』の収録作品は全部で31部に分けられる。それぞれの部ごとに詩数を統計した。

懐古詩、辺塞詩、送別詩、閨怨詩の定義については、拙論と同様の基準を用いる。また、詩数については『唐詩類苑』に収録された詩のみの場合の詩数（全詩における割合）/筆者が分類した詩を加えた場合の詩数（全詩における割合）という形で示す。『唐詩選』における懐古詩8首（1.84%）/8首（1.72%）・辺塞詩44首（10.11%）/48首（10.32%）・送別詩21首（4.83%）/24首（5.16%）・閨怨詩23首（5.29%）/28首（6.02%）とし、後に得られた江戸文芸作品の主題統計結果と比較する。

次に、『唐詩選』の影響を受けた江戸文芸作品を特定する。本来、収録作品をほぼ網羅的に取り込んでいる作品は、主題選択の傾向をみるうえでは適切な対象とはいえない。そのため本研究では、『通詩選三部作』『唐詩笑』『異素六帖』『唐詩三物』および『唐詩選かるた』を候補として検討し、そのうち本章では『通詩選三部作』を扱う。ただし、本章ではこれら各分野の作品解釈そのものを目的とするのではなく、あくまで『唐詩選』のいかなる詩が選択されたのかを主題別に分析することに主眼を置く。

第3節 『唐詩選』と『通詩選』・『通詩選諺解』¹⁴

日野氏の先行研究によれば、『唐詩選』には惜別・辺愁・閨怨など、人間の情を自然に描く詩が豊富であり、そのことが『唐詩選』が荻生徂徠ら古文辞派に好まれ、ひいては江戸時代の日本人に広く受容された要因であるという。

しかし、これまで見てきたように、『唐詩類苑』を用いて『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況を把握したところ、先行研究の指摘と一致する点もあれば、一致しない点もあった。主題分析から把握できた『唐詩選』の実際の特徴と、『唐詩選』が江戸時代に流行した要因とのあいだには、どのような関係があるのだろうか。とりわけ、先行研究の指摘とは異なり、『唐詩三百首』と『唐詩選』における送別詩の収録数には大きな差がなく、また『唐詩選』においては懷古詩と閨怨詩が必ずしも多いとはいえないにもかかわらず、それらが『唐詩選』の特徴として語られてきたことは、どのように理解すべきであろうか。

この問いに答えるため、本章では、『唐詩選』の影響を受け、その原詩をもとにパロディーされた作品を調査することによって、『唐詩選』流行の実態を捉え、とくにどの作品・どの主題が好まれたのかを考察する。

先行研究で取り上げられてきた『唐詩選』受容作品のうち、本章では『通詩選三部作』を分析対象とする。『通詩選三部作』とは、『通詩選笑知』『通詩選』『通詩選諺解』の総称である。このうち『通詩選笑知』は『唐詩選』巻六「五言絶句」の一部の詩をもとにした狂詩集であり、『通詩選』は巻二「七言古詩」の一部をもとにし、『通詩選諺解』は巻七「七言絶句」の一部をもとにしている。

さらに、『通詩選笑知』『通詩選』『通詩選諺解』が『唐詩選』のどの詩に基づいてパロディーされたかを確認したところ、『通詩選笑知』は巻六の五言絶句全74首のうち72首を対象としており、内容上の取捨選択よりも、ほぼ網羅的にパロディー化しているとみられる。したがって、主題選択の傾向を分析する本章の対象からは除外することとした。これに対し、『通詩選』および『通詩選諺解』は、ともに原詩を選択的に用いて成立した作品であり、どの主題が好まれたかを検討するうえで適切な分析対象である¹⁵。

ここでは、一つの実例を出す。

● 大門 「郭中禮日」¹⁶

¹⁴ 本節の比較内容は、「『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況—『唐詩三百首』との比較を通じて—」（『中國中世文學研究』第76号、2023年3月）として投稿し、掲載されたものである。

¹⁵ パロディーに当たっては、単にパロディーを作りやすい詩が選ばれたとも考えられるが、ここでは、広く知られている作品の方がよりパロディーされやすかったと考えることにする。

¹⁶ 狂詩の原詩は国文学研究資料館に公開されたオンライン資料を引用し、訓読は目加田誠氏の訓読を参考にし、筆者が付けたものである。

正月二日酒盃臺	正月二日 酒盃臺
茶席茶筵勸客杯	茶席茶筵 客に勸むる杯
人情已厭舊冬苦	人情已に厭ふ 舊冬の苦
高慢那從北里回	高慢那ぞ 北里より回る

『唐詩選』における原詩は下記である。

● 王勃 「蜀中九日」 (『唐詩選』)

九月九日望郷臺	九月九日 望郷臺
他席他郷送客杯	他席他郷 客を送る杯
人情已厭南中苦	人情已に厭ふ 南中の苦
鴻雁那從北地來	鴻雁那ぞ 北地より来る

狂詩は日本でつくられた、漢詩体の詩の一種で、押韻、平仄など漢詩の作法に従いながら俗語、卑語を交えて、滑稽、洒脱を主としたものである。また、『通詩選』と『通詩選諺解』は『唐詩選』の影響を受け、『唐詩選』の原詩を元にしてパロディーを行ったものである。ここで挙げている「蜀中九日」は『唐詩選』第七卷七言絶句の第一首であり、『唐詩類苑』においては、「歳時部」の「九月九日」に分類されている。太田南畝により、『通詩選諺解』において、パロディー作の「郭中禮日」が作られた。

これらの『通詩選』の18首と『通詩選諺解』の50首の原詩が、それぞれ『唐詩類苑』においてどの主題に分類されているか分析すれば、江戸時代において、『唐詩選』所収詩の中で、どのような詩が実際に好まれたかを推測できると思われる。

『通詩選』の18首と『通詩選諺解』の50首の原詩が、それぞれ『唐詩類苑』においてどの主題に分類されているかを分析した結果を、附表1に示す。『通詩選』の18首と『通詩選諺解』の50首の原詩が『唐詩類苑』において、18部に分類されている。『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩において辺塞詩に関しては、「辺塞部」と「武部」には各4首で、合わせて8首あり、全原詩68首の11.76%を占めている。すなわち、辺塞詩が多く作られたことが分かった。

また、『唐詩選』所収詩の各部の順位と同じく、『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩においても、「人部」の詩数が26首あり、全詩68首の38.24%を占めており、第1位になっている。「人部」の下各類の詩数状況を見てみよう。『通詩選』と『通詩選諺解』「人部」各類原詩順位状況を附表2に示す。

附表2から、『唐詩類苑』において、『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩が「人部」において、全部で14類に分類されている。「幽怨」類の詩が6首あり、一番多いことが注目される。また、「閨情」類の詩が1首ある。閨怨詩には「幽怨」・「閨情」二類の詩が含まれているため、『通詩選』と『通詩選諺解』の「幽怨」・「閨情」類の原詩は全部で7首あり、全詩68首の10.29%を占めており、『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩には閨怨詩が多いことが分かった。このことは、閨怨詩が日本人に好まれ、パロディーの対象となったことを反映していると思われる。

次に、『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩で送別詩に関連する部別は「送」のみであるが、「送」類は3首あり、全詩68首の4.41%を占めており、第3位になっている。送別詩も日本人に好まれ、やや多くパロディーの対象となったことを反映していると思われる。

最後に『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩には懷古詩が2首あり、全詩68首の2.94%を占めている。「人部」の第4位になっており、やはりパロディーの作品はやや少ないことが

分かった。

小結

以上、『通詩選』および『通詩選諺解』における原詩（計 68 首）を『唐詩類苑』の部・類に即して整理した結果、両作品が参照した『唐詩選』の主題は一樣ではなく、一定の偏りをもって選び取られていることが明らかになった。

『通詩選』と『通詩選諺解』の原詩における「人部」の詩の中で、特に閨怨詩（「幽怨」・「閨情」）と送別詩が日本人に好まれ、パロディーの題材として多く取り上げられたことが分かる。これらのジャンルは感情的な深みを持ち、普遍的な共感を呼び起こすため、日本文化においても響く部分が大きいことが背景にあると考えられる。

以上を踏まえると、江戸期の文芸作品における『唐詩選』受容を論じるためには、先行研究が提示してきた主題像を前提として語るのではなく、どの作品が具体的にパロディーの対象となり、その際にどの主題がどの程度の頻度で用いられたのかを、主題分類の基準を明示したうえで数量的に確かめる必要がある。

次章では、この課題をさらに進めるため、狂詩以外の文芸ジャンルも視野に入れ、『唐詩笑』『異素六帖』『唐詩三物』などの作品を取り上げる。そして、各作品で参照された『唐詩選』原詩を特定し、主題別の出現頻度を比較することで、江戸文芸の世界で実際に“好まれて取り上げられた主題”をより立体的に捉え直したい。

附表

附表 1 『通詩選』と『通詩選諺解』原詩の各部主題順位状況

	部名	詩数	全詩における割合
1	人部	26	38.24
2	居処部	6	8.82
3	花部	4	5.88
4	京都部	4	5.88
5	武部	4	5.88
6	辺塞部	4	5.88
7	水部	3	4.41
8	歳時部	3	4.41
9	山部	2	2.94
10	鳥部	2	2.94
11	天部	2	2.94
12	服食部	2	2.94
13	楽部	1	1.47
14	果部	1	1.47

15	職	1	1.47
16	地部	1	1.47
17	木部	1	1.47
18	積部	1	1.47
	合計	68	100.00

附表 2 『通詩選』と『通詩選諺解』「人部」各類原詩順位状況

	部・類名	詩数	全詩における割合
1	人部（幽怨）	6	8.82
2	人部（行役）	4	5.88
3	人部（送）	3	4.41
4	人部（懷古）	2	2.94
5	人部（俠少）	2	2.94
6	人部（宴集）	1	1.47
7	人部（感慨）	1	1.47
8	人部（交遊）	1	1.47
9	人部（述懷）	1	1.47
10	人部（贈）	1	1.47
11	人部（美人）	1	1.47
12	人部（貶謫）	1	1.47
13	人部（醉）	1	1.47
14	人部（閨情）	1	1.47
	合計	26	

第 8 章 江戸文芸作品における『唐詩選』の受容—主題別影響の分析を中心に—¹

はじめに

前章では、『通詩選』および『通詩選諺解』を対象として、『唐詩選』所収詩のうち、いかなる主題の作品が狂詩化の過程で選択されたのかを検討した。その結果、『唐詩選』における主題構成そのものと、江戸文芸において実際に取り上げられた主題とのあいだには、必ずしも一致しない側面があることが明らかになった。とりわけ、受容の場面においては、閨怨詩や送別詩など、感情表現の濃い作品が相対的に選ばれやすい傾向が確認された。

本章では、この問題をさらに進め、狂詩以外の文芸ジャンルにも視野を広げて、『唐詩選』受容のあり方を検討する。具体的には、『唐詩笑』・『異素六帖』・『唐詩三物』を取り上げ、それぞれの作品において『唐詩選』のどの詩が参照されているのかを特定し、その主題別分布を比較する。これにより、江戸文芸の世界において、実際にどのような主題の詩が好んで取り上げられたのかを、より多角的に明らかにしたい。

第 1 節 『唐詩選』と『唐詩笑』

前述のように、先行研究では『唐詩選』が狂文に与えた影響について、『唐詩笑』が具体例として挙げられている。

『唐詩笑』は宝暦三年（一七五三年）に刊行されたものとされる。その著者「玩世教主」については、鷲尾順敬氏編の『日本仏家人名辞書』²で「実順」、小川貫道氏編の『漢学者伝記及著述集覧』³で「雪巖」と記されている。中野三敏氏によると、「玩世教主」は一時、詩僧「雪巖実順」と関連付けられたこともあったが、考証の結果、井上蘭台の戲号であることが明らかになったという⁴。

中野氏によれば、『唐詩笑』は享保期以降の江戸文壇における狂詩・狂文の流行を促進し、漢戯文を出版文化に定着させた初期の作品である。本来このような知的遊戯は上方に適した文化であったが、宝暦期の江戸では出版が活発化し、娯楽性の高い作品の流行の中で本作が生まれたという。また同氏は、「笑」が「艶笑」の趣を帯び、古典の文句を巧みに切り取り新たな意味を与える手法を評価し、『唐詩笑』を深い学識と高度な諧謔性に支えられた洒脱な作品として高く評価している⁵。

『唐詩笑』における『唐詩選』収録作品のパロディー使用状況を調査した結果、『唐詩選』全 465 首のうち、69 首がパロディーの対象として使用されていた⁶。その内訳は次のとおりである。五言古詩 14 首のうち 7 首、七言古詩 32 首のうち 15 首、五言律詩 67 首のうち 10 首、五言排律 40 首のうち 13 首、七言律詩 73 首のうち 3 首、五言絶句 74 首のうち 5 首、七言絶句 165 首のうち 16 首が、それぞれパロディーの対象として採用されている。

次に、『唐詩笑』における『唐詩選』の主題別の詩の選択を分析する。前述の通り、『唐詩

¹ 本章の内容は、今後整理のうえ、「江戸文芸作品における『唐詩選』の受容—主題別影響の分析を中心に—」として、『末名玉沙集林 遊佐徹教授退休記念論集』に投稿予定である。

² 鷲尾順敬『日本仏家人名辞書』（光融館、1903 年）

³ 小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』（関書院、1935 年）

⁴ 中野三敏・浜田啓介校注『異素六帖古今俄選粹字瑠璃田舎芝居』（岩波書店、1998 年）

⁵ 中野三敏「漢文戯作の展開」（諏訪春雄・日野竜夫編『江戸文学と中国（江戸シリーズ 4）』毎日新聞社、1977 年、pp.109-110）

⁶ 『唐詩選』の同じ詩の中から異なる詩句が引用される場合、それらは一つの詩として数えることにした。

笑』では『唐詩選』の全詩体から計六十九首が収録されている。例えば、その冒頭には以下の作品が挙げられている。

魏徴

陰痿者為龍陽之破曰、縦横計不就。驅馬出関門。人生感意氣。功名誰復論。變童曰、秋風吹不尽。總是玉関情。国音秋与臭近」○俗謂陽物長大者為驢顛。馬耶驢耶、王耶葛耶、吾未之知也。張祐詩、虢國夫人承主恩、平明騎馬入宮門。与此馬別。⁷

陰痿ノ者、龍陽ノ破ヲ為シテ曰ク、「縦横計リゴト就サズ、馬ヲ驅ツテ関門ヲ出ズ。人生意氣ニ感ズ。功名誰カマタ論ゼン。變童曰ノ曰ク、「秋風吹キ尽サズ。総ベテコレ玉関ノ情」国音、秋ト臭ト近シ。○俗ニ陽物長大ノ者ヲ謂ヒテ驢顛ト為ス。馬カ驢カ王カ葛カ、吾イマダコレヲ知ラザル也。張祐ノ詩ニ、「虢國夫人主恩ヲ承ク、平明馬ニ騎ツテ宮門ニ入ル」ト。此ノ馬ト別ナリ。

この実例のように、『唐詩笑』では、詩人名を記し、その後に『唐詩選』に収録された詩句や詩人名を含む文章を添える形式をとっている。全体で 22 人の詩人名とそれに関連する文章が含まれており、詩句は多くの場合そのまま引用され、文章に巧みに組み込まれている。

しかし、これらの詩句は原詩の主題とは異なる文脈で用いられ、しばしば戯作的な再解釈が加えられている。引用された詩の多くは、『唐詩類苑』の主題分類とは異なる使われ方をしており、詩句の断章取義や語音の類似といった手法で別の意味やユーモアが付与されていると考えられる。

これらの詩が戯作の対象として選ばれた背景には、『唐詩選』の原詩が広く知られているため、元の主題と異なる使い方をすることで落差が生まれ、面白さが増すという作者の嗜好や戯文的効果を重視した判断があると考えられる。したがって、どの詩が選ばれているかを特定することは、『唐詩選』の中で特に戯作に適していた、あるいは好まれた主題を明らかにする手がかりとなるだろう。

上記の分析を踏まえ、『唐詩笑』で作品選択の対象となった『唐詩選』の 69 首を主題別に分類し、どのような詩がパロディーの対象の題材として選ばれ、どの主題が重視されたのかを統計的に分析したい。

まず、『唐詩笑』の戯作対象となった『唐詩選』収録作品の主題（部ごと）の結果を統計的に分析した。その結果、戯作の 69 首の詩は 21 の部に分類され、最も多くパロディーの対象となった主題は「人部」の詩であり、全体の 30.43%（21 首）を占めている。その次に多いのは居処部 7 首（10.14%）、水部 5 首（7.25%）、歳時部 4 首（5.80%）であり、それ以下の部に属する詩は 3 首以下にとどまるため、ここでは詳細な内訳を省略する。

その中で、「人部」に属する詩は、感慨 3 首、貶謫 3 首、寄 2 首、幽怨 2 首、俠少 2 首、宴集 1 首、感遇 1 首、行役 1 首、送 1 首、答 1 首、美人 1 首、別 1 首、閨情 1 首、閒適 1 首という、計 14 類に細分化できる。

次に、先行研究で注目されてきた辺塞詩・閨怨詩・送別詩の割合について見ると、「辺塞部」に分類される辺塞詩が 3 首、「幽怨」と「閨情」を合わせた閨怨詩も 3 首であり、いずれも全 69 首の 4.35%を占めている。「送」と「別」を合わせた送別詩は 2 首で、全体の 2.90%

⁷ ここで引用している原文および書き出し文については、前掲注 4 で挙げた中野三敏・浜田啓介校注の書籍を参照した (pp.49-50)。

に相当する。

一方、『唐詩選』における割合は、辺塞詩が 44 首 (10.11%) / 48 首 (10.32%)、閨怨詩が 23 首 (5.29%) / 28 首 (6.02%)、送別詩が 21 首 (4.83%) / 24 首 (5.16%) である。これと比較すると、『唐詩笑』における閨怨詩・辺塞詩、とりわけ送別詩のパロディー対象率は相対的に低いことが分かる。しかし、『唐詩笑』では閨怨詩が「人部」の中で最多を占め、辺塞詩も主要な部の第 5 位に位置しており、閨怨詩および辺塞詩が一定数含まれていると評価できる。

これらの結果から、『唐詩笑』においては、『唐詩選』収録作品の中でも特に辺塞詩と閨怨詩が比較的高い割合で選ばれ、作品選択において重視されていたことが確認できた。このことは、『唐詩笑』が単に『唐詩選』収録作品を断章取義的に戯作したものではなく、当時の文化的・審美的関心や戯作の意図に基づいて詩を選択していたことを示唆している。

第 2 節 『唐詩選』と『異素六帖』

前述のように、先行研究では『唐詩選』が洒落本に与えた影響について、『異素六帖』が具体例として挙げられている。

『異素六帖』は宝暦七年 (1757 年) に刊行され、江戸時代の洒落本の元祖とされ、吉原に関する洒落本の濫觴として高く評価されている。藤井乙男氏は、漢学は本来倫理や政治を目的とする学問で、詩文は余技とされていたが、時代の変化とともに文学として楽しまれるようになったと指摘する。さらに、宝暦期に始まる花柳界を描いた洒落本には中国戯文の影響もあり、『異素六帖』や『聖遊郭』が最古の例とされる⁸。

『異素六帖』の著者・無々道人は、書家・沢田東江の戯名である。中野三敏氏によれば、東江は『唐詩笑』の著者・井上蘭台の直弟子であり、『異素六帖』の刊行は『唐詩笑』より早い。『唐詩笑』は宝暦三年 (1753 年) 以前に成立しており、その影響は明らかである。東江は、蘭台から『唐詩笑』を見せられるか、あるいは戯作に参加し、その流れで『百人一首』を題材にした本作を着想したのだろうと述べている⁹。

また、題名は『義楚六帖』を意識しているが、内容に直接の関係はなく、『唐詩笑』の手法を継承しつつ、吉原を舞台に『唐詩選』や『百人一首』の句を断章取義的に用いている。「発例」には歌学者・仏者・儒者の三者が論争する場面があり、詩歌遊戯の背景が描かれているという

『異素六帖』における『唐詩選』収録作品のパロディー使用状況を調査した結果、『唐詩選』全 465 首の中から、五言絶句 74 首のうち 23 首、七言絶句 165 首のうち 30 首、合計 53 首がパロディーの対象として採用されていることが分かった¹⁰。このことから、『異素六帖』も『唐詩選』収録作品を基にしたうえで、取捨選択の過程を経てパロディーの対象とされた作品であると判断できる。

次に、『異素六帖』において『唐詩選』のどのような主題の詩が作品選択の対象となったかを、具体例を挙げながら分析を行う。前述のように『異素六帖』では『唐詩選』五言絶句と七言絶句から合計 53 首が対象とされた。ここでは、一つの実例を挙げる。

⁸ 藤井乙男「支那小説の翻訳 (剪燈新話と伽婢子)」pp.20-21 頁 (京都文学会編『芸文』3 (9)、内外出版印刷、1912 年 9 月)

⁹ 前掲注 4 中野三敏・浜田啓介校注書

¹⁰ 『異素六帖』について、序および発令に引用された『唐詩選』の作品は対象外とし、本文に登場する作品のみを数えることとした。

くめんのあしき女郎

但見涙痕湿 不知心恨誰

人をも身をもうらみざらまし

涙痕はうらみのなみだ目をうるほすといふ。あくびやめうばんにてなくをばいはず

本文で引用する「但見涙痕湿、不知心恨誰」（但見る 涙痕の湿ふことを、知らず 心 誰をか恨む）は、『唐詩選』巻六・五言絶句に収められた李白の詩「怨情」の一節である。この詩は、涙の跡に表れる女性の複雑な感情を描き、夫を思いながら会えない悲しみや恨みを詠んでいるとされる。また、「人をも身をもうらみざらまし」は、『百人一首』四十四番・中納言朝忠の歌「逢ふことの絶えてしなくはなかなか人に人をも身をも恨みざらまし」からの引用で、「もし最初から逢うことがなければ、かえってあの人も自分も恨まなかっただろう」という意味である。

さらに、「あくびやめうばんにてなくをばいはず」について、中野氏の注釈によれば、これは『秘伝書』という指南書物の「なみだのひしよの事」からの引用であるとされている¹¹。その出典を確認すると、『秘伝書』「なみだのひしよの事」には、以下のように記されている。

一なきたきときは、きるものゝゑりのうち。又は、そでぐちに。みやうばんをぬり。袖にてぬくべば、そのまゝ。なみだたるもの也。やきかへして。よくこにして、ぬるべし。又、めをみはり。しばし、まだゝきをせずしてをれば、かのうちころつくものなり。そのとき、まだたきをすれば。かならず、なみだ出るなり、めのいろをかへたきときは、めのうちに、あかすちはるなり。但、おなかのはりたるとき、むさといけむべからず。せどぐちのようじんあるへし。¹²

これは、涙を意図的に演出するための具体的な方法が記された内容であり、化粧技術あるいは表現技法の一環と見なすことができる。

一方、水野稔氏の『黄表紙・洒落本の世界』では、「くめんの女郎」が戯作における知識人の遊戯的解釈の一例として取り上げられている。水野氏は「涙痕はうらみのなみだ、目をうるほすといふ。あくびやめうばんになくをばいはず」という句について、女郎が客を巧みに騙して金を取る振る舞いを、無邪気さを装いながらも計算された仕草で演出しているとし、こうした姿に古典の引用を無理に結びつける趣味は、知識人の生活の側面を如実に表していると評価している¹³。

以上を踏まえると、唐詩や和歌では女性が何らかの理由で恨みの涙を流す一方、遊女と客の間にはそれほど深い情はない。しかし、涙を流すために明簪を用い、客に対して涙をいかに効果的に見せるかというイメージを、あえてパロディ的に戯画化して描いたものと考えられる。詩句や和歌と重ね合わせた編者の巧みな構成がうかがえる。このように、『異素六帖』では『唐詩選』の詩句を素材に、新たな文脈と解釈を加えることで独自の世界を創出しており、戯作としての創意が顕著に表れている。他の例の詳細な分析は紙幅の都合により割愛する。

¹¹ 前掲注4 中野三敏・浜田啓介校注書

¹² 小野晋『近世初期遊女評判記集 本文篇』「2、秘伝書 赤木文庫蔵」（1965年、pp.82-83）

¹³ 水野稔『黄表紙・洒落本の世界』（岩波新書、1976年、p.12）

『異素六帖』においてパロディーの対象となった『唐詩選』の 53 首を主題別に分類し、どのような詩がパロディーの題材として選ばれたのかを統計的に分析した。53 首の作品は 14 部に分けられ、そのうち最も多い主題は「人部」で、22 首を数え、全体の 41.51% を占めていることが分かった。その次に多いのは居処部 5 首 (9.43%)、歳時部 4 首 (7.55%) であり、それ以下の部に属する詩はいずれも 3 首以下にとどまるため、ここでは詳細な内訳を省略する。

特に「人部」に属する詩の内訳を見ると、幽怨 4 首、送 3 首、閨情・宴集・別・會遇がそれぞれ 2 首ずつあり、還郷・行役・述懷・罷官・隱逸・閒適・俠少がそれぞれ 1 首ずつ確認される。先行研究で指摘されている辺塞詩・閨怨詩・送別詩について見ると、辺塞部と武部を合わせた詩が 6 首、「幽怨」類と「閨情」類を合わせた詩が 6 首であり、これらは全 53 首のうち 11.32% を占めている。一方、送別詩については、「送」類と「別」類を合わせた詩数が 5 首で、全体の 9.43% に相当する。

一方、『唐詩選』における割合は、辺塞詩が 44 首 (10.11%) / 48 首 (10.32%)、閨怨詩が 23 首 (5.29%) / 28 首 (6.02%)、送別詩が 21 首 (4.83%) / 24 首 (5.16%) である。これと比較すると、『異素六帖』では辺塞詩がやや高く、加えて閨怨詩および送別詩はいずれも相対的に高い割合でパロディーの対象として採用されていることが確認できる。

以上の分析から、『異素六帖』においては、閨怨詩・辺塞詩・送別詩が、パロディーの題材として特に多く採用されていたことが明らかとなった。

第 3 節 『唐詩選』と『唐詩三物』

『唐詩選』が俳諧に与えた影響の一例として、『唐詩三物』が挙げられる。池沢一郎氏によれば、『唐詩三物』は雪中庵三世蓼太の門人によって作られたものであり、27 首の五言絶句を、一人一首ずつ「三物」に翻案したものであるという¹⁴。『唐詩三物』に関する書誌情報は限られているものの、筆者が東京大学図書館所蔵の『唐詩三物』¹⁵を調査した結果、『唐詩選』収録作品のうち、どの詩がパロディーの対象となったかが明らかになった。それによれば、『唐詩選』全 465 首の中から五言絶句 74 首のうち 27 首がパロディーの対象として採用されていることが確認できた。このことから、『唐詩三物』は『唐詩選』収録作品を基にしつつ、選択過程を経てパロディーの対象が行われた作品であると判断できる。

『唐詩三物』は宝暦七年（一七五七年）に刊行されたとされる¹⁶。本稿では『唐詩三物』において『唐詩選』のどのような主題の詩がパロディーの対象となったかを、具体例を挙げながら分析を行う。前述のように『唐詩三物』では『唐詩選』五言絶句から合計 27 首が作品選択の対象とされた。ここでは、一つの実例を挙げる。

少年行

遺卻珊瑚鞭 白馬驕不行

章臺折楊柳 春日路傍情

駒白し猶紅ひのむめの鞭

¹⁴ 池沢一郎『『唐詩三物』と『唐詩選三物』』（『明治大学教養論集』(377)、2004 年 1 月）

¹⁵ 本稿で言及する『唐詩三物』は、東京大学デジタルアーカイブポータルに掲載されているものを参照している。(https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/09cef071-82f1-5698-7d7b-7521965e982a?pos=2) 最終閲覧日：2025 年 1 月 13 日

¹⁶ 改造社編『俳句講座』「第 9 卷」p.371（改造社、1932 年）

柳手折ば宵のむら雨
春は只うハ気な風の吹からに¹⁷

「遺卻珊瑚鞭...引用者略...」(珊瑚の鞭を遺却して...後略...)は、『唐詩選』巻六に収められた崔国輔の五言絶句「少年行」から全四句が引用されたものである。この詩では、珊瑚の鞭や白い馬といったモチーフを用いて、風流な若旦那風の少年の姿が描かれている。また、「楊柳」や「春日」などの語によって春の季節感が演出されるとともに、「楊柳」は遊女の喩えとも読み取れ、若者が遊里を行き来する様子を象徴的に表している。その後に続く俳諧の連句では、白い馬と紅梅の対比が美しく描かれ、春の訪れを象徴する情景が巧みに表現されている。白馬や柳といったイメージが共通して用いられ、原詩に登場するモチーフが俳諧の世界でも踏まえられていることが分かる。

『唐詩三物』において、『唐詩選』の五言絶句の27首はすべて全詩句がそのまま採用されており、12の部に分類されている。最も多くパロディーの対象となった主題は「人部」の詩であり、全体の33.33%(9首)を占めている。その次に多いのは居処部と歳時部で、各4首(14.81%)、天部が2首(7.41%)である。それ以下の部に属する詩はいずれも1首にとどまるため、ここでは詳細な内訳を省略する。特に「人部」に属する詩の内訳としては、閨情3首のほか、閒適・幽怨・俠少・行樂・隱逸・贈答がそれぞれ1首ずつ選ばれている。

先行研究で指摘されている辺塞詩・閨怨詩・送別詩のうち、『唐詩三物』では辺塞詩と送別詩はいずれもパロディーの対象とされておらず、閨情3首と幽怨1首の計4首(14.81%)が採用されている。『唐詩選』における閨怨詩の割合が23首(5.29%) / 28首(6.02%)であるのに比べると、『唐詩三物』においては、閨怨詩が相対的に多くパロディーの対象とされていることが確認される。

小結

以上、『唐詩笑』『異素六帖』『唐詩三物』において参照された『唐詩選』原詩を主題別に整理した結果、江戸文芸作品における『唐詩選』受容は一樣ではなく、作品のジャンルや性格に応じて、一定の偏りをもって原詩が選び取られていることが明らかになった。

『異素六帖』および『唐詩三物』では、とくに閨怨詩が比較的多く取り上げられており、加えて『異素六帖』では送別詩や辺塞詩も高い割合で用いられていた。一方、『唐詩笑』では、辺塞詩・閨怨詩・送別詩はいずれも一定数含まれているものの、全体としては主題そのものよりも、詩句の断章取義や戯作的効果に適した作品が選ばれている傾向が強いことが確認された。

このようにみると、江戸文芸においては、閨怨詩・送別詩・辺塞詩が比較的好まれ、繰り返しパロディーの題材として取り上げられたことが分かる。これらの主題は、情感の表出が明瞭であり、また異郷・離別・男女の情といった主題が、江戸の読者や作者にとって翻案しやすく、共感や興趣を喚起しやすい性格を持っていたことが背景にあると考えられる。

一方で、懷古詩は必ずしも多く取り上げられておらず、パロディーの題材としての利用は比較的限制的であった。すなわち、この結果は、『唐詩選』にどの主題が多く収録されているかという作品集自体の構成と、江戸文芸がどの主題を実際に取り上げたかという受容側の選択とが、必ずしも一致しないことを改めて示している。

¹⁷ 『唐詩三物』では、俳諧の部分がくずし字で記されている。その読み方については、前掲注14 池沢一郎氏による論文を参照した。

以上を踏まえると、江戸期の文芸作品における『唐詩選』受容を論じるためには、先行研究が提示してきた『唐詩選』の主題像をそのまま前提とするのではなく、どの作品が具体的にパロディーの対象となり、その際にどの主題がどの程度の頻度で用いられたのかを、主題分類の基準を明示したうえで数量的に確かめる必要がある。

また、本章の分析からは、主題だけでなく、五言絶句・七言絶句といった詩体の選ばれやすさも見えてきた。今後は、こうした主題や詩体の傾向に加え、個々の詩人の作風や詩句表現の特質にも目を向けることで、江戸文芸における『唐詩選』受容の実態を、さらに具体的かつ多面的に捉えていきたい。

第9章 結論と展望

第1節 結論

本研究は、江戸時代において長期にわたり読まれたベストセラー『唐詩選』の流行現象を、従来重視されてきた外在的・制度的要因（古文辞派の推奨、出版・教育環境など）だけで説明するのではなく、収録作品の主題構成という内在的特質に着目して捉え直し、その特質が日本における受容と文化的影響の過程でどのように作用したのかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、①『唐詩選』の主題構成が他の主要選集と比較していかなる独自性を示すのか、②その独自性が江戸期日本の漢詩文化および文芸作品における受容過程でいかに働いたのか、という二つの問いを設定し、定量的分析と具体的事例研究を連結させて検証した。

本論は二部構成である。第1部では、『唐詩選』収録作品の主題を統計的に整理し、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』との比較を通じて主題分布の特徴を数量的に把握した（主題分類には選集間の比較可能性を確保するため『唐詩類苑』の分類体系を参照した）。第2部では、第1部で明らかにした特徴が、江戸詩壇における詩作・詩論、ならびに江戸文芸におけるパロディーの場でどのように受け止められ、いかなる選択と再編を経て影響を生み出したのかを検討した。

以上を踏まえ、本研究の結論は次のようにまとめられる。

1. 第1部の結論

● 詩人とその作品数からみる『唐詩選』の特徴

先行研究では、『唐詩選』の収録作品は初唐・盛唐の詩が多く、中・晩唐の諸家の作品が極めて少ないと指摘されている。しかし、実際に『唐詩選』所収詩人の時期別分布について詳細な統計による検証は行われていない。本研究では、時期別の詩人分布に注目し、他の漢詩選集と比較することで、それぞれの収録方針や特徴の違いを明らかにした。

『唐詩選』や『唐詩三百首』、『三体詩』では、初唐、盛唐、中唐、晩唐の四時期にわたる唐詩のみが収録されている。一方で、『古文真宝』には漢代から宋代に至るまでの60家の作品が含まれており、その収録範囲の広さが特徴である。『唐詩選』については、詩数では初唐・盛唐が多い一方、中・晩唐の作品が非常に少ないとされるが、詩人の人数で見ると中唐が盛唐に次いで多く、中唐詩人が決して少なくないことがわかった。この背景には、『唐詩選』が中唐の多くの詩人を収録しているものの、それぞれの詩人の収録作品数が少ないことが影響していると考えられる。そのため、各時期の詩人の多さが必ずしも詩数の多さに直結しない点に留意する必要がある。

次に、『三体詩』と比較すると、『唐詩選』では盛唐の詩人と詩数が最も多いのに対し、『三体詩』では晩唐の詩人と詩数が最も多く、中唐がそれに続く。これにより、『唐詩選』が盛唐の詩人と作品を重視し、その文学的価値を評価している一方で、『三体詩』は晩唐および中唐の詩人に比重を置いていることが明らかとなった。それぞれの選集には異なる時期の文学的傾向が反映されているといえる。

さらに、『古文真宝』では中唐の詩人が最も多い一方、収録作品数では盛唐が全体の65%を占め、最も多く収録されている。これにより、『唐詩選』と『古文真宝』の両選集がともに盛唐詩を重視している点が確認された。ただし、『古文真宝』において中唐の詩人が多いにもかかわらず、詩数は全体の25%に留まっているため、中唐詩人の作品が相対的に少ないことが推測される。

以上、収録作品の時期に関する比較から、『唐詩選』は特に盛唐期の芸術的に優れた作品を選定するという収録方針を持つことが明確である。盛唐詩の雄渾瀏亮とされた特徴が高く評価されており、『唐詩選』がこの時期の作品に比重を置いている点は、収録詩の主題にも大きく関与していると考えられる。閨怨や辺塞などの主題が『唐詩選』に多く含まれることも、この収録方針の一環であるといえる。

● 詩体からみる『唐詩選』の特徴

先行研究では、『唐詩選』と他の唐詩選集を詩体の観点から比較したものが存在するが、具体的な数値が示されることは少なかった。本研究では、『唐詩選』を含む漢詩選集について詩体、詩数、割合を具体的に示し、詩体から見た『唐詩選』の特徴を客観的に明らかにすることを目指した。以下にその結果を述べる。

まず、詩数と詩体の比較である。『唐詩選』には465首、『唐詩三百首』には321首、『三体詩』には494首、『古文真宝』には120首が収録されている。詩数は最多ではないものの、『唐詩選』は古体詩と近体詩の両方を網羅しており、多様性に富んでいる点が特徴である。これに対し、『三体詩』は近体詩のみ、『古文真宝』は古体詩のみを収録している。『唐詩選』のこの多様性は、唐詩の学習者にとって利便性が高いと考えられる。

次に、近体詩と古体詩の構成比である。『唐詩選』では、古体詩よりも近体詩が著しく多いことが判明した。特に七言絶句（35%）と五言絶句（16%）が全体の約51%を占め、絶句形式が選者に好まれる傾向が見られる。一方、『唐詩三百首』や『三体詩』では五言律詩の割合が高く、それぞれの中心的形式となっている。たとえば、『三体詩』では五言律詩が42.31%を占めるのに対し、『唐詩選』では14.41%にとどまる。律詩の厳格な構造は規範性を重視する傾向を反映しており、『唐詩三百首』や『三体詩』の選定方針にその影響が見られる。

それから、古体詩の割合である。古体詩に関しては、『唐詩選』は五言古詩（3.01%）や七言古詩（6.88%）の割合が比較的低い。この点で、『唐詩三百首』や『古文真宝』に比べて古体詩の収録が少なく、唐代の近体詩、特に絶句や律詩に重点を置いていることが明らかである。

以上、『唐詩選』は詩体の多様性、近体詩の比率の高さ、特に絶句の多さにより、他の唐詩選集に比べて日本人にとって受け入れやすく、日本文芸に融合しやすい特徴を持つ。この点が、日本での受容における重要な要因であると考えられる。

● 主題からみる『唐詩選』の特徴

先述のように、先行研究では、『唐詩選』には懷古・送別・旅愁・惜別・辺愁・閨怨といった主題の詩が多く収録されていると指摘されてきたものの、実際にこれらの主題がどの程度含まれているのかを具体的に検証した研究は存在していない。たとえば、日野氏が『唐詩選』における惜別・辺愁・閨怨詩の多さを指摘しているものの、その収録割合を明らかにする調査は行われていないのが現状である。

本研究では、『唐詩選』と他の漢詩選集を比較し、各選集に収録された詩の主題傾向を明らかにすることを目的とした。まず、『唐詩選』を含む各選集の全体的な特徴を把握することを試みた。その結果、たとえば『三体詩』には、「寺観部」「釈部」「道部」「儒部」に分類される仏教・道教・科挙に関連する詩が『唐詩選』より多いことが分かり、これが『三体詩』の特徴であるといえる。また、『古文真宝』と比較した場合、『唐詩選』には「歳時部」や「水部」に分類される詩が多く含まれており、『唐詩選』の収録作品には主題の多様性が見られる傾向があることが確認された。

特に、先行研究で指摘されている主題に注目し、『唐詩選』に収録された懷古詩、辺塞詩、送別詩、閨怨詩について統計的調査を行い、『唐詩選』の特徴を主題の観点から解明した。

第2章では、まず『唐詩三百首』との比較を通じて調査を行った。その結果、送別詩については『唐詩三百首』と『唐詩選』に大きな差はないことがわかり、懷古詩や閨怨詩の収録数が『唐詩三百首』よりも少ないことが明らかになった。つまり、『唐詩三百首』との比較では、閨怨詩と懷古詩ではその結果が先行研究の指摘に反している。第3章では、『三体詩』との比較、第4章で『古文真宝』との比較を通じて分析した。その結果、懷古詩に関しては大きな違いは見られないが、『唐詩選』には特に多くの辺塞詩や送別詩、閨怨詩が収められていることが確認された。『三体詩』と『古文真宝』の比較の部分では、以前に流行したこれらの選集に慣れていて人々から見ると、唐詩選には辺塞詩や送別詩・閨怨詩が多いという印象が生まれた可能性があるかと推測できた。

以上が、第1部で行った統計的調査による研究の結果である。

2. 第2部の結論

続く第2部の結論は、受容の場において『唐詩選』が「一様に模範化」されたのではなく、立場とジャンルの違いによって参照の仕方が変化し、その過程で主題像そのものが再編されうる、という点にある。

● 古文辞派（服部南郭）

江戸詩壇において古文辞派（服部南郭）は、『唐詩選』を盛唐詩の模範として高く評価し、詩体配列・詩題・主題の水準にまで体系的に参照しながら詩作を行っていた。すなわち『唐詩選』は鑑賞書にとどまらず、実作上の規範として機能していた。

● 反古文辞派（山本北山・市河寛斎）

反古文辞派（山本北山・市河寛斎）は、『唐詩選』を参照枠として認めつつも、それを唯一の規範として固定しない姿勢を示した。北山の詩論は、選集の権威化や語句模倣の固定化に批評を向け、詩語が成立する文脈・照応・運用を重視する理路を提示した。寛斎の前期詩作もまた、形式的枠組みを共有しながら、詩体運用や詩題・主題の参照の水準で南郭のような体系的踏襲を行わず、一定の距離を伴う受容を示した。

● 江戸文芸（パロディー）

具体的には『通詩選』・『通詩選諺解』、『唐詩笑』・『異素六帖』・『唐詩三物』・唐詩選かるたを取り上げ、これらの作品を通じて『唐詩選』のどの詩がパロディーとなったかを特定し、その影響を考察した。詩壇を越えた江戸文芸の領域では、『唐詩選』収録詩は改作・引用・パロディーの素材として選別され、そこで頻繁に用いられた主題（とりわけ閨怨、送別、辺塞）が、受容側の反復によって可視化され、結果として『唐詩選』全体の主題像に関する印象形成にも影響した可能性が高い。すなわち、先行研究がしばしば語ってきた『唐詩選』の主題的特色は、作品集の内部構成のみから自動的に導かれるのではなく、江戸期の受容実践（とくに通俗文芸における選択と転用）を通じて強化された像を含んでいる。

以上より、本研究は『唐詩選』の流行現象を説明するにあたり、外在的要因の重要性を否定するのではなく、それに加えて、（1）作品集側の主題構成という内在的特質、（2）受容側の選択と再編（詩壇内部の参照の差異、文芸ジャンルでの転用の偏り）という二つの水準を接続して捉える必要性を示した。

とくに主題の「多さ」は、作品集の統計的分布として把握されるだけでなく、受容の現場でどの主題が反復的に用いられたかによっても規定される。この点に、本研究の方法的意義

がある。

第2節 展望

本研究は、『唐詩選』の受容要因と影響を、主題構成の定量的把握と、江戸詩壇および江戸文芸における具体的な受容の分析とを結びつけて検討してきた。しかし、その一方で、今後さらに検討を深めるべき課題も残されている。

第一に、『唐詩選』を他の重要な詩集と比較するにあたり、『瀛奎律髓』や『聯珠詩格』など、江戸時代の日本で広く流行していた詩集を十分に分析対象に含めることができなかった点が挙げられる。これらの詩集は、『唐詩選』と同じ時代背景や文化的脈絡の中で流布したものであり、その内容や主題構成、受容状況を詳細に検討することによって、『唐詩選』の特異性や独自性をより明確に位置づけることが可能になると考えられる。この点は、今後の研究において取り組むべき重要な課題である。

第二に、本研究では、『唐詩選』が江戸時代の文芸作品に与えた影響を考察するにあたり、主としてパロディーとしての受容や、江戸文芸における詩の好まれ方に注目した。しかし、個々の文芸作品を精読し、それぞれの作品において『唐詩選』がどのように引用・改作されているのかを詳細に検討する作業までは行っていない。今後は、江戸文芸作品を一つ一つ精読し、具体的な引用や改作のあり方、主題的な共鳴の様相を明らかにすることで、より踏み込んだ議論が可能になると考えられる。

第三に、本研究では、古文辞派については服部南郭を中心に、反古文辞派については山本北山の詩論と市河寛斎の詩作を対象として分析を行った。しかし、これらは江戸詩壇の一部にすぎず、今後は対象とする詩人や論者をさらに広げ、より多角的な視点から検討を進める必要がある。

さらに、『唐詩選』の受容をめぐる当時の知識人層の議論を体系的に整理し、それが江戸時代の文学文化にどのような影響を及ぼしたのかを検討することも重要である。たとえば、『唐詩選』を支持した古文辞派がその価値をどのように位置づけていたのか、また反古文辞派がどのような批評を展開していたのかを明らかにすることは、『唐詩選』の受容過程を理解する上で有益である。また、出版業の発展が詩集の流通と受容に与えた影響についても、江戸・大坂・京都といった出版の中心地における『唐詩選』および他の詩集の刊行状況を具体的に検討することで、より明確にすることができるだろう。

本研究では、以上の課題に十分に取り組むことはできなかったが、今後はこれらを継続的に検討し、『唐詩選』が江戸時代の日本文学および文化に与えた影響を、より全面的かつ詳細に明らかにしていきたいと考えている。とくに、『唐詩選』の収録作品が江戸時代の文芸文化における主題や形式の選択にどのような影響を与えたのか、またそれが知識人層のみならず一般読者にどのように受け入れられたのかを、多角的な視点から解明していく予定である。

参考文献（刊行年順）

◎書物

- 鷲尾順敬 『日本仏家人名辞書』光融館、1903 年
- 榊原篁洲 『漢籍国字解全書』第 11 卷「古文真宝前集諺解大成」、1909 年
- 富山房編輯部編 「漢文大系」「第 2 卷」、富山房、1910 年
- 久保得二（芸閣玄之口述） 『唐詩選・三體詩』東京博文館、1913 年
- 三島毅・服部宇之吉（監修）、瀬武次郎・久保得二（校訂） 『唐詩選・三體詩』、東京博文館蔵版、1913 年
- 国民文庫刊行会編 『国訳漢文大成』第 2・第 6 卷、東洋文化協会、1920 年
- 塚本哲三 『唐詩選：三體詩』、有朋堂書店、1924 年
- 川上天山 『唐詩選詳解全訳漢文叢書』、東京至誠堂書店、1927 年
- 岡田正之解題 『古文真寶』・漢文叢書第 23、有朋堂、1928 年
- 『漢文叢書』第 23（古文真宝〔全〕・楚辭〔全〕）、有朋堂、1928 年
- 簡野道明 『唐詩選詳説（上下）』、明治書院、1929 年
- 田中慶太郎（校訂） 『古文真宝前集』文求堂書店、1929 年
- 京都帝国大学国文学会編 『江戸文学図録：藤井博士還暦紀念 解説篇』、1930 年
- 改造社編 『俳句講座』第 9 卷、改造社、1932 年
- 弘道館編・近藤正治講述 『漢文講座第 5 文章軌範、古文真宝』、弘道館、1933 年
- 小川貫道 『漢学者伝記及著述集覧』関書院、1935 年
- 漆山又四郎訳注 『三体詩』、奎光書院、1936 年
- 大野實之助 『唐宋八家文・古文真宝・文章軌範』、学燈社、1953 年
- 国民文庫刊行会編 『国訳漢文大成』[第 2] 第 6 卷、東洋文化協会、1956 年
- 齋藤响 『漢詩大系・「唐詩選」（上）』、集英社、1964 年
- 目加田誠 『唐詩選』、新釈漢文大系、1964 年
- 青木正児 『漢詩大系』「第 6」、集英社、1964 年
- 小野晋 『近世初期遊女評判記集 本文篇』、古典文庫、1965 年
- 高木正一（著）吉川幸次郎（監修） 『新訂中国古典選・「唐詩選」（上）』、朝日新聞社、1965 年
- 村上哲見著 『三体詩』（新訂中国古典選；第 16 卷）、朝日新聞社、1966 年
- 星川清孝 『新釈漢文大系 9 古文真宝（前集）上』明治書院、1967 年
- 鹽谷温 『唐詩三百首新釈』、書籍文物流通會、1968 年
- 水田紀久・頼惟勤（編） 『中国文化叢書 9・日本漢学』、大修館書店、1968 年
- 鈴木修次・高木正一・前野直彬 『中国文化叢書 5・文学史』、大修館書店、1968 年
- 古川哲史著、 『広瀬淡窓』、思文閣、1972 年
- 池田四郎次郎・浜野知三郎・三村清三郎編 『日本芸林叢書』「第 1 卷作詩志穀」（鳳出版、1972 年）
- 目加田誠（訳注） 『唐詩三百首』、平凡社、1973 年
- 吉川幸次郎・小川環樹（編） 『筑摩叢書・「唐詩選」（上）』、筑摩書房、1973 年
- 平野彦次郎 『唐詩選研究』、株式会社明德出版社、1974 年

- 水野稔 『黄表紙・洒落本の世界』岩波新書、1976 年
- 諏訪春雄・日野竜夫編『江戸文学と中国（江戸シリーズ 4）』毎日新聞社、1977 年
- 高木正一著 『唐詩選』朝日新聞社、1978 年
- 石川忠久 『漢詩のこころ』、時事通信社、1980 年
- 日野龍夫（校注） 『唐詩選国字解』、平凡社、1982 年
- 中島敏夫（訳） 『中国の古典 27・「唐詩選」（上）』、学習研究社、1983 年
- 大川忠三 『唐詩三百首』、明德出版社、1984 年
- 前野直彬（注解） 『唐詩選』、岩波書店、1984 年
- 林楨（校注）、佐藤保・和泉新（訳） 『古文真宝』「中国の古典 26」、1984 年
- 服部南郭著、日野龍夫編集・解説 『近世儒家文集集成 第七巻 南郭先生文集』ぺりかん社、1985 年
- 富士川英郎ほか編 『詩集日本漢詩』第 4 巻、汲古書院、1985 年
- 孫琴安 『唐詩選本六百種提要』、陝西人民教育出版社、1987 年
- 入谷仙介 『漢詩入門』、日中出版、1990 年
- 中島敏夫（解説） 『唐詩類苑』、汲古書院、1990 年-1995 年
- 村上哲見 『漢詩と日本人』、講談社、1994 年
- 中野三敏・浜田啓介校注 『異素六帖；古今俄選；粹宇瑠璃；田舎芝居』、岩波書店、1998 年
- 日野龍夫 『服部南郭伝攷』ぺりかん社、1999 年
- 松浦友久（編） 『漢詩の事典』、大修館書店、1999 年
- 菅野禮行・徳田武（校注・訳） 『日本漢詩集』新編日本古典文学全集 86、小学館、2002 年
- 杉下元明 『江戸漢詩影響と変容の系譜』、ぺりかん社、2004 年
- 若林力 『江戸川柳で愉しむ中国の故事』、大修館書店、2005 年
- 蔡毅、西岡淳 『日本漢詩人選集 9 市河寛斎』（研文出版、2007 年）
- 大田南畝並びに社中作・日野龍夫他解説 『通詩選三部作：通詩選笑知・通詩選・通詩選諺解』、太平文庫 64、2010 年
- 王國維 『宋元劇曲史』、新世界出版社、2012 年
- 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（東洋文庫、2012 年）
- 有木大輔 『唐詩選版本研究』、好文出版、2013 年

◎論文

- 藤井乙男 「支那小説の翻訳（剪燈新話と伽婢子）」、『芸文』3（9）、京都文学会編、内外出版印刷、1912 年 9 月
- 神保五彌 「近世後期町人文学の発生」、『國文學研究』巻 9（10）、早稻田大學國文學會、1954 年
- 仁枝忠 「蕪村の句における漢詩文の影響について」、『津山工業高等専門学校紀要』第 5 号、1968 年 3 月
- 日野龍夫 「『唐詩選』と近世後期詩壇—都市の繁華と古文辞派の詩風」、岩波書店、『文学』39(3)、1971 年 3 月
- 藤田真一 「俳諧師嘯山：啓蒙家の両義性について」、『大阪大学国語国文学会』、1984 年 6 月
- 市木武雄 「万里集九と三体詩--「梅花無尽蔵」中に見られる」、『昭和学院國語國文』

(19)、1986 年 3 月

- 蒋寅 「舊題李攀龍『唐詩選』在日本的流傳和影響:日本接受中國文學的一個側面」、『國學研究』卷 12、2003 年 12 月
- 池沢一郎 「『唐詩三物』と『唐詩選三物』」『明治大学教養論集』(377)、2004 年 1 月
- 楊妹美 「唐代佛寺題材詩論稿」、吉林大学碩士學位論文、2008 年
- 小財陽平 「三宅嘯山の『唐詩選』受容」、和漢比較文学学会大会、2011 年 8 月
- 吉海直人 「板かるたの歴史:会津発祥説の検討」、『同志社女子大学日本語日本文学』卷 25、2013 年 6 月
- 山本嘉孝 「山本北山の技芸論—擬古詩文批判の射程—」『近世文藝』99 卷、2014 年 1 月
- 堀誠 「杜甫『春望』という古典教材」、『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第 6 号、2014 年 3 月
- 合山林太郎 「近世期日本における袁中郎の受容とテキストの問題——山本北山一派の動向を中心に——」『雅俗』第 15 号、雅俗の会、2016 年 7 月
- 顧春芳 「重新考訂李攀龍『唐詩選』的意義」、大阪府立大学人文学会、2017 年 3 月
- 鞏本棟 「略論《古文真寶》的東傳」、《『域外漢籍研究集刊』》、2021 年 11 月
- 大庭卓也 「嵩山房小林新兵衛の「唐詩選かるた」について」、『比較文化年報』(久留米大学大学院比較文化研究科) 第 26 輯、2021 年 3 月

◎電子データベースと書籍

- 『唐詩品彙』 https://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA102_view.html
- 『唐詩訓解』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14363620/1/67>
- 『芙蕖館提耳』 https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17_02022/index.html
- 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』(東洋文庫、2012 年)
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=80010V0816P0001#B0001>
- 菅野禮行・徳田武校注訳『日本漢詩集』(新編日本古典文学全集 86、小学館、2002 年)
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=80110V00860554&scale=0.31976&top=-54px&left=541px&angle=0&mode=0>
- 山本北山『作詩志彀』(須原屋伊八、1783 年) <https://dl.ndl.go.jp/pid/13588749/1/4>

初出一覧

第一章 『唐詩三百首』との比較を通じて

旧題「『唐詩選』における懷古詩・辺塞詩・送別詩・閨怨詩の収録状況—『唐詩三百首』との比較を通じて—」『中國中世文學研究』第 76 号、2023 年 3 月

第二章 『三体詩』との比較を通じて

旧題「『唐詩選』収録作品の主題—『三体詩』との比較を通じて—」『中国文史論叢』第 20 号、2024 年 3 月

第三章 『古文真宝』との比較を通じて

旧題「『唐詩選』収録作品の主題—『古文真宝』との比較を通じて—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 58 号、2024 年 12 月

第六章 市河寛斎の『唐詩選』への態度

旧題「市河寛斎の『唐詩選』への態度」『中国文史論叢』第 22 号、2026 年 3 月（掲載予定）

第八章 江戸文芸作品における『唐詩選』の受容—主題別影響の分析を中心に—

旧題「江戸文芸作品における『唐詩選』の受容—主題別影響の分析を中心に—」『未名玉沙集林—遊佐徹教授退休記念論集』（掲載予定）

謝辞

本論文を完成するにあたり、多くの方々のご支援とご指導を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

まず初めに、指導教員である橘先生、遊佐先生には、研究の初期段階から完成まで、終始一貫して的確なご指導と温かいご支援をいただきました。先生方の深い知識と鋭い洞察力に触れることができたことは、私にとってかけがえのない経験であり、本研究を進める上で大きな励みとなりました。心より御礼申し上げます。

また、研究経過報告会などでは、副指導教員の山本秀樹先生と藤原祐子先生にも多大なるご助言をいただきました。そして、法政大学の小林ふみ子先生には、感謝の意を申し上げます。面識がないにもかかわらず、他大学の学生である私に江戸文学の相談に応じてくださり、不安を和らげる温かいお言葉とともに、貴重なご意見を数多くいただきました。本当にどうもありがとうございました。多角的な視点からのご指摘とアドバイスにより、本論文の内容をより深めることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さらに、卓越大学院プログラムを通じて石田先生には、研究や生活の相談に乗っていただき、研究費の申請や申請書・論文作成の指導に至るまで、温かい励ましをいただきましたことに、深く感謝いたします。このプログラムに採択されたおかげで、人文情報学をはじめとする新しい分野を学ぶ機会を得ることができました。本当にありがとうございました。

特に、博士三年次の2024年度には、OU-SPRINGプログラムに採択され、多くの奨励費をいただいたおかげで、生活や経済的な負担を心配せず、研究に専念することができました。また、OU-SPRING事業の一環として、ポスター発表で異分野の優秀な学生との交流を通じ、研究に対する刺激やモチベーションの向上を実感しました。こうした経験から、今後も積極的に学術イベントに参加し、学びを深めていきたいと思います。

また、岡山大学大学院社会文化科学研究科の事務局、OU-SPRING事務局の皆様には、日々の事務手続きや研究支援にご尽力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。加えて、フィールドワークや資料収集に際し、多大なるご協力をいただいた方々にもお礼申し上げます。特に、福岡県三池カルタ・歴史博物館の梶原様には、貴重なご助力をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

そして、家族と親友である王若冲さんの支えがなければ、本研究を続けることはできませんでした。夫と息子には、日々の励ましと理解をいただき、研究に専念できる環境を与えてくれたことに深く感謝しております。また、自分の両親と夫の両親をはじめとする家族には、長年にわたり温かい応援をいただきました。

特に、プレマスターに進学してから親友となった王若冲さんには、いつも暖かいお言葉をいただき、岡山で宿泊させていただいたり、出産時にはお見舞いや子どもの世話までしていただいたりと、多くの面で助けていただきました。研究や生活で困難に直面した際にも、いつも相談に乗ってくださり、そのおかげで多くの試練を乗り越えることができました。この場を借りて、心より感謝の意を表します。最後に、本研究に関わる全ての方々に、改めて深く感謝申し上げます。皆様のご支援があったからこそ、本論文を完成させることができました。

令和7年12月20日

馬艶艶